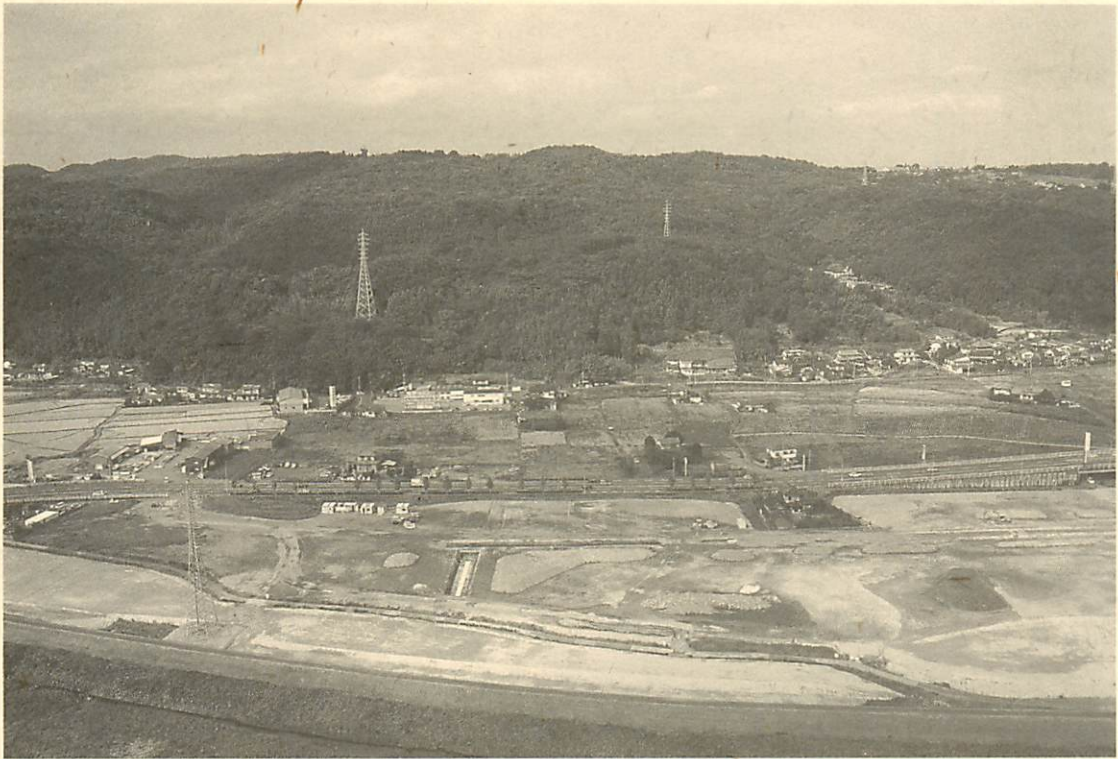


賀 来 西 遺 跡

第1次・第2次発掘調査報告書

—大分都市計画事業賀来西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—



2004

大分市教育委員会

賀 来 西 遺 跡

第1次・第2次発掘調査報告書

－大分都市計画事業賀来西土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－



2004

大分市教育委員会

序 文

本書は、平成14～15年度に実施した賀来西土地地区画整理事業に伴う賀来西遺跡第1・2次発掘調査の成果を収録したものです。

平成14年度に実施した本区画整理事業に先立つ事前の試掘調査において、縄文時代の針尾系黒曜石製石鏃や弥生時代から近世の集落跡や水田遺構、遺物が発見され、その広がりが予見されました。そのため、記録保存の範囲をできるだけ縮小できるよう関係機関との調整を行い、平成14・15年度に発掘調査を実施しました。その結果、畦畔や水路跡などの施設とともに、弥生時代から近世にいたる水田形成の状況を明らかにすることができました。

本発掘調査において、はからずも賀来に生活した人々の長年にわたる水田開発への取り組みの一端を明らかにできたことは、本地域のムラの歴史に新たなページを付け加える貴重な成果となりました。

本書が、今後の学術研究ならびに文化財保護に対するご理解を深める一助となり、また、広く市民の皆様に利用され、郷土の歴史研究に幅広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本発掘調査事業の実施にあたり、多大なるご配慮、ご協力をいただきました大分市賀来西土地地区画整理組合理事長 瀧野文夫氏をはじめ、関係されました諸機関・各位に対しまして衷心より感謝申し上げます。

平成16年10月1日

大分市教育委員会
教育長 秦 政博

例 言

1. 本報告書は、大分市教育委員会が賀来西区画整理組合の委託を受けて実施した、大分市大字賀来に所在する遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、賀来西地区区画整理の市道建設に伴い、第1次調査は平成14年10月1日より10月31日に、第2次調査は平成15年4月22日より10月1日まで実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は、第1次調査は萩（大分市教育委員会文化財課嘱託）・松尾聡（同）・松竹智之（同）・水町裕子（同）が、第2次調査は萩・大野（同）が行い、遺跡の空中写真は九州航空株式会社に委託した。
4. 土器の実測は作吉美知子（大分市教育委員会臨時職員）・松浦憲治（別府大学大学院生）が、石器の実測は萩が、遺構の下図作製は萩・大野が、遺構図のトレースは大野・作吉・澤田香織（大分市教育委員会臨時職員）が、写真図版作製は大野が行い、遺物実測図のトレース・遺物写真は雅企画に委託した。
5. 放射性炭素年代測定及び土師器に付着した金属同定は古環境研究所に委託した。
6. 本書の執筆は、調査を担当した塔鼻（大分市教育委員会文化財課専門員）・萩・大野がこれに当り、一部を梅木（大分市教育委員会嘱託）に依頼し、科学分析については、業務委託した古環境研究所に依頼した。

第1章	塔鼻 光司
第2章、第4章Ⅱ. 2 付属遺構・出土遺物、第5章Ⅱ	大野 瑞恵
第3章、第4章Ⅰ, Ⅱ. 1, Ⅱ. 2 水田、小結	萩 幸二
第5章Ⅰ	梅木 信宏
7. 遺物番号は本文・挿図・図版で一致する。
8. 遺構番号については、現場の段階のものを整理の段階で付け直した。
9. 挿図における遺構の略号は、次の内容を意味する。 SD＝溝状遺構 S＝水田
10. 本書の編集と稿正は萩・井口あけみ（大分市教育委員会嘱託）が行った。

本文編 目次

第1章はじめに	1
I. 調査に至る経緯	1
II. 調査期間	1
III. 調査組織	1
第2章遺跡の立地と環境	3
I. 地理的環境	3
II. 歴史的環境	3
第3章試掘	6
I. 区画ごとの成果	6
II. 出土遺物 (第4図～第7図)	9
第4章本調査	16
I. 第1次調査	16
1. 第3号水田 (第10図)	16
付属遺構 (第11～14図)	16
出土遺物 (第15図)	21
2. 第4号水田 (第16図)	21
付属遺構 (第17～21図・第24図)	25
出土遺物 (第22・23図)	26
3. 第6号水田 (第25図)	28
付属遺構 (第26～32図・第34・35図)	28
出土遺物 (第33図)	33
4. 第7号水田 (第36図)	34
付属遺構 (第37・40・41図)	36
出土遺物 (第38・39図)	37
5. V・VI層水田	39
付属遺構 (第42・43図)	39
6. その他の遺物 (第44・45図)	41
7. 小結	44
II. 第2次調査	52
1. 第I調査区	52
①第1号水田 (第53図)	52
付属遺構 (第54・55図)	53
出土遺物 (第56図)	53
②第2号水田 (第57図)	53
付属遺構 (第58図)	56
③第3号水田 (第59図)	56
付属遺構 (59・60図)	58
出土遺物 (第62図)	62
④小結	62
2. 第II・III調査区 (第64図)	63
①第2号水田 (第65図)	64
付属遺構 (第66～77図)	66
出土遺物 (第78・79図)	73
②第3号水田 (第80図)	75
付属遺構 (第81～108図)	77
出土遺物 (第109図)	91
③第4号水田 (第110図)	92
付属遺構 (第111～121図)	93
出土遺物 (第122・123図)	97
④第II・III調査区出土の その他の遺物 (第124・125図)	98
⑤小結	100
第5章考察	115
I. 賀来西土地区画整理地区の地形復原	115
II. 賀来西・宮苑井ノ口両遺跡における水田の広がり 初瀬井路の開削	126
化学分析編	132

挿図 目次

第1図	遺跡の位置	3	第74図	第2号水田H畦畔平・断面図	71
第2図	周辺の遺跡分布図	4	第75図	第2号水田I畦畔平・断面図	71
第3図	賀来西・宮免井ノ口遺跡 試掘トレンチ配置図	7～8	第76図	第2号水田J畦畔平・断面図	72
第4図	試掘出土の土器・磁器	9	第77図	第2号水田K・L畦畔平・断面図	73
第5図	試掘出土の石器①	11	第78図	第2号水田出土遺物	74
第6図	試掘出土の石器②	13	第79図	第2号水田出土の鞆羽口	74
第7図	試掘出土の石器③	14	第80図	第Ⅱ・Ⅲ調査区第3号水田遺構配置図	75
第8図	調査区の位置	17	第81図	第3号水田A畦畔平・断面図	77
第9図	賀来西遺跡第1次調査遺構配置図	18～19	第82図	第3号水田B畦畔平・断面図	77
第10図	第3号水田遺構平面図	18～19	第83図	第3号水田C畦畔平・断面図	78
第11図	第3号水田A畦畔平・断面図	20	第84図	第3号水田D畦畔平・断面図	78
第12図	第3号水田B畦畔平・断面図	21	第85図	第3号水田E畦畔平・断面図	78
第13図	第3号水田D畦畔土層断面図	21	第86図	第3号水田F畦畔平・断面図	79
第14図	第3号水田C畦畔平・断面図	22	第87図	第3号水田G畦畔平・断面図	80
第15図	第3号水田出土遺物	22	第88図	第3号水田H畦畔平・断面図	80
第16図	第4号水田遺構平面図	23～24	第89図	第3号水田I畦畔平・断面図	81
第17図	第4号水田C畦畔平・断面図	23～24	第90図	第3号水田J畦畔平・断面図	82
第18図	第4号水田D畦畔平・断面図	23～24	第91図	第3号水田a畦畔平・断面図	82
第19図	第4号水田F畦畔平・断面図	23～24	第92図	第3号水田K畦畔平・断面図	82
第20図	第4号水田A畦畔平・断面図	25	第93図	第3号水田L畦畔平・断面図	83
第21図	第4号水田B畦畔平・断面図	26	第94図	第3号水田M畦畔平・断面図	83
第22図	第4号水田出土遺物	26	第95図	第3号水田N畦畔平・断面図	84
第23図	第4号水田出土石器	26	第96図	第3号水田O畦畔平・断面図	85
第24図	第4号水田E畦畔平・断面図	27	第97図	第3号水田R畦畔平・断面図	85
第25図	第6号水田遺構平面図	29～30	第98図	第3号水田P畦畔平・断面図	86
第26図	第6号水田A畦畔平・断面図	29～30	第99図	第3号水田U畦畔平・断面図	86
第27図	第6号水田B畦畔平・断面図	29～30	第100図	第3号水田Q畦畔平・断面図	87
第28図	第6号水田C畦畔平・断面図	31	第101図	第3号水田Y畦畔平・断面図	87
第29図	第6号水田D畦畔平・断面図	31	第102図	第3号水田S畦畔平・断面図	88
第30図	第6号水田E畦畔平・断面図	32	第103図	第3号水田V畦畔平・断面図	88
第31図	第6号水田F畦畔平・断面図	32	第104図	第3号水田W畦畔平・断面図	88
第32図	第6号水田G畦畔平・断面図	32	第105図	第3号水田T畦畔平・断面図	89
第33図	第6号水田出土遺物	33	第106図	第3号水田牛の足跡平面図①	90
第34図	第6号水田面A・Bグリッド牛の足跡	33	第107図	第3号水田直下牛・人の足跡平面図②	90
第35図	第6号水田面A・Bグリッド牛・人の足跡	34	第108図	第3号水田対応の湿地・第3号水田直下水田・牛の足跡	90
第36図	第7号水田平・断面図	35～36	第109図	第3号水田出土遺物	90
第37図	第7号水田A畦畔平・断面図	35～36	第110図	第Ⅱ・Ⅲ調査区第4号水田遺構配置図	91
第38図	第7号水田出土石器	37	第111図	第1号溝状遺構平・断面図	93
第39図	第7号水田出土石器	37	第112図	第4号水田第2号溝状遺構平面図①	94
第40図	第7号水田B畦畔平・断面図	38	第113図	第4号水田第2号溝状遺構平・断面図②	94
第41図	第7号水田C畦畔平・断面図	38	第114図	第4号水田A畦畔平・断面図	95
第42図	第V・Ⅵ層水田A畦畔平・断面図	39	第115図	第4号水田C畦畔平・断面図	95
第43図	第V・Ⅵ層水田B畦畔平・断面図	40	第116図	第4号水田B畦畔平・断面図	96
第44図	第1次調査出土遺物	41	第117図	第4号水田E畦畔平・断面図	96
第45図	第1次調査出土の土錘	41	第118図	第4号水田D畦畔平・断面図	97
第46図	調査区北壁土層断面図	42～43	第119図	第4号水田H畦畔平・断面図	97
第47図	V・Ⅵ層水田から第7号水田の平面的な変遷	45	第120図	第4号水田F畦畔平・断面図	98
第48図	V・Ⅵ層水田から第7号水田の垂直的な変遷	46	第121図	第4号水田G畦畔平・断面図	98
第49図	水田窪地の埋没過程	46	第122図	第4号水田出土遺物	99
第50図	畦畔間の小水田の平面形の復原	48	第123図	第2号溝状遺構出土土錘	99
第51図	調査区と現代の水掛かり	48	第124図	第Ⅱ・Ⅲ区出土遺物	99
第52図	第Ⅰ調査区遺構配置図	52	第125図	Ⅱb層出土土錘	100
第53図	第1号水田遺構配置図	53	第126図	水田の拡大と自然地形の変遷	101
第54図	第1号溝状遺構平・断面図	54	第127図	Ⅱ調査区の水田の垂直的な変遷	104
第55図	第3号溝状遺構平・断面図	55	第128図	Ⅲa区の水田の垂直的な変遷	105～106
第56図	第1号溝状遺構出土遺物	55	第129図	Ⅲb区の水田の垂直的な変遷	105～106
第57図	第2号水田遺構配置図	55	第130図	第4号水田の平面形の復原	108
第58図	第4号溝状遺構平・断面図	57	第131図	第3号水田の平面形の復原	109～110
第59-1図	第3号水田遺構配置図	58	第132図	第2号水田の平面形の復原	109～110
第59-2図	第3号水田A畦畔平・断面図	58	第133図	Ⅱ層水田と現代の水田の比較	111～112
第60図	第2号溝状遺構平・断面図	59	第134図	トレンチ 配置図	116～117
第61図	第Ⅰ調査区南壁土層断面図	60～61	第135図	A・B'土層断面柱状図	118～119
第62図	第2号溝状遺構出土遺物	62	第136図	B・A'土層断面柱状図	120～121
第63図	第Ⅰ調査区各水田の畦畔の復原	63	第137図	B・B'土層断面柱状図	120～121
第64図	第Ⅱ・Ⅲ調査区グリッド配置図	64	第138図	C・C'土層断面柱状図	122～123
第65図	第Ⅱ・Ⅲ調査区第2号水田面遺構 配置図	65	第139図	D・D'土層断面柱状図	123
第66図	第2号水田A畦畔・牛の足跡 平・断面図	67	第140図	E・E'土層断面柱状図	122～123
第67図	第2号水田B畦畔平・断面図	67	第141図	F・F'土層断面柱状図	124～125
第68図	第2号水田M畦畔平・断面図	68	第142図	G・G'土層断面柱状図	124～125
第69図	第2号水田C畦畔平・断面図	69	第143図	中世水田の範囲と水田上面の標高	127
第70図	第2号水田D畦畔平・断面図	69	第144図	近世水田の範囲と水田上面の標高	128
第71図	第2号水田E畦畔平・断面図	70	第145図	近世期の整地層(B・7)	128
第72図	第2号水田F畦畔平・断面図	70	第146図	初瀬井路の水路現況模式図	129
第73図	第2号水田G畦畔平・断面図	70			

表 目次

第1表	試掘出土土器・陶器・磁器観察表	15	第7表	第Ⅰ調査区出土土器・磁器観察表	60～61
第2表	試掘出土石器観察表	15	第8表	第Ⅱ・Ⅲ区出土土器・磁器観察表	114
第3表	第1次調査出土土器・陶器・磁器観察表	41	第9表	府内藩領内の主要井路と初瀬井路の開削・関連年表	129
第4表	第1次調査出土石器観察表	41	第10表	正保4年と比較した村高増加率	130
第5表	水田の埋没過程の変遷	47	表1	賀来西遺跡における蛍光X線分析結果	133
第6表	各水田面の小水田の復原	51			

写真図版 目次

図版1	1. 第1次調査 第6号水田全景 2. 第1次調査第7号水田全景	134
図版2	1. 第6号水田全景① 2. 第6号水田全景② 3. 第6号水田全景③ 4. 第6号水田全景④	135
図版3	1. 第3号水田A畦畔完掘 2. 第3号水田B畦畔完掘 3. 第3号水田C畦畔完掘 4. 第4号水田A畦畔完掘 5. 第4号水田B畦畔完掘 6. 第4号水田C畦畔完掘	136
図版4	1. 第6号水田A畦畔完掘 2. 第6号水田B畦畔完掘 3. 第6号水田C畦畔完掘 4. 第6号水田D畦畔完掘 5. 第6号水田F畦畔完掘 6. 第7号水田D畦畔完掘	137
図版5	1. 第6号水田 牛の足跡① 2. 第6号水田 牛の足跡② 3. 第6号水田牛の足跡③ 4. 調査区 北壁① 5. 第Ⅴ－Ⅵ層水田A畦畔 完掘 6. 第Ⅴ－Ⅵ層水田B畦畔完掘	138
図版6	第2次調査 第Ⅰ調査区 全景	139
図版7	1. 第1号溝状遺構土層断面 2. 第1・4号溝状遺構完掘 3. 第3号溝状遺構土層断面 4. 第3号溝状遺構完掘	140
図版8	1. 第2号溝状遺構完掘 2. 第2号溝状遺構土層断面 3. 第2号水田A畦畔 4. 第3号水田A畦畔	141
図版9	1. 第2次調査 第3号水田第Ⅱ・Ⅲ調査区全景 2. 第2次調査 第3号水田第Ⅱa調査区全景 3. 第2次調査 第3号水田第Ⅱb調査区全景	142
図版10	1. 作業風景 2. 第2次調査 第2号水田第Ⅲb調査区全景	143
図版11	1. 第2号水田A畦畔完掘 2. 第2号水田B畦畔完掘 3. 第2号水田D畦畔完掘 4. 第2号水田E畦畔完掘 5. 第2号水田F畦畔完掘 6. 第2号水田G畦畔完掘	144
図版12	1. 第2号水田H畦畔完掘 2. 第2号水田I畦畔完掘 3. 第2号水田J畦畔完掘 4. 第2号水田K畦畔完掘 5. 第2号水田L畦畔完掘 6. 第2号水田M畦畔完掘	145
図版13	1. 第2号水田 牛の足跡 2. 第3号水田第1号溝状遺構完掘 3. 第3号水田第1号溝状遺構土層断面 4. 第3号水田A畦畔完掘 5. 第3号水田B畦畔完掘	146
図版14	1. 第3号水田C畦畔完掘 2. 第3号水田D畦畔完掘 3. 第3号水田E畦畔完掘 4. 第5号水田F畦畔完掘 5. 第3号水田G畦畔完掘 6. 第3号水田H畦畔完掘	147
図版15	1. 第3号水田I畦畔完掘 2. 第3号水田J畦畔完掘 3. 第3号水田K畦畔完掘 4. 第3号水田L畦畔完掘 5. 第3号水田N畦畔完掘 6. 第3号水田O畦畔完掘	148
図版16	1. 第3号水田P畦畔完掘 2. 第3号水田Q畦畔完掘 3. 第3号水田R畦畔完掘 4. 第3号水田S畦畔完掘 5. 第3号水田T畦畔完掘 6. 第3号水田V畦畔完掘	149
図版17	1. 第3号水田V畦畔完掘 2. 第3号水田W畦畔完掘 3. 第3号水田Y畦畔完掘 4. 牛・人の足跡完掘① 5. 牛・人の足跡完掘② 6. 遺物出土状況	150
図版18	1. 第4号水田Ⅱ・Ⅲa区全景	151
図版19	1. 第2次調査第4号水田第Ⅱa調査区全景 2. 第2次調査第4号水田第Ⅱb調査区全景 3. 第2次調査第4号水田第Ⅲa調査区東端	152
図版20	1. 第4号水田第2号溝状遺構① 2. 第4号水田第2号溝状遺構境完掘② 3. 第4号水田A畦畔完掘 4. 第4号水田B畦畔完掘 5. 第4号水田C畦畔完掘 6. 第4号水田D畦畔完掘	153
図版21	1. 第4号水田E畦畔完掘 2. 第4号水田F畦畔完掘 3. 第4号水田G畦畔完掘 4. 牛の足跡① 5. 牛の足跡② 6. 牛の足跡③	154
図版22	1. 第Ⅲa調査区南壁 東2. 第Ⅱb調査区東壁①中央 3. 第Ⅱa調査区東壁②南 4. 第Ⅲb調査区北壁① 5. 第Ⅲb調査区北壁② 6. 第Ⅲb調査区北壁③	155
図版23	試掘出土遺物	156
図版24	第1次調査出土遺物①	157
図版25	第1次調査② 第2次調査出土遺物①	158
図版26	第2次調査出土遺物②	159
図版27	第2次調査出土遺物③	160
図版28	第2次調査出土遺物④	161
図版29	試掘出土遺物 石器①	162
図版30	試掘出土遺物 石器②	163

第1章 はじめに

I. 調査に至る経過

大分市の西部、賀来地区において、組合施行による土地区画整理事業が計画されたため、平成14年4月25日～6月4日にかけて試掘調査を実施したところ、水田遺構などが確認された。このため、土地区画整理組合関係者と大分市教育委員会で協議を行い、事業地内道路建設予定地のボックス埋設部分について平成14年10月～11月に本調査を実施することとなった。

II. 調査期間

試掘調査	平成14年4月23日～6月14日
第1次調査	平成14年10月1日～10月31日
第2次調査	平成15年5月16日～10月1日
試掘調査	平成15年10月15日～11月18日

III. 調査組織

調査主体	大分市教育委員会			
現場責任者	教育長 秦 政博			
事務局	大分市教育委員会教育総務部文化財課			
平成 14 年度	帯刀修一（文化財課課長） 木村幾多郎（文化財課参事兼大分市歴史資料館館長） 玉永光洋（同上 参事） 熊谷一秋（同上 課長補佐兼管理係長） 讃岐和夫（同上 課長補佐兼文化財係長） 姫野公德（同上 指導主事） 桑原 治（同上 主任） 幸 裕美（同上 主任） 三浦亜紀（同上 主事）			
調査担当	塔鼻光司（同上 専門員） 荻 幸二（同上 嘱託） 松尾 聡（同上 嘱託） 松竹智之（同上 嘱託） 水町裕子（同上 嘱託）			
発掘作業員	安部房枝 後藤ミヤ子 秦野富士子 築城市枝 築城邦昭 築城邦久 東 晋生 濱野 恵 濱野千秋 横尾弘子			
	(敬称略)			
平成 15 年度	帯刀修一（文化財課課長） 木村幾多郎（文化財課参事兼大分市歴史資料館館長） 玉永光洋（同上 参事） 久多羅岐明（同上 課長補佐兼管理係長） 讃岐和夫（同上 課長補佐兼文化財係長） 平野勝敏（同上 主査） 姫野公德（同上 指導主事） 桑原 治（同上 主任） 安部一成（同上 主任） 三浦亜紀（同上 主事）			

調査担当	塔鼻光司 (同上 専門員)	荻 幸二 (同上 嘱託)	大野瑞恵 (同上 嘱託)
発掘作業員	安部房枝	岩本久枝	大久保公治
	嶋津将拓	首藤伊津代	秦野富士子
	仲野道代	二宮アキ子	東 晋生
	松浦憲治	三又鉄男	三又峯男
整理作業員	作吉美知子	森岡晃司	横尾弘子
		吉永幸司	

(敬称略)

平成 16 年度	足立昌人 (文化財課課長)
	木村幾多郎 (文化財課参事兼大分市歴史資料館館長)
	玉永光洋 (同上 参事)
	久多羅岐明 (同上 課長補佐兼管理係長)
	讃岐和夫 (同上 課長補佐兼文化財係長)
	平野勝敏 (同上 主査)
	姫野公德 (同上 指導主事)
	桑原 治 (同上 主任)
	安部一成 (同上 主任)
	三浦亜紀 (同上 主事)
	加藤キヌ (同上 主事 平成 16 年 7 月～)
	塔鼻光司 (同上 専門員)
	坪根伸也 (同上 専門員)
報告書作成担当	荻 幸二 (同上 嘱託)
	大野瑞恵 (同上 嘱託)
整理作業員	澤田香織



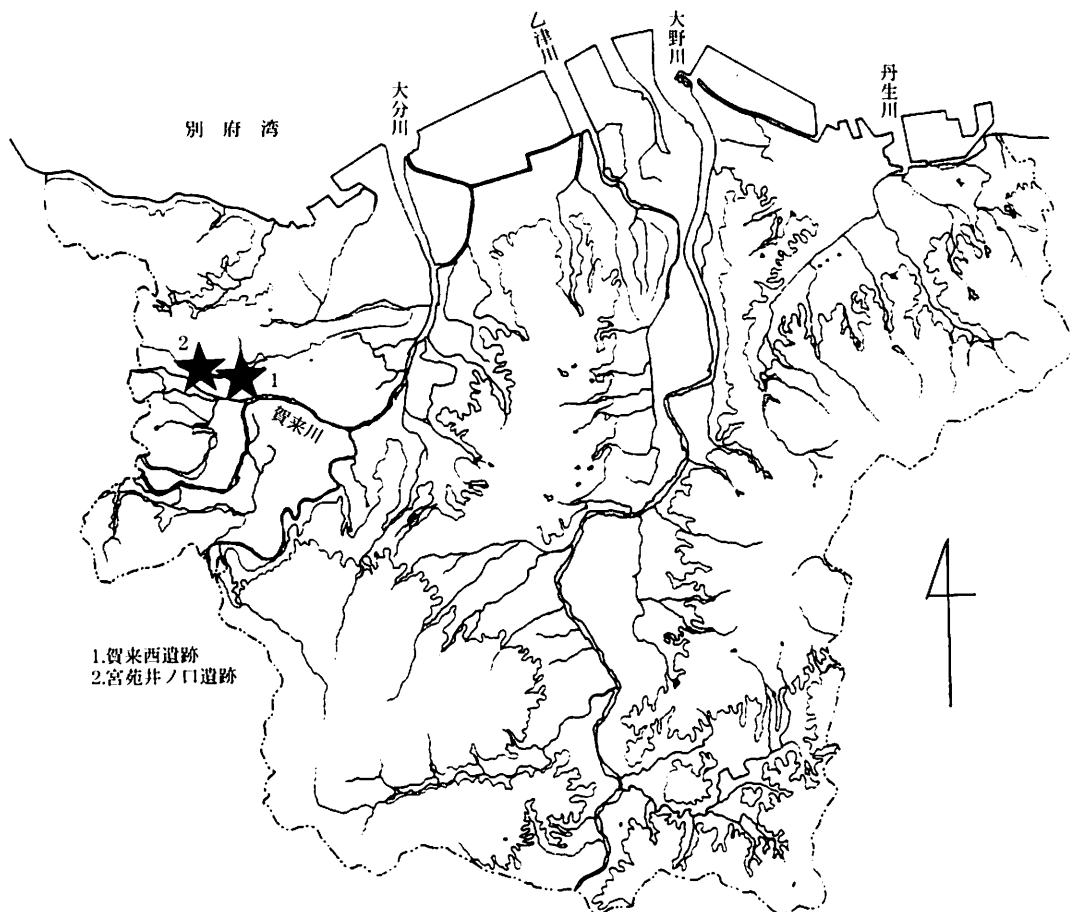
第2章 遺跡の立地と環境

I. 地理的環境

本遺跡は、九州島の北東部に位置する大分県の中央部、別府湾を北に望む大分市北部の大分川下流域に広がる、大分平野北西部の大分市大字賀来・宮苑井ノ口に所在する。大分川とその支流、賀来川と金谷迫丘陵に挟まれた沖積平野である。この沖積平野は大分川・賀来川の開析によって形成されており、基底は砂礫であるが中・上部は砂層から成っている。高崎山地の南面に延びる、更新世中期の堆積物が侵食されて形成された金谷迫丘陵を北に望み、南方には賀来条里・玉沢条里へと続く狭い沖積平野が広がっている。標高は低い場所で約 14 m、高い場所で約 17 m を測る。発掘調査の結果、本遺跡周辺は本来窪地であり、何度か大分川や賀来川が氾濫したとみられる痕跡が認められた。

II. 歴史的環境

本遺跡周辺では、旧石器時代から人々の居住が認められ、旧石器時代の遺跡は大きく2ヶ所に分布している。まずは、大分市と挾間町との境に近接して野田山遺跡（杉崎他 1979）と下黒野遺跡（大分県 1980）が隣接して所在する。両遺跡からは始良 Tn パミス（以下 AT と略す）下位のナイフ形石器が出土した。そして、本遺跡北側の金谷迫丘陵には、集石遺構を検出し剝片尖頭器や三稜尖頭器とナイフ形石器を中心とした石器が出土した庄ノ原遺跡（高橋 徹 1996）、机張原遺跡（友岡 1996）があり、両遺跡とも出土石器の型式から、AT を挟んだ2枚以上の文化層の所産と考えられる。

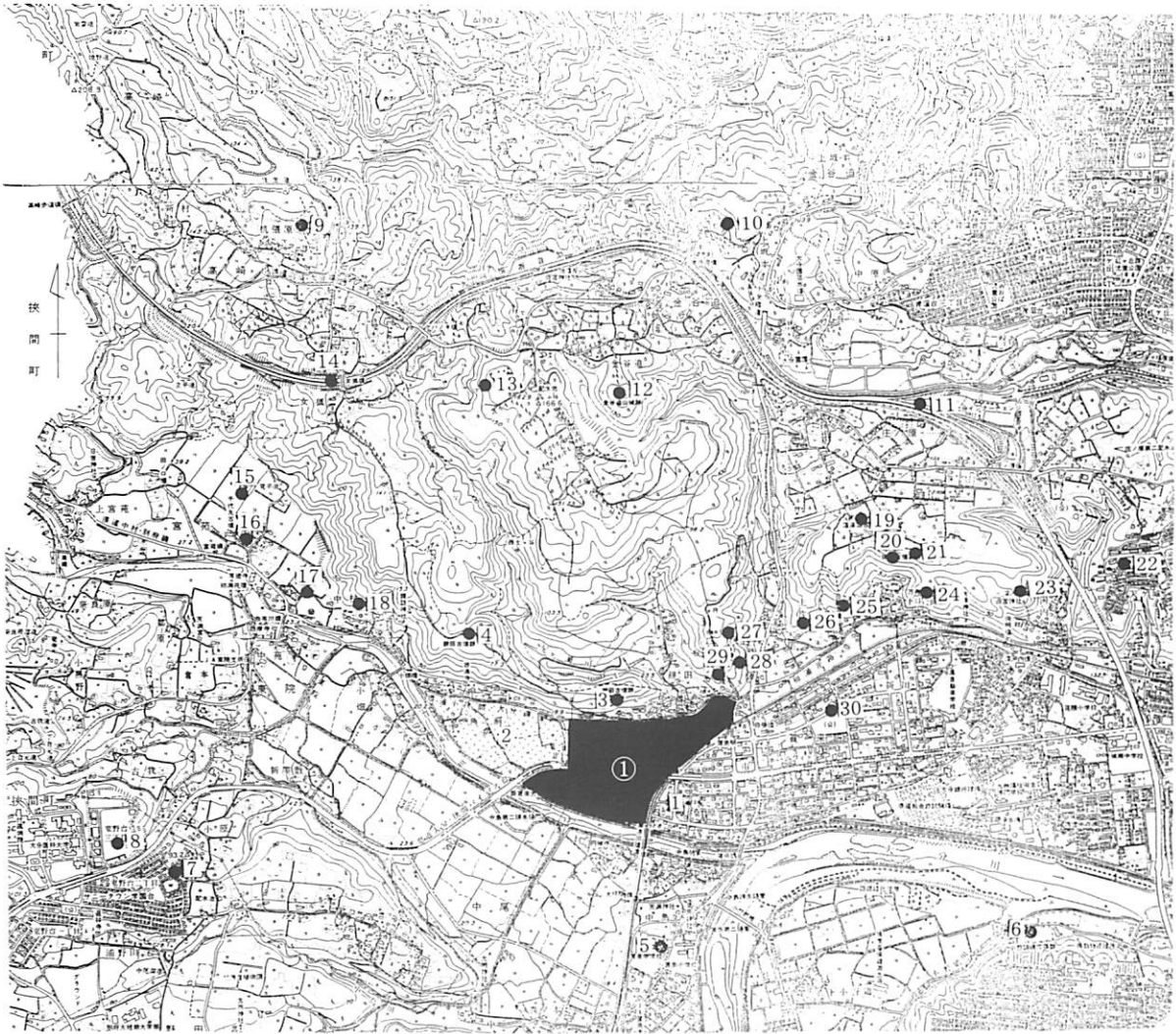


第1図 遺跡の位置

縄文時代には炉穴や集石が検出され早期の条痕文土器が出土した野田山遺跡、稲荷山式土器・早水台式土器を中心とした、縄文早期前半の遺物群が出土した庄ノ原遺跡が存在する。これらの遺跡は早期主体の遺跡である。金谷迫遺跡（大分市 2004）でも早期の無紋土器・チャート製剥片といった石器が出土している。

弥生時代には後期の竪穴住居跡 90 基から甕・壺や、鎌などの鉄器類が出土した雄城台遺跡（高橋 信武 1987）、10 基の住居跡を検出した尼ヶ城遺跡、守岡遺跡が高台に、低地には集落の他埋葬遺構が検出された賀来中学校遺跡といった集落が営まれた。また、下黒野遺跡は縄文時代早期の集石が検出され押型文の土器の出土が見られるほか、刻目突帯文土器が出土し、大分県の刻目突帯文（夜臼式単純期）の標識遺跡となっている。

このように、旧石器時代から弥生時代にかけては、主に台地上またはその周辺に遺跡が形成されたことがわかる。



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	賀来西遺跡	2	宮苑井ノ口遺跡	3	餅田横穴墓群	4	餅田古墳群	5	賀来中学校遺跡
6	小野鶴横穴墓群	7	野田山遺跡	8	下黒野遺跡	9	放生池遺跡	10	金谷迫遺跡
11	庄ノ原遺跡	12	金谷迫山城跡	13	金谷迫古墳	14	机張原遺跡	15	宮苑遺跡
16	千代丸古墳	17	中村遺跡	18	岩御堂横穴墓群	19	蓬萊山古墳	20	田崎古墳群
21	田崎遺跡	22	尼ヶ城遺跡	23	深河内古墳	24	万寿山古墳群	25	丑殿古墳
26	上片面横穴墓群	27	井手ノ上横穴墓群(1)	28	井手ノ上古墳	29	井手ノ上横穴墓群(2)	30	上片面遺跡

第2図 周辺の遺跡分布図

古墳時代になると金谷迫丘陵沿いを中心に多くの古墳が展開していく。4世紀代の古墳に、同一丘陵南縁部に箱式石棺を持つ前方後円墳の亀甲山古墳、三角縁神獣鏡を出土した蓬萊山古墳（真野 1976）が立地している。蓬萊山古墳に付属する形で田崎古墳群、餅田古墳群が存在している。後期には同一丘陵南裾部に丑殿古墳、千代丸古墳が存在している。

奈良時代には大分市は豊後国に含まれ、本遺跡から南に約3kmのところに、聖武天皇の勅により豊後国分寺（真野 1979）が建立される。国分寺は立地条件のよい場所を選んで建立され、豊後国府も古国府周辺にあったとみられており、律令制下においては豊後国の中心地域であった。金谷迫遺跡では、7世紀・9世紀の炭焼窯をそれぞれ1基ずつ検出している。

中世には、賀来川を挟んで賀来西遺跡の南側に賀来条里、七瀬川沿いに植田荘に比定される玉沢条里といった荘園へと発展していく。今回報告する賀来西遺跡でも近世以前、14世紀代とみられる水田が検出されているが、周辺の賀来川南岸や植田地域とは異なり条里地割は見受けられない。また、高崎山上には高崎城が存在し金谷迫丘陵上には金谷迫山城が存在していたと考えられる。

近世になると本遺跡から約3km北西の台地上に、18世紀後半に形成された女狐集落の共同墓地である、女狐近世墓地（田中他 1996）が営まれた。ただ、縄文時代の机張原遺跡以来、周辺に遺跡がみられない。大分平野では中世・近世に新田開発が奨励されるのに伴い、条件が悪かったこの地域にも集落が形成されたとみられる。

【参考文献】

- 清水宗昭・渋谷忠章他 1980『下黒野遺跡』大分県教育委員会
萩 幸二 2004『金谷迫遺跡発掘調査報告書』大分市教育委員会
讃岐和夫 1987『第三章二 海と里のムラ』『大分市史 上巻』大分市教育委員会
杉崎重臣・牧尾義則・讃岐和夫 1979『野田山遺跡』大分市教育委員会
千田 昇 1987『第一章二 大分平野のなりたち』『大分市史 上巻』大分市教育委員会
高橋 徹 1987『第四章一 高塚の始まりとその行方』『大分市史 上巻』大分市教育委員会
高橋 徹 1996『II 調査の立地と環境』『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』大分県教育委員会
高橋信武 1987『雄城台―第8調査ノ概要―』大分県教育委員会
坪根伸也 1992『賀来中学校遺跡』大分市教育委員会
友岡伸彦 1996『机張原遺跡』『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』大分県教育委員会
田中祐介他 1996『女狐近世墓地』『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』大分県教育委員会
高橋 徹 1996『庄ノ原遺跡群』『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』大分県教育委員会
真野和夫 1976『蓬萊山古墳』『日本考古学年報』27
真野和夫 1979『豊後国分寺』大分市教育委員会

第3章 試 掘

大分市賀来西地区区画整理事業に伴い、遺跡の存在の有無の確認を含めて、試掘調査を平成14年4月から実施することになった。

試掘の実施に当っては便宜的に、平成14年度分の施工部分の現行のバイパス道路の南側をA区、北側をB区として設定し、施設が埋設される道路部分を中心に、盛土により保存可能な区域を補助的に行った。両地区とも近世以前に遡る水田が検出された。賀来条里に関わる遺跡の存在が予想され、急ぎ遺跡として登録する運びとなり、施設が埋設される道路部分のみの本調査の実施が決定した。

また協議により、次年度の施工部分についても引き続き試掘を行うこととなり、平成15年度施工部分をC区と設定し、平成14年6月まで試掘を続行した。その結果、C区においても近世以前の水田・遺構が検出され、施設が埋設される道路部分の本調査の実施が決定した。

そして、平成15年度の本調査の後、平成15年10～11月にかけて、平成16年度施工部分の試掘調査も行った。そのうち、区画整理地区の東端部分をD区、西端部分をE区として設定した。その結果、同様に近世以前の水田・遺構が検出され、平成16年度においても本調査の実施が決定した。

なお、A～D区は賀来西遺跡として登録され、E区は平成15年度に県道部分について調査した県の登録名に倣って宮苑井ノ口遺跡とした。

I. 区画ごとの成果（第3図）

A区（平成14年度施工分）

A-1～17トレンチの17本の試掘坑を設定した。そのうち、A-8・10・14～16トレンチからは、近世以前と考えられる水田が検出された。つまり、A区中央部北半に水田が形成されていたと推測される。A-8トレンチからは中世所産の白磁や瓦質の揃鉢などが出土している。

B区（平成15年度施工分）

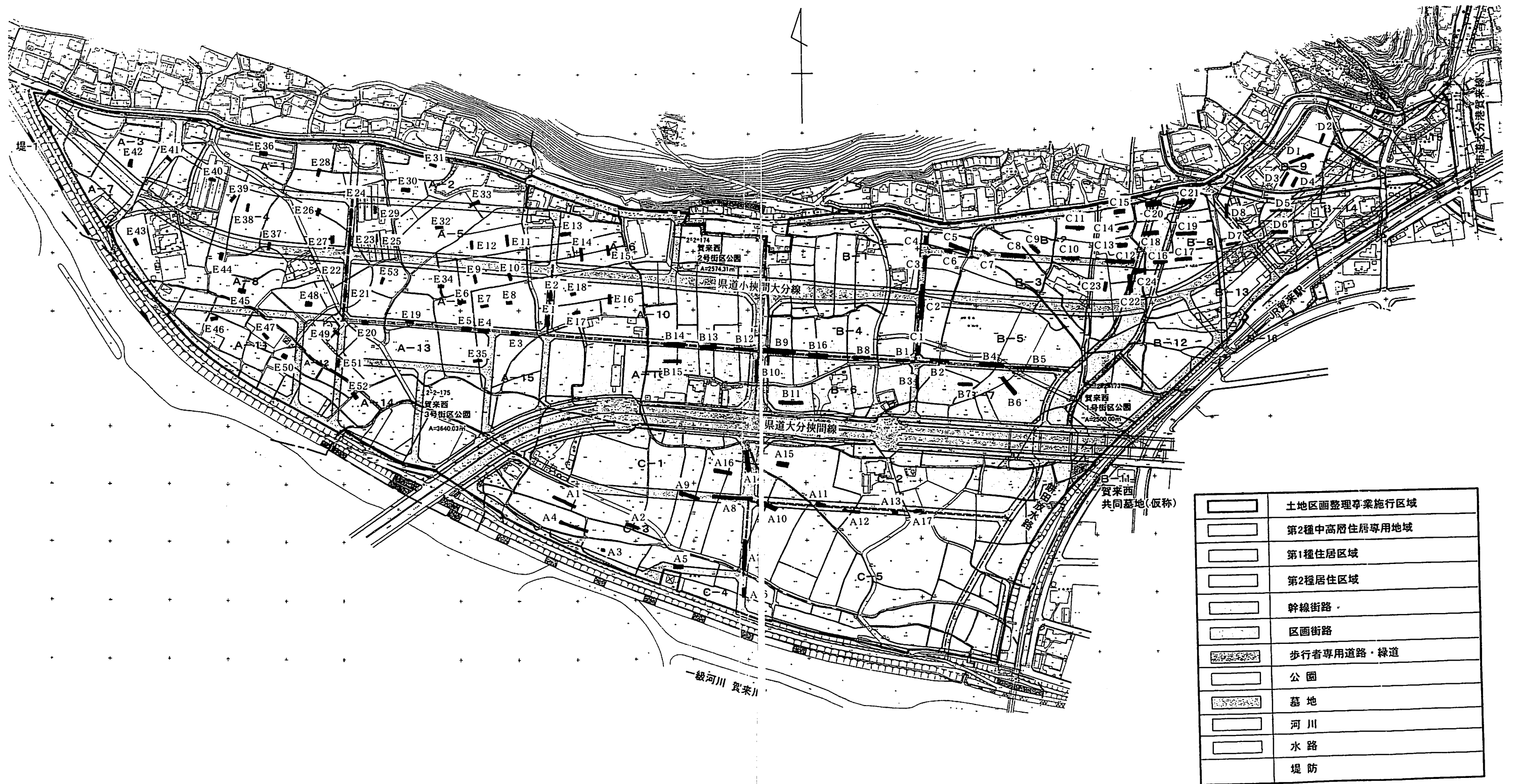
当初は平成14年度施工分であったが、その後平成15年度施工分に変更された。B-1～16トレンチの16本の試掘坑を設定した。そのうち、B-5・6・9～16トレンチからは、近世以前と考えられる水田が検出された。つまり、B区中央部を除き、東端と西半部分に古い水田が形成されていたと推測される。また、B-5・13トレンチからは水田に関わる溝状遺構も検出されている。一方、B-3トレンチからは中世所産の土師器の甕などが出土している。

C区（平成15年度施工分）

C-1～24トレンチの24本の試掘坑を設定した。C-12・13・16・17・19・22・24トレンチからは近世以前と考えられる水田・遺構が検出された。殊に、C-12・16トレンチからは弥生後期初頭の土器を伴って周溝や柱穴群が、近接するC-17・19トレンチからは水田に伴う流路が検出されており、弥生時代の集落とそれに付随する水田の存在が予想される。また、C-2～4、7～9、14・15・18トレンチからは近世水田面の直下から泥炭層が検出されており、C区西半に広い湿地が存在したことを窺わせる。遺物としては、既述の弥生時代後期初頭の甕などの他、C-23トレンチからは縄文時代の所産と考えられる西北九州産黒曜石製の石鏃なども出土している。

D区（平成16年度施工分）

D-1～8トレンチの8本の試掘坑を設定した。そのうち、D-1・3・4・8トレンチでは近世の水田面の直下に弥生～古墳時代の所産と考えられる柱穴・土坑などの遺構が、D-5・6・7トレンチでは近世を遡る水田が検出され、当該期の集落とそれに付随する存在が予測される。



第3図 賀来西・宮苑井ノ口跡 試掘トレンチ配置図(1/3300)

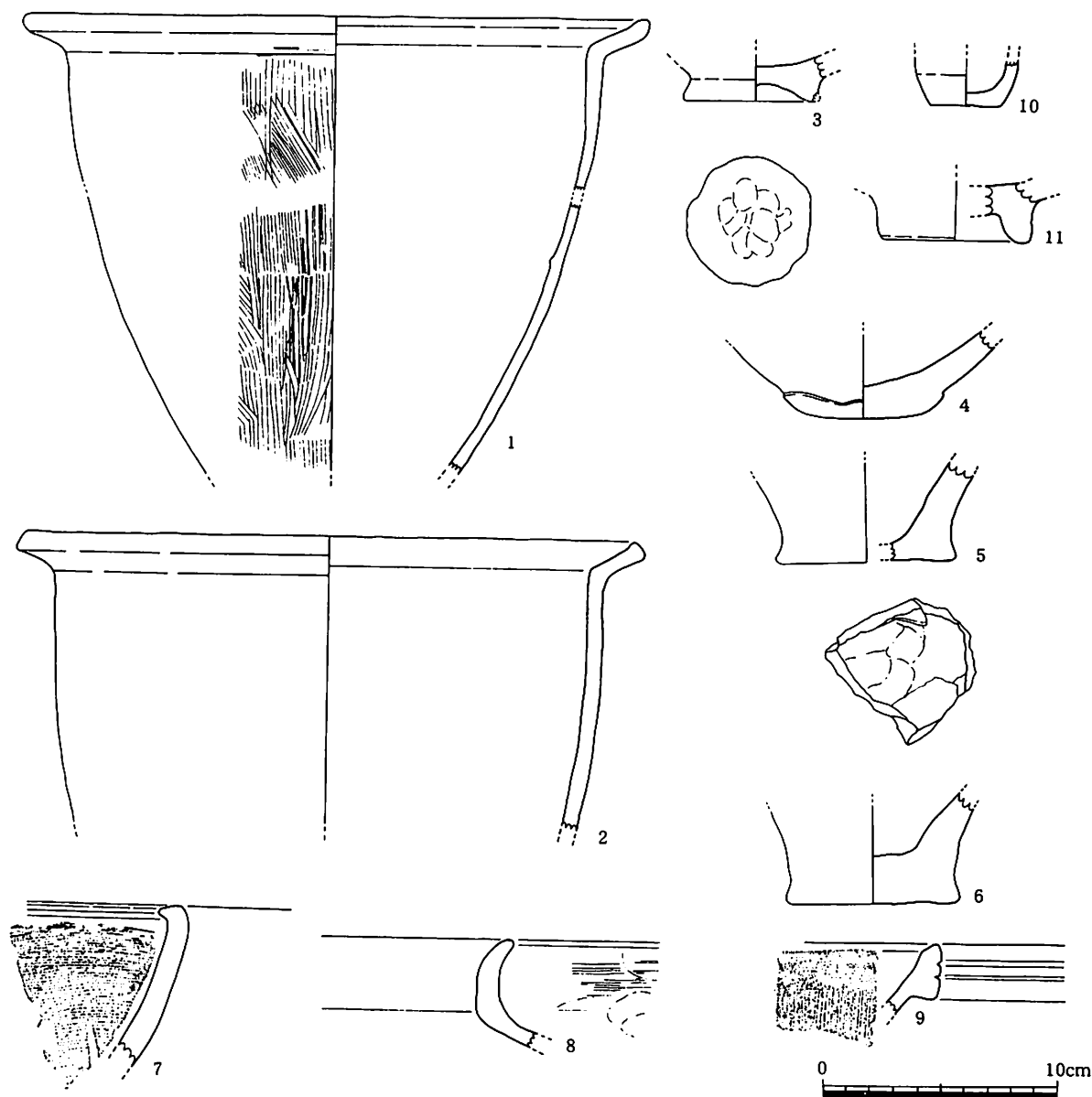
E区（平成 16 年度施工分）

E-1～53 トレンチの 53 本の試掘坑を設定した。E-1～18・24・26・32・34・29・30・32～44・47～49 トレンチでは近世を遡る水田が検出されている。E-19・20 トレンチでは近世以前の水田の他、中世の所産と考えられる包含層・柱穴が、E-28 トレンチでは近世以前だが時期不明の柱穴群が、また E-21・22 トレンチでは弥生～古墳時代の住居跡が、E-23 トレンチでは水田に伴うと考えられる流路が検出されており、それぞれの時期の集落が予測された。遺物としては、E-21 トレンチの住居跡内から古墳前期の土師器、弥生後期の甕などが出土した。

II. 出土遺物

1. 土器・陶器・磁器（第4図）

弥生時代中期を中心とする弥生土器、中世の所産である播鉢や土師器などが出土している。



第4図 試掘出土の土器・磁器(1/3)

第4図1=C-12トレンチ一括

弥生時代中期前葉の甕で、口縁部と胴部片が全体の1/4ほどが残存。口縁部は「く」の字状を呈し、内側の先端が若干跳ね上がるタイプである。復元口径は約27cmを測る。外面にハケ目が見られる。

第4図2=C-12トレンチ

弥生時代中期前葉の甕で、口縁から胴部当りまでが全体の1/4ほどが残存。第4図1と同様の跳ね上がり口縁である。

第4図3=B-4トレンチ一括

弥生時代の台付き鉢の高台部分のみ。内部底面及び高台部外面に丹が残存し、底部外面には指オサエが認められる。

第4図4=E-13トレンチ一括

弥生土器の底部で、後期初頭の所産と考えられる。やや膨らみを持った平底である。底径6.6cmを測る。

第4図5=E-25トレンチ一括

弥生土器の底部片で、中期の所産と考えられる。しっかりした平底である。復元した底径は7.7cmを測る。

第4図6=E-23トレンチ一括

弥生土器の底部片で、中期の所産と考えられる。しっかりした平底で、復元した底径は7.4cmを測る。

第4図7=A-8トレンチ一括

中世の瓦質の播鉢の口縁部片で、内面にハケ目が全体的に見られ、下端部に幅の広い播り面が僅かに認められる。口縁部は内側に若干屈曲する。

第4図8=B-3トレンチ一括

中世の所産と考えられる土師器の甕の口縁部片。口縁部が緩やかに外反する。頸部の屈曲部に指オサエが見られる。

第4図9=B-6トレンチ一括

近世に所産する焼締陶器の播鉢の口縁部片。口縁部上端に断面三角形で、2条の沈線の入る突帯紋が見られる。播部は、2～3mm間隔で縦に施された沈線によって形成されている。

第4図10=C-12トレンチ

白磁の小型の瓶の底部。外面底部及び内面には釉薬は施されておらず、外面底部には回転糸切りの痕が残る。

第4図11=A-8トレンチ一括

13世紀に所産する、龍泉窯系の青磁の碗の高台部片。全面に釉薬が施されている。

2. 石器 (第5～7図)

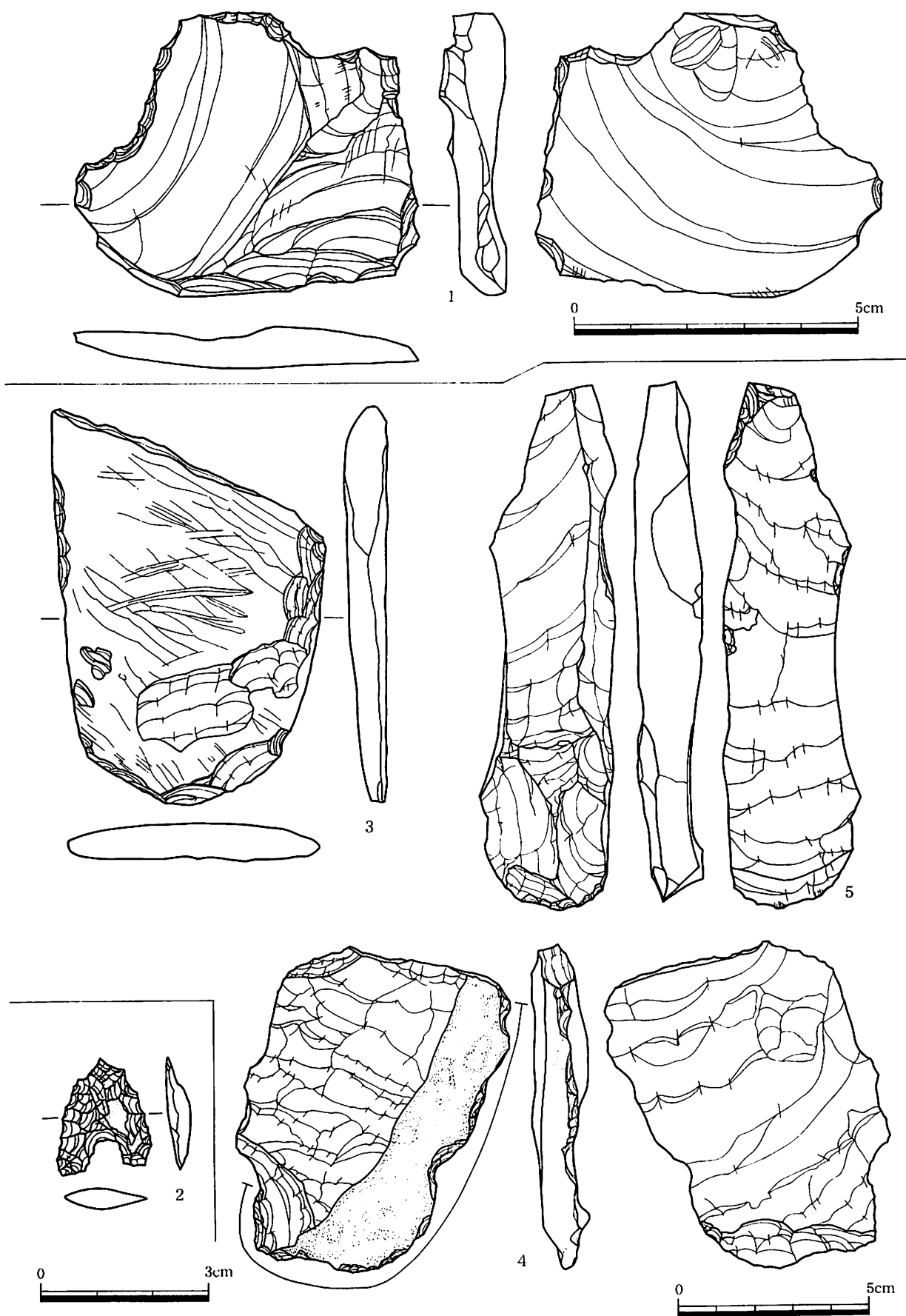
弥生～古墳時代と推測される凝灰岩製の石錘を中心に、旧石器～縄文時代の石器も出土している。石錘に用いられる凝灰岩は軟質で風化が進んでいるものが多いが、やや硬質のものも見られる。

第5図1=C-7トレンチ一括

大野川産の流紋岩製の使用痕を有する剥片。石材から後期旧石器時代の所産と推察される。単剥離打面の幅広剥片を素材とし、左右両側縁に使用痕によると考えられる剥離痕が認められる。打面を残存し、表面に残る剥離痕から、この剥片が剥がされる前にも、ランダムな方向からの幅広剥片が剥離されたことが窺える。

第5図2=C-23トレンチ一括

長崎県の針尾系と考えられる、暗青灰色の黒曜石製の石鏃。右脚部の右側縁を若干ガジリによって欠損。基部の深い抉りから縄文時代早期の所産と推察される。また、先端部の歪な形状から、先端の欠損の後、リダクションしたものと推測される。



第5図 試掘出土の石器①(1, 2は1/1、3~5は2/3)

第5図3=C-12トレンチ一括

穿孔は見られないが、佐賀県産と考えられる結晶片岩製の磨製の石包丁と考えられる。同じトレンチから出土した弥生土器などから考慮して、弥生時代中～後期の所産と推察される。右半部は裏から表への折れによる欠損。表面の右半を中心に整形のための二次加工痕が大きく残存し、裏面の中央部にも磨き残した加工痕が一部見られる。表面には磨き整形による擦痕が認められ、左上⇄右下方向の後に左⇄右方向の順で磨いたことが判る。裏面にも、右上⇄左下方向の磨き整形による擦痕が残る。左側縁が刃部である。

第5図4=D-8トレンチ一括

凝灰岩製の使用痕を有する剥片。複剥離の打面を残存する幅広剥片を素材とする。右側縁下半から末端にかけて使用によると考えられる剥離痕が認められる。石材の共通性から石錘と同時期の所産か。表面には同様の幅広剥片の剥離痕が2枚見られる。

第5図5=E-11トレンチ一括

凝灰岩製の先細りの見事な縦長剥片だが、使用した様子も二次加工も認められない。石核の稜付き剥片の可能性が高い。

第6図1=D-1トレンチ一括

やや硬質の凝灰岩製の石錘。下端右半に自然面を残す。打ち欠きによって挟りを入れている。裏面はほぼ全面自然面で、表面も下半と左側縁は自然面に近いかなり古い剥離面で、扁平な礫片に近いものを素材とし、上端から半ば以上に及ぶ剥片を剥離した後に、挟りを施している。右側面も自然面に近い古い剥離で、欠損ではない。また、右側面中央には使用によると考えられる剥離痕が見られる。

第6図2=D-1トレンチ一括

やや硬質の凝灰岩製の石錘。上端・右側縁中央に表面から、下端に中央に表裏面からの打ち欠きによる挟りが、左側縁を除く全周縁に整形のための二次加工が施されている。表裏面内側に大きく自然面が残存する礫片を素材とする。また右側縁の挟りの裏面には、使用によると考えられる剥離痕が認められる。左側縁は、裏から表への折れによる欠損。

第6図3=A-10トレンチ一括

凝灰岩製の石錘。上下端中央に打ち欠きによる挟りが、右側縁を除くほぼ全周縁に、整形のための二次加工が施されている。表裏面内側に大きく自然面が残存する礫片を素材とする。表裏面に左右方向の擦痕と、上下端の切り目を繋ぐような擦痕と剥離痕が認められる。右側縁は裏から表への折れによる欠損か。

第6図4=C-19トレンチ一括

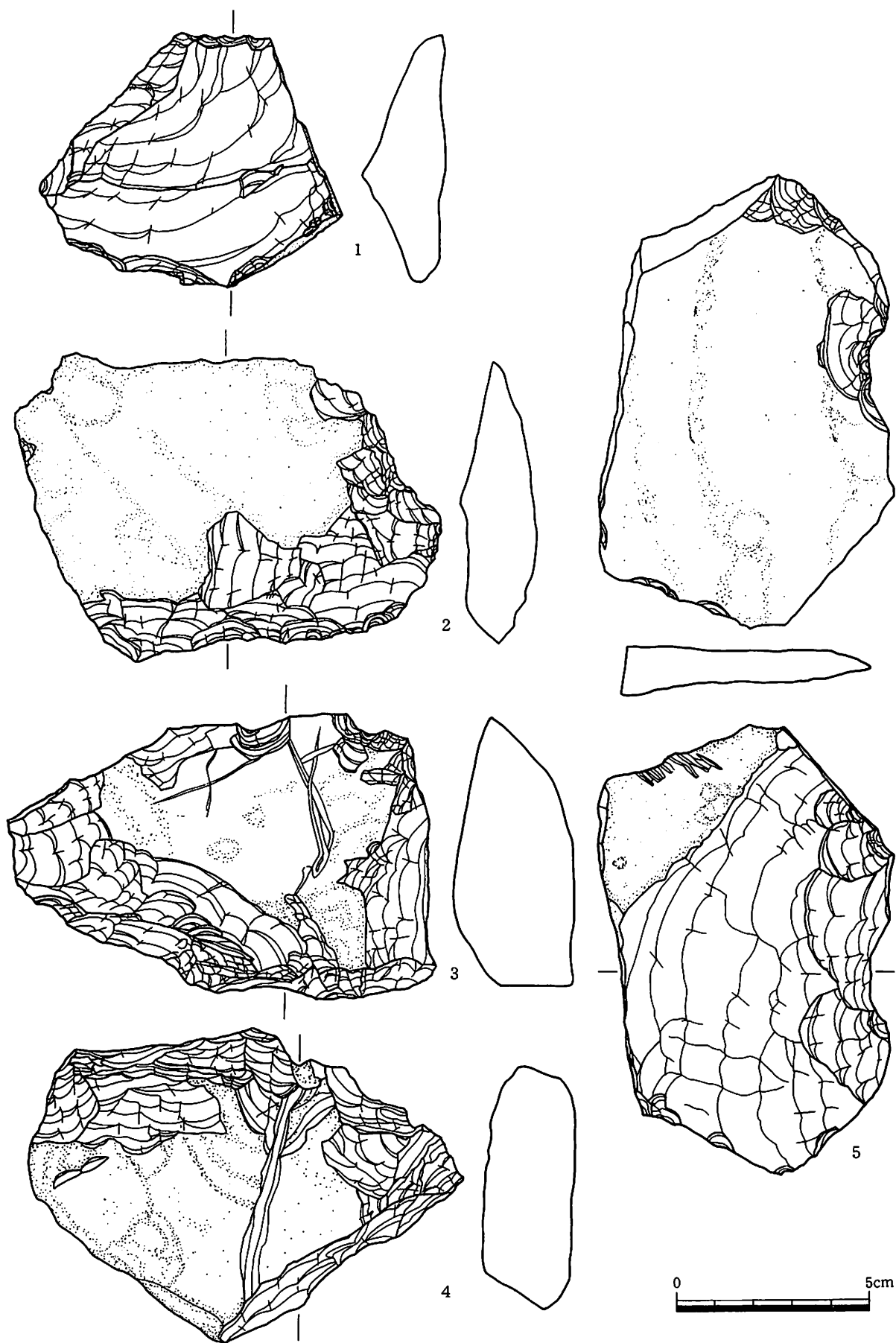
凝灰岩製の石錘。上端中央に表裏面からの打ち欠きによる挟りが、上端の全側縁に表裏面からの整形のための二次加工が施されている。表面の上端の挟入部から下端方向に深い擦痕が見られる。また、左側縁の表裏面に切り目状の圧痕、表面にはそこから中央方向へ剥離痕と擦痕が認められる。表裏面内側に大きく自然面が残存する礫片を素材とする。右側縁は裏から表への折れによる欠損。

第6図5=E-30トレンチ一括

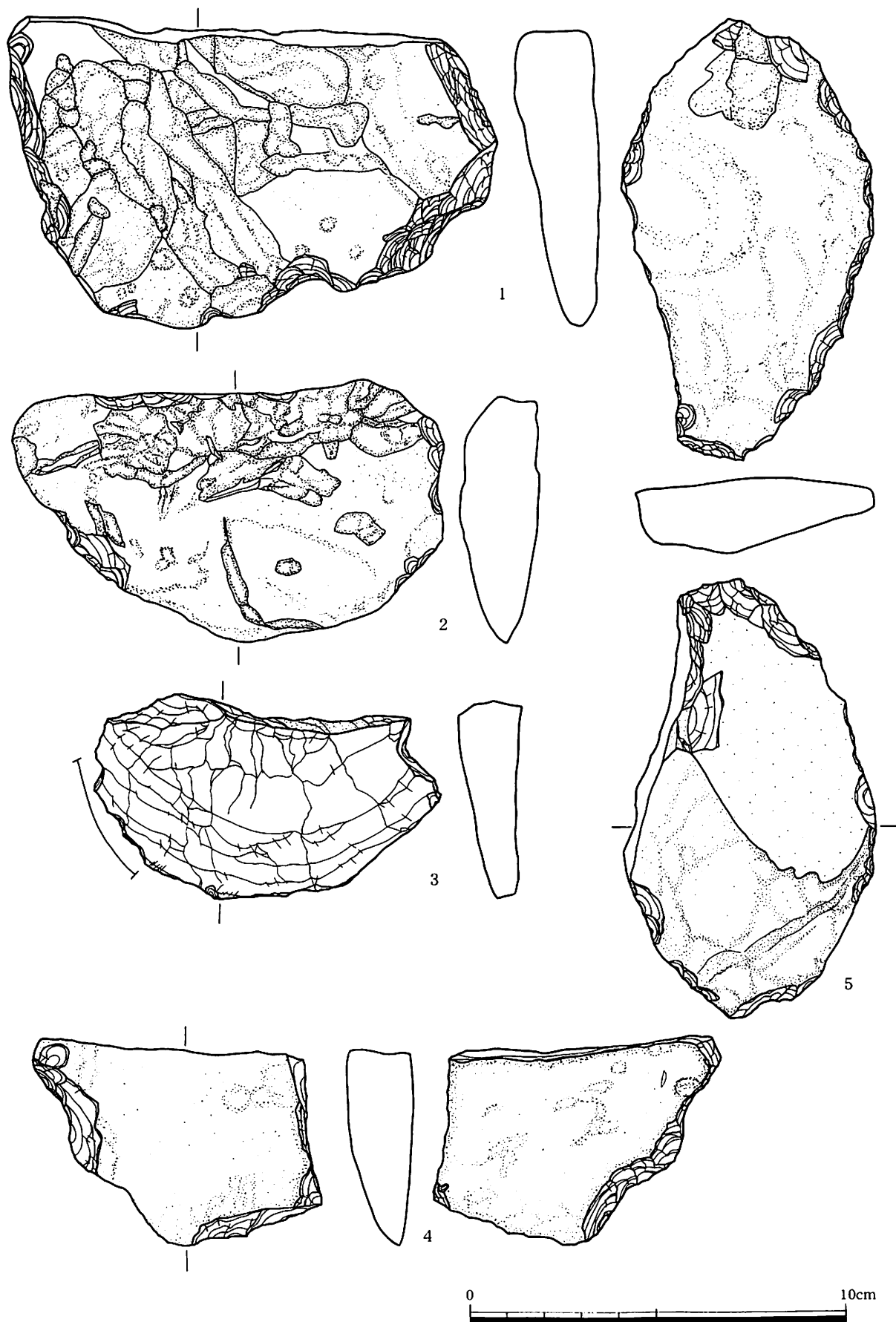
凝灰岩製の石錘。上端・左側縁上半・裏面は分割面、表面の右側縁近くは自然面である。右側縁中央部に擦痕が認められる。下端中央に表裏面からの打ち欠きによる挟りが、その周辺に整形のための二次加工が施されている。

第7図1=D-5トレンチ一括

凝灰岩製の石錘。表裏面共に大部分が自然面、上端は分割面で、礫片を素材としている。下端中央・右側縁に裏面からの、左側縁に表面からの打ち欠きによる挟りが、上端を除くほぼ全周縁に整形のための二次加工が施されている。表面に、左右方向に掛け紐による2条の圧痕が、左右側縁の挟入部の部分から延びるように見られ、



第6図 試掘出土の石器②(2/3)



第7図 試掘出土の石器③(2/3)

それを切るように、下端中央の挟入部から延びるように、左上⇄右下方向のやはり掛け紐による圧痕が認められる。両方向の圧痕は裏面にも同様の状況で看取される。また、左上⇄右下方向の圧痕の裏面部の上端には、掛け紐によると考えられる挟入状の欠損が見られる。

第7図2＝D－4トレンチ一括

凝灰岩製の石錘。表裏面とも殆ど自然面、上端は分割面で、礫片を素材としている。右側面・下端中央やや左寄りに表面からの、左側縁に裏面からの打ち欠きによる挟り、周縁の一部に整形のための二次加工を施している。挟入部から上下・左右の2方向の掛け紐による圧痕が表裏面共に認められる。また、裏面の上下方向の圧痕の上端部に掛け紐による欠損が認められる。

第7図3＝E－15トレンチ一括

凝灰岩製の石錘。裏面が節理面で、表面が主要剥離面とする幅広剥片を素材とする。上下端は分割面である。右側縁に挟入状の打ち欠きによる挟入部が施されており、右側縁はそれに対応するように欠損が認められる。また、下端左半には微細な剥離痕が認められる。

第7図4＝D－5トレンチ一括

凝灰岩製の石錘。表裏は殆ど自然面で、礫片を素材としている。上端・右側面は表からの折れによる欠損である。左側縁は表裏面からの、下端は裏面からの整形のための二次加工が施されており、左側縁のものは挟入状となっており、打ち欠きによる挟入部の可能性が高い。

第7図5＝D－8トレンチ一括

やや硬質の凝灰岩製の石錘。表面の左半・裏面・上端面はの大部分は自然面で、表面右半は節理面であり、礫片を素材としている。上端面を除くほぼ全周縁に整形のための二次加工が施されている。左側縁の加工は挟入状で打ち欠きによる挟りの可能性が高く、その裏面部には挟入部から延びるように横方向の圧痕が認められ、それに対応するように右側縁表裏面には薄い剥離痕が看取され、左右方向に掛け紐が掛けられていたと推測される。また、上端面左端・下端中央部に薄い剥離痕が同様に見られ、縦方向の掛け紐も想定される。

第1表 試掘出土土器・陶器・磁器観察表

図版	遺物	出土遺構 出土区	種類	器種	時期	胎 土		色 調		器 面 調 整		法 量 (cm)			備 考
						混和材	粒子	内 面	外 面	内面	外面	口 径	胴径最大径	底 径	
4	1	C-12トレンチ	弥生土器	甕	弥生中期 前 葉	長石・石英 赤色・白色粒子	微粒	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ハケ目 ヘラナデ	(27.0)	(23.2)	—	反転復元 黒底 表面上部煤付着
4	2	C-12トレンチ	弥生土器	甕	弥生中期 前 葉	角閃石・長石 石英・チャート 赤色粒子	微粒	橙 色	橙 色	ハケ目 ヘラナデ	ナデ	(27.0)	(23.0)	—	反転復元
4	3	B-4トレンチ	弥生土器	台付鉢	弥生中期	長石・石英 雲母・角閃石	微粒	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	—	指オサエ	—	—	5.3	側面・内部底面に丹
4	4	E-13トレンチ	弥生土器	鉢	弥生後期末 葉	角閃石・石英	微粒	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	—	—	6.8	反転復元
4	5	E-25トレンチ	弥生土器		弥生中期初 葉	石英・赤色粒子	微粒	灰白色	褐色	ナデ	ナデ	—	—	(7.7)	反転復元
4	6	E-23トレンチ	弥生土器		弥生後期 初頭	角閃石・長石 石英・黒色粒子 白色粒子	微粒	灰白色	赤褐色	指オサエ ナデ	ナデ	—	—	(7.4)	反転復元
4	7	A-8トレンチ	瓦質土器	擂 鉢		石英・角閃石	微粒	灰色	灰色	ハケ目	ナデ	—	—	—	
4	8	B-3トレンチ	土師器	甕	中 世	石英・角閃石	微粒	にぶい褐色	褐色	ナデ	指オサエ	(21.0)	—	—	
4	9	B-6トレンチ	焼締陶器	擂 鉢	近世	石英・角閃石	微粒	灰色	灰色	ヘラ	ナデ	(31.0)	—	—	埋産
4	10	C-12トレンチ	白磁	小型瓶	近世	—	—	白色	灰白色	—	—	—	—	3.0	回転糸切
4	11	A-8トレンチ	青磁	碗	13C	—	—	オリーブ灰色	オリーブ灰色	—	—	—	—	(6.4)	反転復元 龍泉窯系

第2表 試掘出土石器観察表

図版	番号	出土区	器 種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	時 期	備 考
5	1	C-7トレンチ	使用痕剥片	流紋岩	5.00	6.05	1.10	27.0	旧石器	
5	2	C-23トレンチ	石鏃	針尾系黒曜石	2.00	1.65	0.40	1.1	縄文早期	
5	3	C-12トレンチ	石包丁	結晶片岩	7.20	(10.55)	1.10	120.0	弥生時代	右側若干欠損
5	4	D-8トレンチ	使用痕剥片	凝灰岩	8.60	7.40	1.50	64.0	弥生～古墳	右半欠損
5	5	E-11トレンチ	剥片	凝灰岩	13.85	3.60	1.80	77.5	弥生～古墳	
6	1	D-1トレンチ	石錘	凝灰岩	6.60	8.00	2.15	87.0	弥生～古墳	
6	2	D-1トレンチ	石錘	凝灰岩	8.05	11.20	2.05	190.0	弥生～古墳	
6	3	A-10トレンチ	石錘	凝灰岩	7.45	11.25	3.25	240.0	弥生～古墳	
6	4	C-19トレンチ	石錘	凝灰岩	8.20	(11.45)	3.30	190.0	弥生～古墳	
6	5	E-30トレンチ	石錘	凝灰岩	7.75	11.90	1.50	120.5	弥生～古墳	右側縁欠損
7	1	D-5トレンチ	石錘	凝灰岩	8.20	13.00	2.40	199.5	弥生～古墳	
7	2	D-4トレンチ	石錘	凝灰岩	6.90	11.40	2.10	117.0	弥生～古墳	
7	3	E-15トレンチ	石錘	凝灰岩	6.35	9.20	1.65	72.0	弥生～古墳	
7	4	D-5トレンチ	石錘	凝灰岩	(5.55)	7.60	1.95	67.5	弥生～古墳	
7	5	D-8トレンチ	石錘	凝灰岩	6.60	12.60	2.20	140.5	弥生～古墳	左側・下端欠損

第4章 本調査

試掘の成果によって遺跡の存在が確認され、区画整理により市道が増設される区域で、構造物を敷設する地点については本調査が実施されることとなった。区画整理の造成工事の進捗状況に従って、試掘のA区の区域を平成14年度に第1次調査として、B区の区域を平成15年度に第2次調査として、調査を行った。なお、B区は調査区が東西2箇所に分れたため、東側部分を第Ⅰ調査区、西側部分は更に市道が十字に交差する地点に当たったため、南北道を第Ⅱ調査区、東西道を第Ⅲ調査区として設定した（第8図）。

I. 第1次調査

南北約2.5m×東西約59m＝約147.5㎡の調査区を設定して、調査を実施した（第9図）。

近世の水田面の下に7枚の水田が検出された。そのうち、第1・2号水田は中央の深くなっている部分でのみ、土層観察で検出されただけであり、第5号水田もやはり中央の深い部分で小畦畔が認められただけなので、詳しい報告は省略する。第3・4・6・7号水田は東西端の区域で水田の始まる大畦畔が、その内側にはそれぞれ複数の小畦畔が検出され、また第1号水田の上面に、近世の溝を伴う大・小畦畔各1条が見出された。

それぞれの水田の所属に時期についてだが、遺物の出土が少ないので確度はやや低いが、第3・6・7号水田で13～14世紀の所産と考えられる磁器・土師器などが出土しており、第4号水田でも中世の所産と考えられる青磁などが検出されており、第3・7号水田の全てが13～14世紀以前の中世段階に造成・耕作されたと推測される。第1・2号水田については、第3号水田の上層で近世水田のV・VI層の下面なので、13～14世紀以降近世以前としか言えない。

1. 第3号水田（第10図）

土層観察からすると（第46図）、西側はA・B-15グリッド中央部に検出されたC畦畔から水田が始まっており、西側は調査区の西端でも耕作土・床土共に認められ、なお若干西側に延びていくものと推測され、南北の広がりには不明だが、東西は少なくとも53m以上の長さを有している。

平面的にA・Bの2小畦畔と水田の始まりを示すCの大畦畔が検出された他、A・B-5・6グリッド境界付近で、近世期のSA-O1A畦畔とS-O4B畦畔に垂直的に挟まれる形で小畦畔＝Dが存在することが、土層観察で判明した。

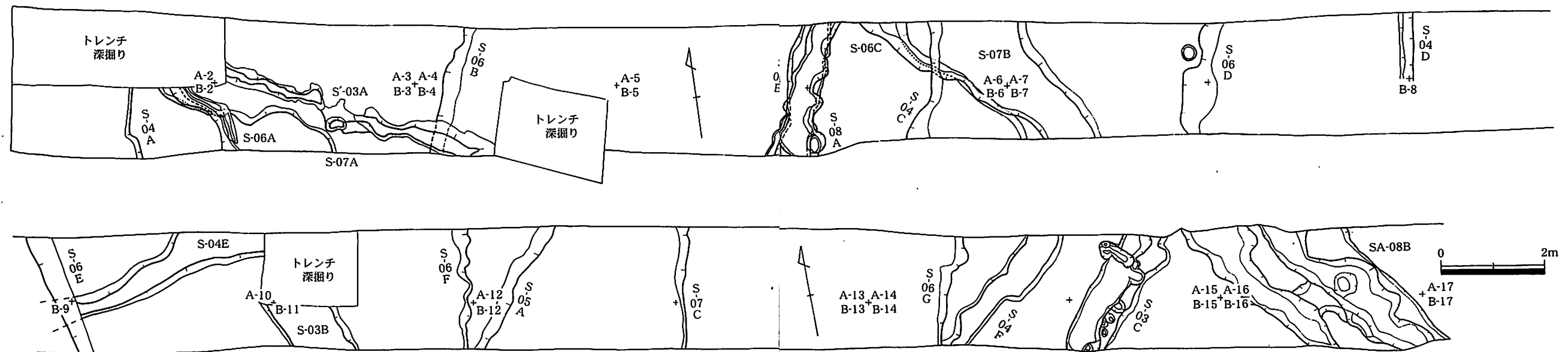
また、土層図にa＝耕作土・b＝床土の別で示したように、調査区全域で両者の層が見られるわけではない。西端からA・B-2・3グリッド境界付近までは両者が存在するが、そこからD畦畔までは耕作土しか認められず、D畦畔の東側からは暫く床土しか見られず、A・B-7グリッド中央部からは再び両者が看取されるようになり、C大畦畔まで続いてゆく。耕作土の見られない区域は、上層の近世の水田によって削平されたと考えられ、床土が看取できない区域は、床土形成の発達具合に関係すると推測される。

更に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして第3号水田面の標高について見てみると、調査区の東端で約14.74mで、暫く同様の高さが続き、D小畦畔の東側から下がり始め、A・B-10・11グリッド境界付近では約14.65m、A・B-11・12グリッド境界付近で最も低くて約14.60mとなり、そこから再び上がり始めてA・B-13グリッド中央部で約12.68m、水田の終るC大畦畔の西側で約14.76mとなっている。つまり、東西の端と最深部で約15cmの標高差が見られ、平均して東側で約0.4%、西側で約1.3%の傾斜を有している。

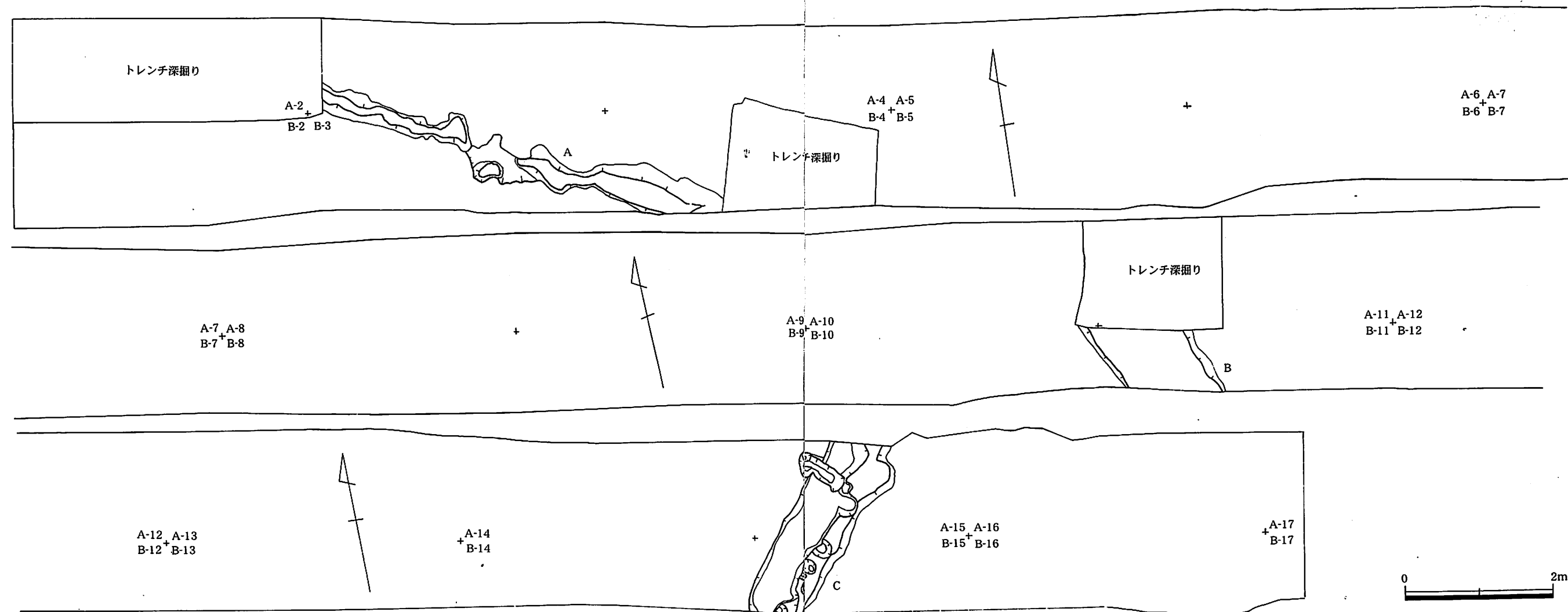
①付属遺構

A畦畔（第11図）

A-3・B-3・4グリッドに位置し、西北西-東南東方向に造成された小畦畔である。調査区内で長さ約4.2



第9図 賀来西遺跡第1次調査遺構配置図(1/90)



第10図 第3号水田平面図(1/60)

m、最大幅約 0.5 m、最大高約 2.5cm を測る。高さは、近世 (V・VI層) ないしは第 1・2号水田に削平を受けていると考えられる。

B畦畔 (第 12 図)

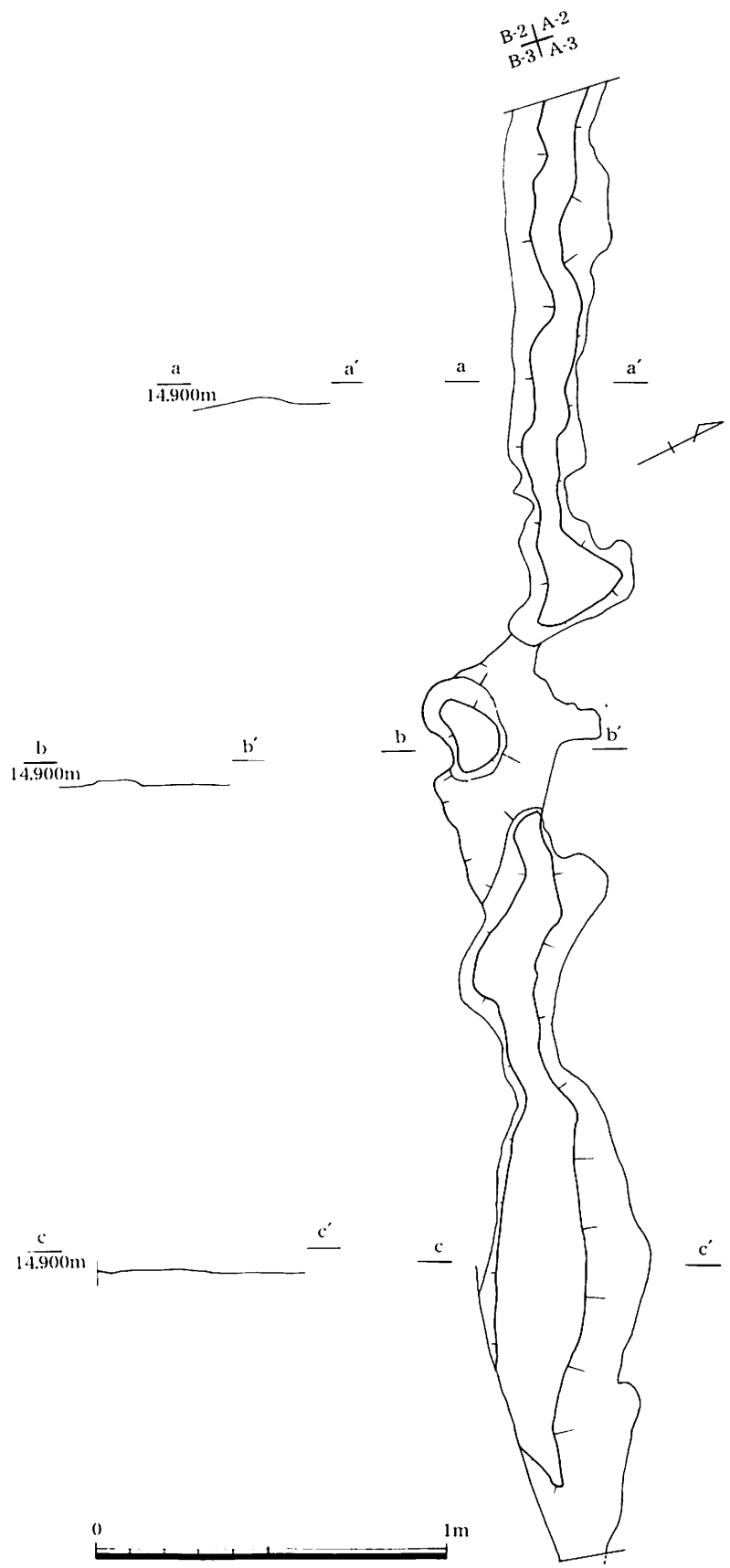
B-10・11 グリッドに位置し、北北西-南南東方向に造成された小畦畔である。調査区北半が試掘トレンチの深掘り部分によって破壊されているので、長さ約 1.0 m が残存し、幅約 1.0 m、最大高約 3cm を測る。他の畦畔に比べ、幅がかなり広いタイプである。

C畦畔 (第 14 図)

A・B-15 グリッドに位置し、北東-南東方向に造成された大畦畔で、第 3 号水田の東側の始まりを形成しており、畦畔の東側に用水路と考えられる溝を伴っている。調査区内で、長さ約 2.6 m、最大幅約 1.0 m を測る。畦畔自体は最大幅約 0.5 m、最大高 3cm、溝の最大幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。底面の高さで約 16cm を有しているため、北東から南西に向って水が流れていたと推測される。また、A・B畦畔の方向と比較して、第 3 号水田はほぼ北東-南西とほぼ北北西-南西の直交する二方向の畦畔を有していたと推察される。

D畦畔 (第 13 図)

平面では検出できず、土層で確認されただけである。土層観察からすると、直下の第 4 号水田 B 畦畔と重なるように、その溝を切る形で存在しているので、平面的に第 4 号水田 B 畦畔と識別できなかったと考えられる。そうだとすると、第 4 号水田 B 畦畔とほぼ同じ北北東-南南西方向に造成され、調査区内での長さも同様に約 2.4 m を有していたと推測される。土層からすると、東側に溝を伴う小畦畔で、幅約 0.9



第11図 第3号水田A畦畔平・断面図 (1/20)

m (=畦畔約 0.2 m + 溝約 0.7 m)、畦畔の最大高約 2 cm、溝の深さ約 15 cm を測る。方向からすると、A 畦畔に平行する向きの小畦畔だったと推測される。上面は近世の溝に壊されている。

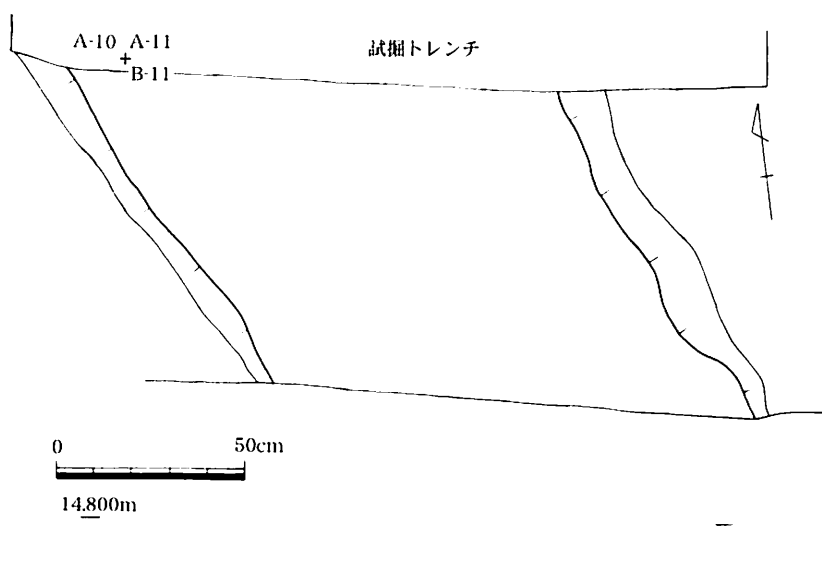
②出土遺物 (第 15 図)

第 15 図 1 = 第 3 号水田 A・B - 2・3・4 グリッド一括

13 世紀の所産と考えられる龍泉窯系の青磁の高台付碗の底部片。表裏面とも、オリーブ灰色を呈し、貫入が見られる。

第 15 図 2 = 第 3 号水田 A・B - 1 ~ 5 グリッド一括

中世の所産と考えられる瓦質の火鉢の底部片。内面にハケ目が見られる。

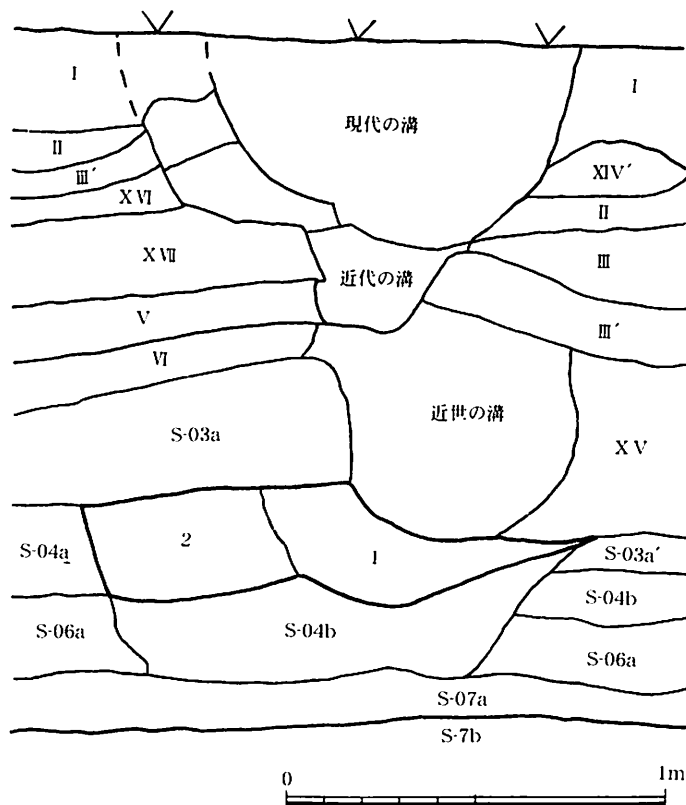


第12図 第3号水田B畦畔平・断面図(1/20)

2. 第4号水田 (第 16 図)

土層観察からすると、第3号水田の直下に形成されており、A・B - 3 グリッドの東端のA大畦畔から水田が始まっており、A・B - 14 グリッド東端のF大畦畔で終息していることから、南北は不明だが、東西は約 48.5 m の拡がり有している。そして、平面的には、西端のA、東端のFの2大畦畔と、その内側にB・C・D・Eの4小畦畔が検出されている。

また、土層図に耕作土 = a 層、床土 = b 層の別で示しているが、第3号水田同様に、本水田も両者の層が全域で見られるわけではない。即ち、A大畦畔からB畦畔の西側までは耕作土しか認められず、B畦畔の東側からは一転して床土のみが看取されており、A・B - 6 グリッドの中央では部分的に耕作土が現れるが、す



1. 黒色砂質土: 白色粒子・鉄分を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
2. 暗灰褐色砂質土: 鉄分を若干、白色粒子を割合含む。しまりよく、粘性殆どなし。

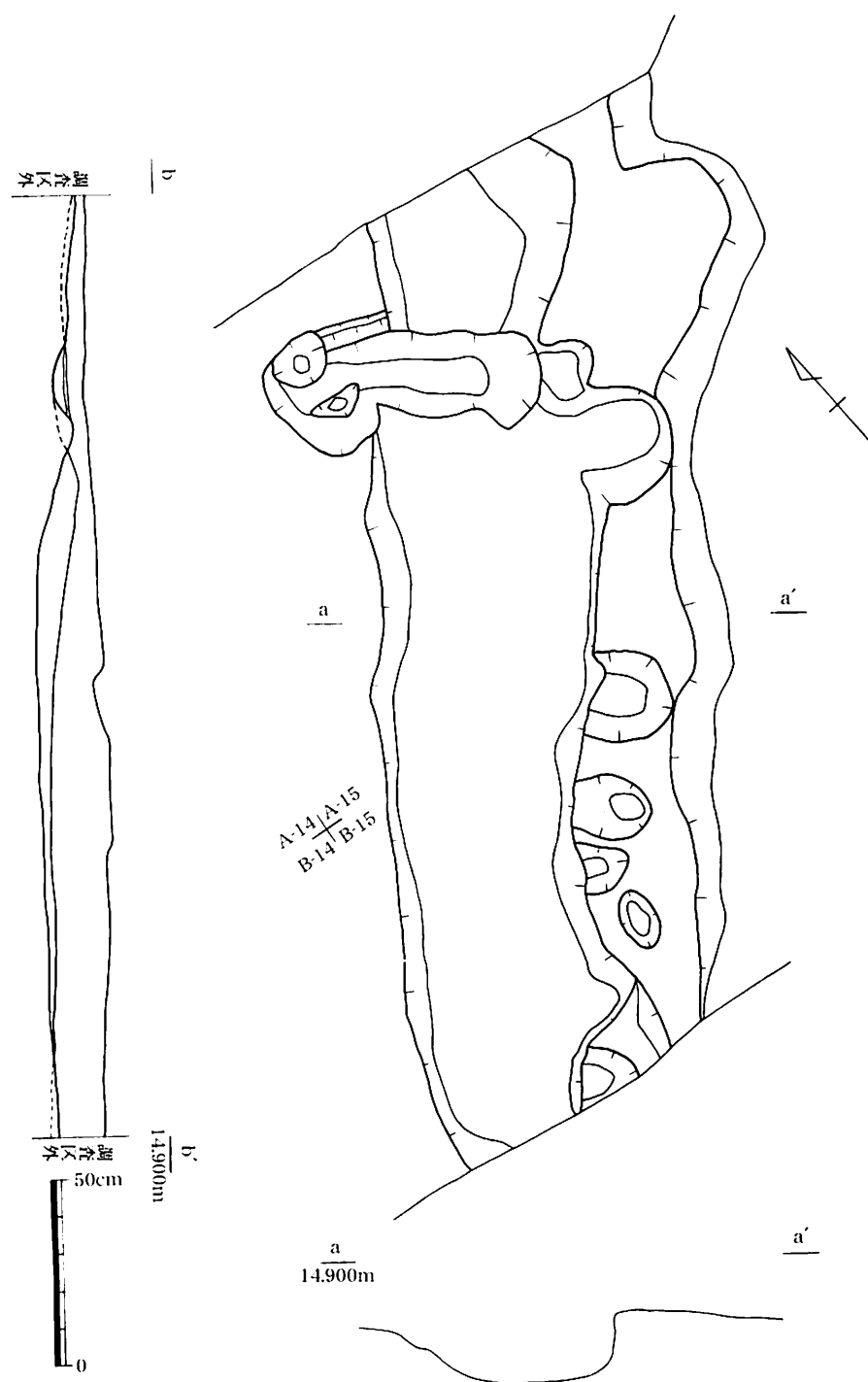
第13図 第3号水田D畦畔土層断面図(1/20)

ぐにまた床土のみとなる。
が、A・B-8グリッド中央で再び耕作土が現れ、両者が揃い、A・B-14グリッド東端の水田の終わりであるF畦畔まで続いている。

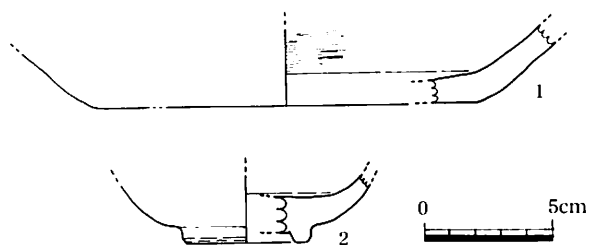
更に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして第4号水田の標高を見てみると、A畦畔の東側で約14.70mで始まり、B畦畔の西側まで漸次落ちていって約14.65mとなり、A・B-5・6グリッド境界付近のB畦畔の東側では約14.62mとやや下がる。B畦畔の東側も同レベルで移行するが、A・B-6グリッド中央部のC畦畔のところで一旦盛り上がり、再び同様のレベルに戻る。だが、A・B-8・9グリッド境界付近のD畦畔辺りから約14.60mと下がり始め、A・B-10グリッド中央部のE畦畔の東側で約14.46mとなり、A・B-12グリッド中央部が最も深く約14.36mを示す。

そこから上がり出し、A・B-13グリッド中央部で約14.40mとなり、A・B-14グリッドの東端の水田の終るF畦畔の西側で約14.50mを示す。つまり、水田の始まりの西端のA畦畔と最深部で約34cm、最深部と水田の終りのF畦畔で約14cmの標高差が認められ、平均で西側が約0.9%の、東側が約1.6%の傾斜を有している。

遺物としては、須恵器の鉢や、12～13世紀の青磁などが出土しているが、水田の造成時期は



第14図 第3号水田C畦畔平・断面図(1/20)



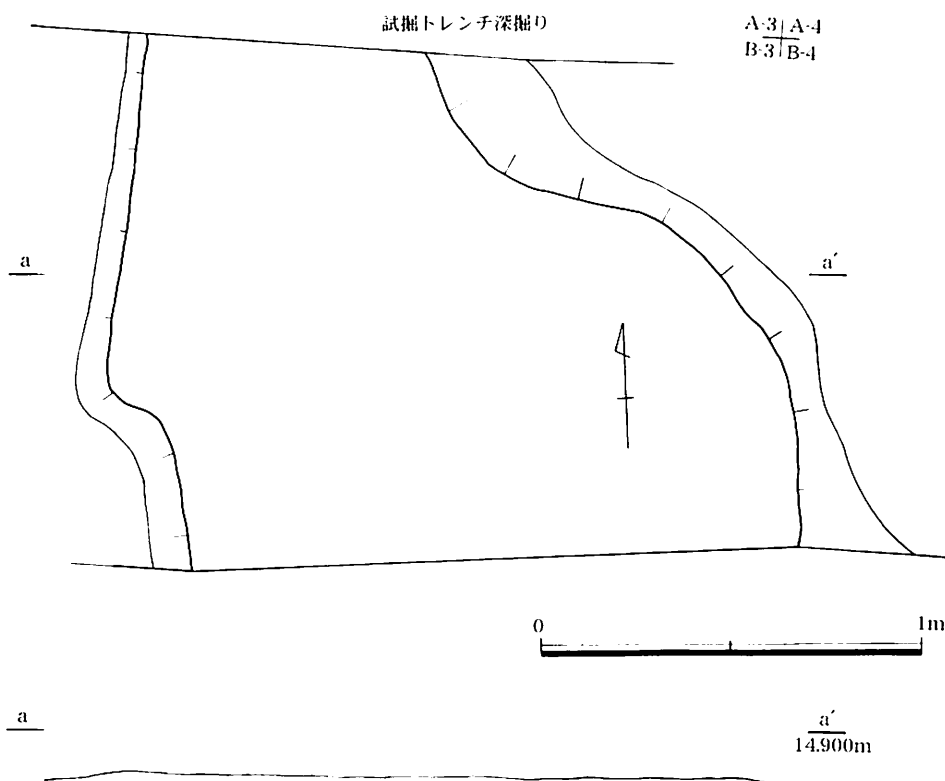
第15図 第3号水田出土遺物(1/3)

既述のように、13～14世紀以前としか言えない。

①付属遺構

A畦畔 (第20図)

B-2・3グリッドに位置し、第4号水田の始まりを形成する大畦畔である。ほぼ南北方向に造成されており、調査区内で長さ約1.4mを有するが、北半は試掘トレンチの深掘部分で破壊されている。最大幅約1.9m、最大高約2.5cmを測る。大畦畔に相応して幅の最も広いものの1つである。



第20図 第4号水田A畦畔平・断面図(1/20)

B畦畔 (第21図)

A・B-5・6グリッド

下に位置し、ほぼ南北方向に造成された溝を伴った小畦畔で、畦畔の盛り上がり自体は殆ど残っていない。調査区内で長さ約2.7m、最大幅約0.9m、溝部分の深さ約15cmを測る。溝の上面を第3号水田D畦畔の溝によって切られている。

C畦畔 (第17図)

B畦畔から2.0mほど隔てて、A・B-6グリッド中央部に位置し、ほぼ南北方向に造成された小畦畔である。調査区内で長さ約2.3m、最大高約4.5cmを測る。現状では東側に落ちるだけだが、上面の水田に削平を受けたため、一定の幅を持った盛り上がりであったと推測される。

D畦畔 (第18図)

A・B-8・9グリッド境界付近に位置し、ほぼ南北方向に造成された小畦畔である。調査区内で長さ約1.3mを測るのみで、調査の精度の問題で検出できなかったが、南壁の土層観察から調査区南半にも存在したと考えられる。最大高は約3.0cmが残存する。また、現状で西側に落ちるだけだが、正面の水田に削平を受けたため、一定の幅を持った盛り上がりがあったと推測される。

E畦畔 (第24図)

A・B-10グリッドに位置し、ほぼ東西方向に造成された小畦畔である。調査区内で長さ約3.3m、最大幅約0.9m、最大高約12cmを測る。検出できなかったが、西方向のA・B-9グリッド方面に延びてゆくものと推測される。

F畦畔 (第19図)

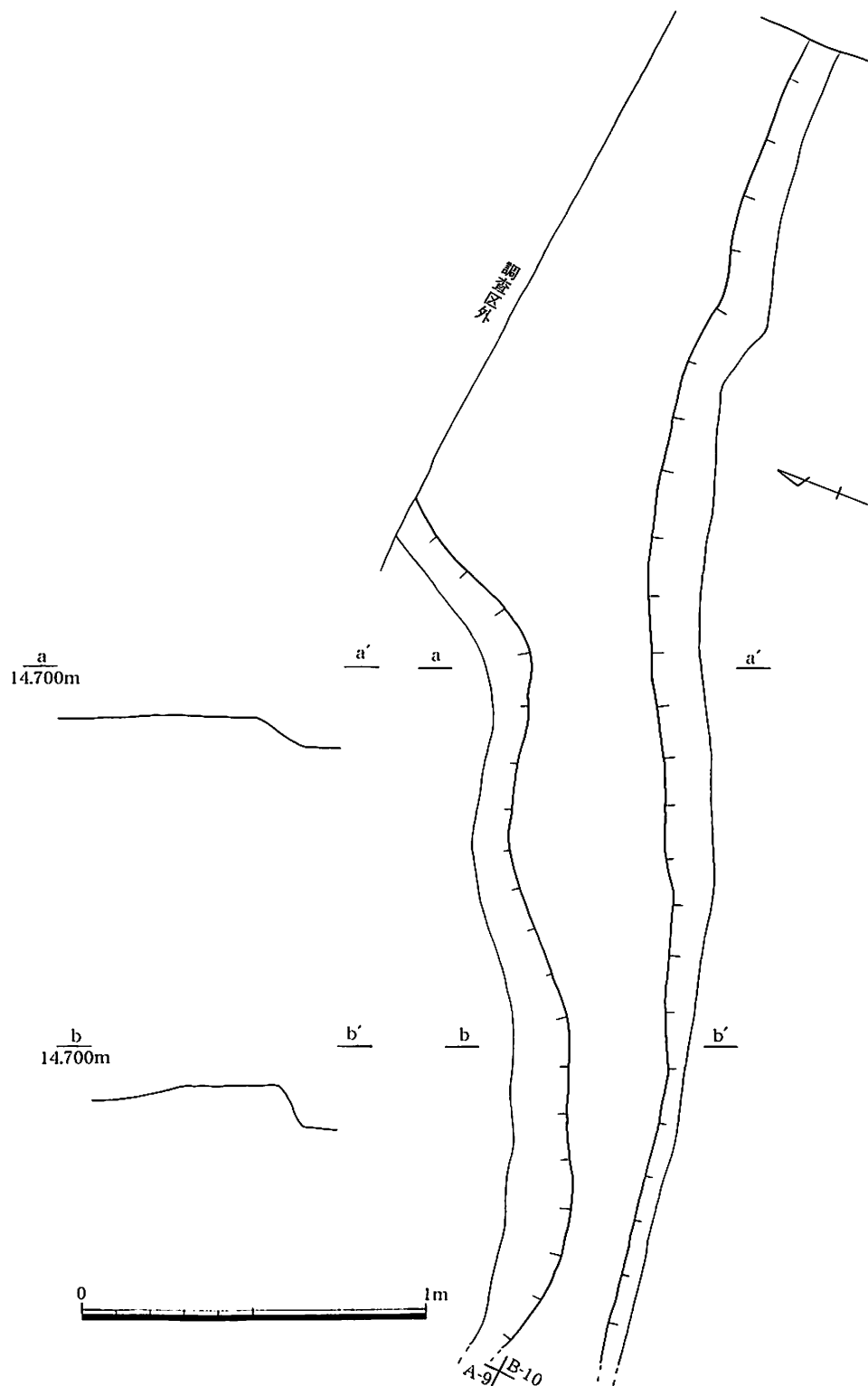
A・B-14グリッドに位置し、北東-南西方向に造成された、水田の東側の始まりを示す大畦畔である。調査区内で長さ約2.8m、最大幅約0.8m、最大高約2.5cmを測る。方向的にいてE畦畔と対を為すと考えられ、他のA・B・C・D畦畔も方向的に対を為し、第4号水田は基本的に南北と東西の2方向の直交する畦畔を有していたと推察される。

第22図3=第4号水田一括

14～15世紀所産の龍泉窯系の青磁の口縁部片。内外面共に灰オリーブ色を呈し、外面には蓮弁文が見られる。

第23図1=第4号水田A・B-14グリッド一括

凝灰岩製の砥石。上下端・左側面は分割面であり、分割時の擦痕が残存する。右側面は分割面を一部残すが、大部分は割れによる欠損面である。表裏面は磨き整形が施されており、表面には研ぎによる左右方向の擦痕が確認



第24図 第4号水田E畦畔平・断面図(1/20)

められる。

3. 第6号水田 (第25図)

土層観察からすると (第46図)、第4号水田の直下に形成されているが、最深部では部分的に第5号水田が挟まる。西側はA・B-3グリッドの東端辺りのA畦畔——第4号水田A畦畔よりやや東側に位置——から始まっており、東側はA・B-14グリッド中央部のG畦畔——第4号水田F畦畔よりやや西側に位置——で終わっている。南北は不明だが、東西は約46mの幅を有している。平面的にはA・Gの2大畦畔とB～Fの5小畦畔が検出されており、E・F間の13グリッド中央部に土層では小畦畔が観察され、H畦畔と称しておく。

また、土層図に耕作土=a層、床土=b層の別で記しているが、第3・4号水田と同様に本水田も両層が全域で見られるわけではない。即ち、A畦畔からA・B-6・7グリッド境界付近のC畦畔の東側までは耕作土は削平されて検出されず床土のみであり、C畦畔の東側からA・B-10・11グリッド境界付近のH畦畔西側までは両層が見られ、H畦畔の東側から水田の終わりのG畦畔までは再び床土しか検出されていない。

次に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして第6号水田の標高の推移を見てみると、A畦畔からC畦畔の西側までは床土しかないため、上面の第4号水田と同じ値を示すが、A畦畔で約14.70mで始まって暫く同程度だが、A・B-4グリッド中央で約14.65mと若干下がって暫く同様の値が続き、A・B-6グリッド中央のC畦畔西側で約14.60m、東側で約14.56mと落ち、A・B-7・8グリッド境界のD畦畔西側で約14.50mと引き続き下落し、A・B-10グリッド東側のH畦畔西側で約14.42mと一挙に落ち、A・B-11畦畔東側では約14.32mと一旦溝状に下がってから、再び約14.42mの値を示すようになって暫く継続するが、A・B-11・12畦畔境付近のF畦畔の東側で約14.32mと一挙に落ち、A・B-12・13グリッド境界付近が約14.30mと最も深くなってから上がり始め、A・B-13グリッド中央のH畦畔東側で約14.40m、水田が終了するA・B-14グリッド中央部のG畦畔西側で約14.44mを示す。水田の東側の始まりのA畦畔と最深部で約40cm、最深部と水田の西側の終わりのG畦畔で約14cmの標高差が認められ、平均で西側が約1.0%、東側で2.3%の傾斜を有している。

遺物としては、13～14世紀の所産の白磁や土師器が出土しており、やはり先述のように13～14世紀以前のの水田としか言えない。

①付属遺構

A畦畔 (第26図)

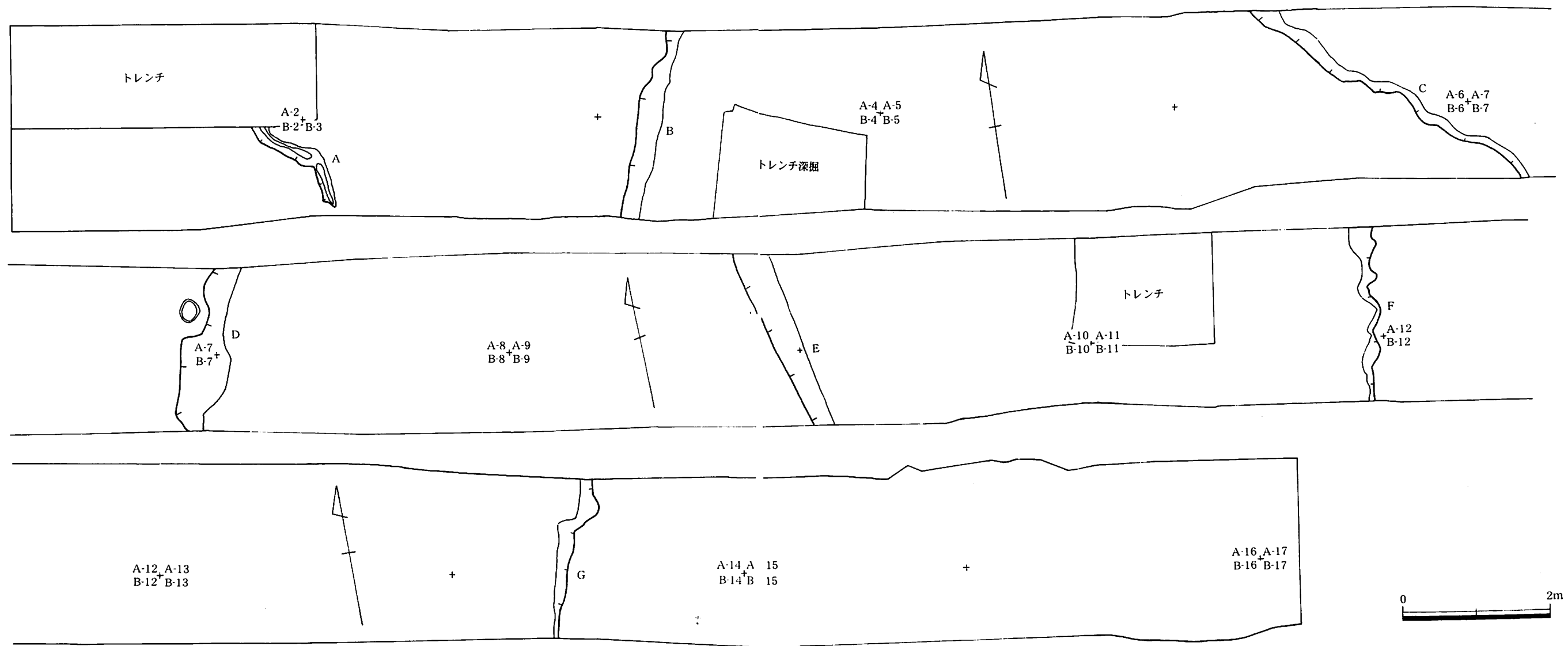
B-3・4グリッドに、第4号水田A畦畔の東側部分と平面的には重なるように位置し、第6号水田の始まりを形成する大畦畔であるが、盛り上がり部分は殆ど残っておらず、溝部分のみが検出されている。ほぼ北西-南東方向に造成されているが、中央部で南方向に屈曲している。調査区内で長さ約1.5mを有するが、北半は試掘トレンチの深掘部分に破壊されている。最大幅約0.3m、深さ約5cmを測る。

B畦畔 (第27図)

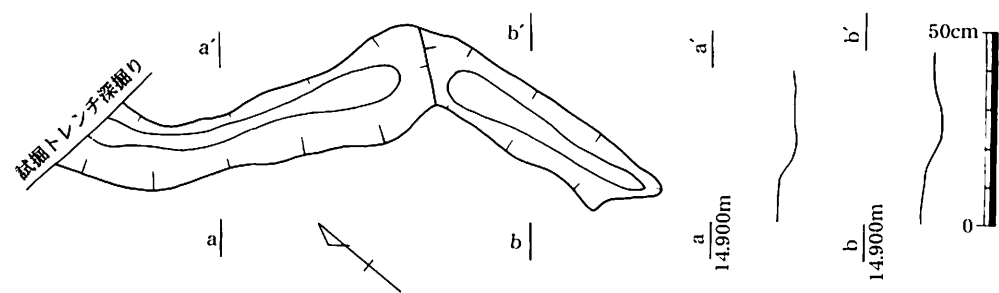
A・B-5グリッド東端近くに位置し、北北東-南南西方向に造成された小畦畔である。傾斜に沿った東側への落ち込み部分しか残っておらず、盛り上がり部分及び浅い西側への落ち部分は上面の第4号水田に削平を受けたものと推測される。調査区内で長さ約2.6m、最大幅約0.35m、最大高約6cmを測る。

C畦畔 (第28図)

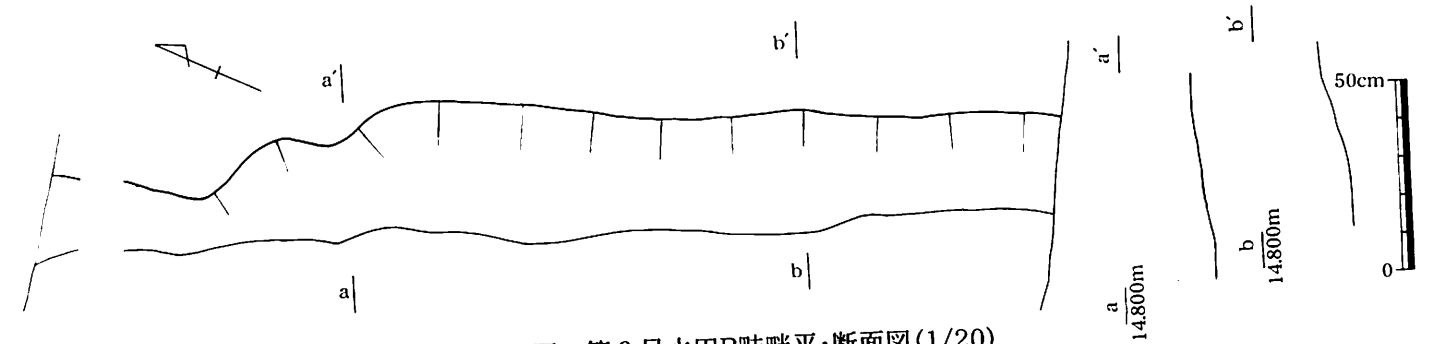
A-7、B-7・8グリッドに位置し、北西-南東方向に造成された小畦畔である。やはり傾斜に沿った東側への落ち部分しか残存しておらず、盛り上がり・西側への落ち部分は上面の第4号水田に削平を受けたものと推測される。調査区内で長さ約4.4m、最大幅約0.25m、最大高約5cmを測る。



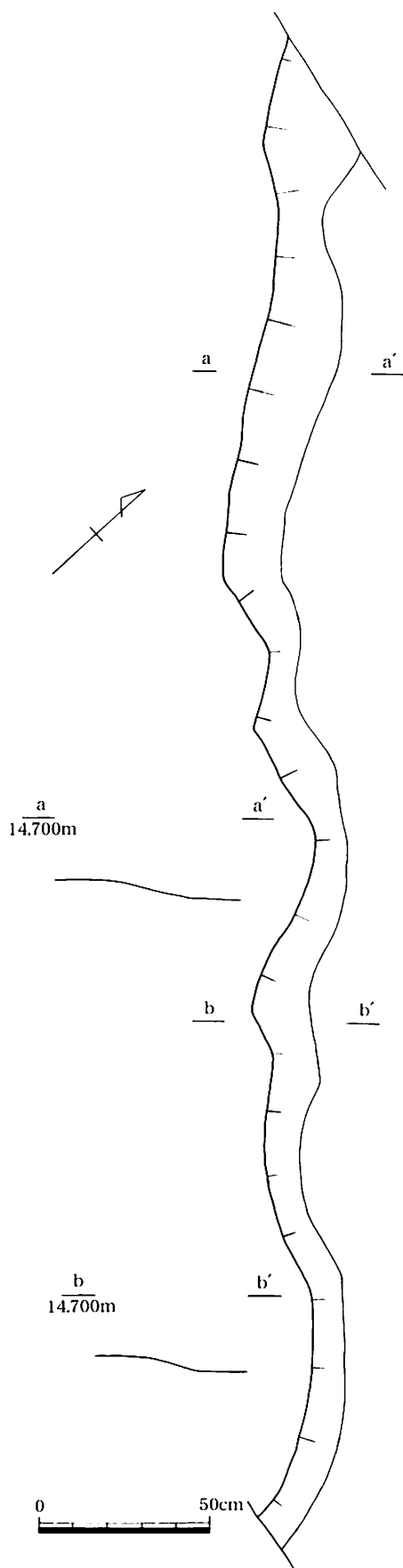
第25図 第6号水田 畠構平面図(1/60)



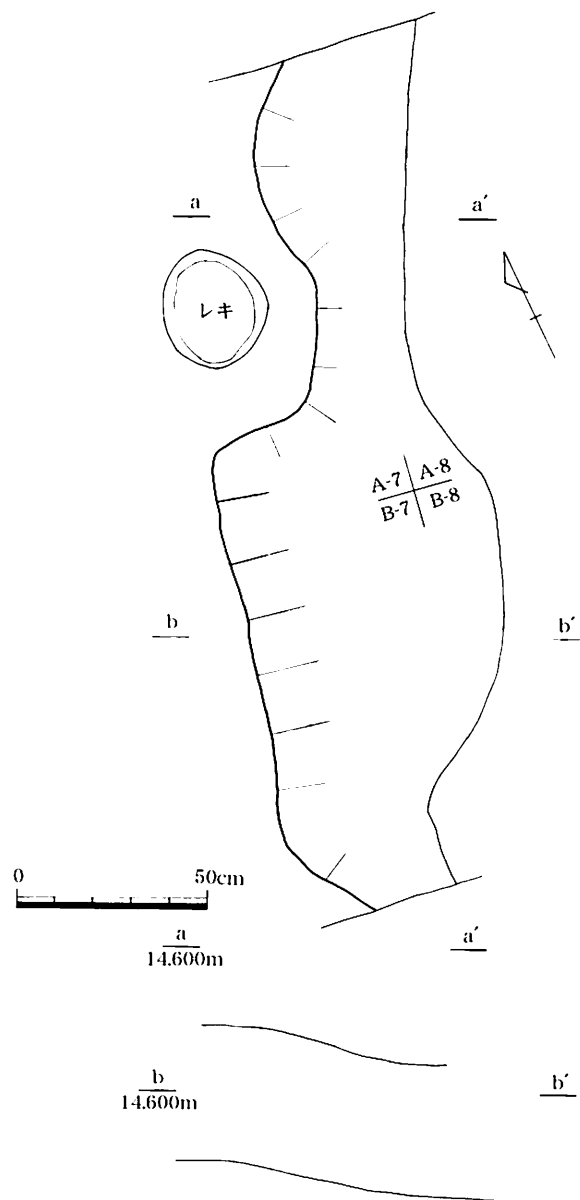
第26図 第6号水田A畦畔平・断面図(1/20)



第27図 第6号水田B畦畔平・断面図(1/20)



第28図 第6号水田C畦畔平・断面図
(1/20)



第29図 第6号水田D畦畔平・断面図
(1/20)

D畦畔 (第29図)

A・B-8・9グリッドに位置し、北北東-南南西方向に造成された小畦畔である。やはり西側への落ち部分しか残存しておらず、盛り上がり・東側への落ち部分は、上面の第4号水田に削平を受けたものと推測される。調査区内で長さ約2.25m、最大幅約0.7m、最大高約10cmを測る。また、畦畔の西側の盛り上がり部分がかったと推測される位置に、長径約30cmの長楕円形の大礫が出土している。

E畦畔 (第30図)

A・B-9・10グリッドに位置し、北北西-南南東方向に造成された小畦畔である。傾斜に沿った西側への落ち部分しか残っておらず、盛り上がり・東側への落ち部分は上面の第4号水田に削平されていると考えられる。調査区内で長さ

約 2.5 m、最大幅約 0.5 m、最大高約 14cm を測る。

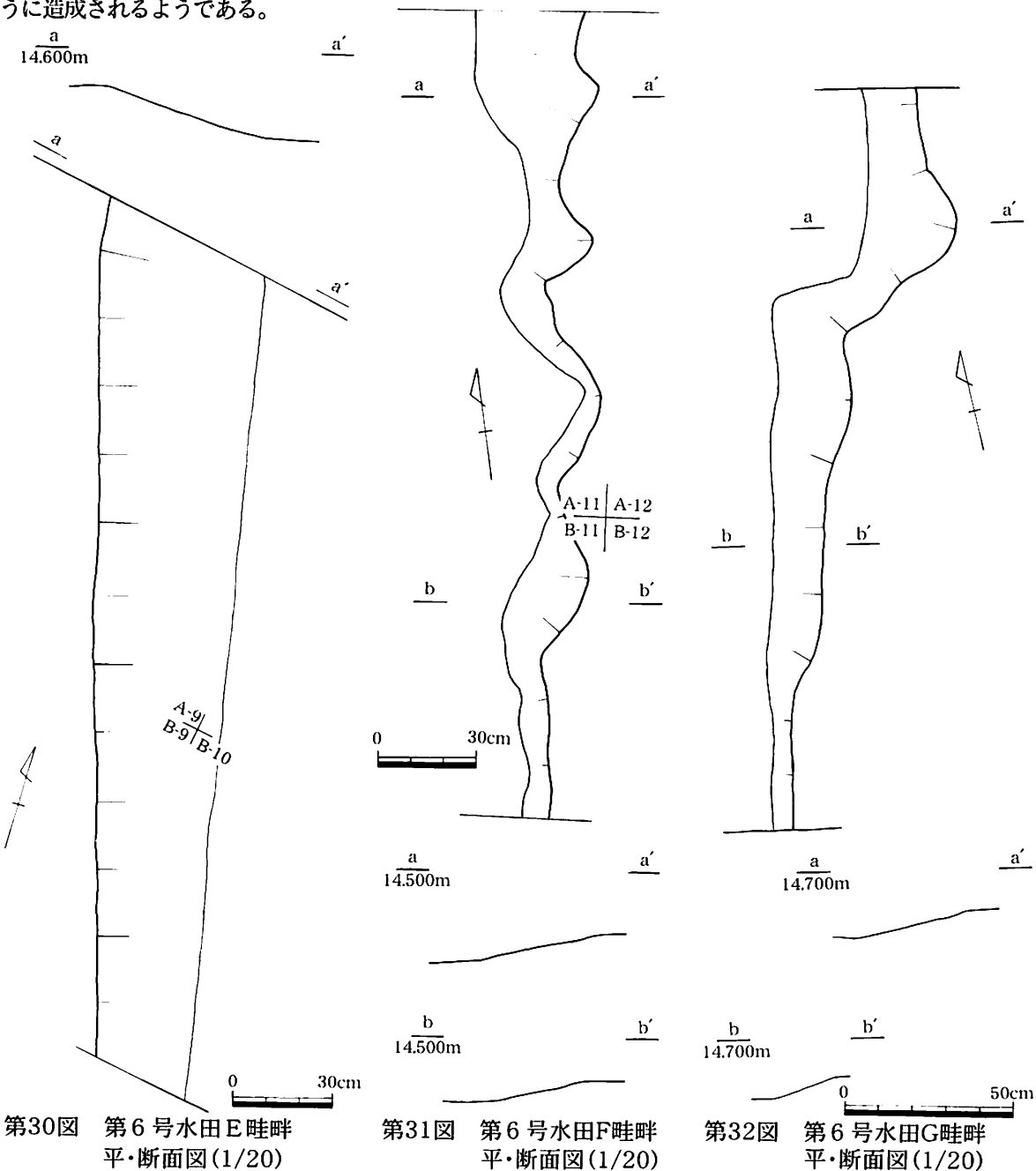
F畦畔 (第 31 図)

A・B-11 グリッドに位置し、ほぼ南北方向に造成された小畦畔である。平面では西側への落ち部分しか検出できなかったが、土層観察からは盛り上がり・東西方向への落ちが看取される。調査区内で長さ約 2.35 m、最大幅約 0.3 m、最大高約 10 cm を測るが、土層図から幅は約 0.8 m ほど有していたと推測され、小畦畔の基本的な大きさを窺わせる。また、すぐ東脇に第 5 号水田の A 畦畔が、本畦畔に平行するようにやや上面に検出されている。

G畦畔 (第 32 図)

A・B-14 グリッドに位置し、北北東-南南西方向に造成された水田の東側の始まりを形成する大畦畔である。傾斜に沿った東側への落ちしか残存していないが、盛り上がり部分は上面の第 4 号水田に削平されたと考えられ、溝も伴っていたと推測される。調査区内で長さ約 2.2 m、最大幅約 0.3 m、最大高約 9cm を測る。

以上のように、北西-南東方向の A・C・E と南北方向に近い B・D・F・G の 2 方向の畦畔が、直交するように造成されるようである。



牛・人の足跡遺構 (第 34・35 図)

調査区西側に砂層でパックされた多数の牛・人と考えられる足跡が、本水田の床土上面で検出された。A・B-4・5グリッド全域に見られるが、A・B-4グリッド西半とA・B-4グリッド東半からA・B-5グリッド西端にかけての2箇所に大きく分れるので、図面は2枚に分割した。全て数 cm の深さを有し、牛は二本跡が2つに分れた形状のものと融合した形状のものの2種が見られ、それに比べやや大型で楕円形のもののは人の足跡だと推測される。足跡の向きに規則的なものは見取されないが、南が爪先となっているものが最も多い。

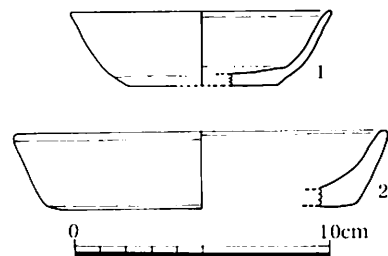
②出土遺物 (第 33 図)

第 33 図 1 = 第 6 号水田 A・B-13・14 グリッド一括

13～14 世紀所産の中国産のIX類の白磁の皿。口縁から底部にかけての破片で、全体の 1/6 程度である。内外面とも灰白色を呈する。底面及び口縁上端の内面には釉薬はかかっていない。

第 33 図 2 = 第 6 号水田面 A・B-8・9 グリッド一括

13～14 世紀所産の土師器の坏。口縁部から底部にかけての破片で、全体の 1/5 程度である。内外面ともナデ整形が施されている。



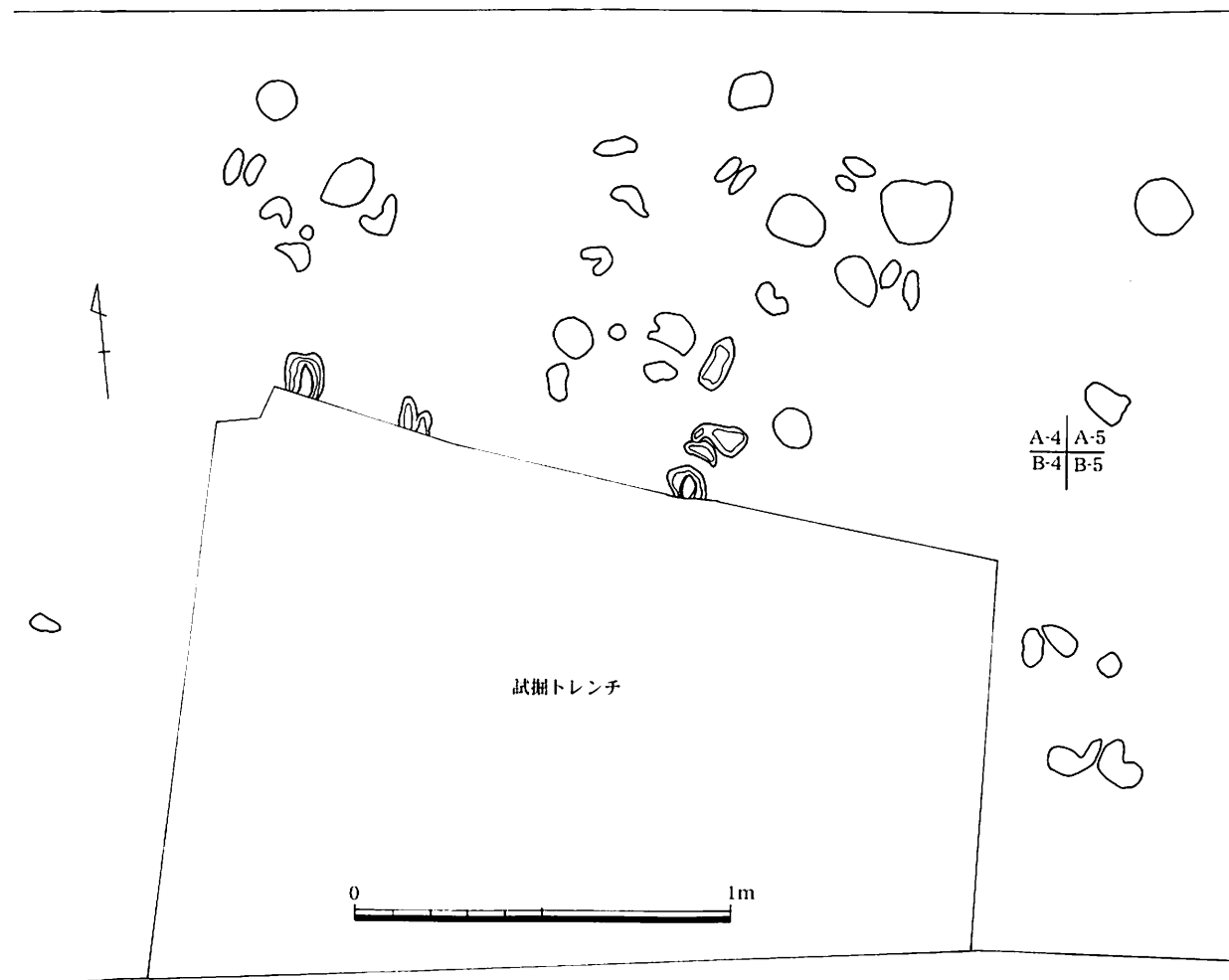
第 33 図 第 6 号水田出土遺物 (1/3)

4. 第 7 号水田 (第 36 図)

土層観察 (第 46 図) からすると、第 6 号水田の直下に形成されて



第 34 図 第 6 号水田面 A・B-4 グリッド牛・人の足跡 (1/20)

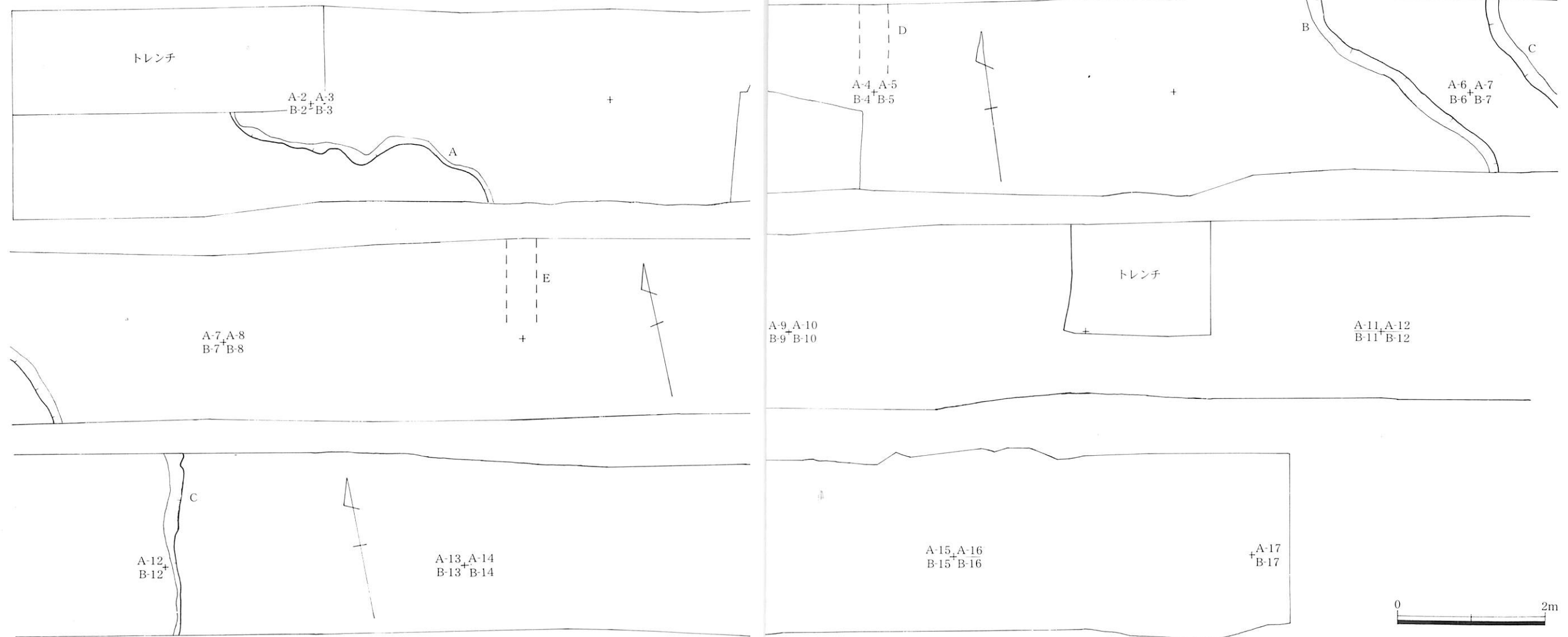


第35図 第6号水田面A・B-4・5グリッド牛・人の足跡(1/20)

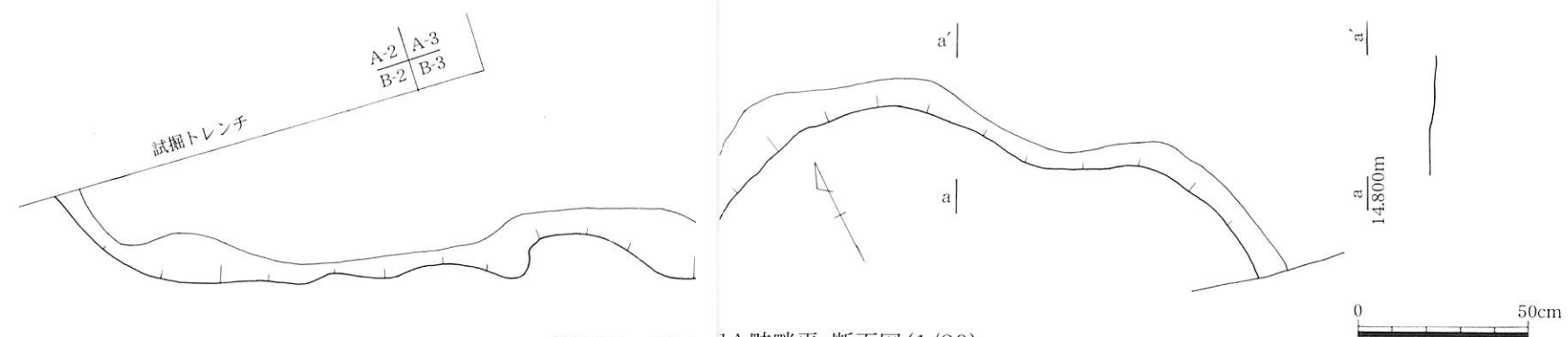
おり、A・B-2グリッド東半のA畦畔から水田が始まっており、A・B-13グリッド西端のC畦畔で終息していることから、南北は不明だが、東西は約41mの拡がりを持つ。そして、平面的には西端のA、東端のCの2大畦畔と、その内側にBという1小畦畔が検出されており、土層ではA・B-4・5グリッド境界付近とA・B-8・9グリッド境界付近に畦畔らしき盛り上がりが見取され、D・E畦畔と称しておく。

また、土層図に耕作土=a層、床土=b層の別で記しているが、第3・4・6号水田と同様に本水田も両層が全域で見られるわけではない。即ち、A・B-2グリッド東端のA畦畔からA・B-10グリッド東端までは両層が認められるが、それより西側では(A・B-11グリッド中央部で一部耕作土が見られるものの)耕作土は削平されたようで、床土しか検出されていない。

次いで、床土の上面を基準にして第7号水田の標高の推移を見てみると、A・B-2グリッド東端のA畦畔の東側で約14.68mで始まってから、僅かながら徐々に下がり出し、A・B-4グリッド東端付近で約14.60m、A・B-4・5グリッド境界のD畦畔西側では約14.54mと緩やかに続落し、D畦畔東側で約14.47mとやや急激に落ちてから、A・B-7グリッド西端のB畦畔の東側で約14.45mとほぼ同レベルを維持するが、そこから再び落ち始め、A・B-7・8グリッド境界付近で約14.30mとなり、A・B-10グリッド中央部で最も深く、約14.19mまで落ち込んでから、それより東側は上昇し出し、A・B-10・11グリッド境界付近で約14.21mとなってから暫く同様のレベルが続き、水田の終了するA・B-12・13グリッド境界付近のC畦畔で



第36図 水田平・断面図(1/60)



第37図 第7 A畦畔平・断面図(1/20)

約 14.40 m となって終っている。水田の西側の始まりの A 畦畔と最深部で約 49cm、最深部と水田の東側の始まりの C 畦畔で約 21cm の標高差が認められ、平均で西側が約 1.6%、東側が約 2.1% の傾斜を有している。遺物としては、中世前半の土師器などが出土しているのみで、やはり 13 ～ 14 世紀以前の水田としか言えない。

①付属遺構

A 畦畔 (第 37 図)

B-2・3・4 グリッドに位置し、西北西-東北東方向に造成された、水田の西側の始まりを示す大畦畔で、平面的には第 3 号水田 A 畦畔と平行している。水田の形成された東側への落ち部分しか検出されていないが、西側に盛り上がり部分が存在したが、上面の水田に削平されたと推測される。また、A-2 グリッドは試掘トレンチの深掘で破壊されており、更に西北西方面に延びてゆくと考えられるが、現存で調査区内で長さ約 3.7 m をなお有し、最大幅約 0.2 m、最大高約 2cm を測る。

B 畦畔 (第 40 図)

A・B-6・7 グリッドに位置し、平面的には第 6 号水田 C 畦畔と平行するように北西-南東方向に造成された小畦畔である。盛り上がり的な平面形しか検出できなかったが、土層観察からすると (第 46 図)、東西落ち部分の中央部に若干の落ち込みが看取され、溝を伴っていた可能性が高い。調査区内で長さ約 3.2 m、最大幅約 2.6 m、土層では東側部分が最大高約 10cm を測る。

C 畦畔 (第 41 図)

A・B-13 グリッド西端に位置し、ほぼ南北方向に造成された、水田の東側の始まりを示す大畦畔である。水田の形成された西側への落ちしか検出されていないが、東側に盛り上がり部分が存在したが、上面の水田によって削平されたと推測される。調査区内で長さ約 2.4 m、最大幅約 0.2 m、最大高約 12cm を測る。

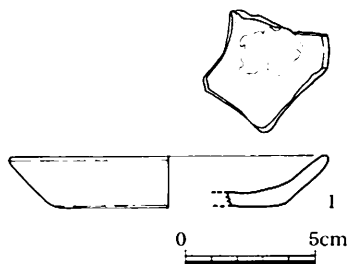
②出土遺物 (第 38・39 図)

第 38 図 1 = 第 7 号水田 A・B-11・12 グリッド一括

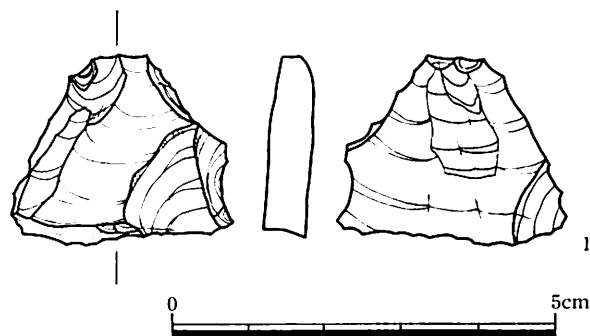
中世前半所産の土師器の坏の口縁から底部にかけての破片で、全体の 1/7 程度が残存。内外面共にナデ整形が見られる。

第 39 図 1 = 第 7 号水田 A・B-6 グリッド一括

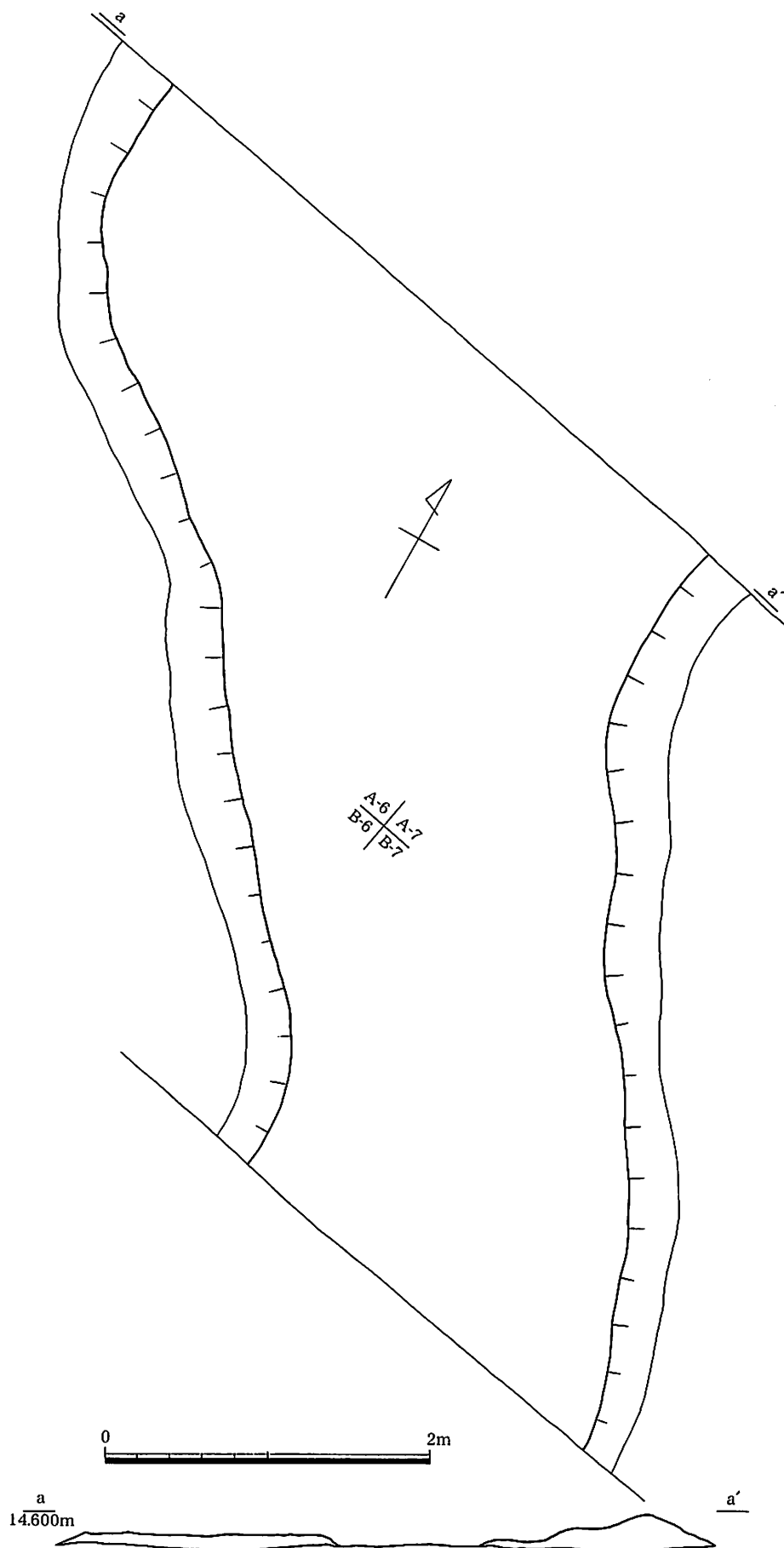
姫島産黒曜石製の二次加工を有する剥片。下半は表から裏への折れによって欠損しているが、幅広の剥片を素材としていたと考えられる。裏面右側縁下半も欠損している。右側縁に裏面からの二次加工が認められる。単剥離打面が残存している。



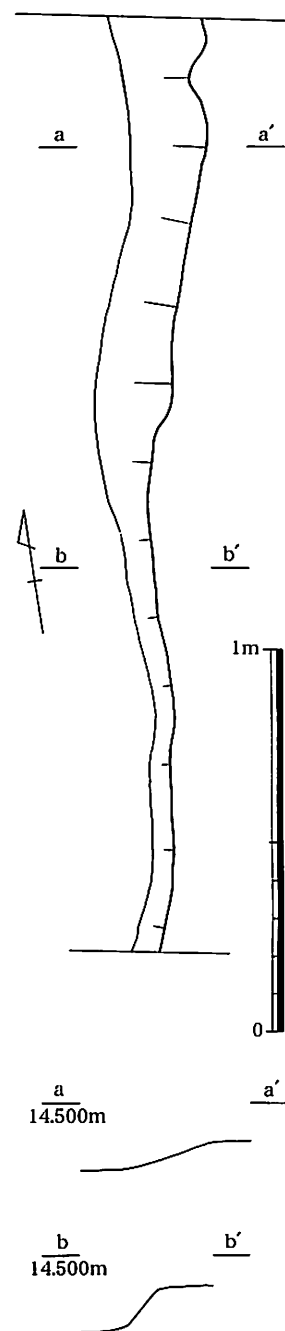
第38図 第7号水田出土土器
(1/3)



第39図 第7号水田出土石器 (1/1)



第40图 第7号水田B畦畔平·断面图(1/20)



第41图 第7号水田C畦畔平·断面图(1/20)

5. V・VI層水田

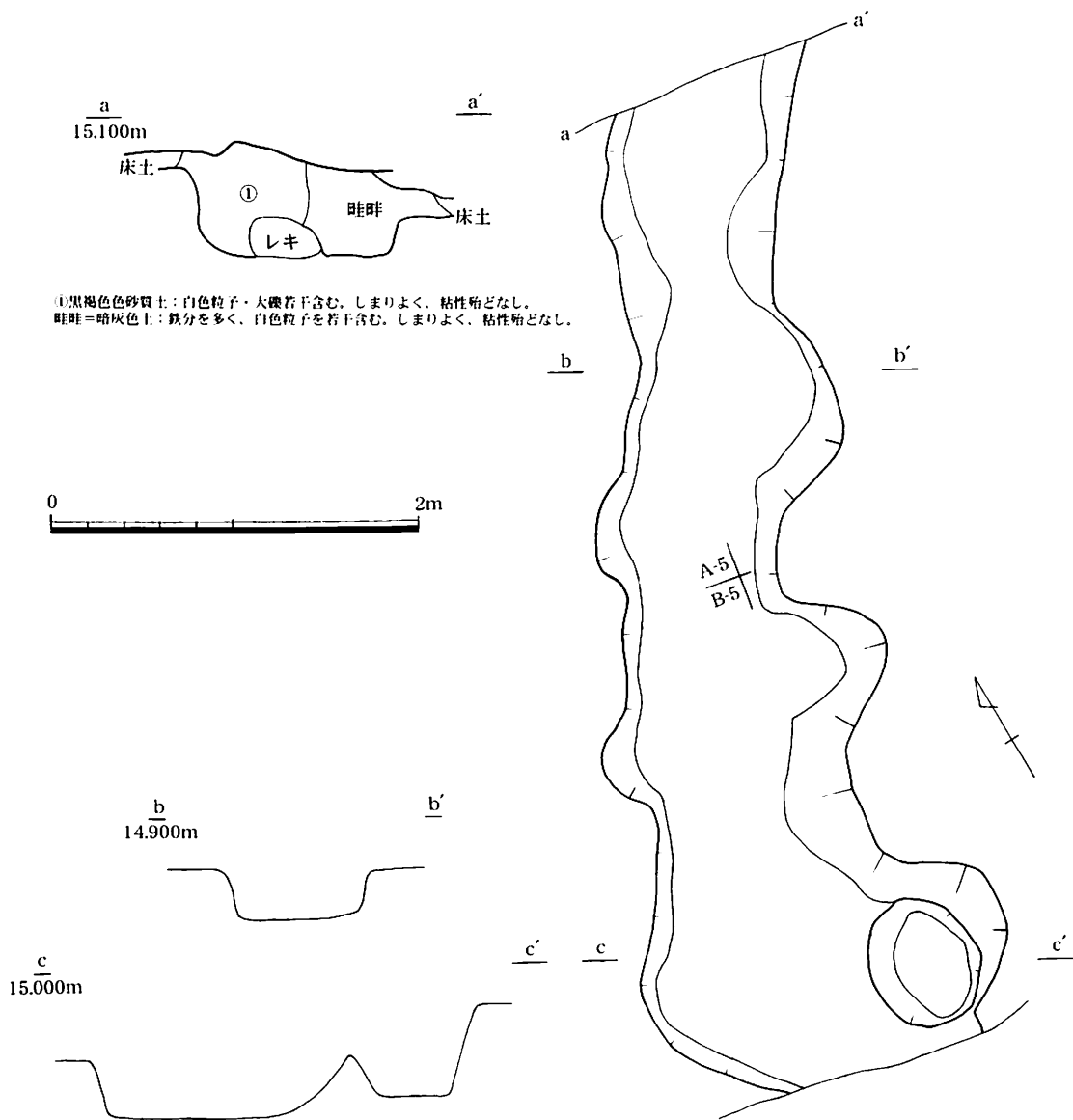
第3（1・2）号水田の上面に検出された近世期の所産の水田で、東側はA・B－15グリッドに位置するB畦畔が水田の始まりを形成しているが、調査区西端は土層観察から水田が終息しておらず、更に西側へ延びるものと推測され、東西で55 m以上の拡がりを有している。平面的には、A・B－6グリッド西端に位置するA小畦畔とA・B－15グリッドに位置するB大畦畔が検出されている。図上では、それぞれS－08 A・Bと称しておく。

床土の上面を基準にして標高の推移を見てみると、調査区西端に近いA・B－3西端で約 14.95 m、A・B－9グリッド中央で最も低く約 14.81 m、A・B－15グリッド東端のB畦畔西側で最も高く約 14.99 mとなっており、平均で東側は約 0.5%、東側で約 0.8%の傾斜を有している。

①付属遺構

A畦畔（第42図）

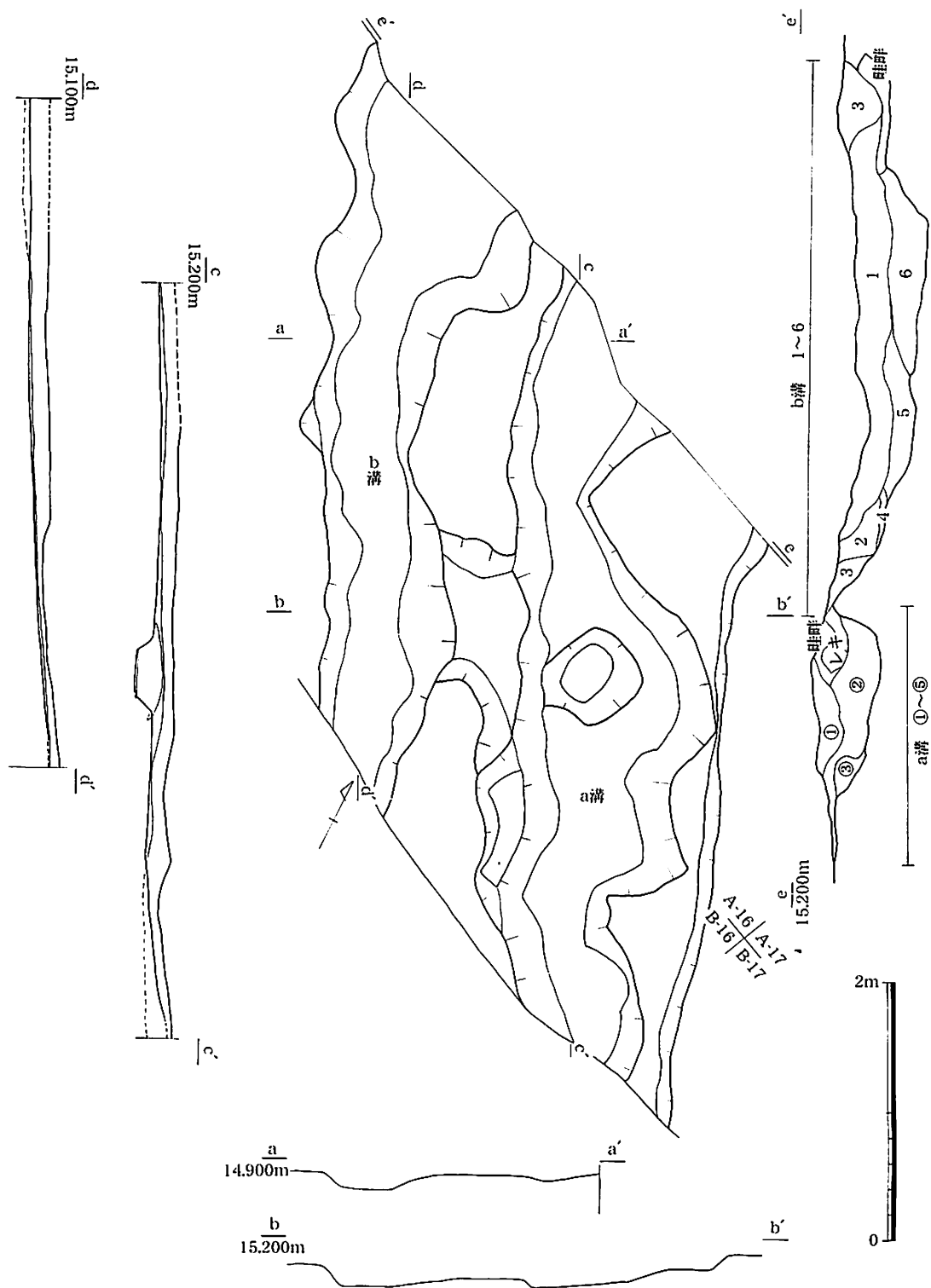
A・B－5・6グリッドに位置し、北北東－南南西方向に造成された小畦畔である。溝を畦畔中央に伴っており



第42図 V・VI層水田A畦畔平・断面図(1/20)

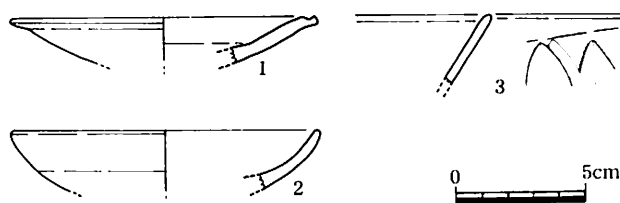
り、東側へは大きく落ちるためか、上端を削平されているものの東側の畦畔土壌は大きく残存している。調査区内で長さ約 2.75 m、最大幅約 1.0 m、最大高は西側が約 6cm、東側が約 25cm、溝の最大深が約 17cm を測る。南北で底面の標高に約 15cm の差があり、北北西から南南西方向に水が流れていたと推測される。また、南端部分は柱穴状の遺構を伴っている。

B畦畔（第 43 図）



第43図 V・VI層水田B畦畔平・断面図(1/25)

A-15・16、B-16・17 グリッドに位置し、北西-南東方向に造成された大畦畔である。2本の溝を有しているが、土層観察から東側のa溝は西側のb溝に切られており、a溝を伴う畦畔が先ず形成され、その後にb溝を伴う畦畔やや西にずれる形で作り直されたと考えられる。調査区内で長さ約2.65 mを有し、b溝を伴う新畦畔は最大幅約2.4 m、溝部分の最大幅約2.1 m、最大深約3.5 m、畦畔の最大高は東西とも約13cmを測り、a溝を伴う旧畦畔は西側を新畦畔に若干切られており、盛り上がり部分は確認できないが、最大幅約1.0 m、最大深約26cmを計測する。旧畦畔のa溝は南北で底面の標高に約6cmの差が見られ、北西から南東へ水が流れていたと考えられるが、新畦畔のb溝は底面の標高が南北で約24cmの差を示し、南東から北西方向への水流が予想され、新旧で水流の転換が認められる。また、a溝は中央底面に柱穴状の遺構が伴っている。



第44図 第1次調査出土遺物(1/3)

6. その他の遺物(第44・45図)

第44図1=南壁一括

1610～30年代所産の唐津系陶器の溝縁皿の口縁部片で外面はオリーブ灰色、内面は灰色を呈する。外面に釉薬が一部付着する。

第44図2=北壁一括

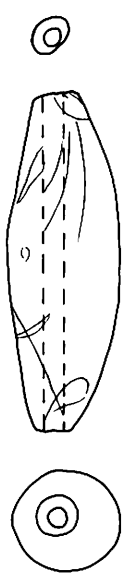
18世紀後半所産の肥前系磁器の染付皿の口縁部片。内外面とも黄白色を呈する。ハケ目装飾を施す。

第44図3=検出面一括

13世紀所産の龍泉窯系青磁碗の口縁部片。内外面ともオリーブ灰色を呈し、外面には蓮弁文が施されている。

第44図1=遺跡一括

中世の所産と考えられる細形紡錘形の土師質の土錘。表面上端と下端に、掛け紐によると考えられる縦方向の圧痕が認められる。法量は、長さ4.35cm、外径1.40cm、孔径0.25cm、重さ8.1 gを測る。



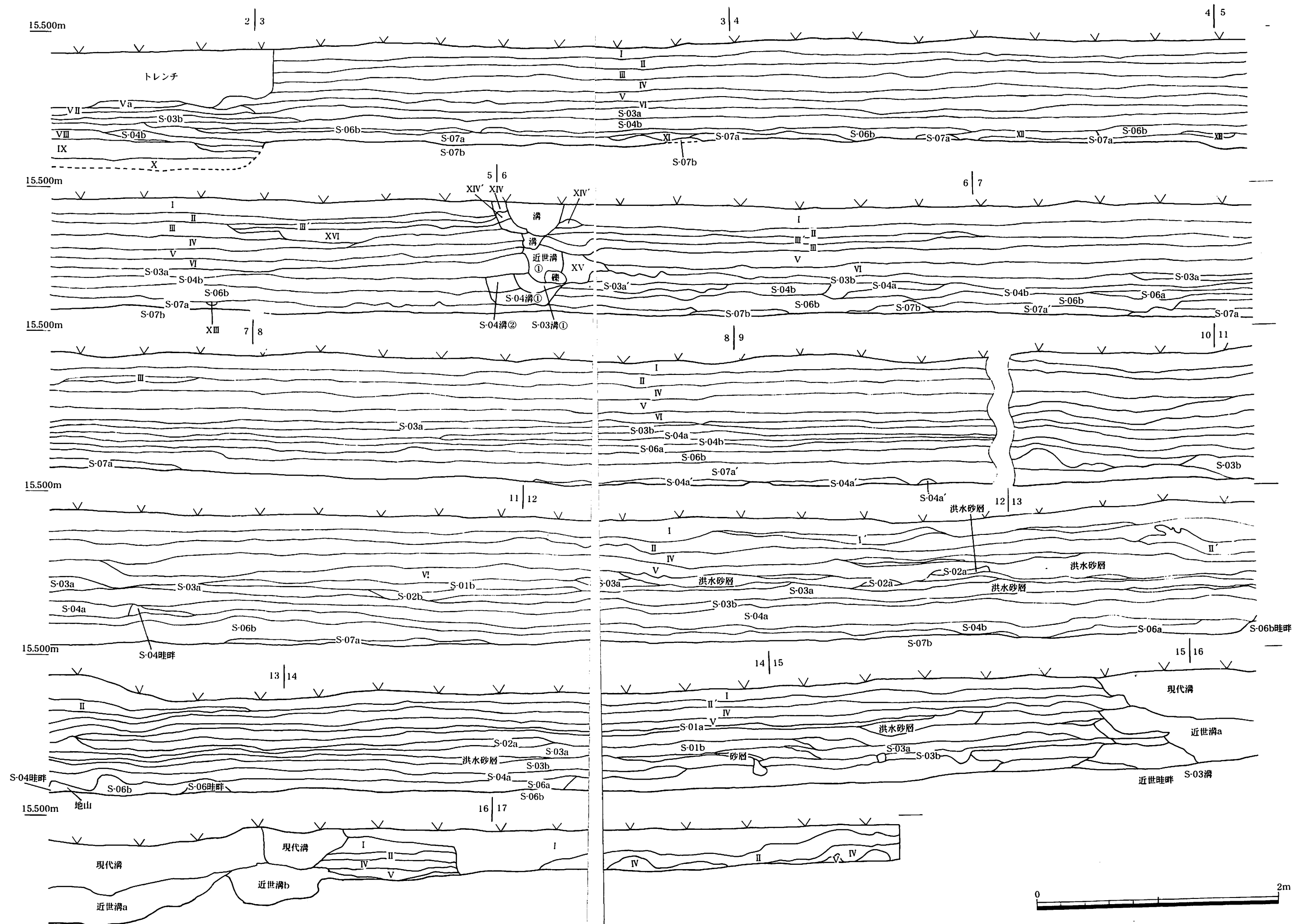
第45図 第1次調査出土の土錘(1/1)

第3表 第1次調査出土土器・陶器・磁器観察表

図版	遺物	出土遺構・出土地区	種類	器種	時期	胎土		色		器面	口縁	法	法量(cm)			備考
						混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口	径	器高	底径	
15	1	第3号水田 A・B-1・5	瓦質土器	火鉢	中世	雲母・石英	微粒	黄灰色	灰色	ハケ目	ナデ	—	—	—	(15.0)	反転復元
15	2	第3号水田 A・B-2・3・4	青磁	高台付碗	13C	—	—	オリーブ灰色	オリーブ灰色	—	—	—	—	—	(4.8)	反転復元 龍泉窯系
22	1	第4号水田 A・B-8・9	須恵器	こね鉢	13~14C	石英	微粒	青灰色	青灰色	ナデ	ナデ	(45.0)	—	—	—	東播系
22	2	第4号水田 A・B-5	青磁	碗	12~13C	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	—	—	—	—	—	—	同安窯系 柘目紋
22	3	第5号水田 一括	青磁	碗	14~15C	—	—	灰オリーブ色	灰オリーブ色	—	—	—	—	—	—	龍泉窯系 蓮弁紋
33	1	第6号水田 A・B-13・14	白磁	皿	13~14C	—	—	灰白色	灰白色	—	—	—	(10.2)	(2.9)	(5.6)	反転復元 中国産IV類
33	2	第6号水田 A・B-8・9	土師器	坏	13~14C	石英	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	(14.6)	3.0	(12.0)	—	反転復元
38	1	第7号水田 A・B-11・12	土師器	坏	中世前半	石英・小礫	微粒	淡灰色	黄褐色	ナデ	ナデ	(12.5)	(2.0)	(9.0)	—	反転復元
44	1	南壁	陶器	皿	1610~30	—	—	オリーブ灰色	灰色	—	—	—	—	—	—	反転復元 唐津系
44	2	北壁	磁器	染付皿	18C後半	—	—	黄灰色	黄灰色	—	—	—	—	—	—	反転復元 肥前系 ハケ目装飾
44	3	検出面	青磁	碗	13C	—	—	オリーブ灰色	オリーブ灰色	—	—	—	(19.0)	—	—	龍泉窯系 蓮弁紋

第4表 第1次調査出土石器観察表

図版	番号	出土遺構	出土区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	時期	備考
23	1	第4号水田	A・B-14	砥石	凝灰岩	5.50	(4.80)	3.55	127.5	中世	右側縁欠損
39	1	第7号水田	A・B-6	二次加工剥片	姫島産黒曜石	(2.55)	2.95	0.70	5.3	弥生時代	下半欠損



第46図

調査区北壁土層断面図(1/30)

I. 黒色土：現代の耕作土 II. 暗赤褐色土：現代の床土 III. 暗黄褐色土：近代の耕作土
 IV. 暗黄褐色土：近代の床土 V. 暗灰色土：近世の耕作土 VI. 暗黄褐色土：近世の床土
 VII. 暗黄灰色砂：鉄分を字約款含む。しまり甘し。 X. 白灰色砂：小礫・黄色風化礫を若干含む。しまり甘し。
 VIII. 暗褐色土：白色・黄色粒子、小礫を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。 XI. 灰色砂：暗褐色・白色粒子を若干含む。しまり甘し。
 IX. 淡灰褐色砂：鉄分を僅かに、黄色風化礫、小・中礫を若干含む。しまり甘し。
 S - 01a. 耕作土。 S - 01b. 床土。 S - 02a. 耕作土。 S - 02b. 床土。
 S - 03a. 暗灰色土：白色粒子をやや多く、鉄分・小礫を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 03b. 暗灰色土：鉄分を多く、白色粒子をやや多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 04a. 暗灰色土：鉄分・白色粒子を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 04b. 暗灰色土：鉄分をやや多く、白色粒子をやや多く、小礫を僅かに含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 06a. 暗灰色土：鉄分・白色粒子を若干、マンガンを若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 06b. 暗灰色土：鉄分を多く、白色粒子・マンガンを若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 07a. 暗褐色土：白色粒子をやや多く、小礫・砂粒を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 07b. 黄褐色土：鉄分・小礫・黄色粒子をやや多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。
 S - 03a'. S - 03a に準ずるも若干色調淡し。 S - 06a'. 暗灰色土：S - 06a に準ずるも砂粒を多く含む。
 S - 07a'. S - 07a に準ずるも灰色砂粒を多く含み、くすんだ色調。 S - 07b'. S - 07a に準ずるも黄色土ブロックを多く含む。

第 46 図北壁土層の土層注記

7. 小結

この節では、第 1 次調査で検出した主な 5 枚の水田について概観すると共に、若干の考察を加えてゆきたい。

①水田の平面的・垂直的な変遷（第 47・48・49 図）

まず、各水田の平面的な比較から、時期を追って水田が拡大する様子を見てゆく（第 47 図）。

本調査区最古の第 7 号水田では A・C 大畦畔の間に、東西幅が南端で約 38 m、北端では約 41 m が、第 6 号水田では A・G 大畦畔の間に、東西幅が南端で約 44 m、北端で約 46 m が、第 4 号水田では A・F 第畦畔の間に、東西幅が南端で約 46 m、北端で約 48.5 m が、第 3 号水田では東側の C 畦畔から調査区の西端までで、東西幅が南端で約 52 m 以上、北端で約 53 m 以上が、近世期の V・VI 層水田では東側の B 畦畔から調査区の西端までで、東西幅が南端で約 57 m 以上、北端で約 55 m 以上が検出されている。

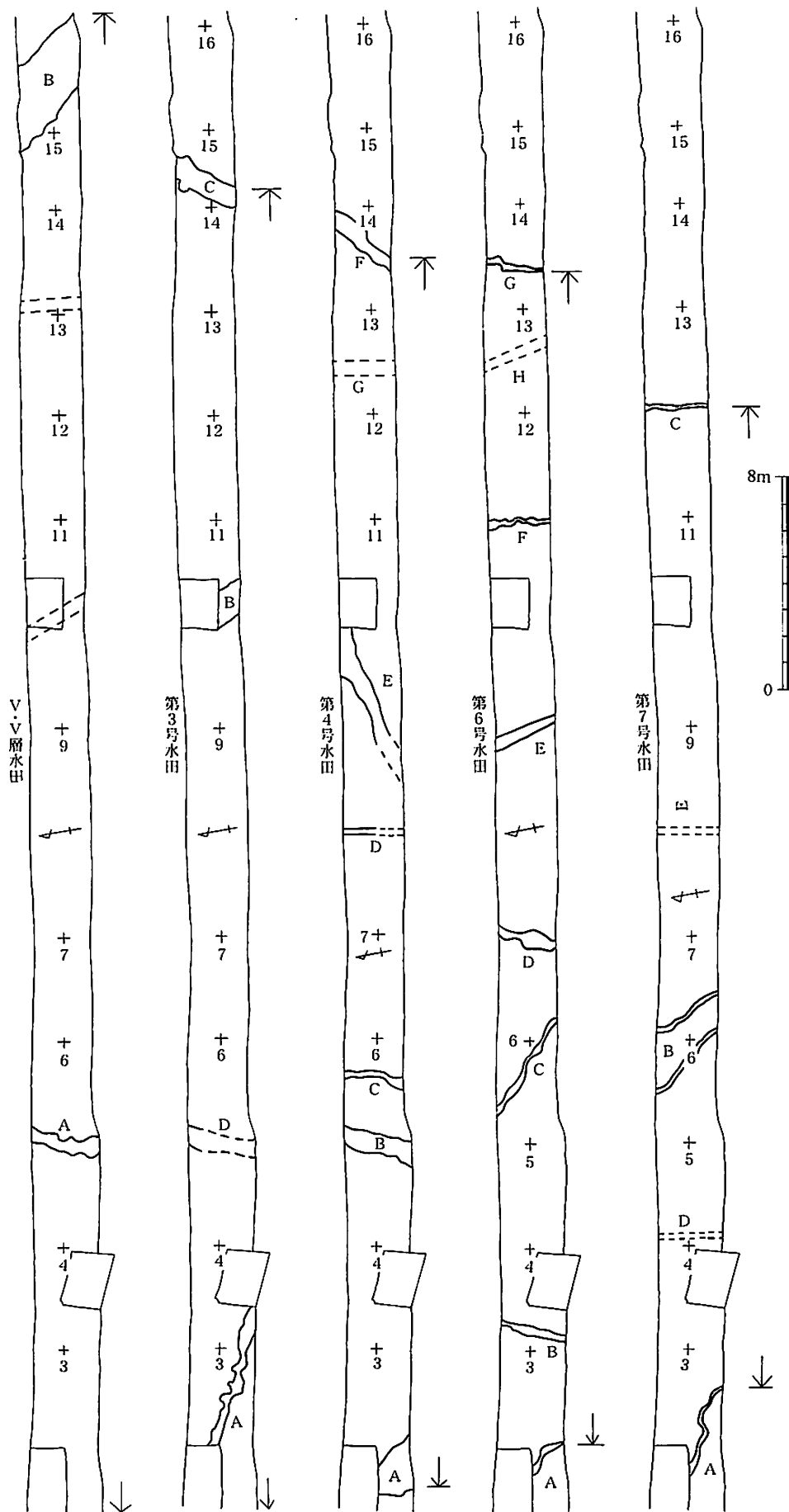
即ち、南端を基準にすると東西幅が、第 7 号から第 6 号で約 6 m、第 6 号から第 4 号で約 2 m、第 4 号から第 3 号で約 6 m 以上、第 3 号から近世水田で約 5 m 以上と拡がっていき、窪地が徐々に埋没して少なくとも東西方向に拡大していくようである。但し、近世期の V・VI 層水田は東側にも延びていくだけでなく、区画整理区域の全域に拡がっているのが観察されている。

次に、垂直的な水田の比較から、窪地の埋没過程を追ってゆく（第 48・49 図）。なお、第 48・49 図は水平の縮尺は 1/240 だが、垂直的には 1/40 に強調して提示している。

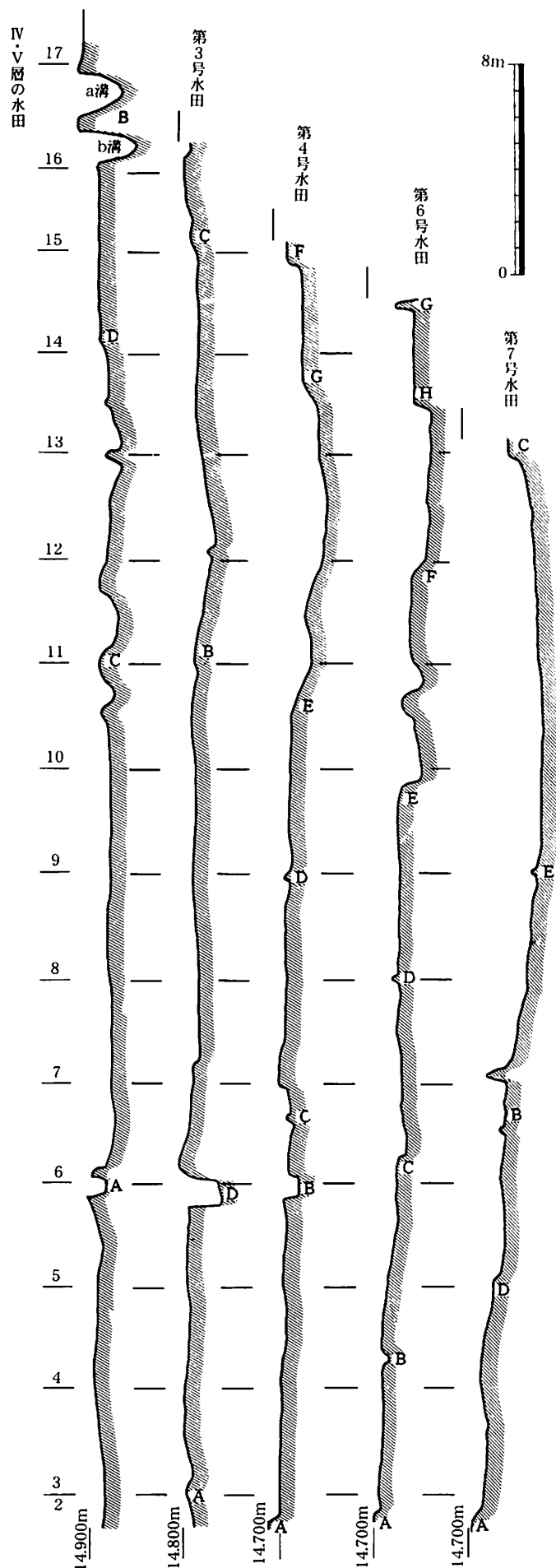
最初期は、基本的に約 28cm の標高差を有する、西端と東端が約 0.7% 傾斜が見られ、約 50cm の深さを持つ東側に深い窪地が認められる地形に第 7 号水田が造成されていることが判る。

次の時期には最下面が約 10cm 埋まり、第 6 号水田が、約 30cm の標高差を有する、西高東低の約 0.7% の傾斜が見られ、窪地はやや東側にずれ、深さが約 40cm を有する地形に造成される。

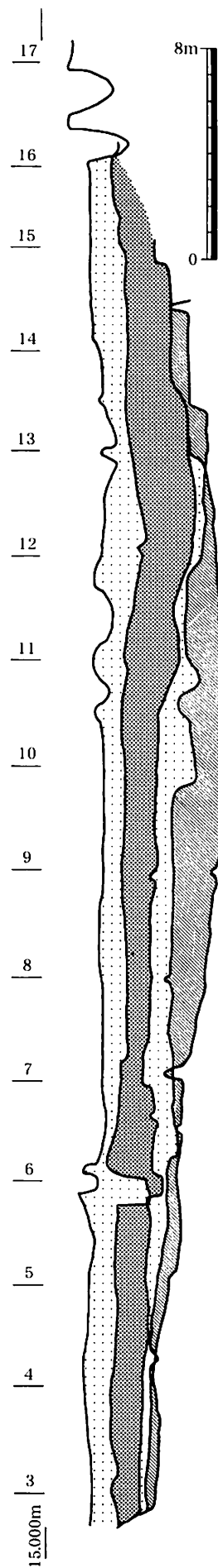
続く時期には最下面が約 5cm 埋まり、第 4 号水田が、約 16cm の標高差を持つ、西高東低の約 0.3% の傾斜が見られ、窪地は更にやや東側にずれ、深さが約 30cm を有する地形に造成されている。



第47図 V・Ⅴ層水田から第7号水田の平面的な変遷(1/240)



第48図 V・VI層水田から第7号水田の垂直的な変遷
(平面は1/240、垂直は1/40)



第49図 水田窪地の埋没過程
(水平は1/240、垂直は1/40)

引き続き時期には最下面が約 20cm 埋没し、第 3 号水田が、東西で殆ど傾斜を持たず、窪地はやはりやや東側に拡がり、深さ約 15cm を有する地形に造成されている。

更に続く時期には最下面が約 10cm 埋没し、V・VI 層水田が、東西で傾斜を持たず、窪地はやや狭まり、深さ約 14cm を有する地形に造成されている。

窪地自体の傾斜は、第 7 号水田で東側が約 1.6%、西側が約 2.1%、第 6 号水田で東側が約 1.0%、西側が約 2.3%、第 4 号水田で東側が約 0.9%、西側が 1.6%、第 3 号水田で東側で約 0.4%、西側で約 1.3%、V・VI 層水田で東側が 0.5%、西側で 0.8%となっている。

それらの変化の数値を表にしたのが第 5 表であるが、時期を追って土層が堆積するのに従い、東西端の傾斜がかわれ、窪地は深さが浅くなってゆくものの、最深部の東がずれることによって、窪地自体は拡大し、近世期にはかなり

第 5 表 水田の埋没課程の変遷

	東西標高差	東西の傾斜	窪地の深さ	東側傾斜	西側傾斜	東西幅
第 7 号水田	28cm	0.70%	50cm	1.6%	2.1%	41m
第 6 号水田	30cm	0.70%	40cm	1.0%	2.3%	46m
第 4 号水田	16cm	0.30%	30cm	0.9%	1.6%	48.5m
第 3 号水田	0cm	0%	15cm	0.4%	1.3%	53m以上
V・VI 層水田	0cm	0%	14cm	0.5%	0.8%	55m以上
	埋没深度	東西傾斜差	窪地深度差	東側傾斜差	西側傾斜差	東西幅差
第 7 号→第 6 号	+10cm	±0%	-10cm	-0.6%	±0.2%	+5m
第 6 号→第 4 号	+5cm	-0.4%	-10cm	-0.1%	-0.7%	+2.5m
第 4 号→第 3 号	+20cm	-0.3%	-15cm	-0.5%	-0.4%	+5.5m以上
第 3 号→V・VI 層水田	+10cm	±0%	-1cm	+0.1%	-0.5%	

平坦化して、地域全体が水田化したことが窺える。詳細としては、第 7 号水田から第 3 号水田への推移で約 35cm の埋没・堆積で窪地の深度も約 35cm 浅くなっており、平均でほぼ 1 cm の埋没に対して窪地が 1 cm ずつ浅くなる計算で、窪地の傾斜も東側が約 1.6%から約 0.4%、西側が約 2.1%から約 1.3%となっており、平均で 1 cm の埋没に対して東側が 0.3%ずつ、西側が 0.2%ずつ緩やかになっている。また同様に、第 7 号水田から第 3 号水田への推移で東西幅は 13 m 以上拡大しており、平均で 1 cm の埋没に対して約 37cm ずつ拡がっている計算となる。

なお、第 3 号水田から近世期の V・VI 層水田への推移では、約 10cm の埋没に対して、窪地の深度は 1 cm しか浅くなっておらず、窪地の東側の傾斜は却って急になっているが、これは最深部のみが局地的に深くなっているためで、局地的に深い地点を除けば、窪地の深さは 6cm しかなく、第 3 号水田より 9cm 浅くなっており、1 cm の埋没に対して窪地は平均で 0.6cm ずつ浅くなっており、これからすると東側の傾斜は約 0.4%と第 3 号水田と同様で、西側は約 0.6%となり、前期の水田より約 0.7%緩やかになっている。現代の水田の耕作土でも調査区内で、東側で 8cm の標高差で約 0.2%、西側で約 16cm の標高差で 0.9%の傾斜をなお有している。

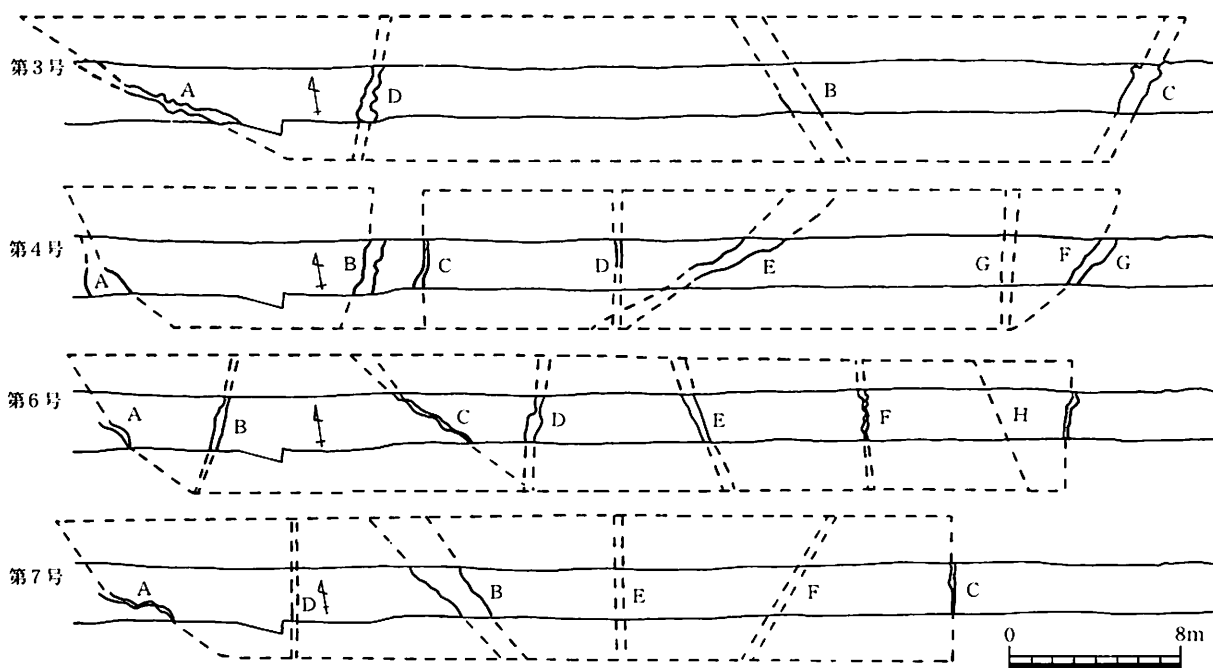
概算でまとめると、第 7 号水田から第 3 号水田への変遷として、窪地の深さは約 30%（近世水田では約 12%）に減じ、東西幅は少なくとも 129%以上に拡大していることになる。

また、次期の水田との標高差が 10cm 以上ある場合には、前期の水田は全域で少なくとも耕作土・床土のいずれかが残存しているが、第 4・6 号水田間では差が 5cm しかないためか、第 5 号水田は小畦畔も伴っているが、最深部の A・B-12・13 グリッド近辺にのみ検出されており、第 3 号水田と近世水田の間も 10cm の埋没しかなく、間に挟まる第 1・2 号水田はやはり A・B-12・13 グリッド近辺でしか見られない。

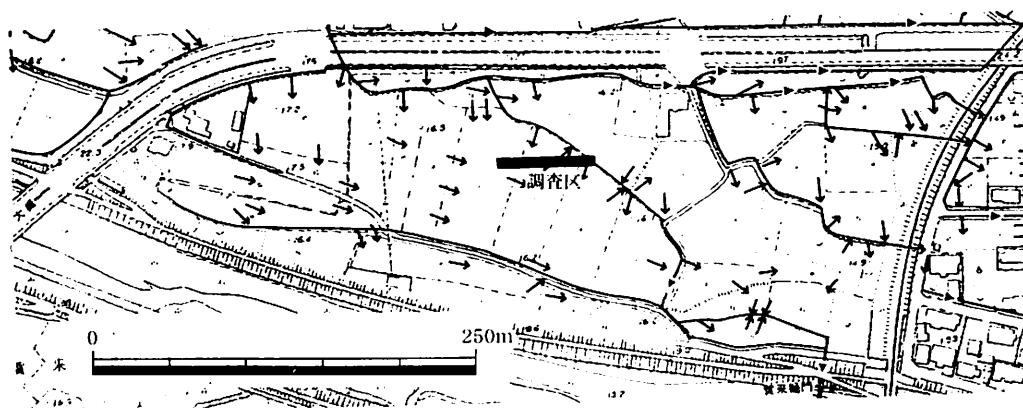
一方、第 1・2 号ないしは第 3 号水田を覆うように、最深部の A・B-12・13 グリッド辺りでは砂層が見られ、既述のように第 6 号水田の A・B-4・5 グリッドでは牛や人の足跡が検出されており、その覆土はやはり砂層である。これらの砂層は、賀来川が氾濫した際の洪水砂層を起源にすると考えられる。

②水田の平面形の復原と畦畔についての予測（第 50 図）

畦畔の方向、水田下面の標高などから、水田面ごとにそれぞれの内部に区画された平面形とその面積を予測的に復原してゆく。



第50図 畦畔間の小水田の平面形の復原(1/360)



第51図 調査区と現状の水掛かり(1/5000)

第7号水田

本水田には既述の如く、水田の始まりを示すA・Cの2大畦畔とB小畦畔が平面的に検出され、土層観察からD・Eの2小畦畔を想定した。A・D畦畔間、D・B畦畔間、B・E畦畔間は、東西幅が約8.0 mで、水田下面の標高が約10cm下がることと斉一性を示しており、D・E畦畔の想定は不自然ではないと考えられる。

A・B畦畔がほぼ北西―南東方向で、D・E・C畦畔がほぼ南北方向を示すことからして、A・D畦畔間、D・B畦畔間、B・E畦畔間に、台形の上（短）辺と下（長）辺を逆に組み合わせた小区画な3枚の水田が想定される（第50図）。水田の南北間の幅は調査していないので推測の域を出ないが、台形状の形状からして約6.5 mかと思われる。すると、3枚の水田はほぼ同様の大きさと、（上辺約5.5 m＋下辺約8.0 m）×高さ約6.5 m ÷ 2＝約44 m²という長さで面積が復原想定される。

E・C畦畔間は東西間の距離が約16.0 mあり、他の畦畔間の倍の間隔を有しているが、水田の下面の標高差は約10cmと他の畦畔の同様であり、畦畔は基本的には、間隔より水田下面の標高差を基準に造成していると考えられる。E・C畦畔はほぼ南北に形成されたと推定され、従って畦畔で区画された水田は長方形を呈し、東西約16.0 m×南北約6.5 m＝約104 m²という長さで面積が復原想定される。が、他の水田に比して大き過ぎ、間に畦畔が存在し、2枚の台形状の水田であった可能性が高く、平均して約57 m²ずつか。

つまり、台形3・長方形1の計4枚の小区画な水田で、総面積約236 m²を有していたと推測されるのである。勿論、東西方向には未検出の水田が広がっていたと推測され、それは以下の上位の水田も同様である。

第6号水田

本水田は、水田の始まりを示すA・Gの2大畦畔とB～Fの5小畦畔が平面的に検出され、土層観察からH小畦畔を想定している。第7号水田と同様に、基本的には水田下面の標高が約10cm下がることに畦畔が形成されているが、東西間の距離が他の倍の値を示すC・E間のみはほぼ中央部にD畦畔を設けている。それぞれの畦畔間の間隔は、水田の東側の終わりのH・G畦畔間の約4 mを例外として約8 mを測り、第7号水田と同規模である。

A・C・Eの3畦畔はほぼ北西―南東方向に、B・D・F・Gの4畦畔はほぼ北北東―南南西方向に造成されており、方向の違う畦畔が交互に現れることから、土層から想定したH畦畔は北西―南東であったと推測される。従って、各畦畔間に、台形ないしは台形に近い三角形のやはり上（短）辺と下（長）辺を逆に組み合わせた7枚の小水田が想定される（第50図）。

南北の長さは調査していないので推測の域を出ないが、A・B畦畔間、C・D畦畔間は三角形に近い同様の大きさの小水田で、それぞれの辺の長さは約6.6 m、7.8 m、10.2 mと想定され、水田の南北の長さが形状から第7号水田と同様の約6.5 mと推察されるため、底辺約7.8 m×高さ約6.5 m ÷ 2＝約25 m²という面積が復原される。他の畦畔間の小水田は全て台形状だが、それぞれ大きさの異同が大きく、B・C畦畔間が最も大きく、（上辺約4.8 m＋下辺約15.0 m）×高さ約6.5 m ÷ 2＝約64 m²、D・E畦畔間、E・F畦畔間はほぼ同様の大きさと、（上辺約6.0 m＋下辺約8.4 m）×高さ約6.5 m ÷ 2＝約47 m²、F・H畦畔間は（上辺約5.4 m＋下辺約7.2 m）×高さ約6.5 m＝約41 m²、H・G畦畔間は窪地の終りに規制されて最も狭く、（上辺約1.8 m＋下辺約4.2 m）×高さ約6.5 m＝約19.5 m²、という各面積が復原想定される。

つまり、三角形2、台形5の計7枚の小区画な水田で、総面積約268.5 m²を有していたと推測されるのである。

第4号水田

本水田は、水田の始まりを示すA・Fの2大畦畔とB～Eの4小畦畔が平面的に検出されているが、土層観察からA・B―13グリッド中央部に盛り上がりが見られ、小畦畔と想定し、ここでG畦畔と称しておく。また、B・C畦畔は2 m以上の間隔を有するとため別畦畔として検出したが、B畦畔は第3号水田のD畦畔の溝に切られて形状の全体が不明で、また土層上はC畦畔の東脇に更に大きな盛り上がりが見られるため、B畦畔からC畦畔の落ち込みまでが溝を形成し、B畦畔の西側とC畦畔の東脇の盛り上がりで畦畔構造を呈する大畦畔と考えた方が妥当かもしれない。第7・6・3号及び近世水田が全て、窪みが大きくなり始める変化点となる位置に溝を伴う、やや大規模な畦畔であることが裏付けてくれるように思う。それで、B・C畦畔及びその東脇の盛り上がりを見せて、BC畦畔と呼んでおく。BC畦畔で約10cm落ち、E畦畔で約20cm落ち、G畦畔で約10cm上がるという断面的構造を示している。D畦畔はBC・E畦畔間が広いために中央部に形成されたと考える。畦畔間

の間隔はD・E畦畔間と水田の東側の終わりのG・F畦畔間が約5～6mであるのを除き、ほぼ約12mという値を示す。

A畦畔のみが北西－南東方向、E・Fの2畦畔が北東－南西方向、BC・Dの2畦畔が南北方向を示す。G畦畔は土層観察からの推測なので不明だが、F畦畔の方向取り関係から、南北方向と北東－南西方向が考えられるが、小畦畔による他の区画水田の平面形との整合性から、南北方向と推察しておく。すると、各畦畔間に台形と長方形、三角形を組み合わせた5枚の小水田が想定される（第50図）。

南北の長さは調査していないので推測の域を出ないが、第7・6号水田と同様に約6.5mと推測しておく。すると、A・BC畦畔間の小水田は台形状で、（上辺約8.4m＋下辺約14.4m）×高さ約6.5m÷2＝約74㎡、BC・D畦畔間の小水田はほぼ長方形で、長辺約11.25m×短辺約6.5m＝約73㎡、D・E畦畔間の小水田は直角三角形形状を呈し、底辺約7.8m×高さ約6.5m÷2＝約25㎡、E・G畦畔間は台形状を呈し、（上辺約7.8m＋下辺約18.0m）×高さ約6.5m÷2＝約84㎡、G・F畦畔間の小水田は直角三角形形状で、底辺約4.8m×高さ約6.5m÷2＝約15.5㎡という面積が復元できる。

つまり、台形2・三角形2・長方形1の5枚の小区画な水田で、総面積約271.5㎡を有していたと推測されるのである。

第3号水田

本水田は、水田の東側の始まりを示すC大畦畔と、A・Bの2小畦畔が平面的に検出されているが、先述の如く土層観察から溝付きのD畦畔を復元している。A畦畔から始まって、水田面が約10cm落ちる位置に、D・B畦畔が、最後に約10cm上がる位置にC畦畔が、約12・16・12mと間隔を開けて造成されている。

A・B畦畔はほぼ北西－南東方向を、C畦畔はほぼ北東－南西方向を示す。D畦畔は南北壁の土層観察から北東－南西方向に造成されている。それからして、各畦畔間に台形の上（短）辺と下（長）辺を逆位に組み合わせた3枚の小水田が想定される（第50図）。また、A畦畔の西側にも同様の形態の小水田が予測される。

南北の長さは下位水田と同様に約6.5mと推測しておく。すると、A・D畦畔間の小水田が、（上辺約5.2m＋下辺約16.8m）×高さ約6.5m÷2＝約71.5㎡、D・B畦畔間の小水田が、（上辺約15.6m＋下辺約21.6m）×高さ約6.5m÷2＝約121㎡、B・C畦畔間の小水田が、（上辺約11.4m＋下辺約18.6m）×高さ約6.5m＝約97.5㎡という面積が復元できる。

つまり、台形状のみ3枚の小区画な水田で、総面積約290㎡を有していたと推測されるが、西側には更に拡がりを持つ。

V・VI層水田

本水田は、調査対象外の時代の水田だったため、平面的にはA・B畦畔しか検出していない。しかし、土層観察から、A・B－10・11グリッド境界付近に畦畔状の盛り上がりと溝状の窪みが、A・B－13・14グリッド境界付近に東方向の盛り上がりが見取されたので、前者をC畦畔、後者をD畦畔と認定しておく。調査区の西端と比してA・C畦畔で約10cmずつ水田面が下がってゆき、D畦畔で逆に約10cm上がるという構造を示す。

だが、C・D畦畔の方向性が不明のため、水田の平面形を復元するのは困難である。但し、A畦畔に伴う溝及びB畦畔に伴うa溝が北→南方向、B畦畔に伴うb溝が南→北方向の水流を示しており、それが現代の水田の水掛けと同じ方向を見せること（第51図、大分市歴史資料館1998）、初瀬井路が戦国時代末から江戸時代初期に造成されたと考えられることから（秦政博1987）、近世期のV・VI層水田は既に現代と同様の地割であった可能性が高い。

各水田の総合

通時的に、各時期の水田の変遷を見ていこう（第6表）。

第6表 各水田面の小水田の復原

法量	畦 畔 間 の 平 面 域 間 隔							東西幅	畦 畔 間 の 水 田 下 面 の 差 異							
	第1間	第2間	第3間	第4間	第5間	第6間	第7間		第1間	第2間	第3間	第4間	第5間	第6間	第7間	第8間
水田名	第7号水田	8.0m	8.0m	8.0m	8.0m	8.0m		41m	-10cm	-10cm	-10cm	+5cm	+5cm	+10cm	+10cm	
第6号水田	8.0m	8.0m	8.0m	8.0m	8.0m	8.0m	4.0m	46m	-10cm	-10cm	0cm	0cm	+10cm	0cm	+10cm	0cm
第4号水田	12.0m	12.0m	6.0m	12.0m	5.0m			48.5m	-10cm	0cm	0cm	0cm	-20cm			
第3号水田	12.0m	16.0m	12.0m					53m以上	0cm	-10cm	+10cm					
V・VI層水田	—	16.0m	16.0m					55m以上								
法量	畦 畔 間 の 小 水 田 の 形 状							総面積	畦 畔 間 の 小 水 田 の 面 積							
	第1間	第2間	第3間	第4間	第5間	第6間	第7間		第1間	第2間	第3間	第4間	第5間	第6間	第7間	平均
水田名	第7号水田	台形	台形	台形	台形	台形	台形	236㎡	44㎡	44㎡	44㎡	57㎡	57㎡			47㎡
第6号水田	三角形	台形	三角形	台形	台形	台形	台形	268.5㎡	25㎡	64㎡	25㎡	47㎡	47㎡	41㎡	19.5㎡	38㎡
第4号水田	台形	長方形	三角形	台形	三角形			271.5㎡	74㎡	73㎡	25㎡	84㎡	15.5㎡			54㎡
第3号水田	台形	台形	台形					290㎡以上	71.5㎡	121㎡	97.5㎡					97㎡
V・VI層水田	長方形	長方形	長方形					—	—	—	—					

まず、小畦畔の間隔だが、第7・6号水田では約 8.0 mが基準となっているが、第4号水田では約 12.0 mとなり、第3号水田では約 12.0 mと約 16.0 mの2種が基準となり、V・VI層水田では約 16.0 mに移行としている。つまり、第7・6号から第4号への変遷で約 1.5 倍となり、第4号からV・VI層への変遷でやはり約 1.5 倍となるが、第3号水田はその中間期に当たると考えられる。

水田下面の標高差と小畦畔の関係だが、第4号水田のE畦畔では約 20cm 落ちるのを例外として、畦畔ごとに約 10cm 下るのを全時的に基本としている。

畦畔間の各小水田の形状については、第7～第3号水田までは台形状で、上（短）辺と下（長）辺を逆位に組み合せるのが基本だが、地形的に制約が少ないところでは長方形も見られ、地形の制約の大きいところでは三角形形状でも造成されている。第3号水田では台形の脚部の角度が浅くなる兆候が見られ、究極的には次期の近世のV・VI層水田の長方形を目指しているように感じられる。

水田の面積に関しては、第7号から第6号では畦畔の間隔では変わりなく、小水田の枚数が増えた分だけ平均面積は若干減少しているが、総面積は第7号を 100 として指数 114 と増加しており、第6号から第4号では畦畔の間隔は約 1.5 倍に拡大し、使用水田の平均面積も 1.4 倍に増加しているが、総面積は指数 115 と余り変わりなく、第4号から第3号では畦畔の間隔は拡大の途上にあり、小水田の平均面積も約 1.8 倍になるのに応じて、総面積の指数も 123 と増加を見せる。

最後に、A・B-5・6グリッド付近に存在する畦畔について述べる。第7～3号及びV・VI層という本調査区で検出した全ての水田面で検出されており、しかも、第7・4・3号及びV・VI層水田面では、畦畔に溝も伴っているのである。これはこの位置が各水田の造成された、浅い谷で形成された窪地の中央に近くで、しかも最深部に向って大きく落ちる手前に当っており、各号水田の給排水を担う最も重要な溝であったと推察される。そうだとすれば、第6号水田ではその位置の畦畔に溝が検出されていないが、実際には存在した可能性が高いと考えられる。しかし、初瀬井路の建設で水田が賀来西地区全体に拡がったと推測される近世期には、V・VI層水田を見る限り、調査区西側に形成されたB畦畔の溝と重要度で同等の地位に低下したと思われる。

【引用・参考文献】

秦 政博 1987 「第4章 四 水への執念」『大分市史 中』大分市編さん委員会
大分市歴史歴史資料館 1998 「付図3 大字賀来・中尾・東院・宮苑の水路利用状況図」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅷ』

II. 第2次調査

試掘でB区と命名した区画の中で、道路に施設を設置する部分のうち、近世の水田層に下面に水田層が確認された、東端に近い区域を第I調査区、西端に近い区域を第II調査区として設定して、本調査を実施した(第8図)。近世の水田面の下面に、第I調査区からは3枚の水田層が、第II調査区からは4枚の水田層が検出され、磁器や土師器、弥生土器、そして土錘・石錘などの遺物が検出された。

1. 第I調査区

南北約2.2m×東西約24.5m=約54㎡の調査区を設定し、調査を実施した(第52図)。

近世の水田面の下に、第1～3号の3枚の水田層とそれぞれに伴う溝状遺構などの遺構も検出された。また、水田の耕作土や溝状遺構の覆土中から磁器や土師器などが出土している。

①第1号水田(第53図)

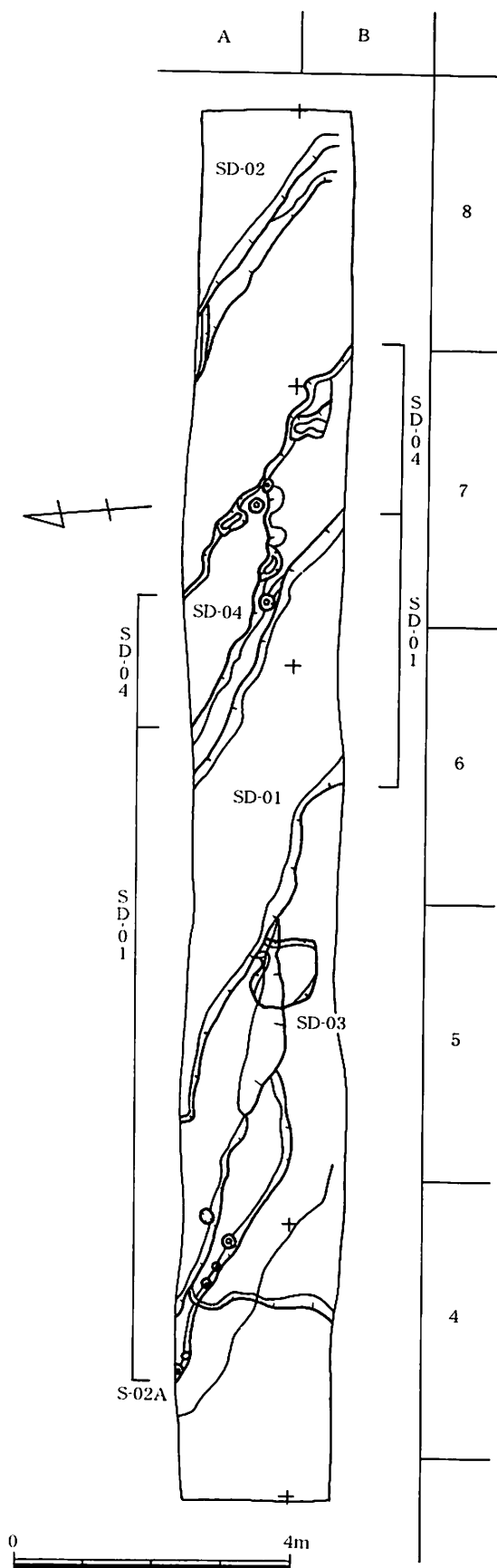
土層観察から、調査区の東西両側に更に拡がって水田層が看取され、東西・南北ともにどこまで存在するか不明であるが、少なくとも東西は調査区と同様の約24.5m以上を有することは確かである。

平面的には、試掘トレンチで水田面が削平されたために、部分的にしか調査できなかったため、畦畔を検出することはできなかったが、調査区中央部のA・B-4・5・6・7グリッドに第1号溝状遺構を検出し、その東西に水田が拡がっていることが確認された。また、第1号溝状遺構は西側に水口が付随している。

また、土層図に耕作土=a、床土=bの別で示したように、調査区全域で両層が見られるが、床土が第2号溝状遺構の上面でのみ土層が若干異なる。これは、第2号溝状遺構が埋没した後も水分の高い状況が残り、水田の床土層に影響を及ぼしたものと考えられる。

次いで、耕作土の床土の上面を基準にして第1号水田の標高について見てみると、調査区西端に近いA・B-4グリッド中央部は約14.26mを測り、暫く同様のレベルが続くが、A・B-5グリッド中央部で約14.20mとやや落ち、A・B-5・6グリッド境付近の第1号溝状遺構の西側まで同様のレベルが続く。

そして、A・B-8グリッド西側の第4号溝状遺構の東側に形成された畦畔の東側では約14.24mとなり、



第52図 第I調査区遺構配置図(1/100)

A・B-9グリッドの西端の第2号溝状遺構の上面になると約14.16 mに急落し、A・B-9グリッド中央部で約14.12 mと最も低くなってから再び上がり始め、A・B-9・10グリッド境阿付付近で約14.24 mを示している。つまり、調査区のほぼ全域で同様の標高を呈するが、第2号溝の上面付近のみが若干窪んでいるようである。

最後に所属の時期であるが、出土遺物から11世紀末から12世紀であることが推測される。

i) 付属遺構

第1号溝状遺構 (第54図)

A・B-4～7グリッドに位置し、北西から南東に延びる溝状遺構である。調査区のほぼ中央を横切り、第3号溝状遺構を付設する。前代の第4号溝状遺構より約1.2 m西へ移動している。

また、西岸は段階的に浅くなっている。底面の比高差が約0.2mあることより北西から南東に流れていたと考えられる。最大幅は推定約4.0m、深さ約0.4mと大形で、用水路として機能していたようである。

第3号溝状遺構 (第55図)

第1号溝状遺構の西側A・B-5・6グリッドに位置し、第1号溝状遺構に接続している。上面を試掘トレンチで削平されているが、一辺約0.8m×約0.95mの方形に近い形を呈し、深さは約0.2mを測る。底面の比高差が約8cmあり、水田のある南側から第1号溝状遺構のある北側に向かって流れていたと推測されるため、排水する水口であったと考えられる。

ii) 出土遺物 (第56図)

第56図1＝第1号水田A・B-5グリッド一括

11世紀末～12世紀の所産と考えられる白磁皿で、底部片である。底面は回転糸切痕を残し、底部の外面に釉はかかっていない。

第56図2＝第1号溝状遺構a区一括

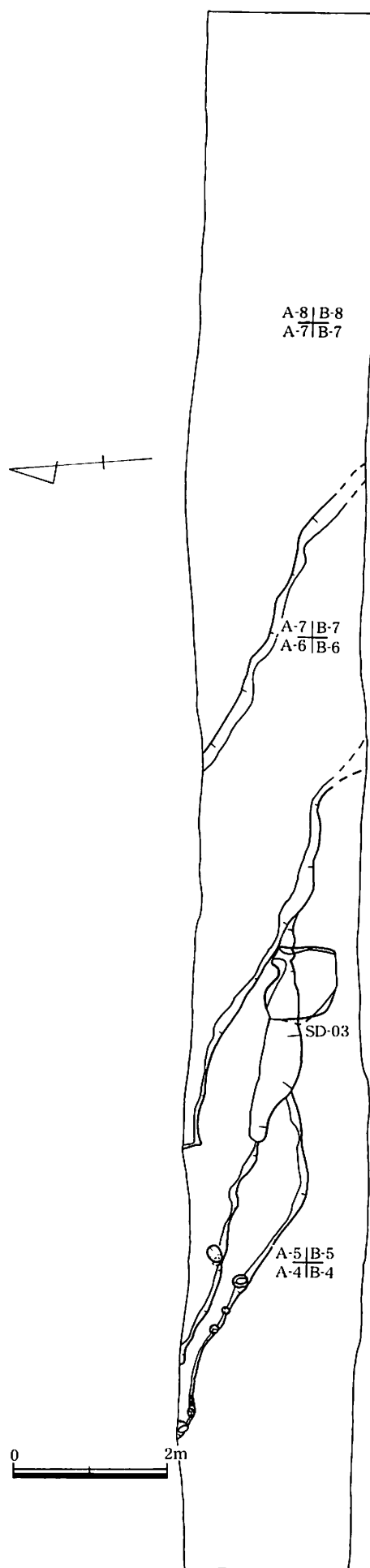
10～11世紀の土師器で、高台付の内黒碗の底部片である。内面をケズリ、外面をナデで仕上げる。

第56図3＝第1号溝状遺構b区一括

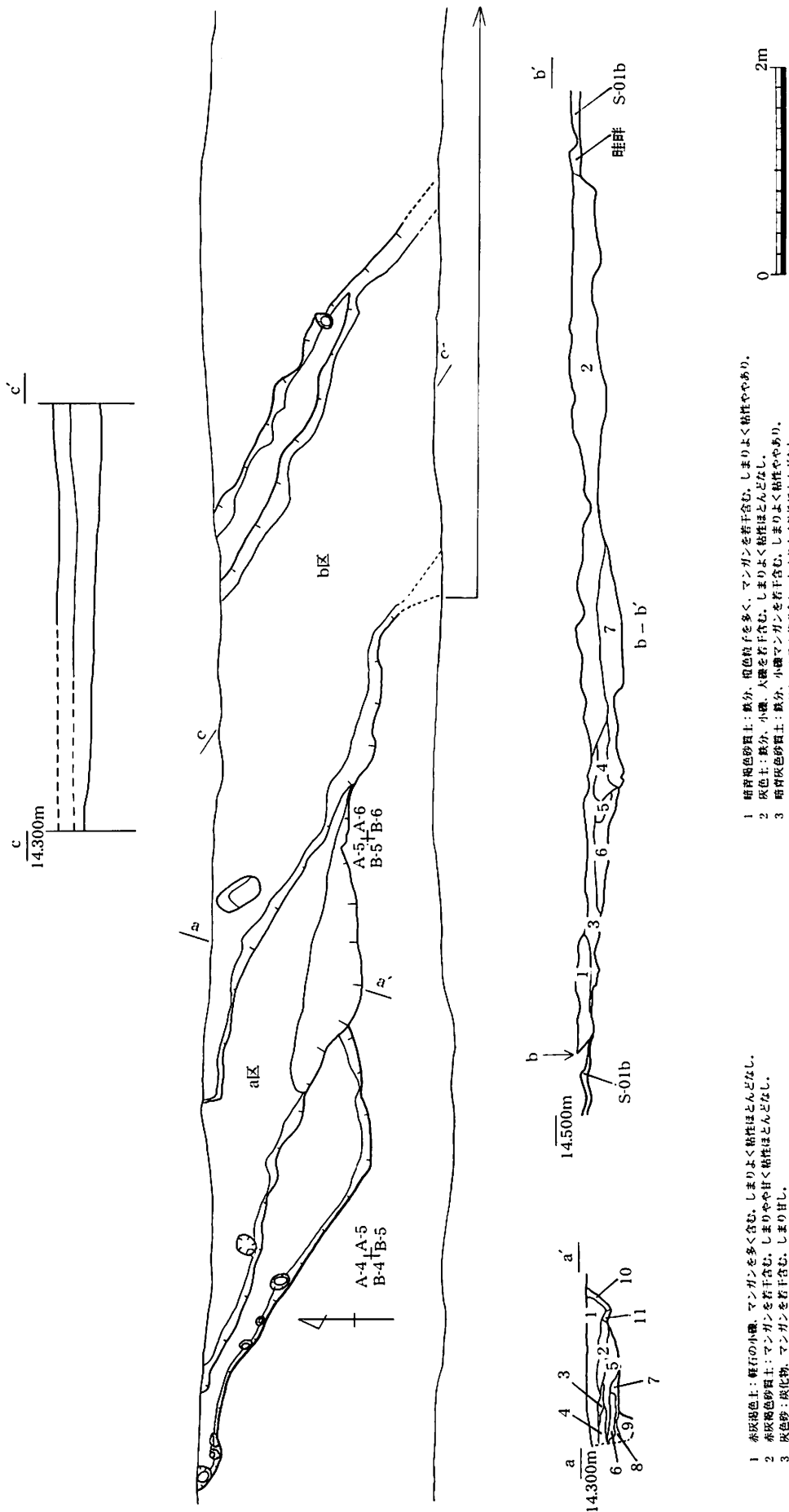
古墳時代の土師器の鉢と考えられる口縁部片で、口縁部は三角縁である。内面ナデ、外面はナデ、ヘラケズリを施す。

②第2号水田 (第57図)

土層観察からすると、第1号水田の直下に形成されており、調査区の東西両側に更に拡がって水田層が看取され、東西・

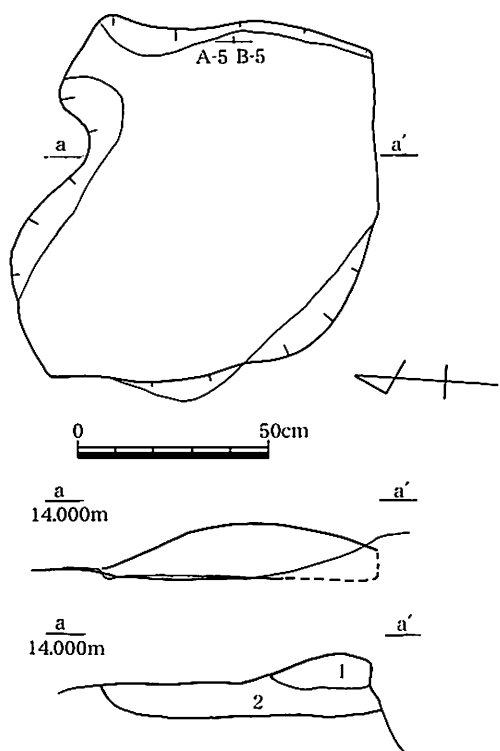


第53図 第1号水田遺構配置図(1/80)



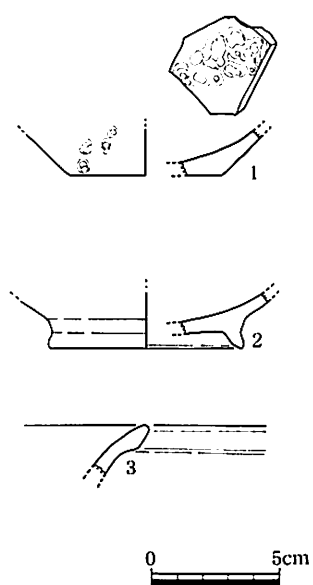
第54図 第1号溝状遺構平・断面図 (1/30)

- 1 暗褐色砂質土：鉄分、褐色粒子を若干含む、しまりよく粘性やあり。
- 2 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 3 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 4 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 5 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 6 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 7 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 8 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 9 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 10 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。
- 11 暗褐色砂質土：鉄分、小礫、大礫を若干含む、しまりよく粘性ほとんどなし。

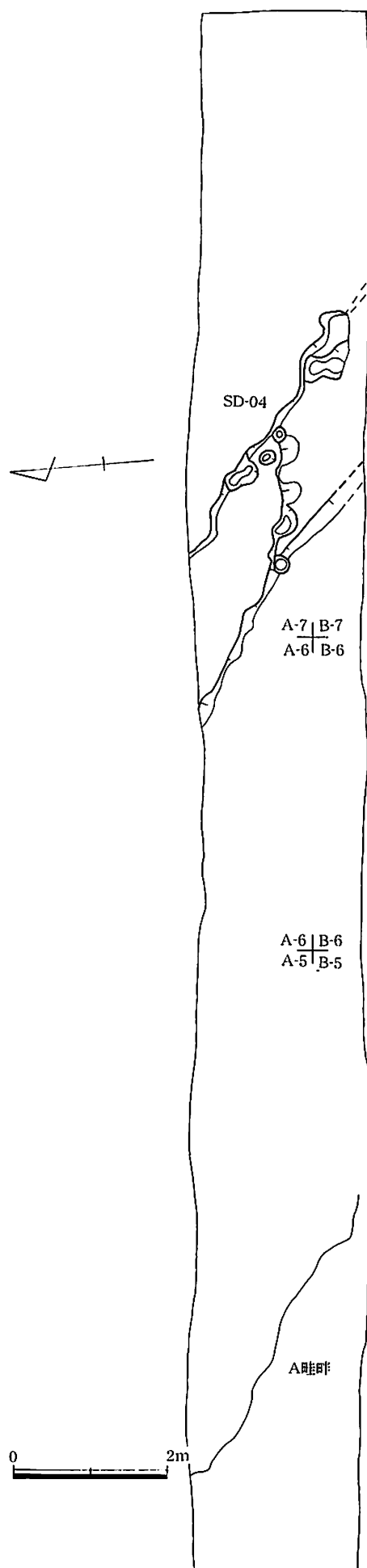


- 1 黒灰色粘質土：鉄分を均一、炭化物を若干含む、しまりよく粘性ややあり。
2 灰褐色粘質土：鉄分をやや多く、炭化物をわずかに含む、しまりよく粘性ややあり。

第55図 第3号溝状遺構平・断面図(1/20)



第56図 第1号溝状遺構出土遺物(1/3)



第57図 第2号水田遺構配置図(1/80)

南北ともにどこまで存在するか不明であるが、少なくとも東西は調査区と同様の約 24.5 m 以上を有することは確かである。平面的には、A・B-5 グリッド西端に A 畦畔が検出され、第 4 号溝が伴うものと考えられる。

また、土層図に a = 耕作土、b = 床土の別を示したように、調査区全域で両層が見られるわけではない。即ち、調査区西側では両者が認められるが、A・B-8 グリッド東端付近で耕作土は途切れ、それより東側では床土しか看取されない。上面の第 1 号水田から削平を受けたと考えられる。また、第 1 号水田と同様に、第 2 号溝状遺構の上面では若干土層が異なり、水分の多い下面の溝の覆土の影響を受けていると推測される。次いで、床土の上面を基準にして本水田の標高について見てみると、調査区西端に近い A・B-4 グリッド中央部で約 14.10 - 14.16 m を測るが、A 畦畔の東側で約 14.06 m と急落してから上昇に転じ、A・B-6 グリッド西端付近で約 14.14 m となるも、後代の第 1 号溝状遺構に切られて一旦途切れる。再び現れるのは第 1 号溝の東側からで、約 14.18 m を示し、A・B-8 グリッド中央の畦畔と推測される盛り上がり手前では約 14.14 m と若干下がり、盛り上がりの東側では約 14.12 m と同様の値を示した後、第 2 号溝状遺構の上面で顕著な下降傾向を見せ、A・B-9 グリッド西端付近で最も深く約 14.04 m となり、そこから上昇に転じ、A・B-9 グリッド中央部の盛り上がり手前で約 14.10 m を示し、盛り上がりの東側では約 14.16 m とやや大きく上がり、調査区東端では約 14.20 m を呈する。つまり、東側がやや低く、溝状遺構の東側で一旦やや高まるものの、第 2 号溝状遺構の上面で大きく窪んでから、東側で最も高くなっている。

更に、所属時期だが、本水田からは時期の判定可能な遺物は出土していないため、第 1 号水田の 11 世紀末～12 世紀よりは古く、第 3 号水田の古墳時代後期よりは新しいとしか言えない。

i) 付属遺構

第 4 号溝状遺構 (第 58 図)

第 1 号溝状遺構 (第 54 図) に隣接し、東西両岸ともに第 1 号溝状遺構 (第 54 図) に切られた形で検出された北西から南東に延びる溝状遺構である。用水路として機能していたとみられ、前代の第 2 号溝状遺構より約 1.7m 西へ移動している。幅は推定約 3.5 m、深さは約 0.25m、比高差が約 5cm あり、第 1 号溝状遺構と同様北西から南東に流れていたと考えられる。推定される幅から、第 1 号溝状遺構とほぼ同程度の規模を有していたと推測される。第 1 号溝状遺構に本溝・第 2 号水田とも大きく切られており、直接の接続関係は見られないが、先後・位置関係や第 1 号溝状遺構の西側に第 1・2 号水田共に畦畔状の盛り上がりか認められることなどから、本遺構が第 2 号水田に付属すると判断した。

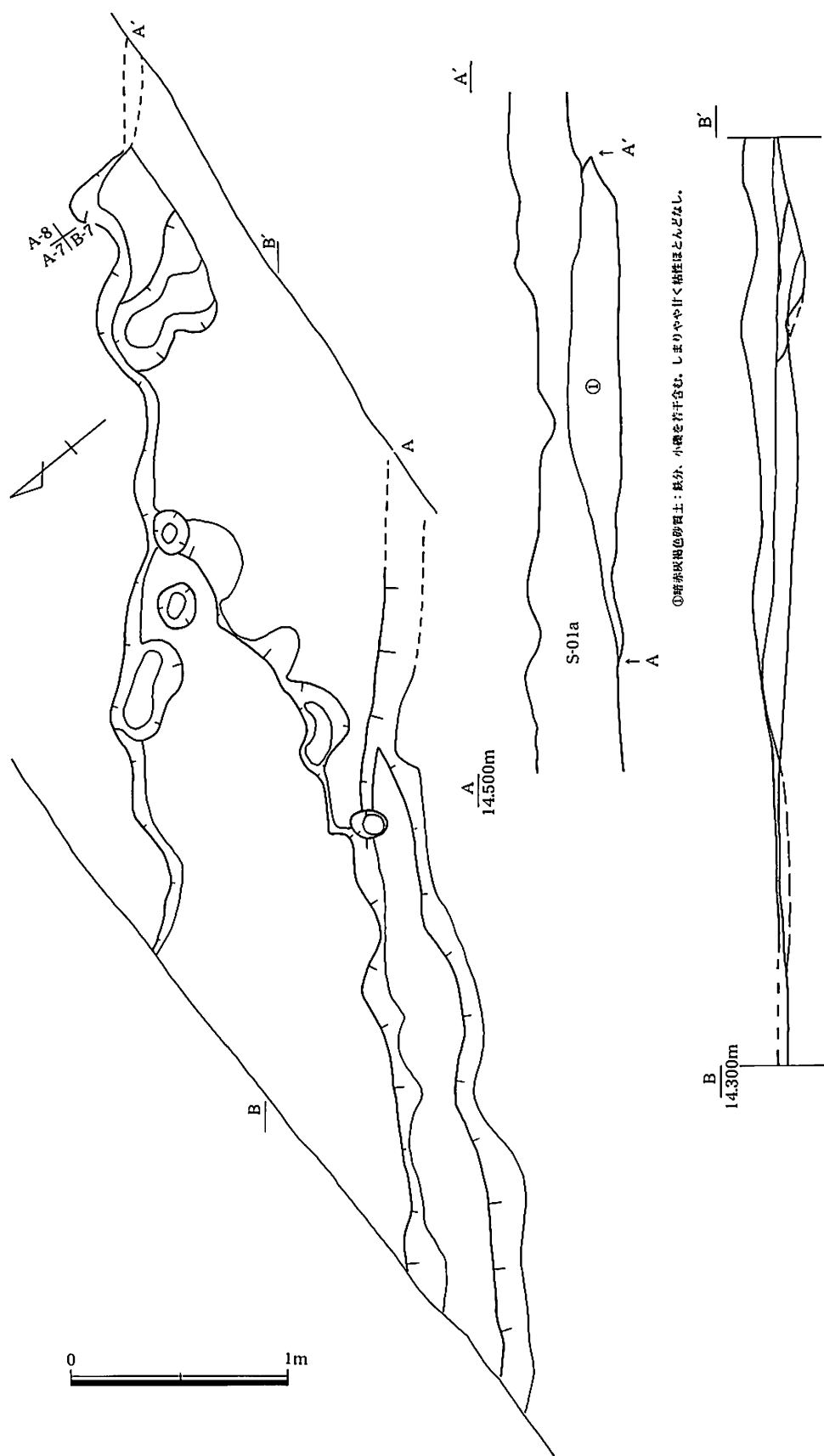
A 畦畔

第 4 号溝状遺構の西側の位置に、第 4 号溝状遺構と平行するように北西から南東方向に約 4.0m 確認された畦畔である。盛り上がりは平面的に認識できなかったが、土層からすると東側への約 12cm の落ちが看取される。

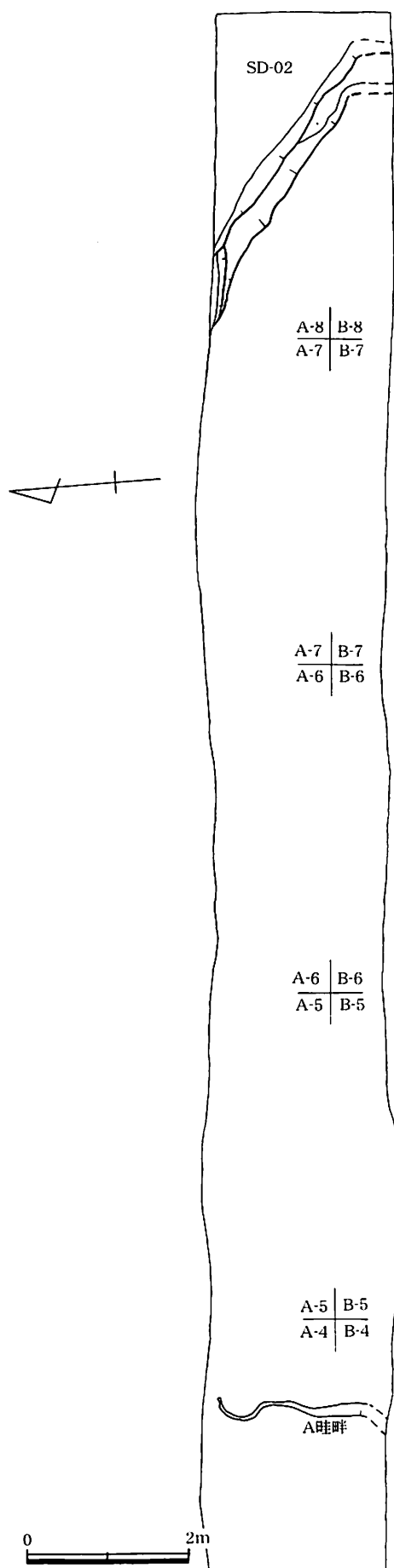
③第 3 号水田 (第 59 図)

土層観察からすると、第 2 号水田の直下に形成されており、西側は A・B-4 グリッド中央に位置する A 大畦畔から水田が始まっている。そこから A・B-5 グリッド中央までは水田層が観察されるが、そこで一旦、Ⅵ層の湿地堆積によって途切れ、第 1 号溝状遺構の東側から再び水田層が現れ、東側は第 2 号溝状遺構西側の畦畔で終わっているが、調査区外の溝の東側に更に水田が伸びていた可能性もある。湿地堆積で途切れることから、湿地を避けるように途切れ途切れに狭い水田が形成されていたと推測される。また、平面的には、既述のように西側の水田の始まりを示す A 畦畔と第 2 号溝状遺構が検出されており、水田層が検出された区域では、耕作土・床土の両者が認められる。

次いで、床土の上面を基準にして本水田の標高を見てみると、水田の始まりを示す A 畦畔の東側で約 14.00 m で始まり、やや高まる傾向を見せ、A・B-5 グリッド西端に近い湿地堆積の西側で約 14.04 m で一旦途切



第58図 第4号溝状遺構平・断面図(1/30)



第59-1図 第3号水田遺構配置図(1/80)

れ、A・B-8グリッド西端の第1号溝状遺構の東側で約14.06mで再び現れ、すぐに約14.00mと落ち、第2号溝状遺構の西側の畦畔の西側まで同様のレベルで続いている。つまり、調査区全域ではほぼ同様の標高で終始しており急落する窪地を避けていると考えられる。更に、所属時期だが、出土遺物からすると、古墳時代後期と考えられる。

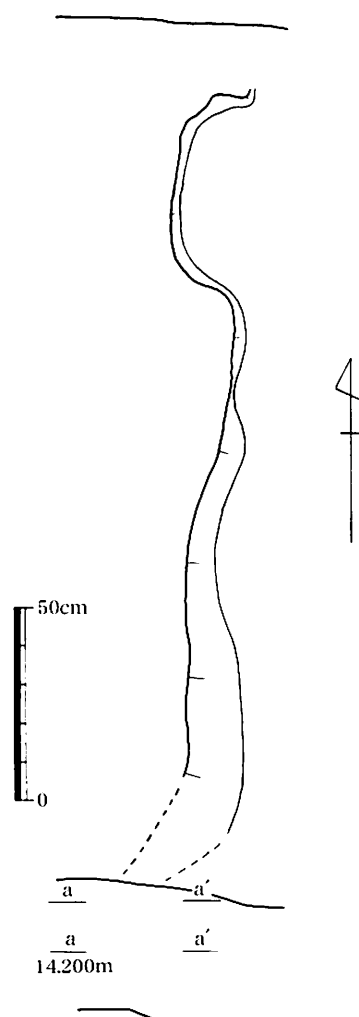
i) 付属遺構

第2号溝状遺構 (第60図)

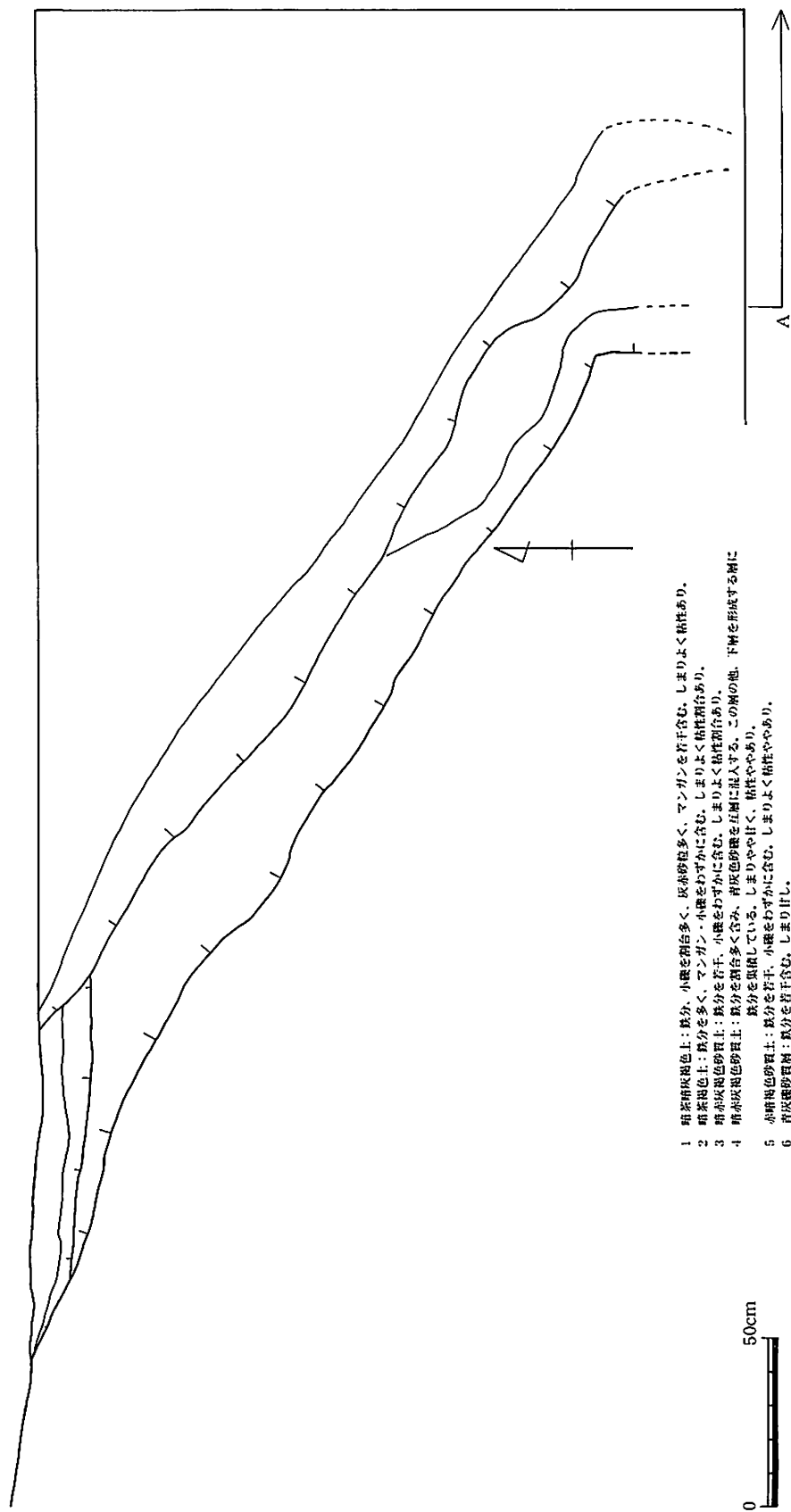
調査区東端部のA・B-8グリッドに位置する北西から南東に延びる溝状遺構で、用水路として機能していたとみられる。

第4号溝状遺構 (第58図) の東へ約1.6mのところの位置にほぼ平行に延びる。溝状遺構がしたいに西へ位置を変えていることが分かる。幅は推定約1.5m程で、深さは約0.3mを測り、底面の比高差が約0.1mあることから第1号溝状遺構同様、北西から南東に流れていたと考えられる。東側は未調査のため詳細は不明である。

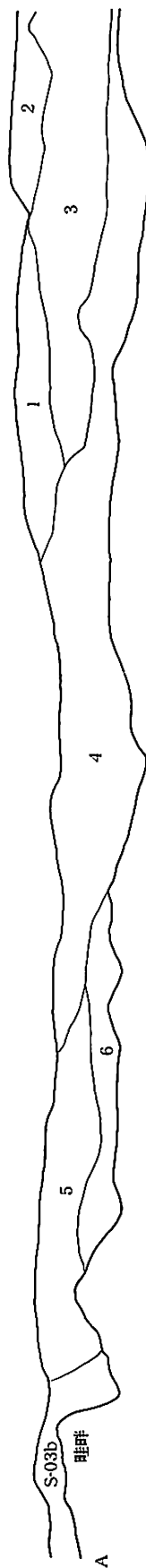
A畦畔 (第59-2図)



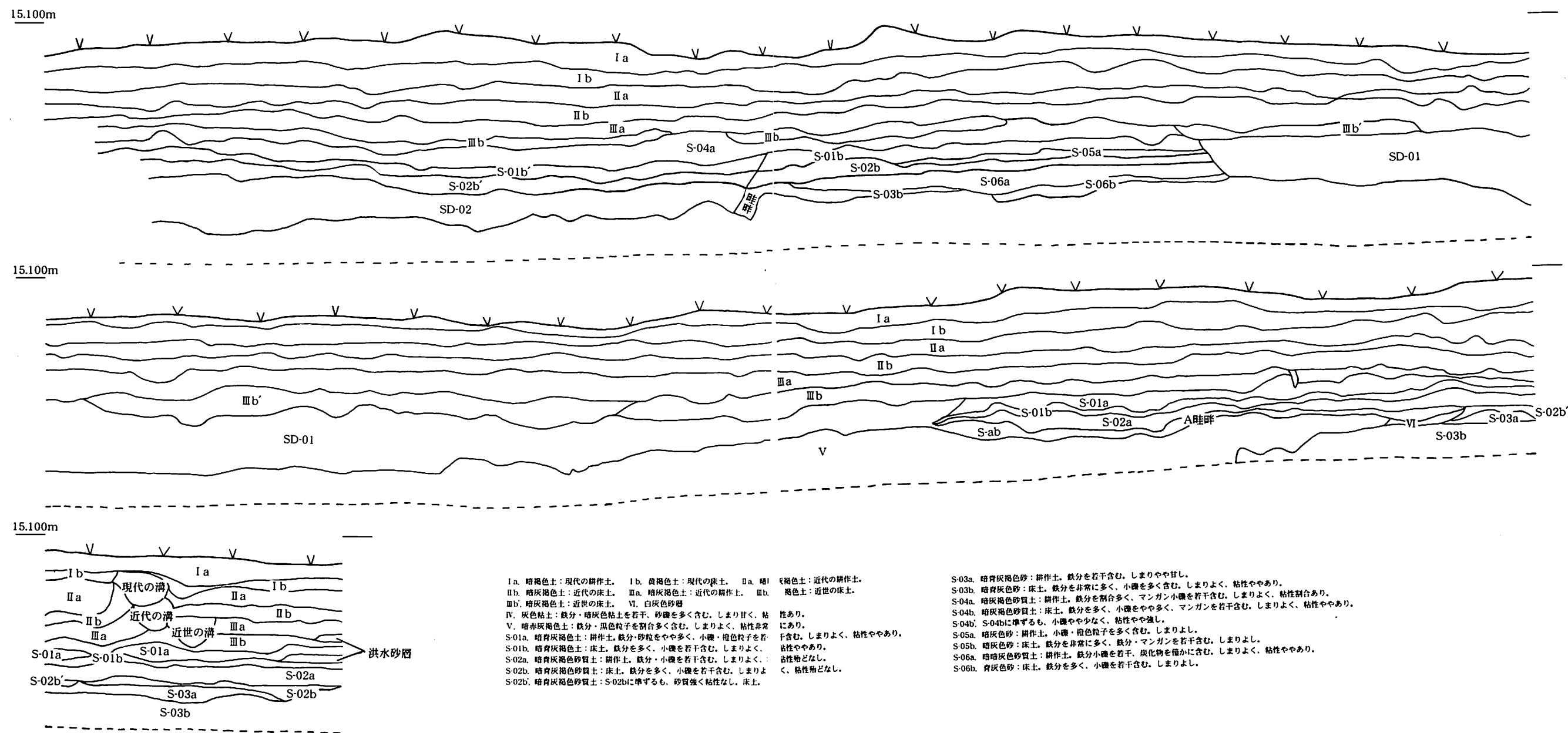
第59-2図 第3号水田A畦畔平・断面図(1/20)



14.200m



第60図 第2号溝状遺構平・断面図(1/20)



第61図 第I調査区 南壁土層断面図(1/30)

第7表 第I調査区出土土器・磁器観察表

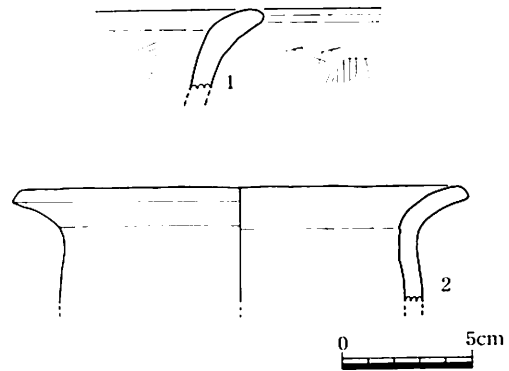
図版番号	遺物番号	出土遺構・出土区	種類	器種	時期	胎土		色調		器面調整		法量(cm)				備考
						混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	器口径	底径	
56	1	第1号水田A・B-5一括	白磁	皿	11世紀末～12世紀	-	-	灰白色	灰白色	-	-	-	-	-	(6.0)	反転復元 底面に施釉なし
56	2	第1号溝状遺構a区一括	土師器	碗	10世紀～11世紀	石英長石	微粒	淡黒色	浅黄褐色	ケズリ	ナデ	-	-	-	(7.8)	反転復元 内黒碗
56	3	第1号溝状遺構b区一括	土師器	鉢?	古墳	石英長石	微粒	褐色	褐色	ナデ	ナデヘラ	(21.0)	-	-	-	口縁部は三角縁
62	1	第2号溝状遺構4・5・6区一括	土師器	甕	古墳	雲母石英	微粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	ナデヘラ	ナデヘラ	(25.0)	-	-	-	口縁部片
62	2	第2号溝状遺構A・B-8・9一括	土師器	甕	古墳後期	石英	微粒	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	(14.6)	3.0	-	(12.0)	反転復元 「く」の字口縁

調査区西端近くのA・B-4グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。北端は第1号溝状遺構によって切られている。北方は細長く、南に向って太くなっていく。最大幅は約0.15m、最小幅は約0.025m、最大高は約3cmを測る。西側に水田面が認められないことから第3号水田の西端を示す畦畔であると考えられる。

ii) 出土遺物 (第62図)

第62図1=第2号溝状遺構4～6区一括

古墳時代所産と考えられる土師器甕の口縁部片である。内外面はナデ・ヘラケズリを施す。



第62図 第2号溝状遺構出土遺物(1/3)

第62図2=第2号溝状遺構A・B-8・9グリッド一括

古墳時代後期の所産と考えられる土師器甕の口縁部片である。口縁部は「く」の字状口縁で、ナデを施す。

④小結

試掘トレンチで第1号水田が判平されており、調査区中央部に第1・4号水田が存在したこともあって、畦畔の平面的な検出が困難であったことから、ここでは各水田面ごとに、土層観察から畦畔の復原を行い、併せて小畦畔で区画された小水田の大きさについても推測を試みたい。なお、その試みにおいて利用した第63図は、垂直の縮尺を1/40に強調してある。

i) 第1号水田 (第63図上段)

まず、明確に認識できるのは、第1号溝状遺構の東西際の盛り上がりで、両者とも最大約5cmの高さを有しており、用水である流路と水田を区画する畦畔だと推察され、A、B畦畔と仮称しておく。更に、A・B-5グリッド中央部、A・B-8グリッド東端、A・B-9グリッド西端に約8～10cmの盛り上がりが見取される。これが畦畔だとすると、約3.0～4.0m間隔で形成されていることになり、同様にC、D、E畦畔と仮称する。そして、調査区内で検出された4枚の小水田うち3面までの標高は約14.25mであり、第2号溝状遺構の痕跡と考えられる窪み部分でのみ約10cm下がって、約14.15mとなっており、かなり平坦な水田が広がっていたと推測される。ほぼ平坦な地形に形成されたとなると、小区画である必要性はないと考えられ、東西幅は約3.0～4.0mでも、南北に長い長短冊形ないしは、それに近い台形を逆位に組み合わせた形状が想定される。

ii) 第2号水田 (第63図中段)

まず、平面的に盛り上がりは判然としなかったが、土質の差からA畦畔が検出されており、土層観察からは約10cmの盛り上がりを持っていたと考えられる。そのA畦畔の東側約1.5mの位置に約6cmの盛り上がりが見取される。A畦畔との間隔が狭すぎることで、またA畦畔が第4号溝状遺構に平行することから、間に水田が造成されたのではなく、A畦畔と一体として流路と水田を区画するやや大形の畦畔を形成していたのではないかと推察され、セットでA畦畔と呼んでおく。また、第4号溝状遺構は東の肩を第1号溝状遺構に切られているので判然としないが、流路の東側にも水田と区画する畦畔が存在した可能性が高く、B畦畔と称しておく。更に、第2号溝状遺構の痕跡である窪みの両脇に盛り上がりが見取され、畦畔だと推測され、C、D畦畔と仮称しておく。そうだとすると、第4号溝状遺構の東側では東西は約4.0m間隔で畦畔が造成されていたと考えられ、これが本水田面で一般的な形であるならば、流路の西側に敷衍すると、A・B-4・5グリッド境付近の西側への落ちも畦畔の痕跡である可能性があり、E畦畔と呼んでおく。

畦畔で区画された各水田面の標高を比較してみると、D畦畔の東側が最も高く約14.20mを示し、B・C畦畔間、E・A畦畔間が約14.16～18mとそれに次ぎ、E畦畔の西側が約14.10mとやや低くなり、C・D畦畔間が約14.06mと最も下がる。つまり、次代の第1号水田に比べると、若干の高低差を持つ地形上に水田が

造成されていることになる。また、高位水田と下位水田の比高差が約 14cm を有し、第 2 号溝状遺構の痕跡の窪地がやや深みを保っている。

iii) 第 3 号水田 (第 63 図下段)

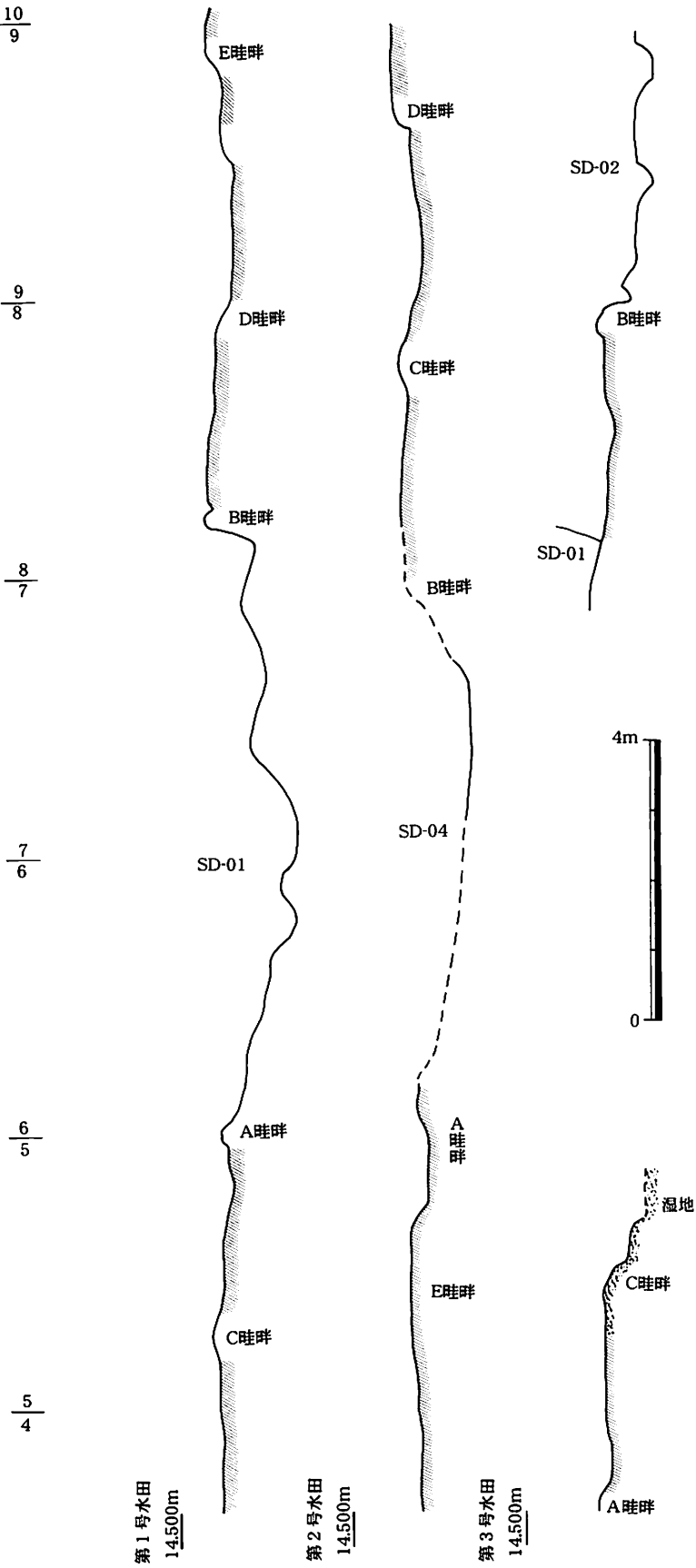
先ず平面的に、A・B-4 グリッド西側に、水田の始まりを示す A 畦畔が検出されている。また既述の如く、全域で水田層が確認されているわけではなく、東西に大きく二分され、西側は A 畦畔から始まり、A・B-5 グリッド西側の湿地堆積で一旦途切れ、東側は第 1 号溝状遺構の東側から現れ、第 2 号溝状遺構の西側までである。但し、東側は第 1・4 号溝状遺構で切れられていると推測される。

また、第 2 号溝状遺構の西側に若干の盛り上がりが見取され、流路と水田を区画する畦畔であったと推察されるので、B 畦畔と仮称しておく。また、西側水田と湿地の境に若干の盛り上がりが見取れるが、これも水田と湿地を区画する畦畔と見ておき、C 畦畔と呼んでおく。

A 畦畔から湿地までが東西幅約 2.5 m を有する。これを本水田で一般的と考えると、B 畦畔の西側にも 1～2 枚の小水田が想定される。東西水田面の標高は約 14.10 ～ 14 m とほぼ同様の値を示す。これは、第 2 号溝状遺構や湿地の周囲に、それらに比すとやや微高地で平坦な土地に水田を造成したと推察される。南北幅は不明だが、湿地などで途切れていることや東西幅から考えると、第 1・2 号水田よりかなり小規模な水田が営まれたのだろう。

2. 第 II・III 調査区 (第 64 図)

市道が十字に交差する部分で、南北道を第 II 調査区として東西が約 2.5m × 南北約 44.4m = 約 111 m²、東西道を第 III 調査区として東西約 111.3 m × 南北約 2.5 m - 交差部分約 6.25 m² = 約 272 m² の計約



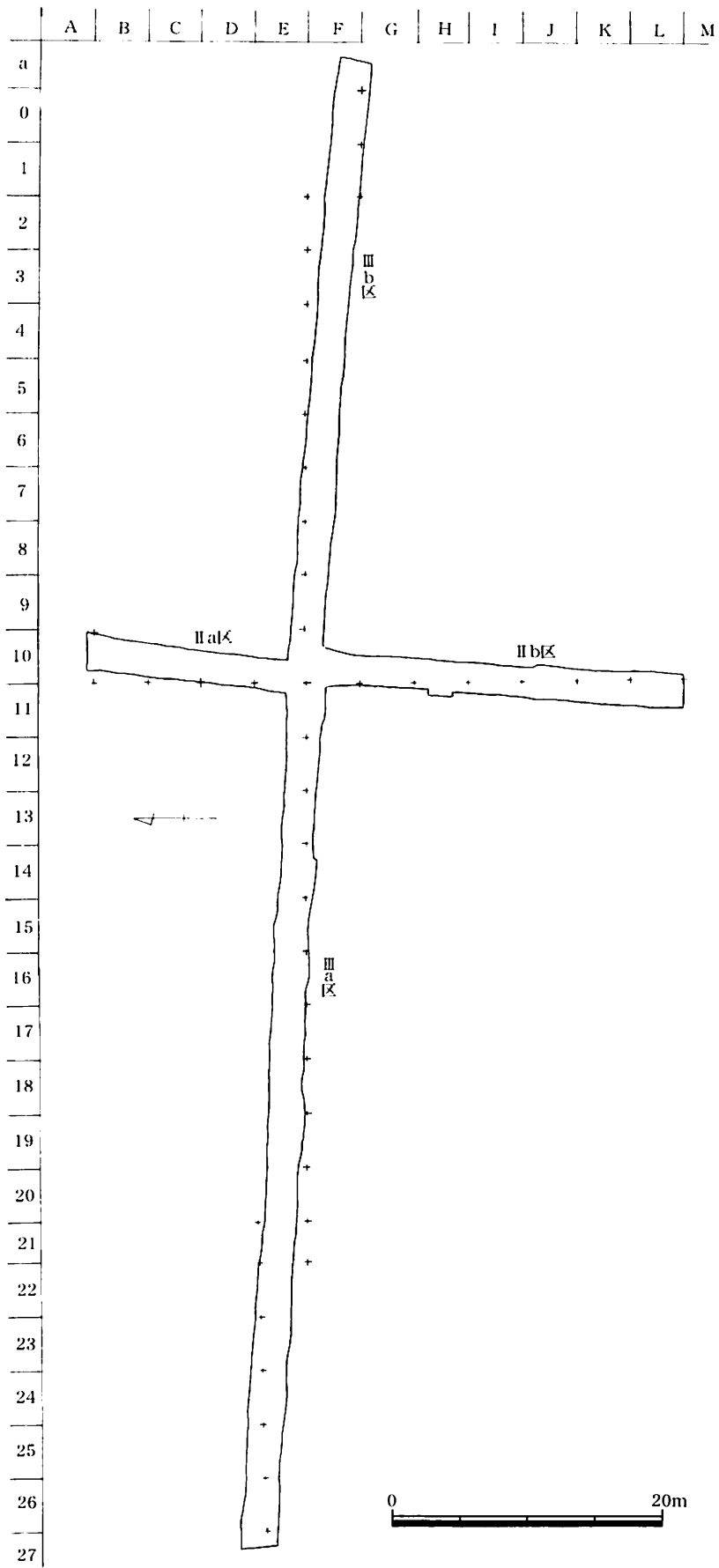
第 63 図 第 I 調査区各水田の畦畔の復原 (1/100)

383 m²を調査した。実際の調査に当っては、工事の手順の問題で、第Ⅱ調査区の北半をⅡa区、南半をⅡb区、第Ⅲ調査区の西半をⅢa区、東半をⅢb区と分割し、Ⅱa区→Ⅲa区→Ⅱb区→Ⅲb区の順で調査を進めていった。

近世の水田面の下に4枚の水田が検出された。そのうち、第1号水田は土層観察から部分的に看取されただけなので、詳報は省略する。第2・3・4号水田ともに複数の畦畔が、第3・4号水田では用水路と考えられる流路も検出された。また、各水田の耕作土や流路から磁器や土師器、土錘、獣骨なども出土している。

①第2号水田 (第65図)

前年度行なった試掘のトレンチが調査区と重複する部分が多いことなどから、Ⅱb区の中央部分を除く全域、Ⅲa区のごく一部と、Ⅲb区の全域でしか面的には調査できなかったが、土層の観察から、Ⅱb・Ⅲa・Ⅲb区では全域で看取されたばかりか、Ⅱb区で更に南に、Ⅲa区では更に西に、Ⅲb区では更に東に延びているのが確認されたが、Ⅱa区では南端に近いE-10グリッドより南にしか看取されていない。しかし、存在しなかった訳ではなく、北向きに高くなる傾斜が観察され、近世の水田面に削平を受けたと考えられるため、少なくとも下面の第3号水田同様、Ⅱa区の北端付近までは存在したと推測さ



第64図 第Ⅱ・Ⅲ調査区グリッド配置図(1/500)

れる。即ち、南北44 m以上、東西は110 m以上、調査区外も入れると、4840 m²以上の水田面積が予想される。

第Ⅱ調査区の状況から概観してゆく。

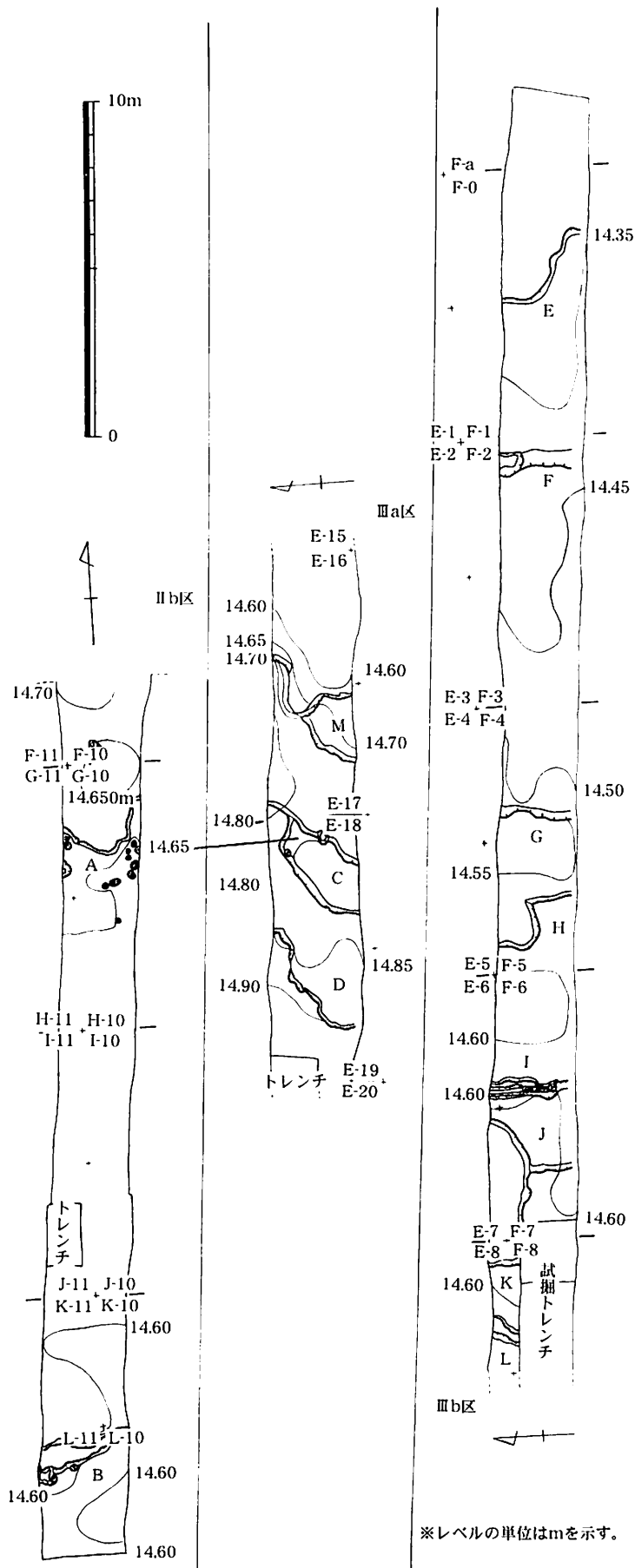
平面的には、Ⅱa区は調査できなかったが、Ⅱb区ではG-10・11 グリッド中央やや北寄り、A畦畔が、L-10・11 グリッド北端でB畦畔が検出された。それ以外に、Ⅱa区ではE-10 グリッド北端付近から南に土層が残存しており、そこから北に向けて土層が上がって終っているのが観察される。その近辺で、1枚上面の近世の水田も土層から畦畔化の存在が推定され、1枚下面の第2号水田にも畦畔状の若干の盛り上がり認められるので、本水田もこの位置に畦畔が存在した可能性が高い。

また、Ⅱa区は耕作土しか認められないが、試掘トレンチの深掘り部分を挟んで、Ⅱb区では土層図a=耕作土、b=床土の別で示したように、南端まで両者が看取される。

次に、第Ⅲ調査区をみてゆく。

Ⅲa区は面的には中央部分しか面的には調査できなかったが、ほぼ4 mおきに北東-南西方向に延びるM・C・Dの3畦畔が検出できた。また、土層図の観察からは、F-11 グリッド中央、F-12 グリッド中央、F-13 東より、F-14 グリッド東より、F-14 グリッド西より、15 グリッド西より、F-19 グリッド東より、F-20 東端、F-20・21 グリッド境界付近、F-22 グリッド東より、F-23 グリッド東より、F-24 グリッド中央、F-25 グリッド東より、F-26 グリッド東よりと、約3~4 mごとに畦畔状の盛り上がり認められる。中でもF-20・21 グリッド境界付近のものは中央に溝状遺構を伴い、幅約2 mを測り、大畦畔の可能性が高い。面的に検出できたM・C・D畦畔と併せ、東西約69 mの間に、平均約4 m間隔で17か所の畦畔が存在したと推測される。

Ⅲb区はほぼ全面で面的に調査しており、L・E~Kの8畦畔が、約4 mごとに検出されているが、G・E畦畔の間のみ約10 m空いており、土



第65図 第Ⅱ・Ⅲ調査区第2号水田面遺構配置図
(1/200)

層観察からF-3・2境界付近の耕作土が若干盛り上がりしており、その当りに畦畔が存在した可能性が高い。

更に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして第2号水田面の標高を見てみる。

Ⅱa区の土層のE-10グリッド北端付近で約14.60mで始まり、試掘トレンチの深掘にぶつかる同グリッド中央部で約14.55mと若干下がり、試掘トレンチ深掘の終るⅡb区のF-10・11グリッド南寄りで約14.70mと若干上がっているが、G-10・11グリッド部分で約14.65mと再び下がり、I-10・11グリッド北端からL-10・11グリッドにかけてが約14.60mと最も深くなっている。即ち、Ⅱ・Ⅲ区が中央部分が交差する部分が最も高く、南北に低く成っており、平面の等高線からするとⅡb区部分では南というより南東に向って傾斜していると推測される。

Ⅲa区は、西端のF-27グリッド東端で最も高く約15.30mで始まっており、F-24・25グリッド境界付近まではほぼ同じ標高で推移するが、そこから落ち始め、F-24・23グリッド境界付近で約15.15mまで下がってから、F-21グリッド東端の溝状遺構の西側までほぼ同レベルを保つか、溝状遺構の東側で約14.95mと急落し、再びF-19グリッド中央までは同程度の標高で推移してから、F-18グリッド中央で約14.80mまで落ちてから、暫くほぼ同様のレベルを保ち、F-15グリッドでまた約14.70mと下り、そして、F-12東端まで同様の標高が続いた後一転して上がり始め、F-11グリッド中央で約14.80mとなる。Ⅲb区に入ると、F-10グリッド東端で約14.75mで始まり、漸次落ち込んでいき、F-8グリッド西よりのL畦畔の西側で約14.65mまで下り、L畦畔の東側で約14.60mとなると、F-7グリッド西端のJ畦畔の西側まで同様の標高を保ち、その東側で約14.55mと落ちてからは、F-4グリッド西端のG畦畔西側までほぼ同じレベルで推移し、その東側で再び下り始め、F-4グリッド中央で14.45mとなってF-2グリッド東端に近いFグリッド西側までは安定し、その東側でまた落ち出し、F-1グリッド中央で約14.30mとなってから調査区東端のF-aグリッドまで、ほぼ同様の標高を保つ。

第Ⅱ・Ⅲ調査区を総合すると、Ⅲa区西端付近が約15.30mと最も高く、東に向ってⅡ・Ⅲ区が交差点西側の約14.70mまで降っていき、両区交差点付近に約14.80mを測る微高地が認められ、再び東・北・南方向へ降下してゆくが、南方向へは最も緩やかで、約26mで20cmと約0.8%の傾斜を測り、東方向へは約44mで約1.1%傾斜しており、北方向へは更に急傾斜で下がるようだが、Ⅱa区北半部分は削平を受けており、詳細は不明である。

出土遺物からは14～15世紀の所産と考えられるが、放射性炭素では12～13世紀の値がでており、使用年代に幅があると推測される。

i) 付属遺構

Ⅱb区

A 畦畔 (第66図)

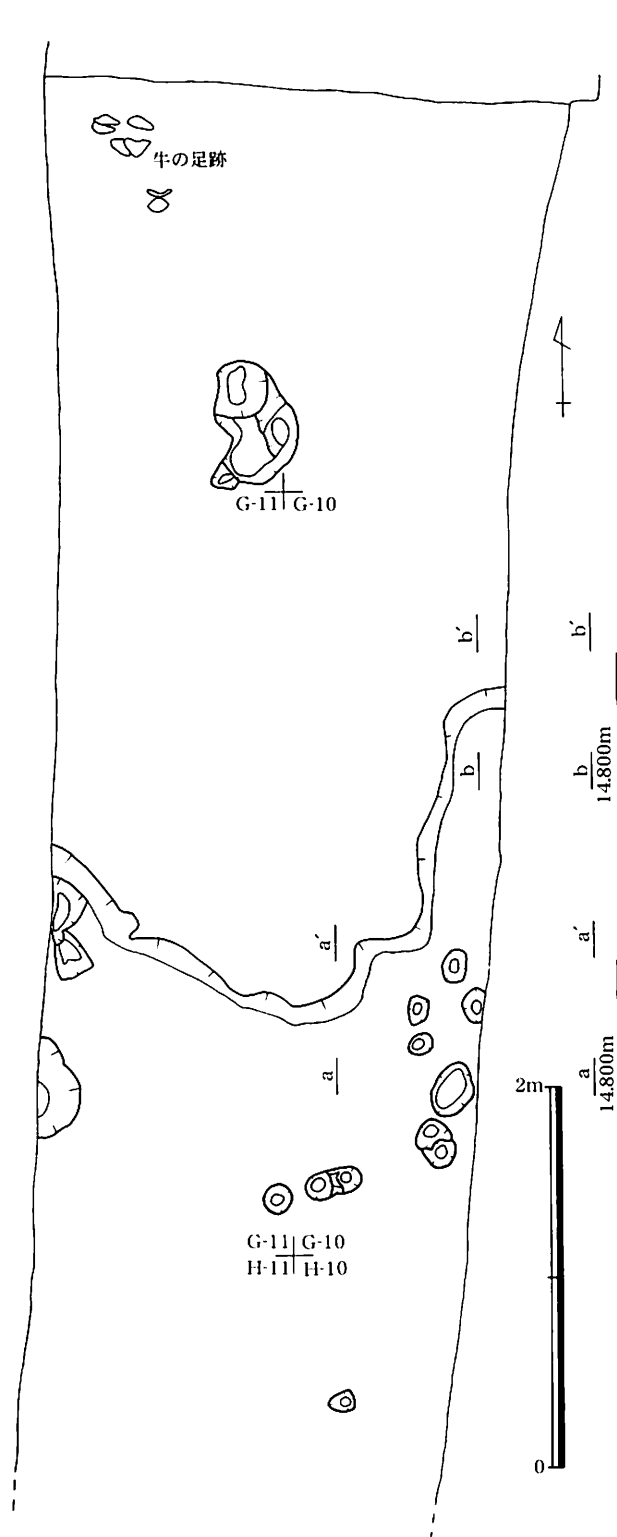
Ⅱb区のG-10・11グリッドに位置し、西から東に向って蛇行して延びる細長い畦畔である。西端から約2.0mの所で北西に屈折する。最大幅約6cm、最大高は約1cm、調査区内での長さは約3.5mを測る。畦畔の南北に杭痕と考えられる小坑が多く見られる。また、本畦畔の北約4mの地点に洪水砂層にパックされた牛と推測される足跡も若干検出されている。

B 畦畔 (第67図)

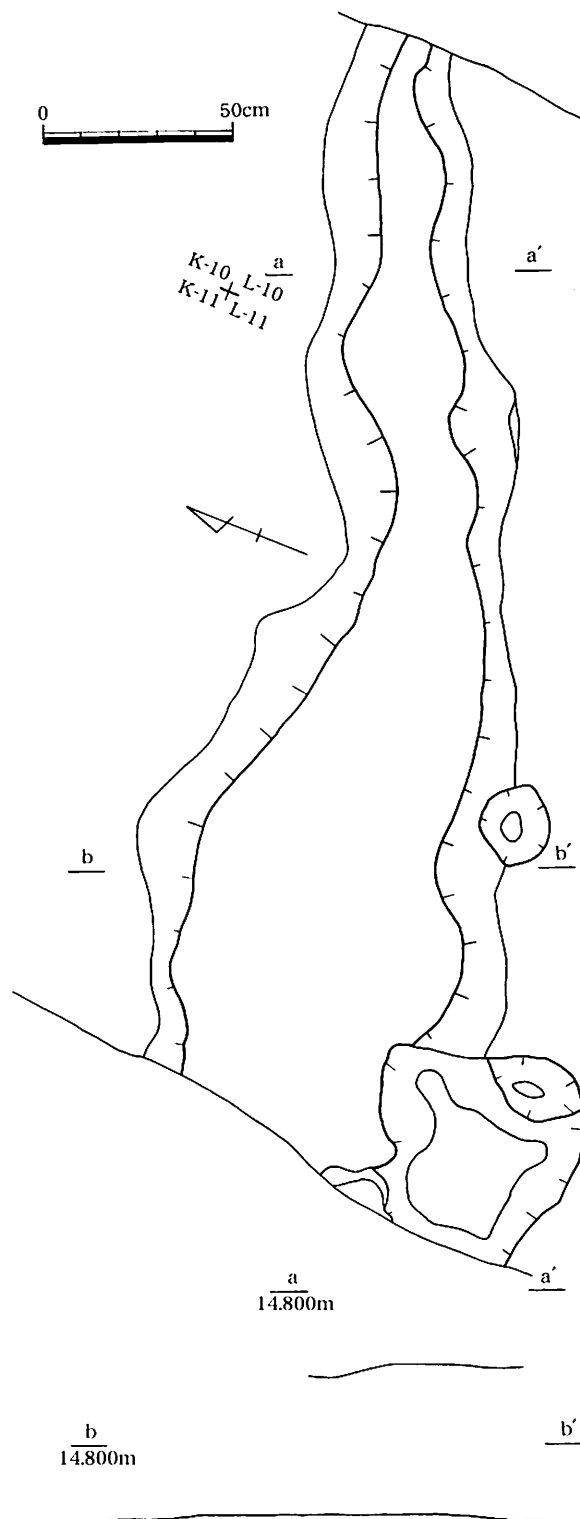
L-10・11グリッドに位置し、ほぼ東-西に延びる畦畔である。最大幅西半部で約0.95m、最大高は約3cm、長さは調査区内で約3.0mを測る。中央に盛り上がり部が認められ、第2号水田に伴う畦畔の中では残りの良い方である。南西部に土坑及び杭痕状の小坑が認められる。

Ⅲa区

M 畦畔 (第68図)

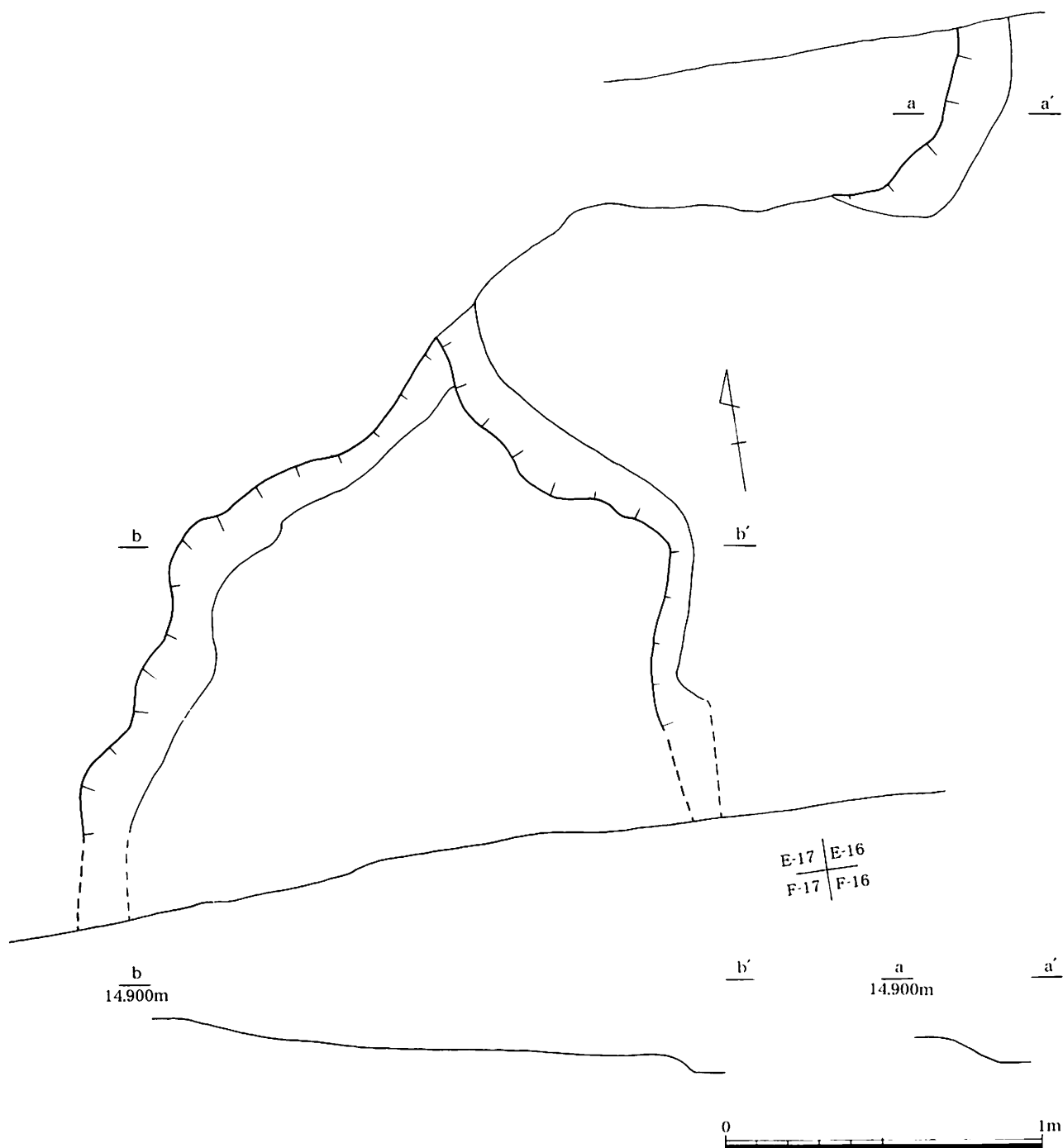


第66図 第2号水田A畦畔・牛の足跡平・断面図
(1/40)



第67図 第2号水田B畦畔平・断面図(1/20)

便宜的に順序を変えて記す。E-16・17グリッドに位置し、ほぼ北東-南西にかけて延びる畦畔である。第3号溝状遺構と第2号水田を区切っている。北東から約2.0mの所で東西の二股に分岐し西から東へ階段的に落ちていく。最大幅は約0.2m、調査区内での長さは約3.5mを測る。最大高は分岐した西側では約6cm、東側では約5cmを測り、全体では最大約0.2mの比高差がある。



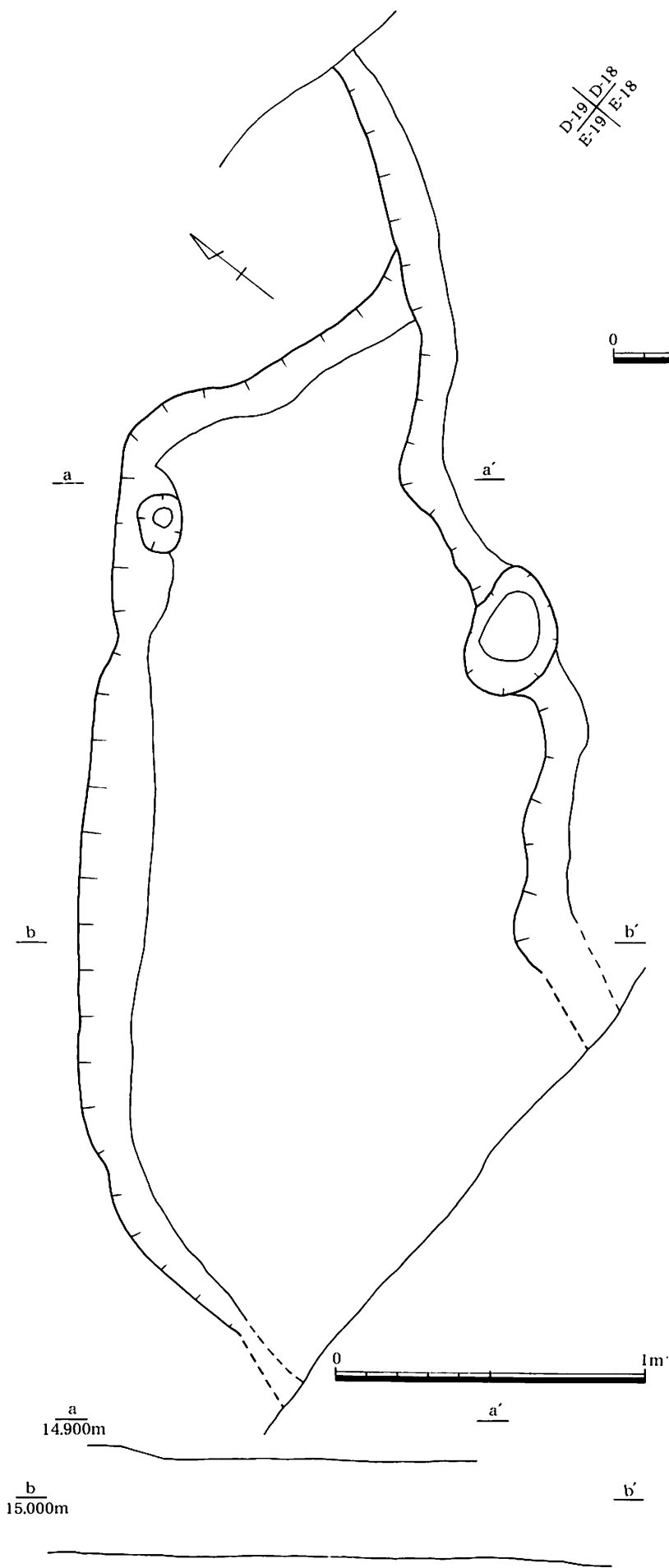
第68図 第2号水田M畦畔平・断面図(1/20)

C 畦畔 (第 69 図)

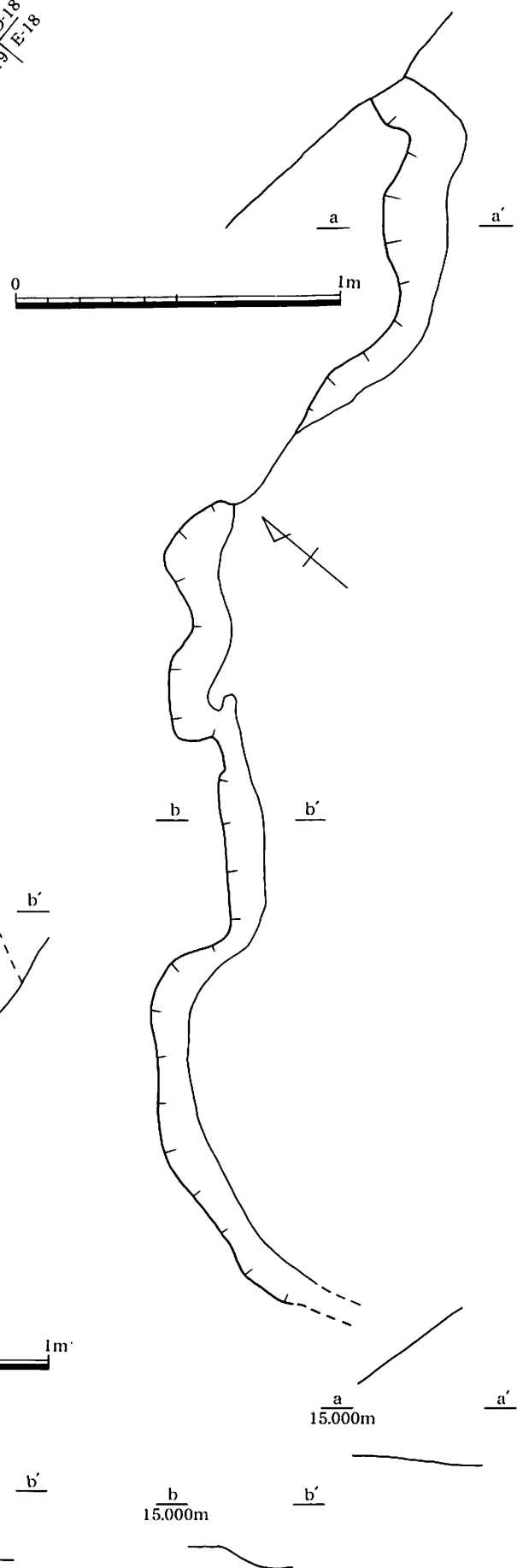
E - 17・18 グリッドに位置し、ほぼ北東－南西にかけて延びる畦畔である。北端から約 0.7 m の所で東西の二股に分岐し西から東へ階段的に落ちていく。最大幅約 1.6 m、調査区内での長さは約 3.5 m を測る。最大高は分岐した西側・東側共に約 2 cm を測り、全体では最大約 4 cm の比高差がある。東西両方とも杭痕状の小坑を 1 基ずつ有する。

D 畦畔 (第 70 図)

E - 18・19 グリッドに位置し、ほぼ北東－南西にかけて延びる畦畔である。最大幅約 0.2m、最大高は約 4 cm、調査区内での長さは約 4.0 m を測る。Ⅲ a 区に位置する M・C・D 畦畔の共通する特徴として、ほぼ北東から南西にかけて延びている点、M・C 畦畔は二股に分岐しており西から東に向かって落ちている点³があげられ、この部分は北東から南西方向の畦畔で区画されていたことが分かる。



第69図 第2号水田C畦畔平・断面図(1/20)

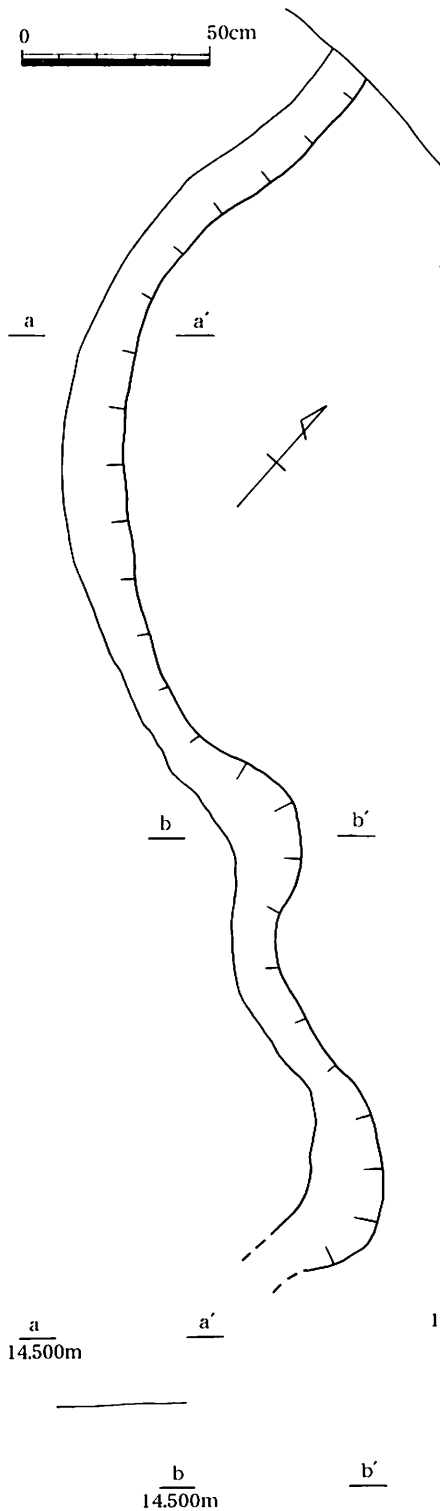


第70図 第2号水田D畦畔平断面図(1/20)

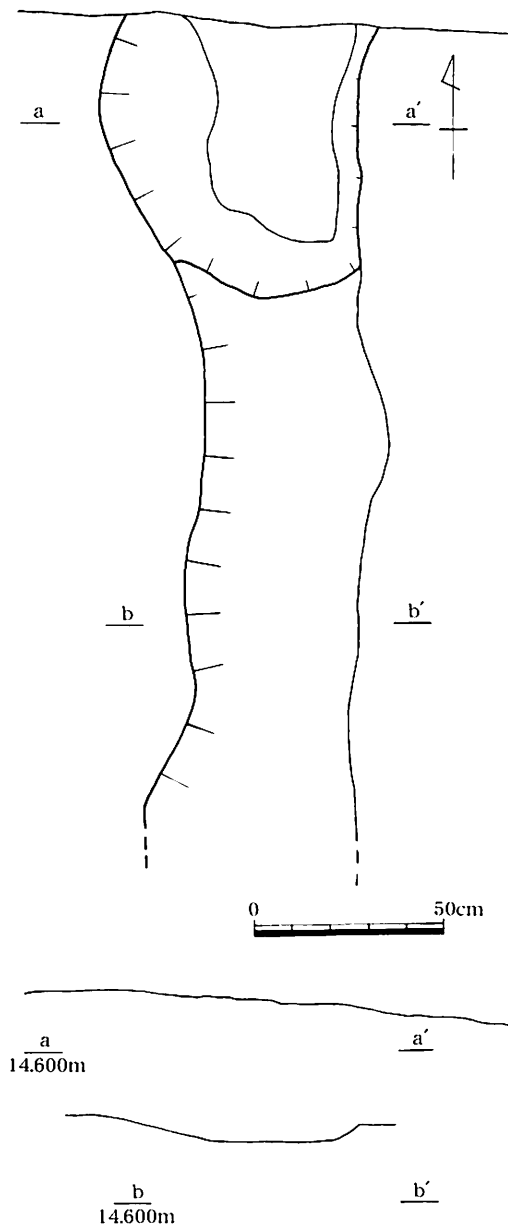
Ⅲb区

E畦畔 (第71図)

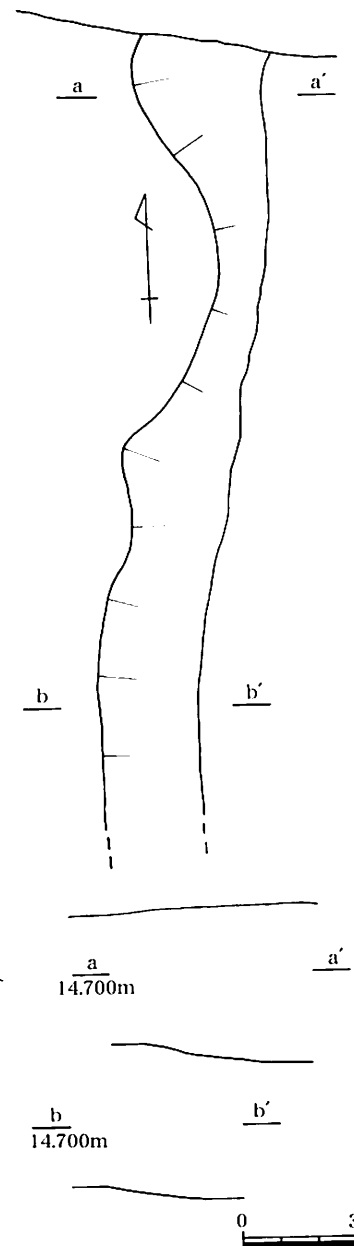
F-0グリッドに位置し、ほぼ北-南東に延びる畦畔である。北から約1.0mの所で南東へ折れ曲がり、さらに約2.0mの所で南に折れ曲がる。最大幅約0.2m、最大高は約2cm、調査区内での長さは約2.5mを測る。



第71図 第2号水田E畦畔平・断面図 (1/20)



第72図 第2号水田F畦畔平・断面図 (1/20)



第73図 第2号水田G畦畔平・断面図 (1/20)

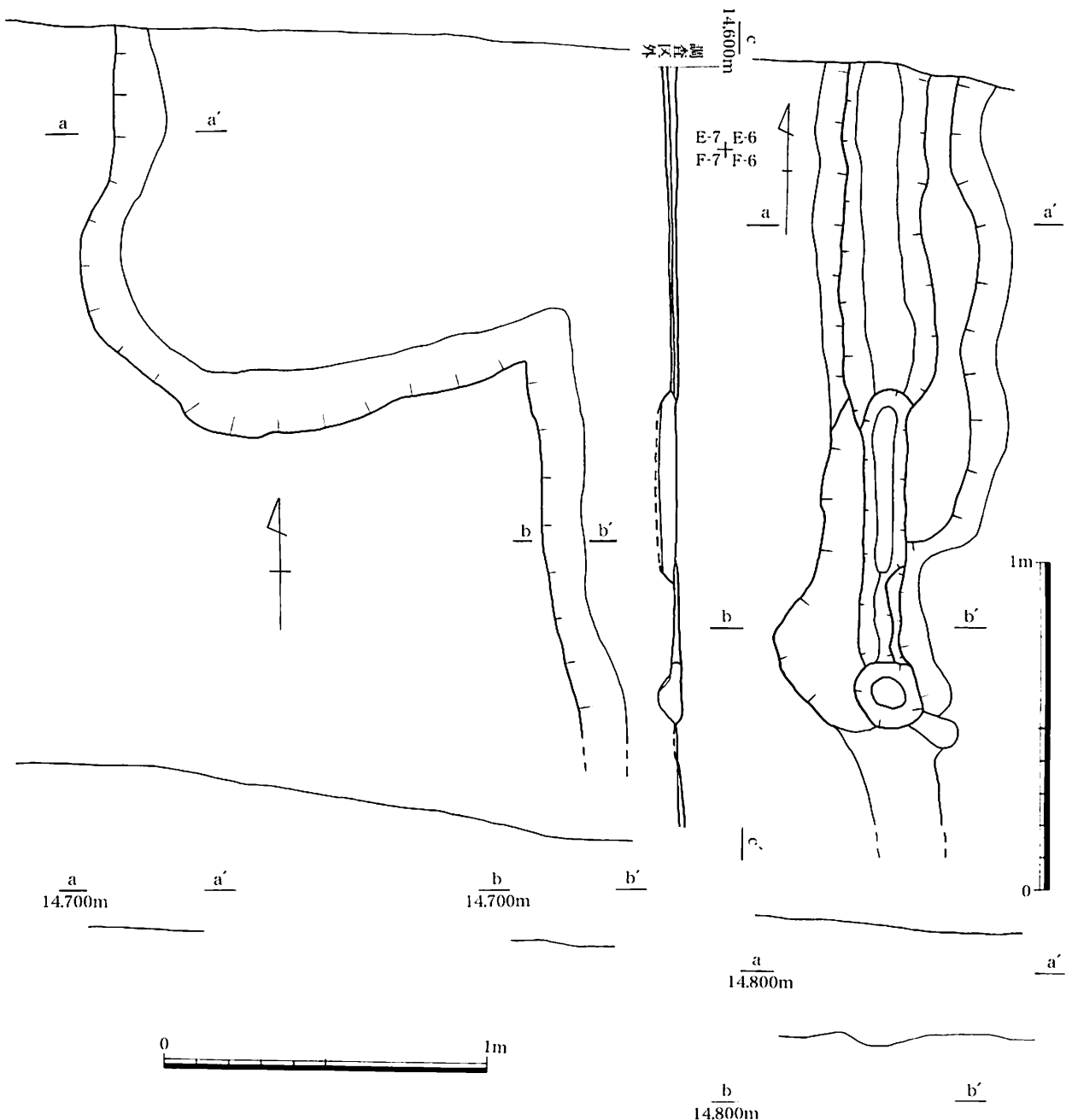
F畦畔 (第72図)

F-2グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北端には最大幅約0.7mの窪みを有する。最大幅約0.7m、最大高は約6.5cm、調査区内での長さは約2.2mを測る。これも、第2号水田に伴う畦畔の中では幅の広いタイプである。

G畦畔 (第73図)

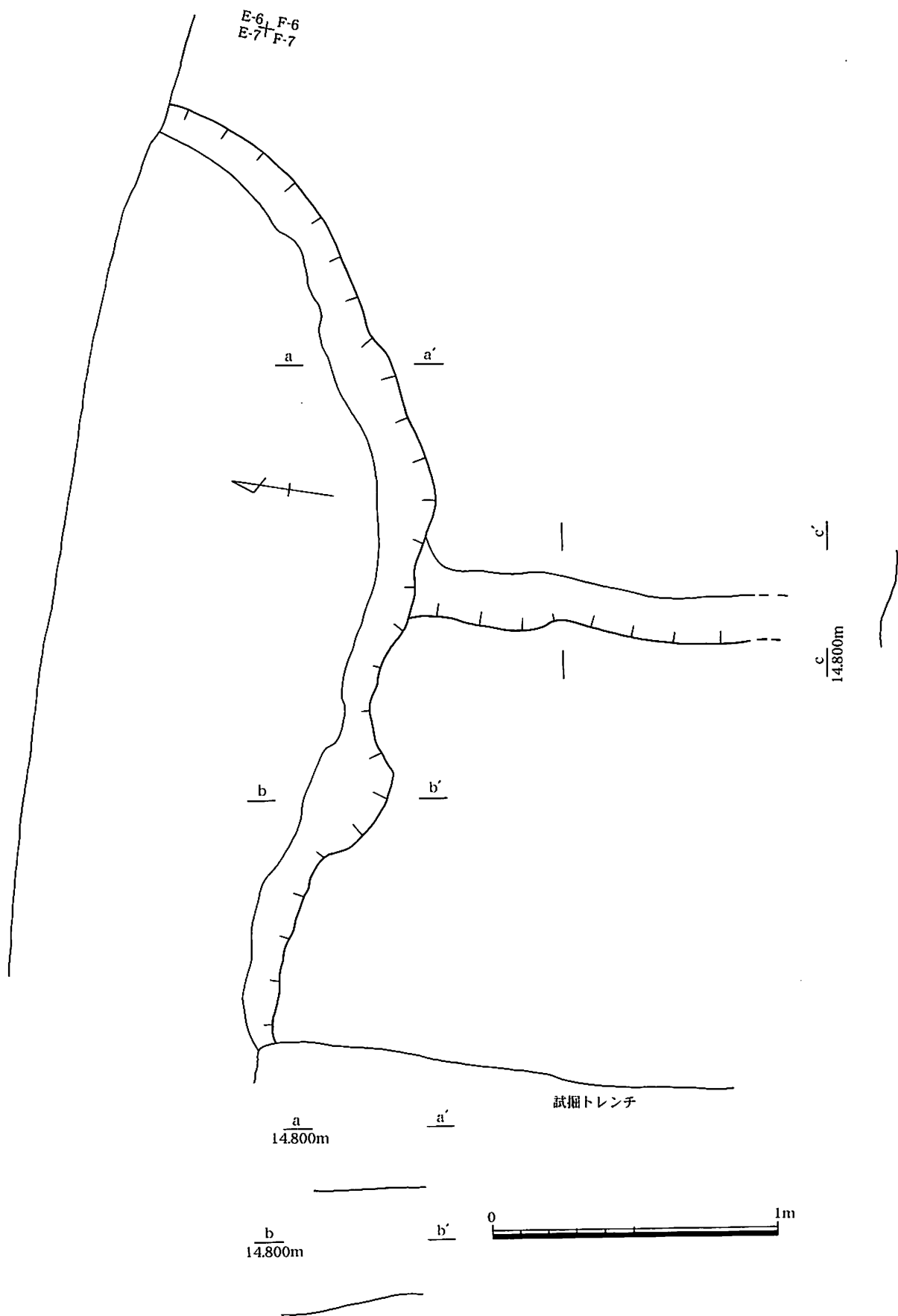
F-4グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北から約0.6mの部分は細く窄まる。最大幅約0.35m、最大高は約4cm、調査区内での長さは約2.0mを測る。

H畦畔 (第74図)



第74図 第2号水田H畦畔平・断面図(1/20)

第75図 第2号水田I畦畔平・断面図(1/20)



第76図 第2号水田J畦畔平・断面図(1/20)

F-5グリッドに位置する畦畔である。北-南に延びるが、北から約0.1mのところまで東へ、さらに東へ約1.0mのところまで南にほぼ直角に屈折する。最大幅約0.2m、最大高は約4.5cm、調査区内での長さは約3.5mを測る。

I 畦畔 (第75図)

E・F-6グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北から約1.5mのところまで細くなっている。中央部に深さが最大で約6cmの溝を有しており、比高差は約2.5cmあることから、南から北へ流れていたと考えられる。最大幅約0.6m、最大高は約1.5cm、調査区内での長さは約2.5mを測る。これも、第2号水田に伴う畦畔の中では幅の広いタイプである。

J 畦畔 (第76図)

E・F-7グリッドに位置し、ほぼT字型をなす畦畔である。上半部は北東から西へゆるやかに延び、下半部は上半部のほぼ中心から南北方向に延びている。最大幅約0.25m、最大高は約5cm、調査区内での長さは約3.5mを測る。

K 畦畔 (第77図)

E・F-8グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北から約0.2mの所で細くなり、南へ向って太くなっていく。試掘トレンチと重なったため南半は調査できなかったが、最大幅約0.25m、最大高は約3.5cm、調査区内での長さは約1.0mを測る。

L 畦畔 (第77図)

E・F-8グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北から約0.7mの所で細くなっている。試掘トレンチと重なったため南半は調査できなかったが、最大幅約0.7m、最大高は約4.5cm、調査区内での長さは約1.0mを測る。中央部に盛り上がり部を有し、第2号水田に伴う畦畔の中では幅の広いタイプである。

ii) 出土遺物 (第78～79図)

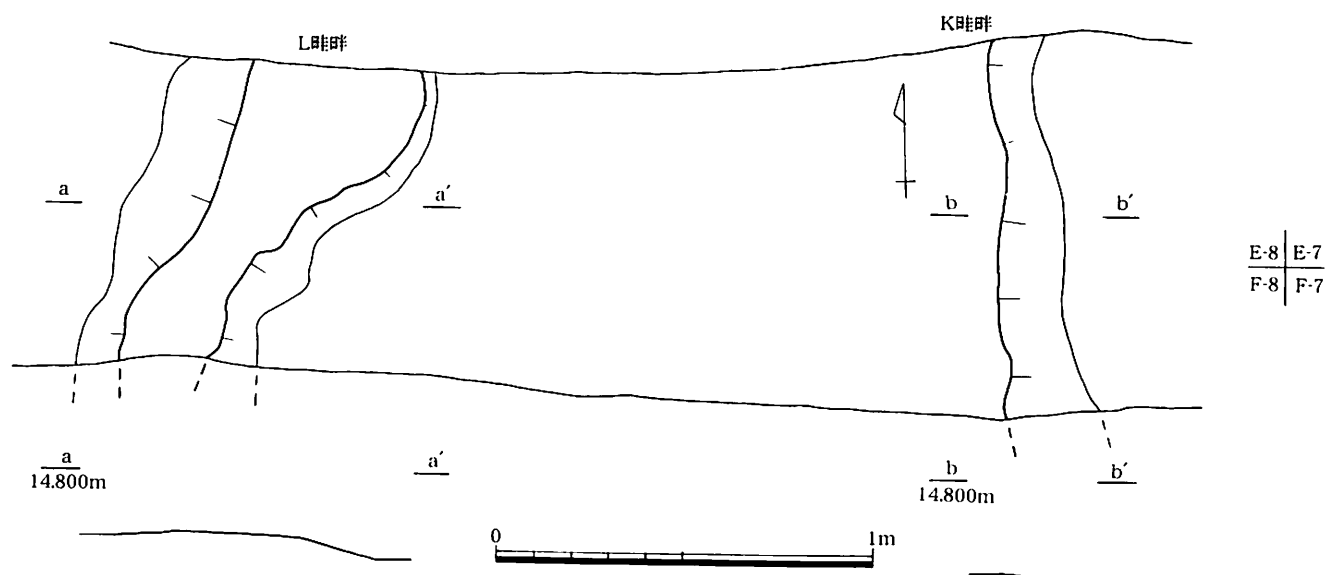
第78図1=E・F-8グリッド一括

11世紀～12世紀の所産と考えられる白磁碗の底部片である。白磁Ⅳ類に分類される。

第78図2=F-9グリッド一括

11世紀～12世紀の所産と考えられる白磁碗の口縁部片で、白磁Ⅳ類に分類される。断面には漆が部分的に残り、割れた際に漆で接いで補修したものと考えられる。

第78図3=F-10・11グリッド一括



第77図 第2号水田K・L畦畔平・断面図(1/20)

13 世紀～ 14 世紀の所産と考えられる土師器の底部片で、底部には回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 4 = E・F - 6 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の坏の底部片で、底部は回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 5 = F - 4 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の小皿で、底部から胴部にかけて約 1/7 が残存する。胴部外面にはハケ目が施され、底部は回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 6 = M - 10・11 グリッド一括

中世の所産と考えられる東播系

の須恵器系土器の底部片で、約 1/8 が残存する。底部は回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 7 = E・F - 6 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の小皿で、底部から胴部にかけて約 1/6 が残存する。底部は回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 8 = F - a グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の小皿で、底部から胴部にかけてが残存する。底部は回転糸切痕跡が残る。

第 78 図 9 = F - 3 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる瓦質土器の坏である。口縁部から底部にかけて約 1/10 が残存する。

第 78 図 10 = F - 2 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の小皿で、口縁部から底部にかけて約 1/8 が残存する。内部にはハケ目が施され、底部は回転糸切を残す。

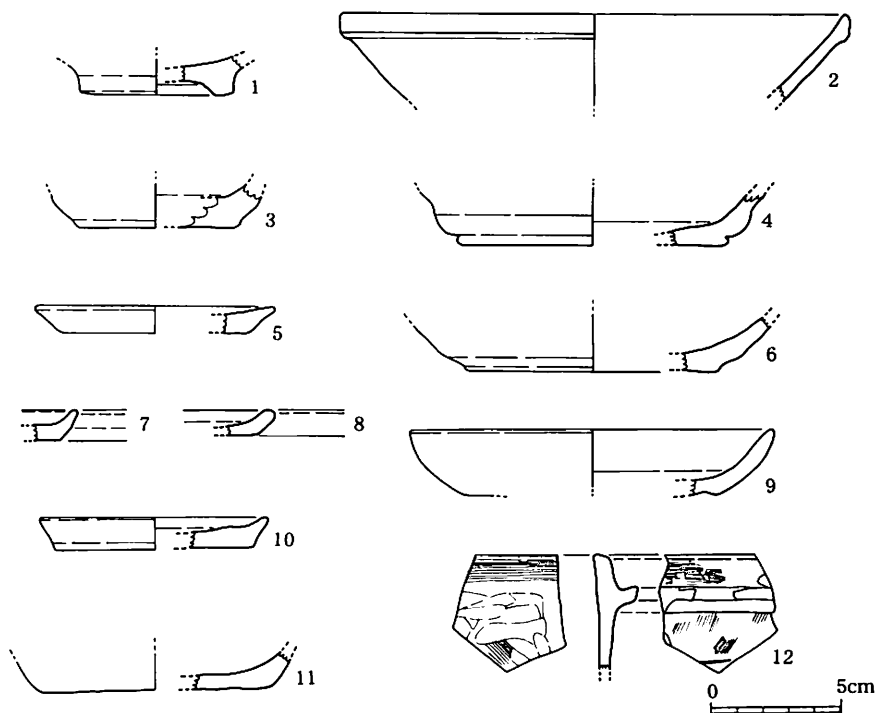
第 78 図 11 = G - 10・11 グリッド一括

13 世紀～ 14 世紀の所産と考えられる土師器の坏の底部片で、約 1/9 が残存する。底部は回転糸切痕跡が残る。

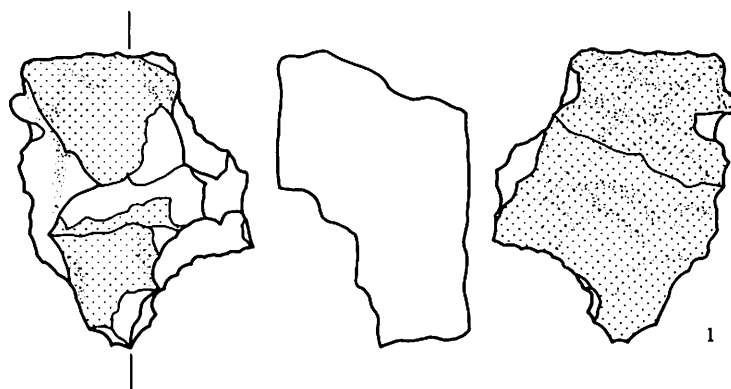
第 78 図 12 = E・F - 8 グリッド一括

中世前半の所産と考えられる瓦質土器の鍋の口縁部片である。外面・内面共にハケ目が施されている。

第 79 図 1 = F - 4 グリッド一括



第 78 図 第 2 号水田出土遺物 (1/3)



第 79 図 第 2 号水田出土の轆羽口 (1/1)

凝灰岩製の鞆羽口の破片。スクリーン・トーンを張った箇所は磨き整形が残存している。内面は焼成によって赤化しており、外面には黒色付着物が認められる。残存重量は21.0 gを測る。

②第3号水田

本水田は、第Ⅱ・Ⅲ調査区の全域で検出されているが、土層観察からⅡa区ではなお北側に、Ⅱb区でもなお南側に、Ⅲb区でもなお東側に延びており、Ⅲa区でのみD・E-26グリッド西寄りに検出されたO畦畔から水田が始まっており、少なくとも南北約44 m以上、東西約108 m以上で、調査区外まで入れると溝部分を含め、約4750 m²以上の水田面積が予想される。

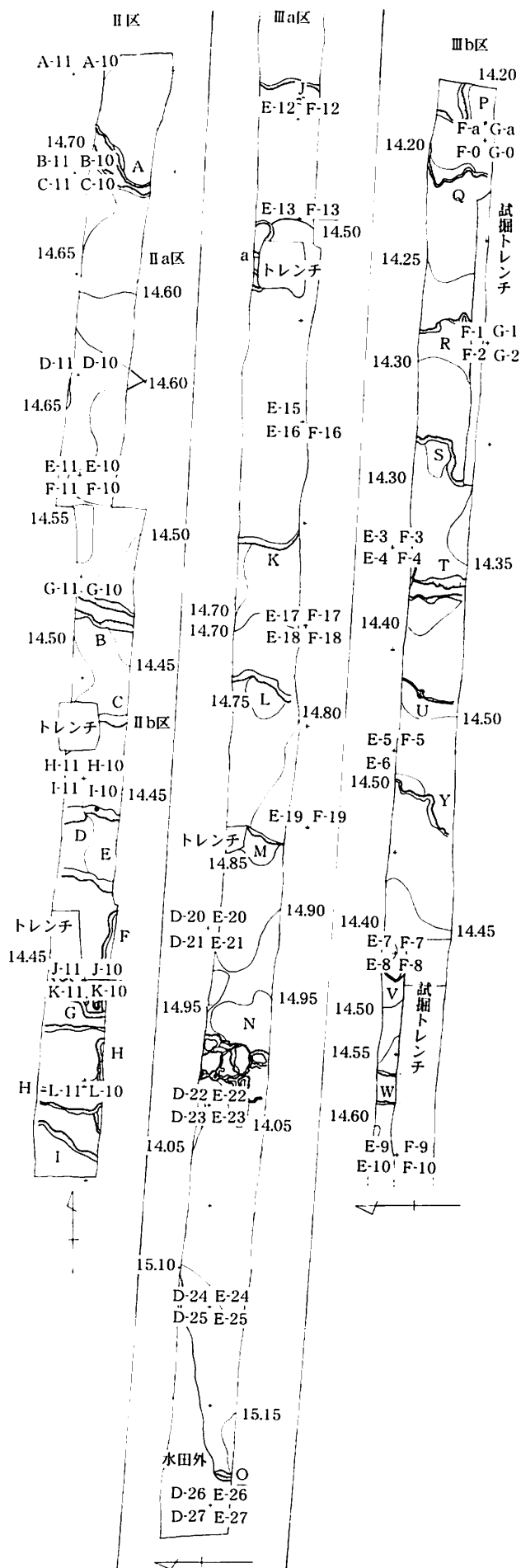
第Ⅱ調査区の状況から概観してゆく。

Ⅱa区では、平面的にはB・C-10グリッド境界付近にA畦畔が検出されただけだが、土層からD-10グリッド中央とE-10グリッド中央に若干の盛り上がりが見られ、約4 mごとに畦畔が形成されていた可能性がある。

Ⅱb区では、平面的にはB～Iの8畦畔が検出されているが、F畦畔のみがほぼ南北方向であるが、他はほぼ東西方向に造成されており、北から南に向かって約3 mごとに形成されていたと考えられる。また、Ⅱ区の全域で土層図にa=耕作土、b=床土の別で示したように両者の土層が認められる。

次いで、第Ⅲ調査区の状況を見てゆく。

Ⅲa区では、平面的にはJ～O・aの7畦畔が検出されており、O畦畔は本水田の西の始まりを示す大畦畔だと推測されるが、F-26グリッドでは水田層は上面の2号水田に大部分が削平を受けている。また、F-11グリッド西端、F-21グリッド東端、F-23グリッド中央、F-24グリッド西端にも畦畔状の盛り上がりが見られる。一方、a・K畦畔の間は第3号溝状遺構が検出されており、本水田を東西に分離している。溝部を除き、平均約4 mごとに畦畔が造成されていた可能性が高い。a・K畦畔は水田と溝を画しており、大畦畔の可能性が高く、N畦畔も畦畔の中央に溝を持つ構造で、大畦畔だったと推測される。a畦畔は北端以外が試掘トレンチで破壊されて判然としないが、J～N畦畔はほぼ南北方向に造成されており、水田の始まりを示すO畦畔のみが北東-南西方向を呈している。



第80図 第Ⅱ・Ⅲ調査区第3号水田遺構配置図 (1/250)

Ⅲ b区では、平面的にはP～W・Yの9畦畔が検出されており、ほぼ4～6m置きに畦畔が造成されていると推測される。また、畦畔は全てほぼ南北方向に造成されているが、東端のP畦畔のみは東西方向と組み合わせられている。そして、W・T畦畔だけは幅も他より広く、中央に盛り上がりは部分が残存し、比較的大形の畦畔であったと推測される。一方、本水田は調査時の所見から、他の水田層に比して粘質で軟質の床土が形成されており、かつ洪水によって耕作土・床土ともに幾度も破壊を受けている様子が土層観察からも窺える。W畦畔に隣接して、土層観察で看取されたZ畦畔は、破壊前の畦畔の可能性が高い。

更に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして、第3号水田の標高を見てゆく。

Ⅱ a区の北端は約 14.60 mで始まっており、前代の第1号溝状遺構の上面で約 14.55 mと下がるが、C－10グリッド北端のA畦畔で再び約 14.60mに返し、C・D－10グリッド境界付近まで同レベルで移行するが、そこから約 14.55 mと落ちてから、Ⅱ・Ⅲ区の交差するF－10グリッド北端まで同様の標高を維持する。試掘トレンチを挟んでⅡ b区に入ると約 14.60 mで始まるが、F－10グリッド中央部で再び約 14.55 mに落ち、G－10グリッド北端でまた約 14.60 mに戻り、G－10グリッド南よりまでは同レベルを保つが、そこからまた落ち出し、H・I－10グリッド境界付近で約 14.50 m、I・J－10グリッド境界付近で約 14.45 m、J－10グリッド南寄りで約 14.40 mと最も深くなってから、K－10グリッド北寄りで約 14.50 mと一転上がり、Ⅱ b区南端まで同レベルで推移する。

Ⅲ a区西端は、水田の西の始まりであるO畦畔付近で約 15.15 mを呈し、F－26・25グリッド境界付近まで同様の標高が維持されてから若干下り、F－25グリッド中央で約 15.10 mとなってから、若干の高下を見せながら、徐々に下ってゆき、F－24・23グリッド境界付近で約 15.05 mとなってからN畦畔の西側まで同レベルで続き、N畦畔の東側で約 14.95 mと落ち、F－21グリッド東端の畦畔状の盛り上がりの東側で約 14.90 mと続落し、F－20中央で約 14.85 m、F－19西端で約 14.80 m、F－19中央で約 14.70 m、F－17グリッド東端のK畦畔の西側で約 14.60 mと随時降下し、第3号溝を挟んで、F－14グリッド中央のa畦畔の東側で再び約 14.60 mで始まり、すぐに約 14.65 mと上がり、ほぼ同様の標高でF－11グリッド西端の畦畔状の高まりの西側まで推移し、その東側で約 14.70 mと上がり、F－11グリッド中央のⅡ・Ⅲ区交差付近で約 14.80mと上がり続ける。Ⅲ b区は、Ⅱ・Ⅲ区の交差点を挟んで、調査区西端は約 14.65 mで始まり、W畦畔の西側まで同様の標高で続き、その東側で約 14.60 mと落ち、E－8・9グリッド境界付近で約 14.55 m、E－8グリッド中央のV畦畔西側で約 14.50 m、その東側で約 14.40 mと続落した後、E－7グリッド中央で一旦約 14.45 mと上昇するが、E－4・5グリッド境界付近で再び約 14.40 mに落ち、E－4グリッド中央のT畦畔まで同レベルで推移し、その東側で約 14.35 mと落ち、E－3グリッド中央で約 14.30 m、E－1グリッド西側のR畦畔辺りで約 14.20 mと急落し、E－1グリッド中央で約 14.05 mと最も深くなりってから、E－1グリッド東よりで約 14.10 m、F－Oグリッド西よりで約 14.20 mと上がり、調査区の東端まで同標高を維持する。

第Ⅱ・Ⅲ調査区を総合的に見ると、Ⅲ区西端の水田の始まり部分が約 15.10 mと最も高く、第3号溝状西側の約 14.70 mまで随時続落し、第3号溝状遺構を挟む東西とⅡ a区全域、Ⅱ b区北端、Ⅲ b区西端部分が約 14.60 mと同様のレベルを示す。が、第2号水田面でもⅡ・Ⅲ区交差部分に微高地が存在したように、Ⅲ a区東端部分に標高約 14.70～80 mの若干の微高地が認められる。Ⅱ b区は南端に近い部分の約 14.40 mまで降下するが、端部で上昇を始める。Ⅲ b区はⅡ b区以上に北端に近い部分の約 14.05 mまで下降した後、上昇に転じており、調査区中、Ⅲ b区北端付近が最も低いことになる。

最後に使用時期だが、14～15世紀代の中世、9～12世紀代の古代、古墳時代の3群の土師器が出土しているが、放射性炭素年代測定によると11世紀代の値が出ており、それに近い古代の一群が使用年代を表しており、9～12世紀の使用幅があったものとする。中世の一群は上面の第2号水田からの、古墳時代の一群は下面の

水田の流れ込みとの推測される。

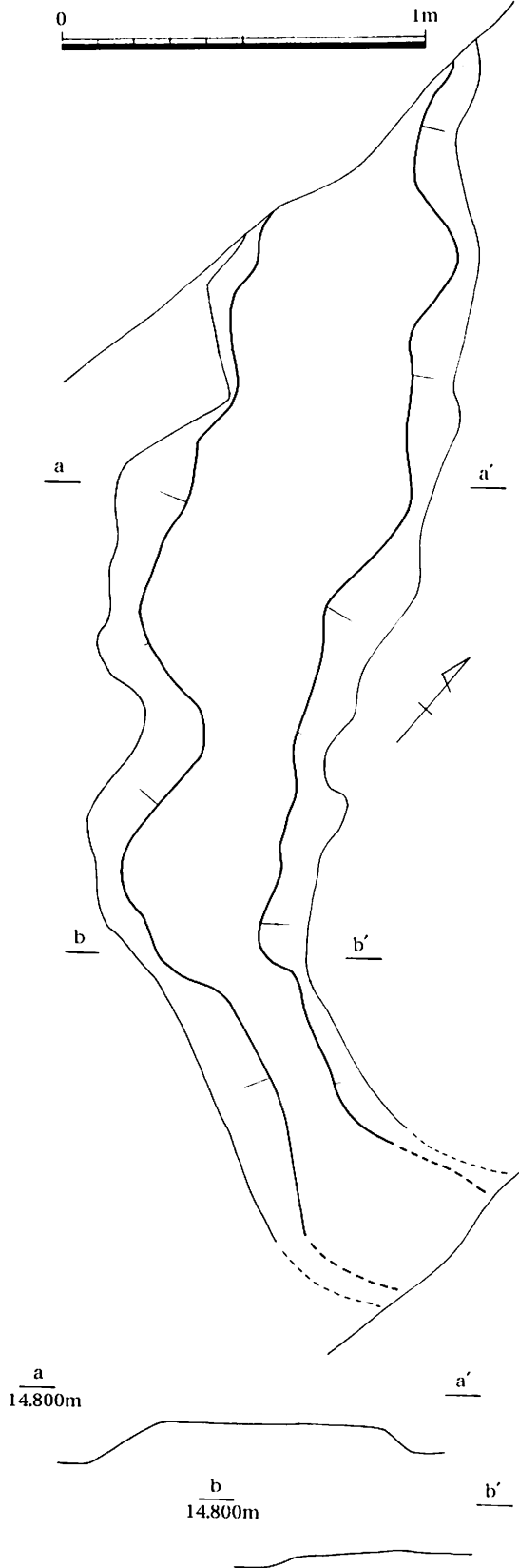
i) 付属遺構

第3号溝状遺構 (第80図)

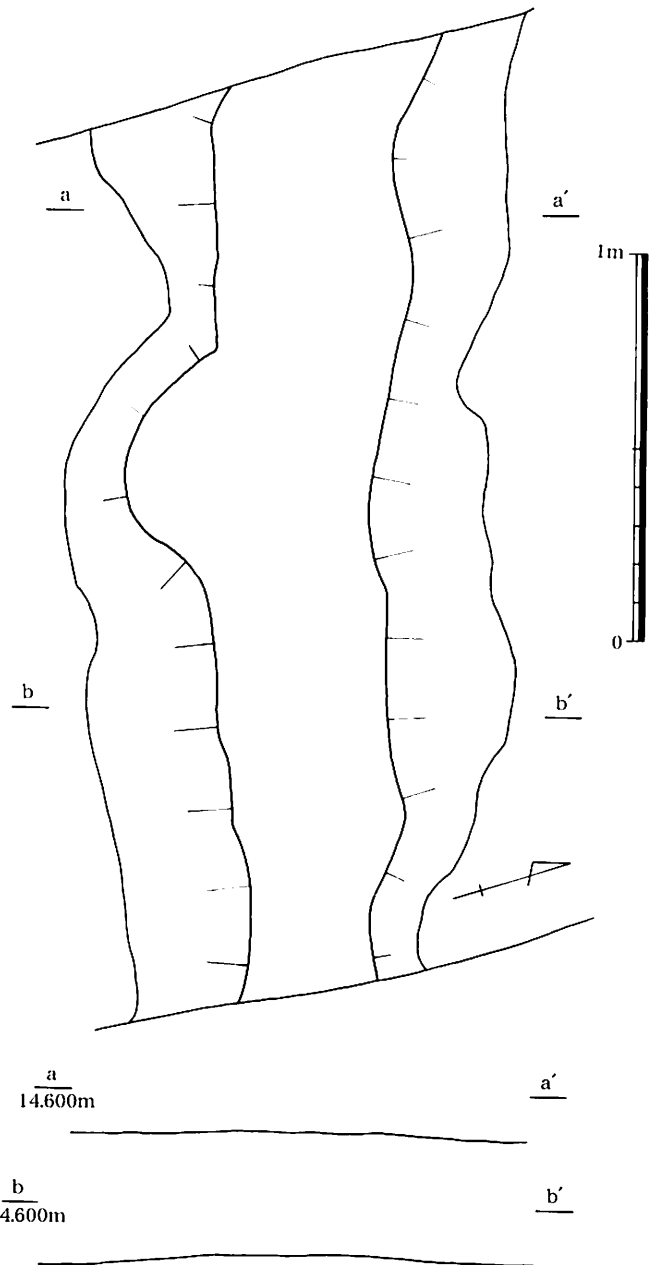
Ⅲ a 区の E・F-14～16 グリッドの a・K 畦畔の間に検出されており、調査区内で幅約 12.0 m、深さ約 11cm を測る。底面の比高差は東西で約 11cm、南北で約 2.5cm を有しており、南東に流れていたようである。第3号水田を東西に分割する。

A 畦畔 (第81図)

B・C-10 グリッドに位置し、ほぼ北西-南東に延びる畦畔である。南東約 2.0 m の所で東に向かい屈折し、細くなる。最



第81図 第3号水田A畦畔平・断面図(1/20)



第82図 第3号水田B畦畔平・断面図(1/20)

大幅約 0.9m、最大高約 7.5cm、調査区内での長さは約 3.0 m を測る。

B 畦畔 (第 82 図)

G - 10・11 グリッドに位置し、ほぼ東西に延びる畦畔である。最大幅約は 1.1m、最大高は約 4cm、調査区内での長さは約 2.5 m を測る。

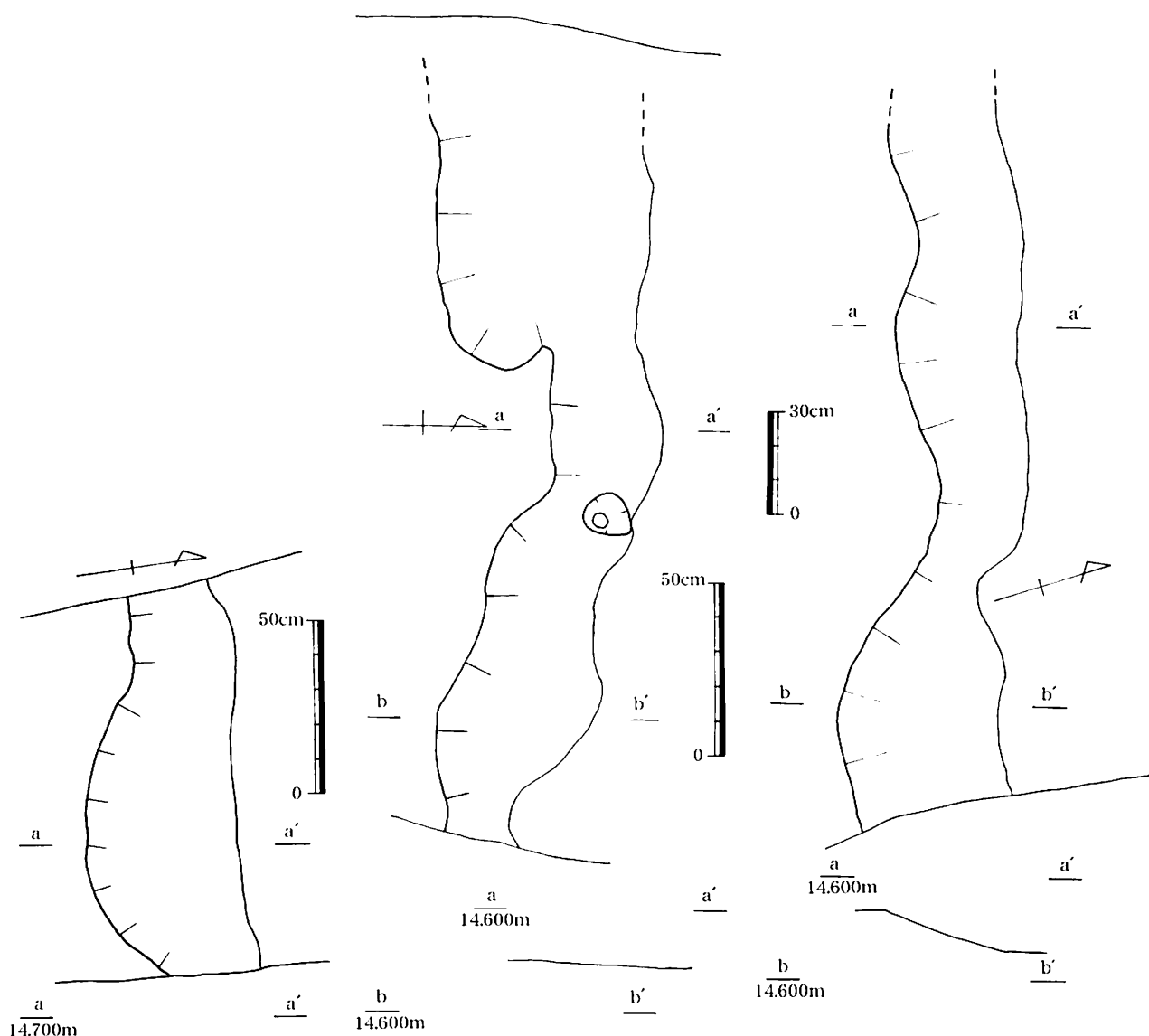
C 畦畔 (第 83 図)

H - 10 グリッドに位置し、ほぼ東西に延びる畦畔である。試掘トレンチと重なったため西半は調査できなかったが、隣接する畦畔と同様さらに西に延びていたと考えられる。東側約 0.9m は大きく膨らみ、西側はすぼまる。最大幅約 0.9m、最大高は約 1 cm、調査区内での長さは約 1.0 m を測る。

D 畦畔 (第 84 図)

I - 10・11 グリッドに位置し、ほぼ東西に延びる畦畔である。西半は東から約 1.4m の所で幅が広くなる。最大幅は約 0.6m、最大高は約 4cm、調査区内での長さは約 2.2 m を測る。

E 畦畔 (第 85 図)



第83図 第3号水田C畦畔
平・断面図(1/20)

第84図 第3号水田D畦畔
平・断面図(1/20)

第85図 第33号水田E畦畔
平・断面図(1/20)

I・J - 10・11 グリッドに位置し、ほぼ東西に延びる畦畔である。最大幅約 0.45m、最大高は約 6cm、調査区内での長さは約 2.0 mを測る。

F 畦畔 (第 86 図)

J・K - 10 グリッドの東端に位置し、ほぼ南北に延びる細長い畦畔である。北端・南端は東に向ってゆるやかにカーブし、南端は G 畦畔に接する。最大幅約 0.2m、最大高は約 4cm、調査区内での長さは約 4.0 mを測る。

G 畦畔 (第 87 図)

J・K - 10・11 グリッドに位置し、ほぼ東西に延びる畦畔である。東から約 0.7m の所で北側のみが大きく広がっている。最大幅約 2.2m、最大高は約 3cm、調査区内での長さは約 2.5 mを測る。北側に柱穴状の落ち込みを伴う。

H 畦畔 (第 88 図)

K - 10 グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北端・南端は東方向へ屈折し、南端は I 畦畔に接する。最大幅約 0.2m、最大高は約 2cm、調査区内での長さは約 1.7 mを測る。

I 畦畔 (第 89 図)

K・L - 10・11 グリッドに位置し、東西に延びる畦畔である。西から約 1.0 m のところで南北に扇状に広がり、南へ向って段階的に落ちていく。中央東端は南北の二股に分岐し、F・H 畦畔同様に屈折し東へ延びる。最大幅約 3.4m と大形で、最大高は約 3cm、調査区内での長さは約 2.5 mを測る。第 3 号水田に伴う畦畔の中では最も幅が広い。

J 畦畔 (第 90 図)

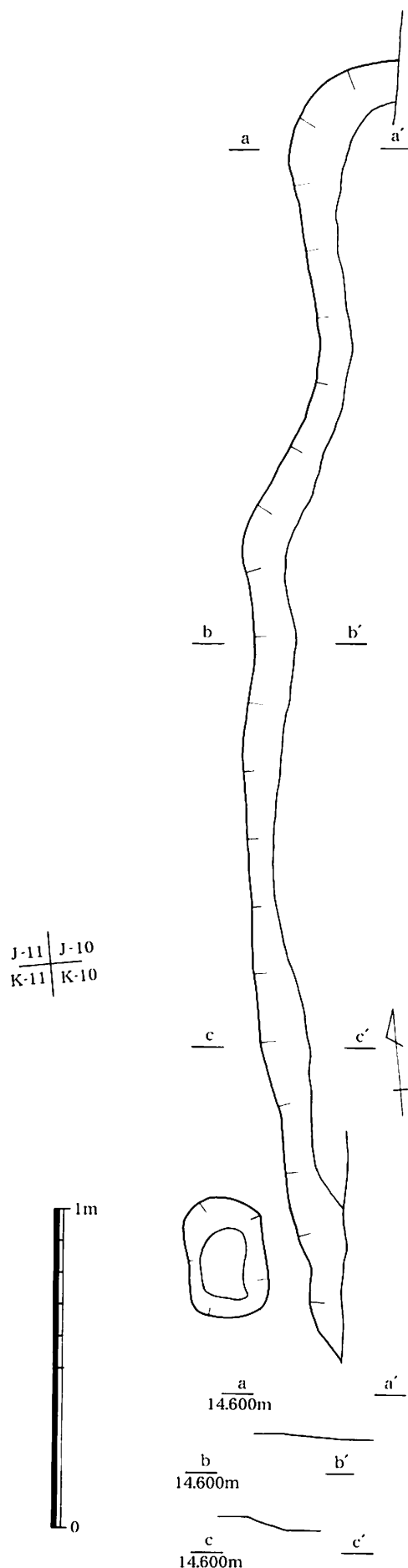
E・F - 12 グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。最大幅約 1.3m、最大高は約 4cm、調査区内での長さは約 2.5 mを測る。

a 畦畔 (第 91 図)

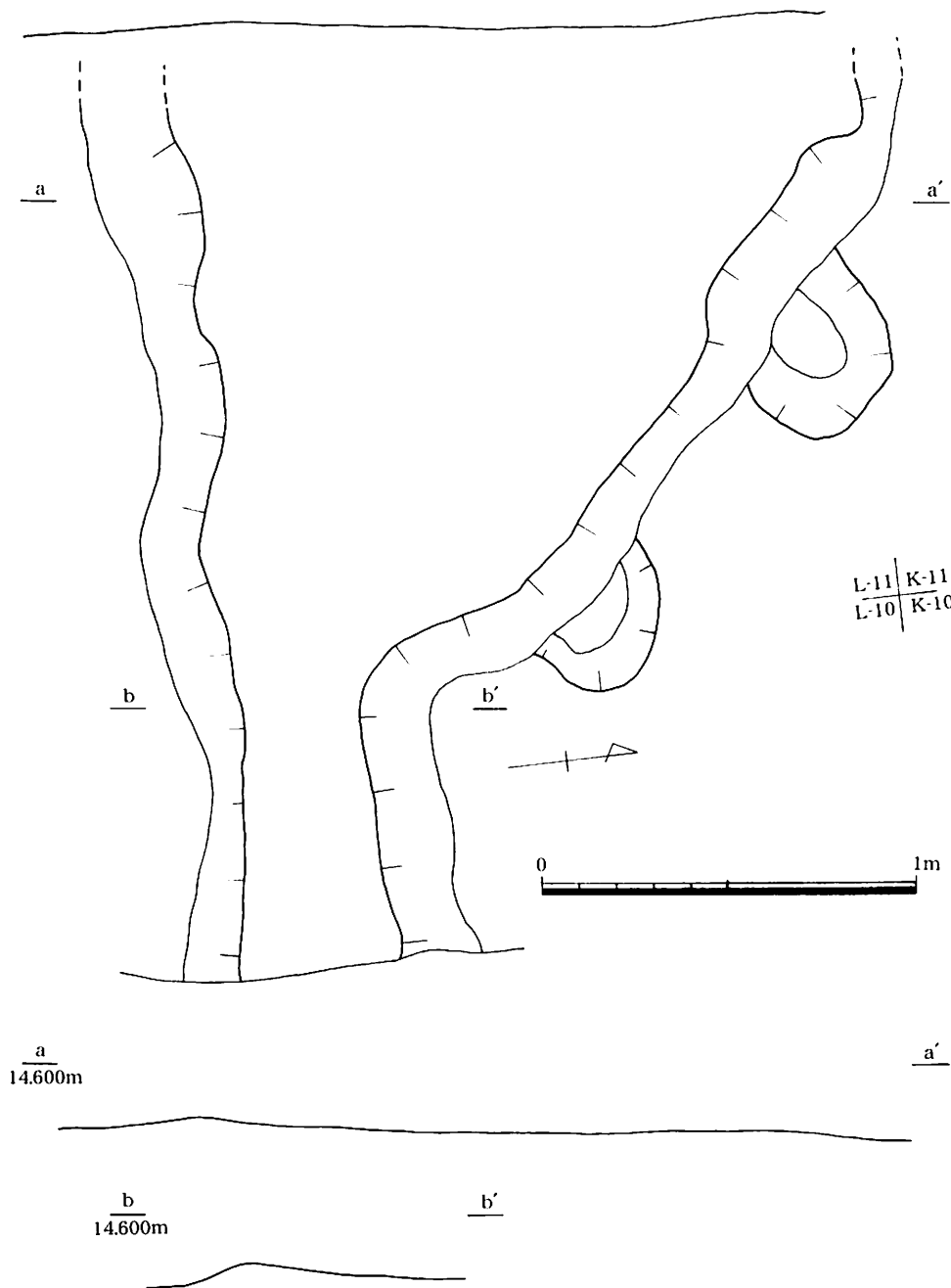
E - 13 グリッドに位置し、第 3 号溝状遺構の東側にあって、第 3 号水田と溝状遺構を画する。但し、調査区の中央には試掘トレンチの深掘があって、北端のみに検出されている。2本連結して盛り上がりか認められるが、主要部分は西側のものと考えられ、最大幅約 0.7 m、最大高約 10cm を測り、やや大形の畦畔だったと推測される。西側部分はほぼ南北方向にしか検出されていないが、東側部分は東西方向にも延びるように見受けられる。

K 畦畔 (第 92 図)

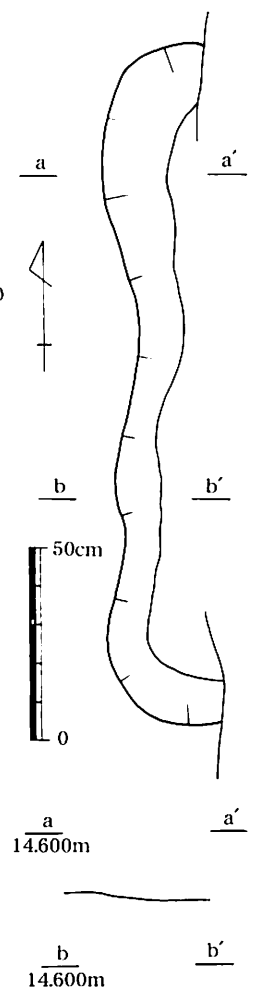
E - 17 グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。北から約 1.9m の所で南東方向に屈折し、細くなっていく。最大幅約 0.3m、最大高は約 6cm、調査区内での長さは約 3.0 mを測る。



第86図 第3号水田F畦畔平・断面図
(1/20)



第87図 第3号水田G畦畔平・断面図(1/20)



第88図 第3号水田H畦畔平・断面図(1/20)

る。第3号溝状遺構の西側に存在し、第3号水田と溝状遺構をa畦畔と共に画する畦畔で、土層観察からは最大高10cm以上を有していたと考えられる。

L畦畔(第93図)

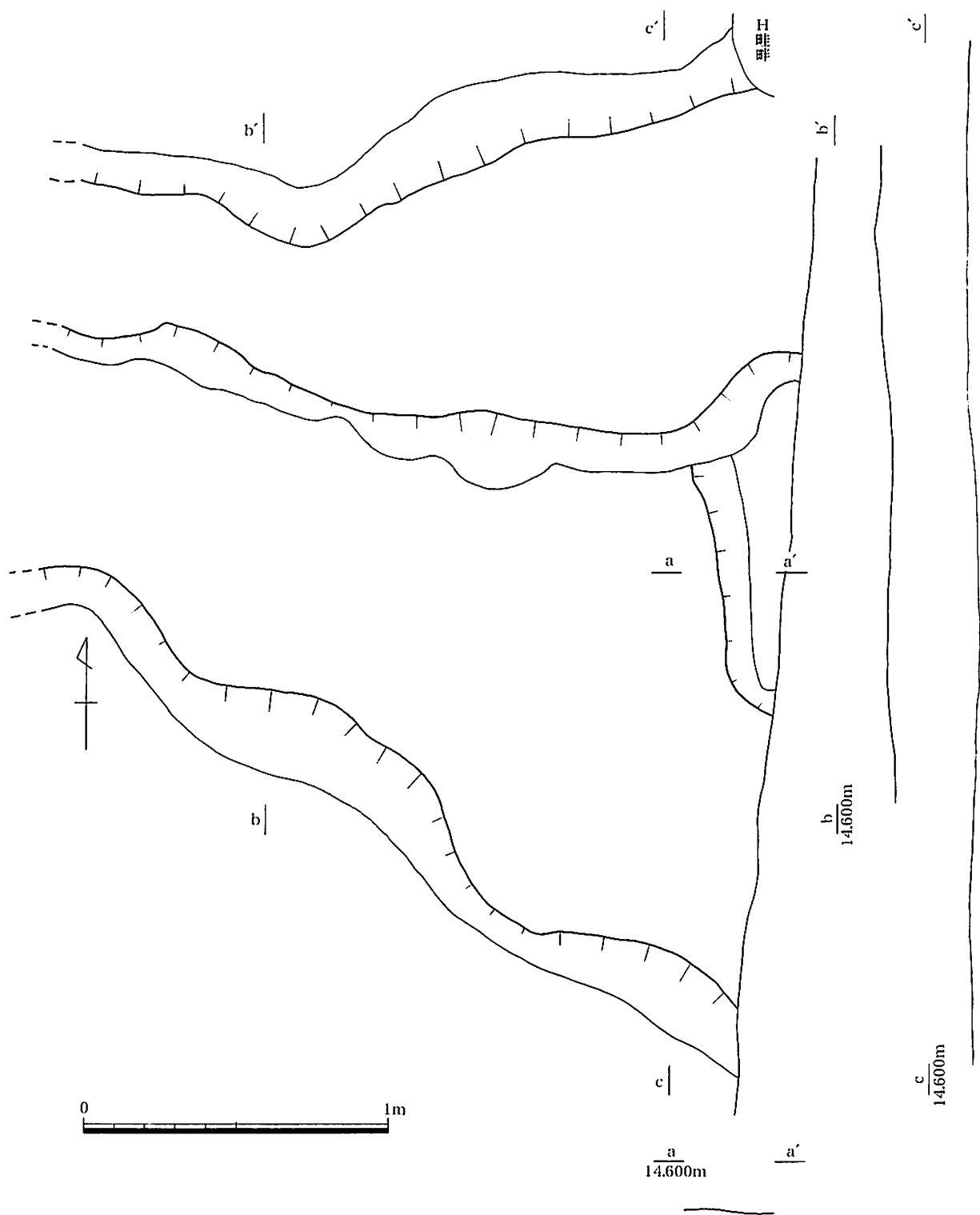
E-18グリッドに位置し、やや蛇行しながら南北に延びる畦畔である。最大幅約0.35m、最大高は約5.5m、調査区内での長さは約3.0mを測る。

M畦畔(第94図)

E-19グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。試掘トレンチと重なったため北半は調査できなかった。最大幅約0.2m、最大高は約3cm、調査区内での長さは約1.5mを測る。

N畦畔(第95図)

D・E-22グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。東側には溝状の落ち込みが、西側には土坑状

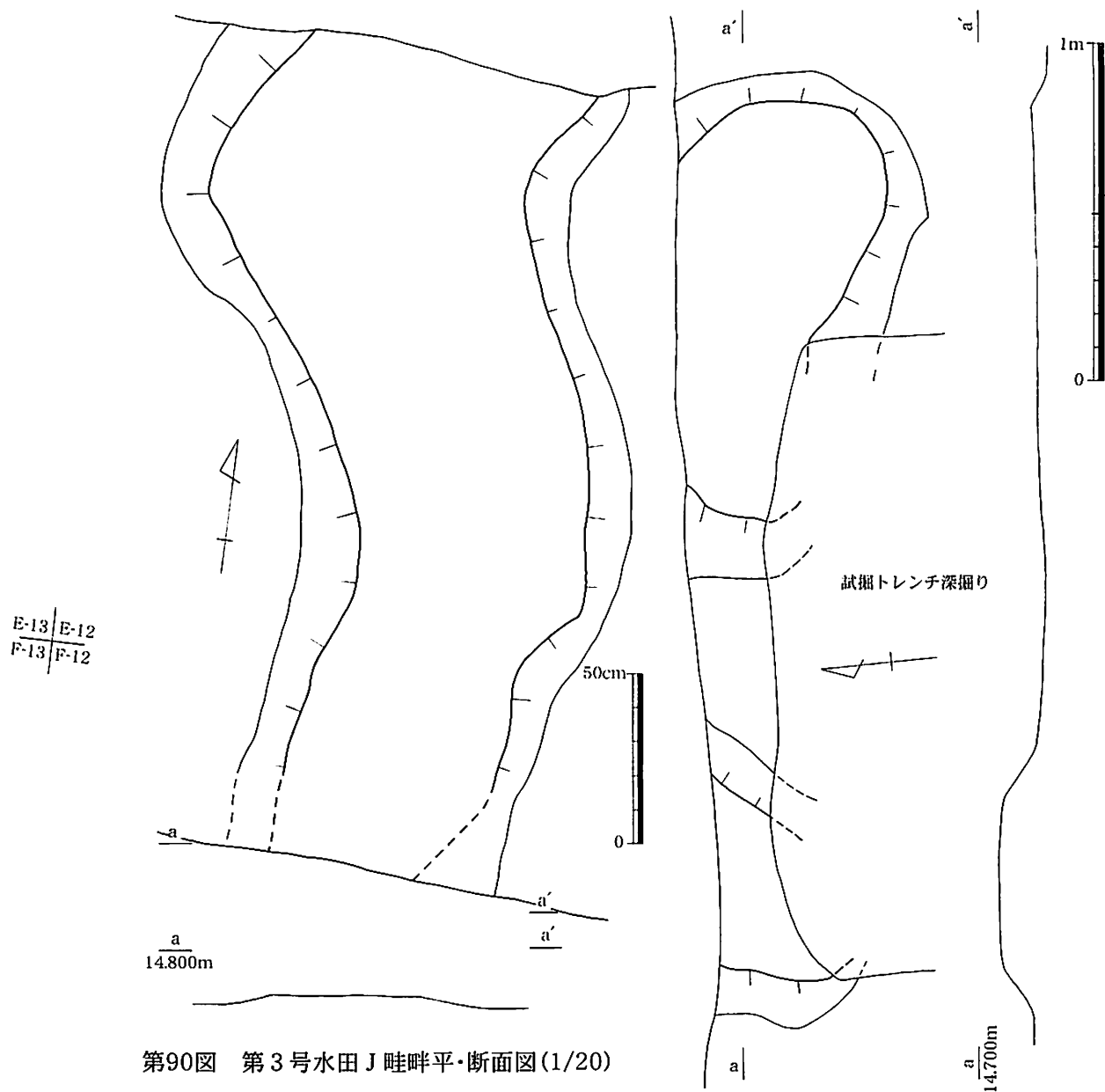


第89図 第3号水田 I 畦畔平・断面図 (1/20)

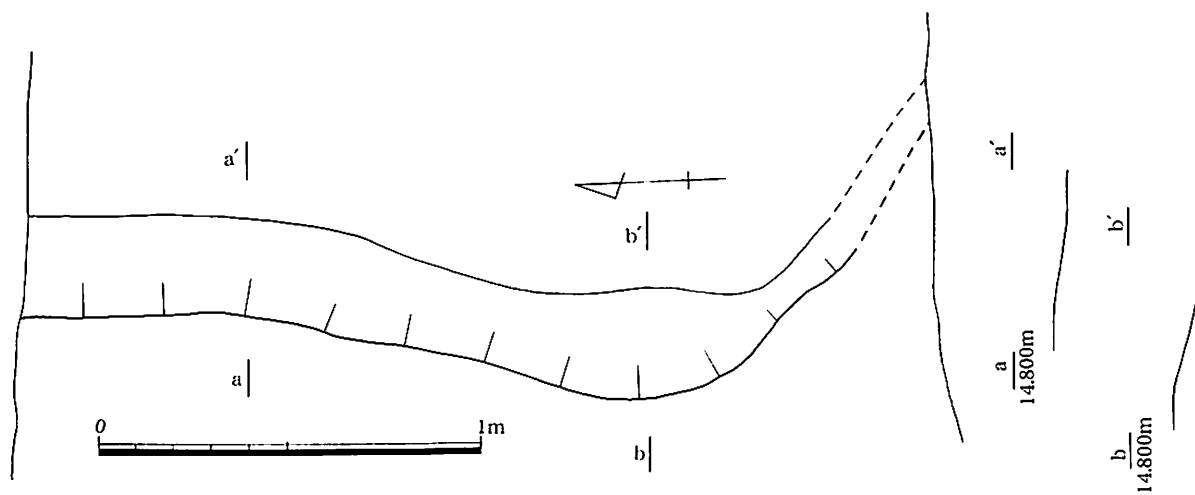
ないしは柱穴状の落ち込みが認められる。溝状の落ち込みの底面の比高差は約2cmあり、北から南へ流れていったものと考えられる。最大幅約2.15mと大形で、最大高は約4cm、調査区内での長さは約2.5mを測る。

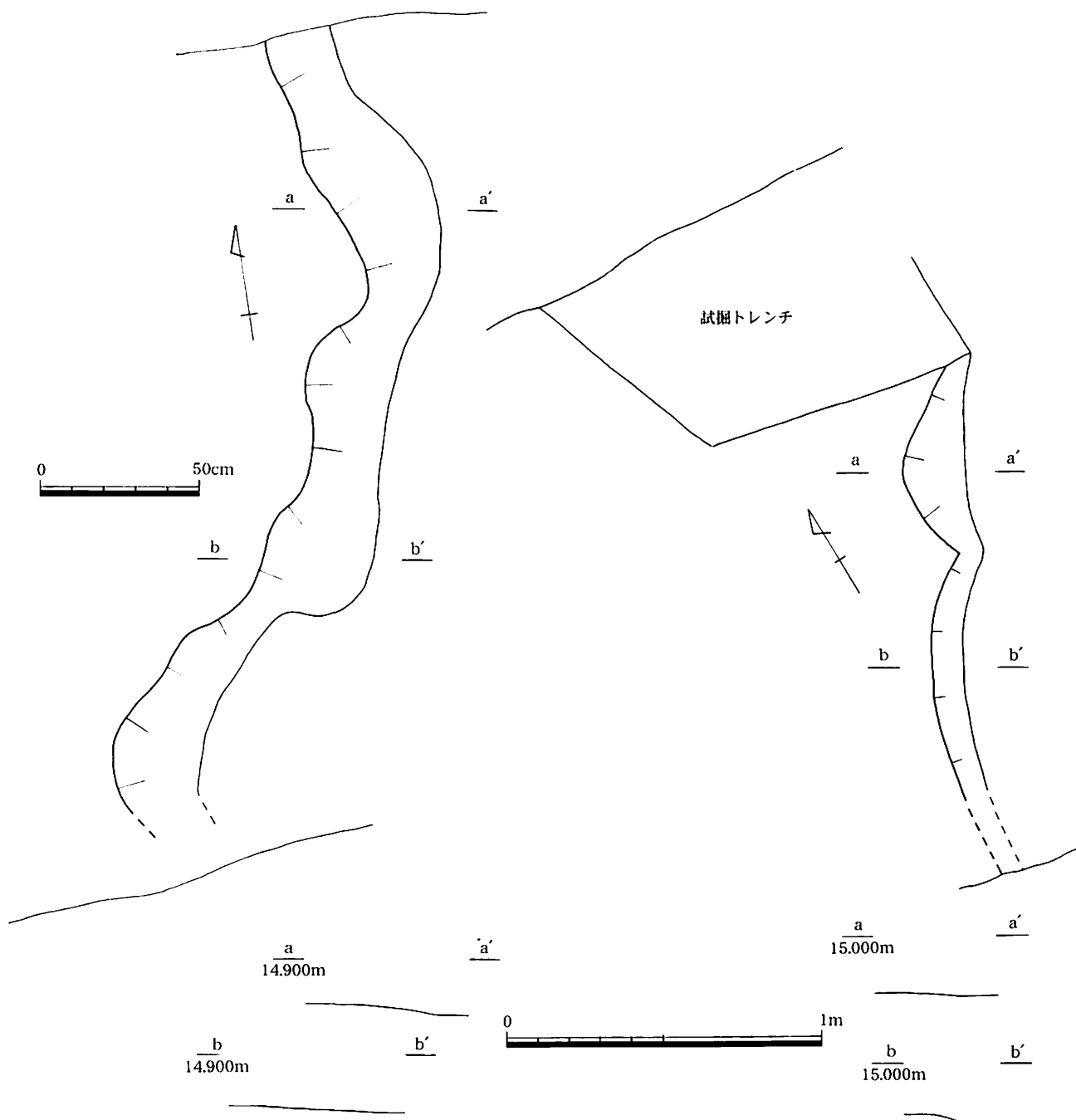
○畦畔 (第96図)

D・E-24～26グリッドに位置し、北東から南西に延びる畦畔である。明確な遺構としては西端で確認したのみで、後は土色の違いにより検出した。耕作土及び床土が上面の第2号水田に削平を受けたからだと考えら



第91図 第3号水田a畦畔平・断面図(1/20)





第93図 第3号水田L畦畔平・断面図(1/20)

第94図 第3号水田M畦畔平・断面図(1/20)

れる。先端の幅は狭く中心部は広い。土層断面をみるとこの畦畔の西側には水田が見受けられないため、水田の西の始まりを示す大畦畔であると考えられる。最大幅約 0.2m、最大高は約 4cm、調査区内での長さは約 0.7 m を測る。明確な遺構として検出していない部分を含めた長さは約 8.7 m である。

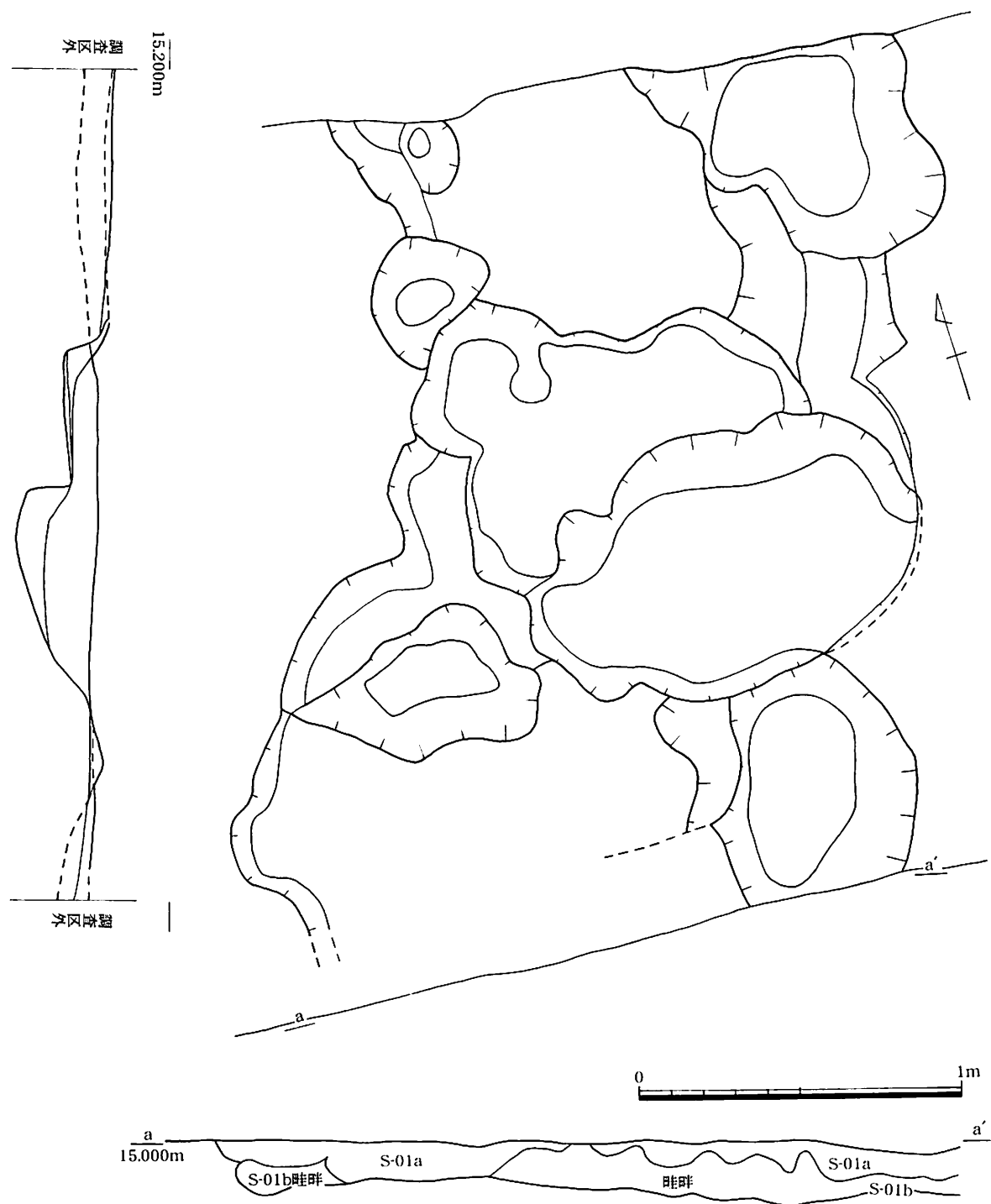
P 畦畔 (第 98 図)

F・G-a グリッドに位置し、南北方向で中央から東にも延びる畦畔である。最大幅約 0.3m、最大高は約 2.5 cm、調査区内での長さは約 2.5 m を測る。

Q 畦畔 (第 100 図)

F・G-0 グリッドに位置し、ほぼ南北に蛇行して延びる畦畔である。北端で北東方向に延びる。最大幅は約 0.65m、最大高は約 6.5cm、調査区内での長さは約 4.5 m を測る。

R 畦畔 (第 97 図)



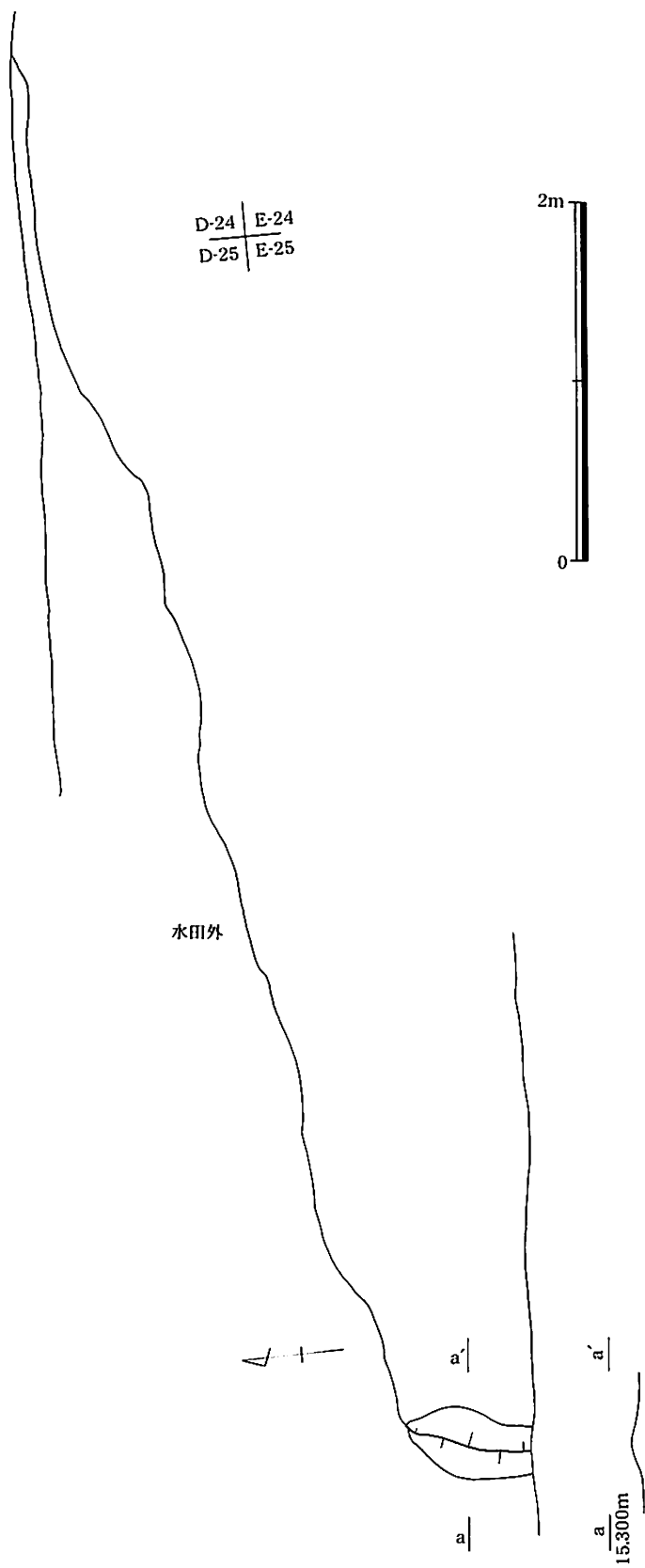
第95図 第3号水田N畦畔平・断面図(1/20)

F-1 グリッドに位置し、ほぼ南北に延びる畦畔である。最大幅約 0.25m、最大高は約 6cm、調査区内での長さは約 2.5 mを測る。

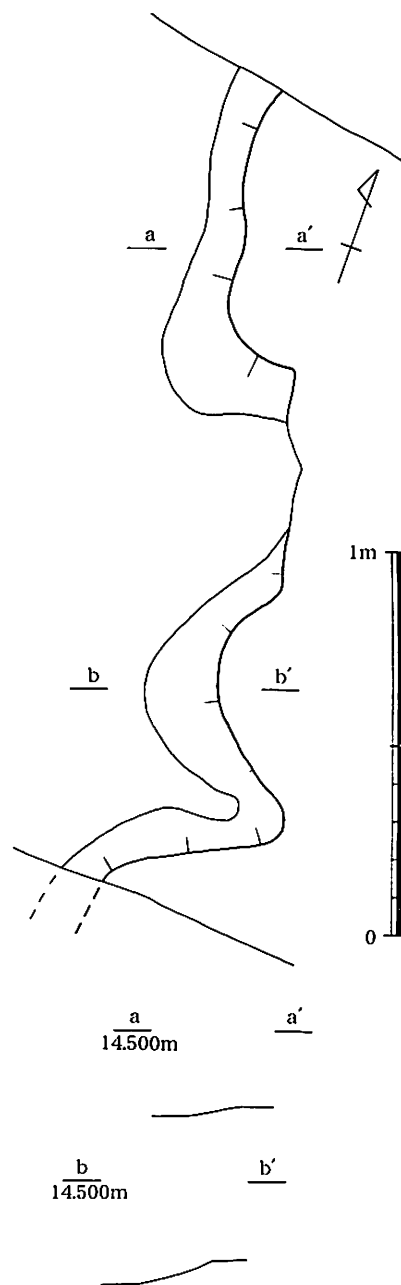
S 畦畔 (第 102 図)

F-2・3 グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。北から約 1.4 mの所で南西に屈折している。最大幅約 0.3m、最大高は約 4.5cm、調査区内での長さは約 3.3 mを測る。

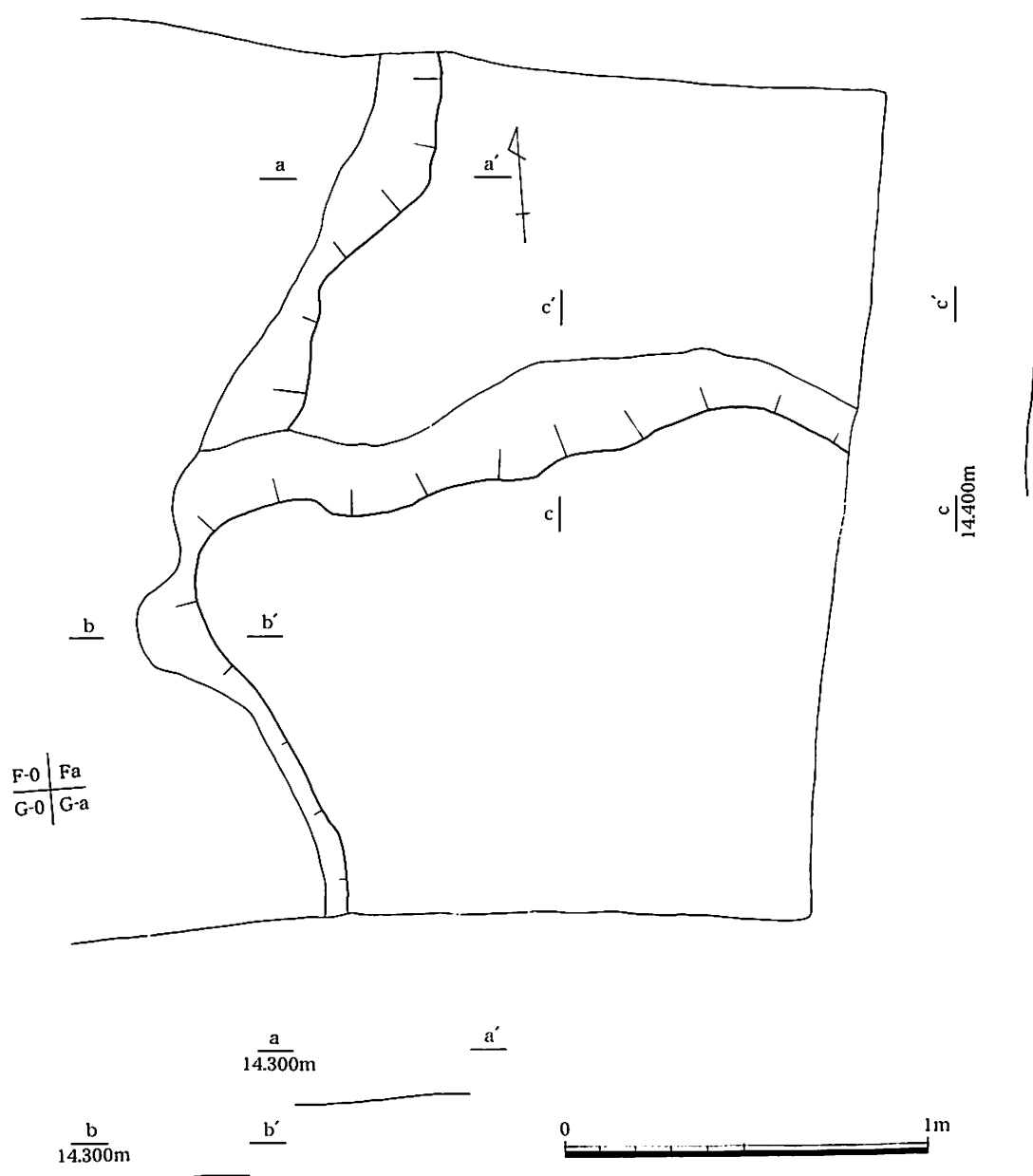
T 畦畔 (第 105 図)



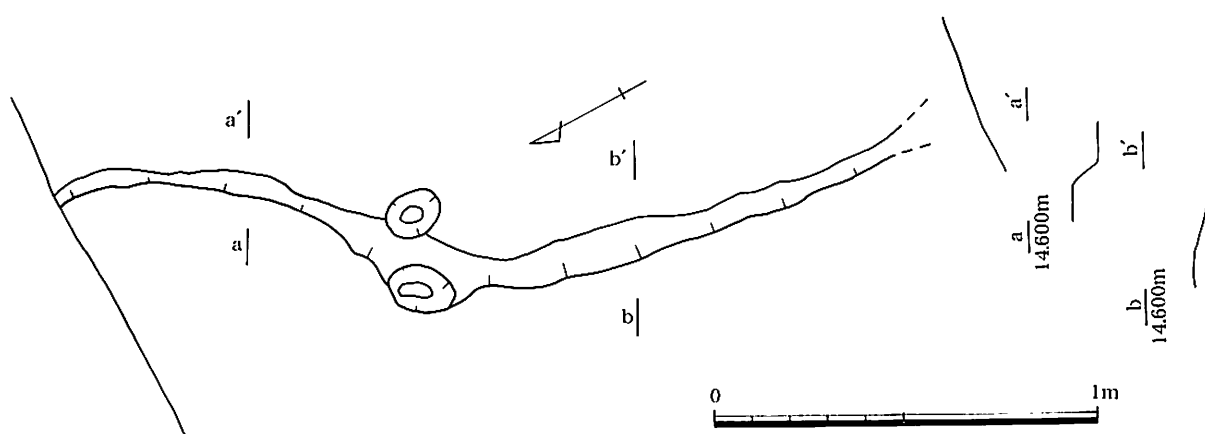
第96図 第3号水田O畦畔平・断面図(1/40)



第97図 第3号水田R畦畔平・断面図(1/20)



第98図 第3号水田P畦畔平・断面図(1/20)



第99図 第3号水田U畦畔平・断面図(1/20)

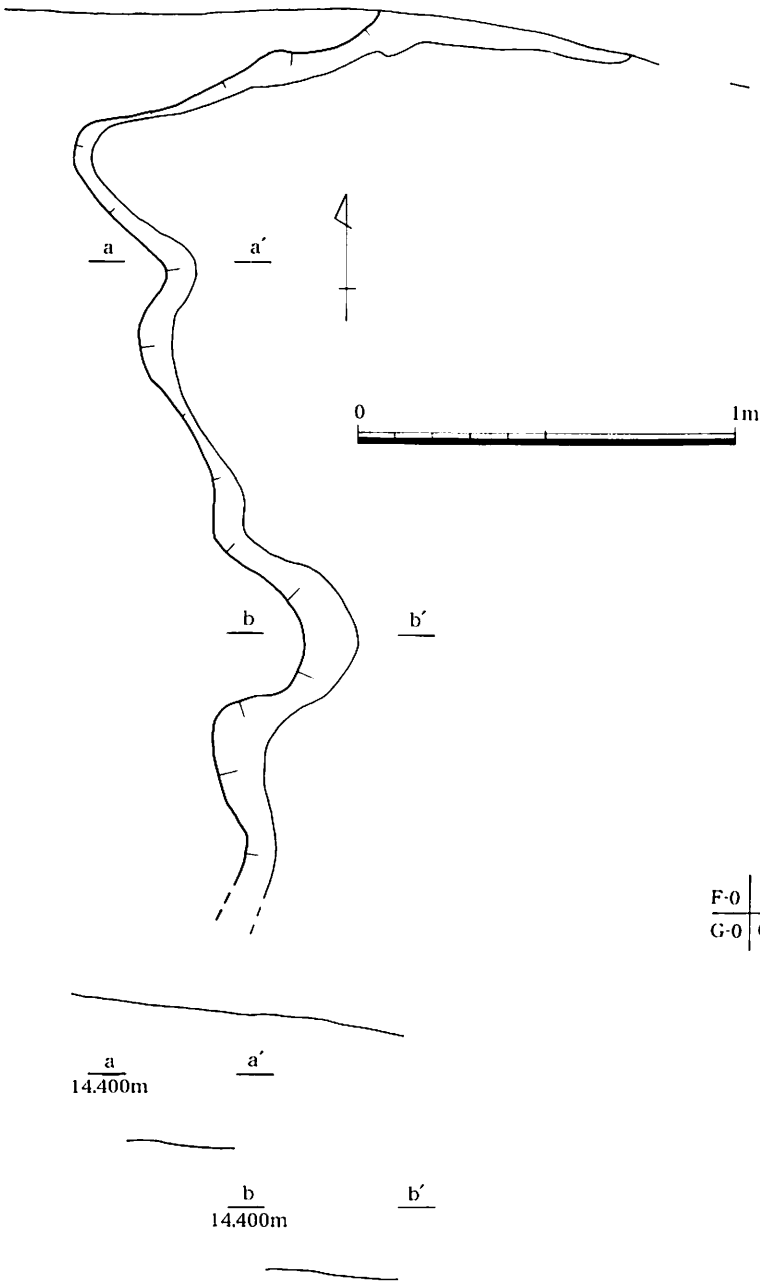
F-4グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。北端で東方向に分岐している。全体的に大形で最大幅約 1.0m、最大高は約 9.5cm、全長は北端で約 1.0 m、南北方向では約 2.0 mを測る。

U 畦畔 (第 99 図)

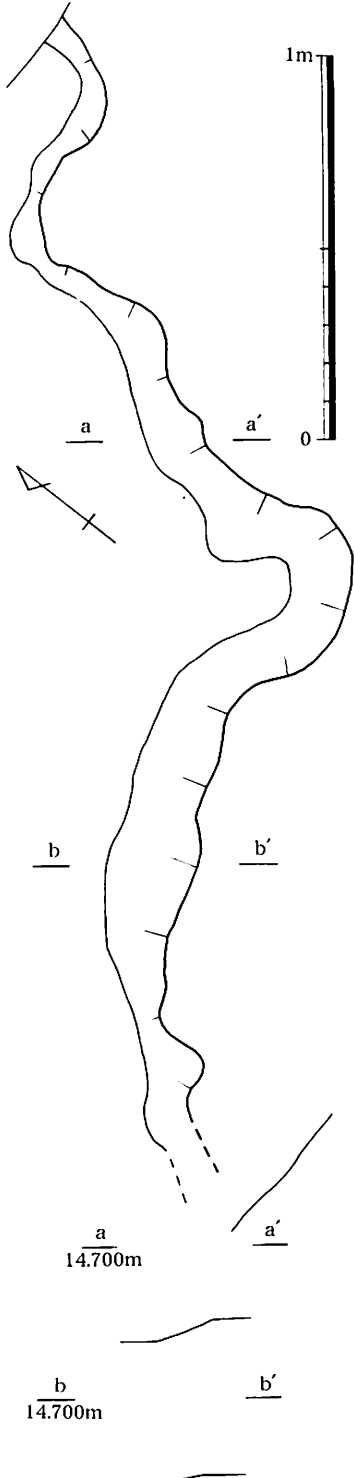
F-5グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。最大幅約 10cm、最大高は約 7cm、調査区内での長さは約 2.5 mを測る。

V 畦畔 (第 103 図)

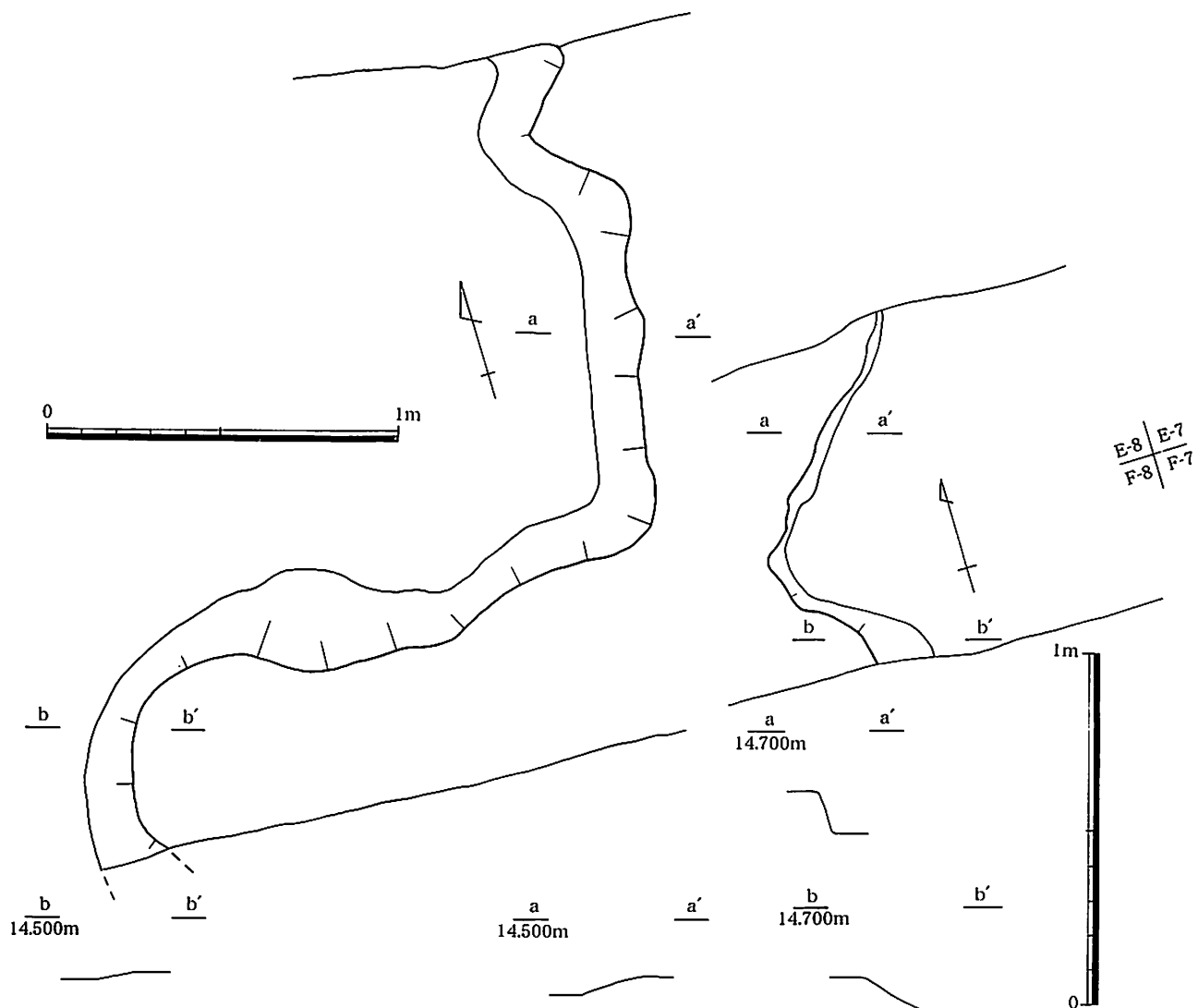
E・F-8グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。試掘トレンチと重なったため南半は調査できなかったが、検出した部分はいくの字状に屈折し東側の落ちた部分は深い。最大幅約 15cm、最大高は約 10cm、調査区内での長さは約 1.2 mを測る。



第100図 第 3 号水田Q畦畔平・断面図(1/20)

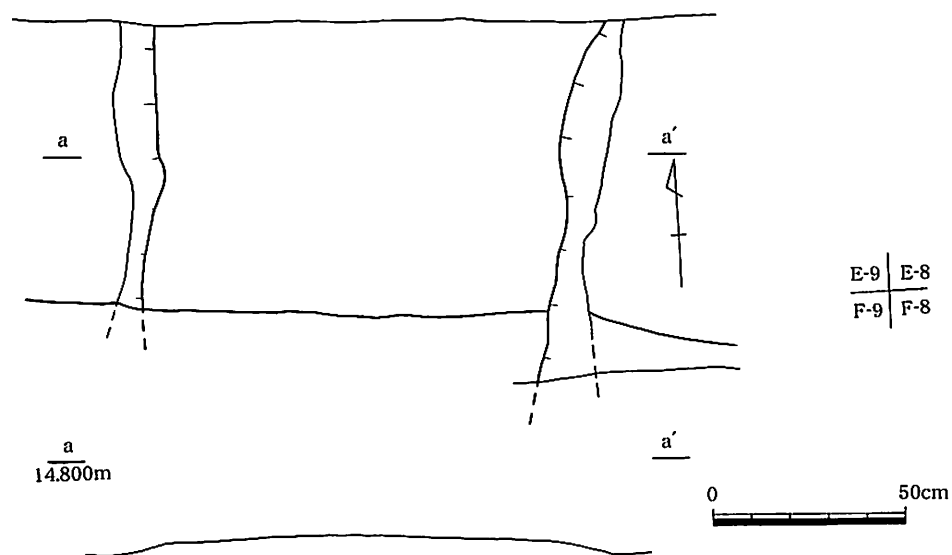


第101図 第 3 号水田Y畦畔平・断面図(1/20)



第102図 第3号水田S畦畔平・断面図(1/20)

第103図 第3号水田V畦畔平・断面図(1/20)



第104図 第3号水田W畦畔平・断面図(1/20)

Y畦畔 (第 101 図)

F-6 グリッドに位置し、北東から南西方向にやや蛇行して延びる畦畔である。最大幅約 0.2m、最大高は約 7.5cm、調査区内での長さは約 3.0 m を測る。

W畦畔 (第 104 図)

E・F-9 グリッドに位置し、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。試掘トレンチと重なったため南半は調査できなかった。最大幅約 1.4m、最大高は約 4.5cm、調査区内での長さは約 0.8 m を測る。第3号水田に伴う遺構の中では幅の広いタイプである。

X畦畔

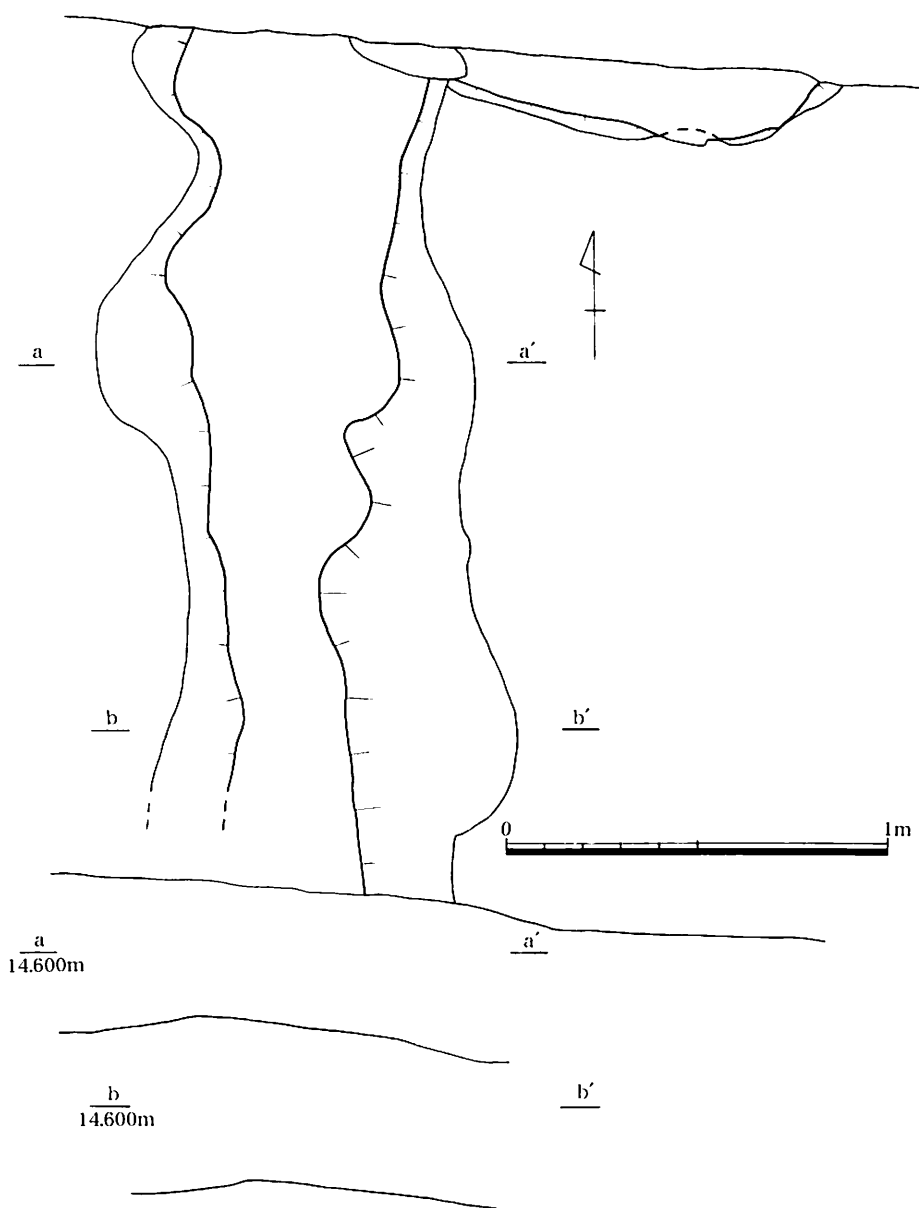
上述の W 畦畔に隣接する形で造成された畦畔である。平面では検出できなかったが土層断面で確認した。

土層観察で W 畦畔に覆われるように造成されている。このため、W 畦畔と平行する形で存在し、X 畦畔の方が先に造成されたものと考えられ、造り直しの可能性がある。土層断面からみると最大幅は約 0.9m、最大高は約 10cm を測る。

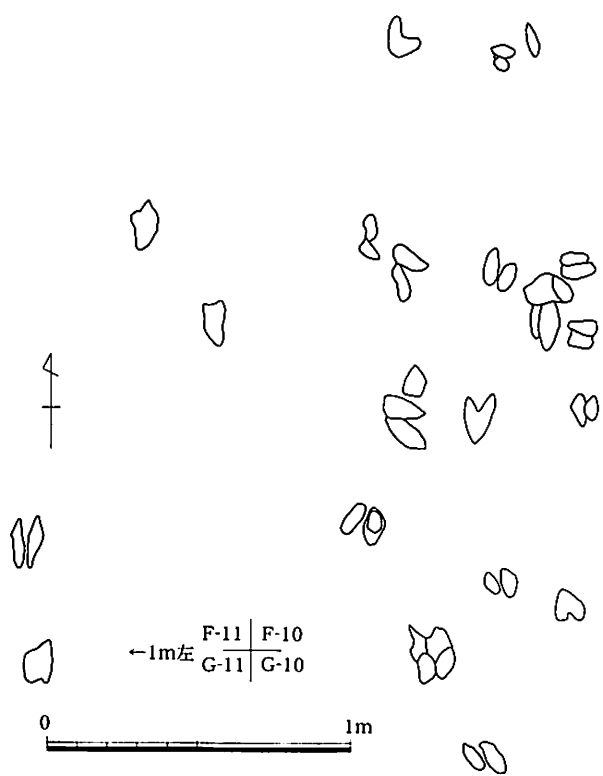
牛・人の足跡 (第 106・107 図)

II b 区北端の F・G-10 グリッドの床土上面 (第 106 図)、III b 区西端に近い、F-8 グリッド西側の床土の下層 (第 107 図) と E・F-7・8 グリッドの本水田の下層 (第 108 図) で、多数の牛とみられる足跡が検出された。F-8 グリッドと、E・F-7・8 グリッド杭周辺にあるやや大形の楕円形をしたものは人の足跡だと推測される。足跡の向きに規則性は認められない。本水田で足跡を検出した場所は第 II・III 調査区交差点付近の南部及び東部である。II b 区北端の足跡を検出した区域の東壁の土層断面にも足跡とみられる窪みが数ヶ所に見受けられ、第 II・III 調査区交差点は試掘トレンチのため土層が残っていなかったもので、II b 区北端と III b 区西よりを中心とする第 II・III 調査区交差点付近は一体となって足跡が集中していたと考えられる。

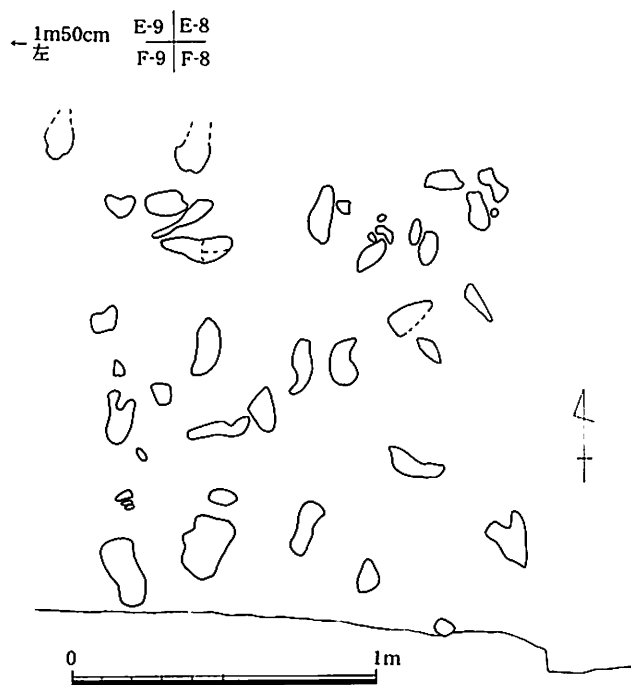
ii) 出土遺物



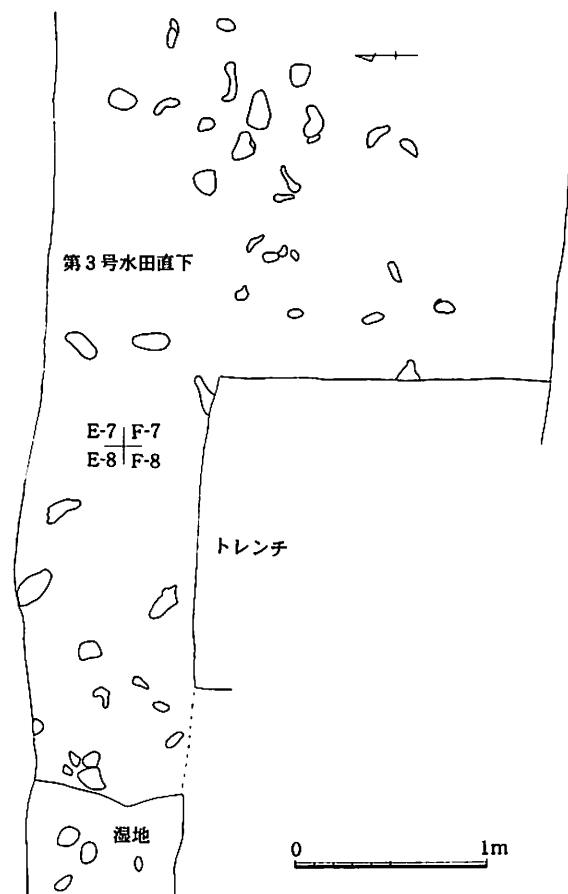
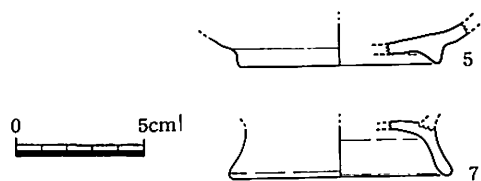
第105図 第3号水田T畦畔平・断面図(1/20)



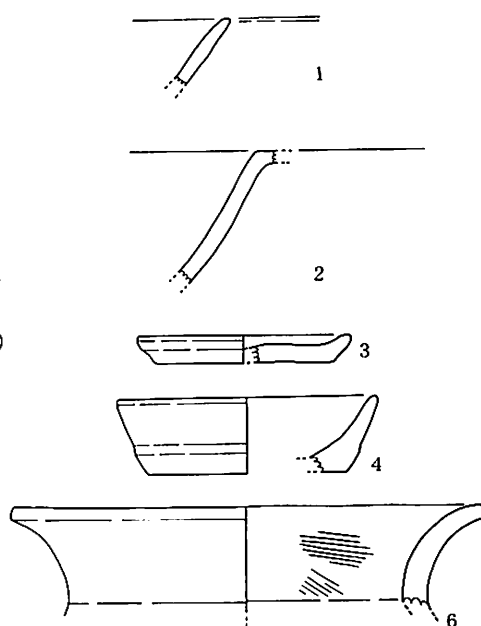
第106図 第3号水田牛の足跡平面図①(1/25)



第107図 第3号水田直下牛・人の足跡平面図②(1/25)



第108図 第3号水田対応の湿地・
第3号水田直下水田牛・人の足跡
(1/40)



第109図 第3号水田出土遺物(1/3)

第 109 図1 = 第3号水田D

・ E - 19 グリッド一括

14 ～ 15 世紀の所産と考えられる土師器杯の口縁部片である。表面・裏面共にミガキ調整が施されている。

第 109 図2 = 第3号水田D

・ E - 25 グリッド一括

古墳時代の所産と考えられる土師器の甕で、胴部片。

第 109 図3 = 第3号水田F

- 0 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の小皿である。底部から胴部にかけて約 1/5 残存する。

第 109 図4 = 第3号水田F

- 0 グリッド一括

14 世紀～ 15 世紀の所産と考えられる土師器の杯で、底部から胴部にかけての破片である。底部は回転糸切痕跡が残る。

第 109 図5 = 第3号水田D

・ E - 25 グリッド一括

古代末～中世初期の所産と考えられる土師器の碗で、底部が約 1/4 残存。底部内面に鉄分が附着している。

第 109 図6 = 第3号水田E

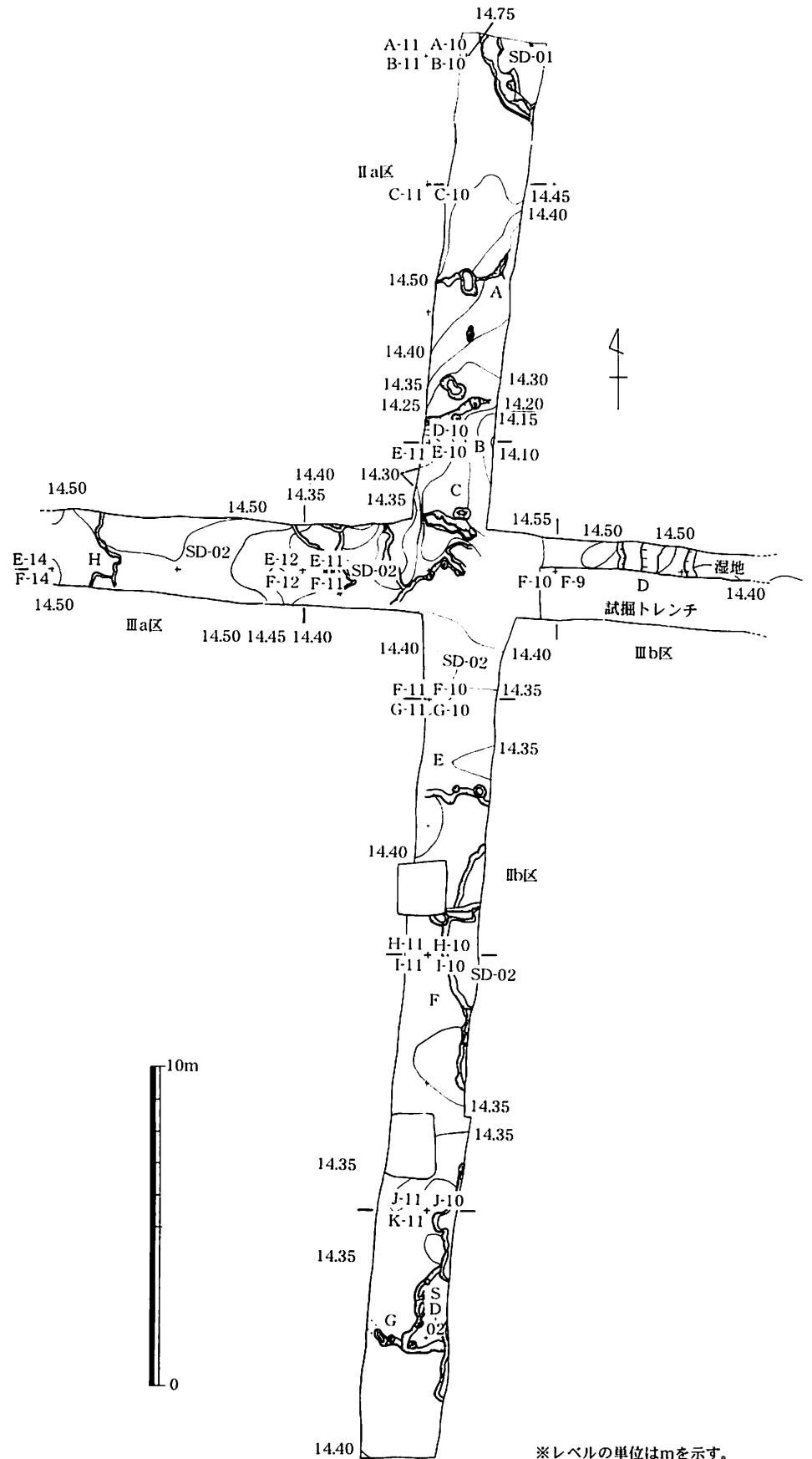
- 16 グリッド一括

古墳後期の所産と考えられる土師器の甕である。口縁部が一部残存し、内面にハケ目が施されている。

第 109 図7 = 第3号水田E

- 21 グリッド一括

9 世紀～ 10 世紀の所産と考えられる土師器。高台付碗の高台部分、約 1/4 が残存。



第110図 第Ⅱ・Ⅲ調査区第4号水田遺構配置図(1/200)

③第4号水田（第110図）

本水田は、Ⅱa区ではC-10グリッドの中央のA畦畔から水田が始まっており、Ⅱb区は調査区の南側に延びるようで、Ⅲa区は上面の第3号水田に伴う第3号溝状遺構に浸食されたと考えられ、溝状遺構が東側の始まりであるF-14グリッド西端で本水田層は途切れ、溝状遺構の西側でも層位が見出せないことから、溝状遺構の内側の何処かで本水田は終っているものと推測され、Ⅲb区ではF-9グリッド中央のD畦畔から水田が始まっている。従って少なくとも、南北は約37 m以上、東西は約22 m以上で、調査区外まで入れると溝部分を含め、約817 m²以上の水田面積が予想される。

先ず、第Ⅱ調査区の状況から概観してゆく。

Ⅱa区では、平面的にはA・B・Cの3畦畔が検出されており、ほぼ4 mごとに造成されているようであるが、D-10グリッド北端にも畦畔状の盛り上がりが見認められる。A畦畔は本水田の北側の始まりを示す大畦畔であり、C畦畔も第2号溝状遺構と水田を画する大畦畔だと考えられる。C畦畔の南側に検出された第2号溝状遺構は、Ⅲa区に延び、本水田の東西及び南北に分けている。また、A畦畔の約3.0 m北に第1号溝が本水田とはやや隔たった形で検出されているが、上面を第3号水田が覆っており、本水田に伴った可能性がある。Ⅱb区では、平面的にはE・F・Gの3畦畔が検出されている。E畦畔は第2号溝状遺構と本水田を南北方向に画し、F・G畦畔は東西方向に画す畦畔で、後二者は更に東西方向の畦畔も伴っている。

次いで、第Ⅲ調査区の状況を見てゆく。

Ⅲa区では、平面的には、E・F-13グリッド中央に、第2号溝状遺構と本水田を画するH畦畔しか検出されていないが、E・F-13・14グリッド境界付近と、本水田層が途切れる上面の第3号溝状遺構の始まるF-14グリッド西側に畦畔状の盛り上がりが見認められ、後者は本水田の西側の始まりを示す大畦畔であった可能性が高い。Ⅲb区では、E-9グリッド中央からE-8グリッド西端にかけて、本水田の東の始まりを示す大畦畔であるD畦畔が検出されているのみである。

更に、耕作土の下面ないしは床土の上面を基準にして第3号水田の標高を概観してゆく。

Ⅱa区のC-10グリッド中央の本水田の北の始まりを示すA畦畔の南側で約14.40 mで始まっており、D-10グリッド北端の畦畔状の盛り上がり部分の北側まで同レベルを維持するが、その南側で約14.35 m、D-10グリッド南端に近いB畦畔の北側で約14.30 m、その南側で約14.20 mと漸次下がり、E-10グリッド南のC畦畔まで同様の標高で推移する。第2号溝状遺構を挟んでⅡb区に入ると、G-10・11グリッド南側のE畦畔の南側で約14.40 mで始まり、I-10・11グリッド中央で約14.35 mと微減するが、調査区南端で再び約14.40 mと微増する。

Ⅲa区も第2号溝状遺構を挟んで、E・F-13グリッド中央のH畦畔の西側で約14.55 mで始まり、E・F-13・14グリッド境界付近の畦畔状の盛り上がり部分まで同レベルを維持するが、その西側で約14.60 mと上がり、同様の標高で、本水田の西端を示すと思われるF-14グリッド西側の畦畔状の盛り上がり部分まで推移する。Ⅲb区も第2号溝状遺構と試掘トレンチを挟んで、E・F-10グリッド東端で約14.50 mで始まり、E・F-9～8グリッドの本水田の東端のD畦畔まで同様のレベルで続く。

第Ⅱ・Ⅲ調査区を総合的に見ると、第2号溝状遺構が本水田の中央部を流れ、Ⅲa区の西側部分が約14.55～60 mと最も高く、溝状遺構を挟んでⅢb区の東側部分も約14.50 mと同様のレベルを見せる。溝状遺構の南北部分は東西部分に比べてやや低く、南側部分のⅡb区は約14.35～40 mを示し、北側部分のⅡa区は約14.40～20 mと溝状遺構に向って本水田で最も低くなる。第3号水田が最大で約1.0 mの標高差が見認められるのに対して、本水田は最大で約0.40 mの比高差しか持たず、約22 mの長さで0.5 mの比高差しか有さないⅡb区を筆頭に、本水田はかなり平坦な地形の場所に水田が形成されていたと考えられる。

最後に使用時期だが、本水田面からは年代の確定できる遺物は出土していないが、第3号水田の9～12世紀

より古いこと、本水田の直下の砂層から出土している弥生土器より新しいこと、第3号水田の出土遺物に古墳時代の遺物が混在していたことから勘案すると、古墳時代であったらうと推察される。

i) 付属遺構

第1号溝状遺構 (第111図)

A・B-10グリッドに位置する。北西-南東に延びると考えられる。西岸から北東にかけて階段的に深くなっていく。底面の比高差は約3.5cmを測り、北西から南東にかけて流れていたと考えられる。最大幅は調査で確認できた部分のみでも約2.1mあるため、かなり大形であったと考えられる。深さは約0.6m、長さは西端で約3.0mを測る。

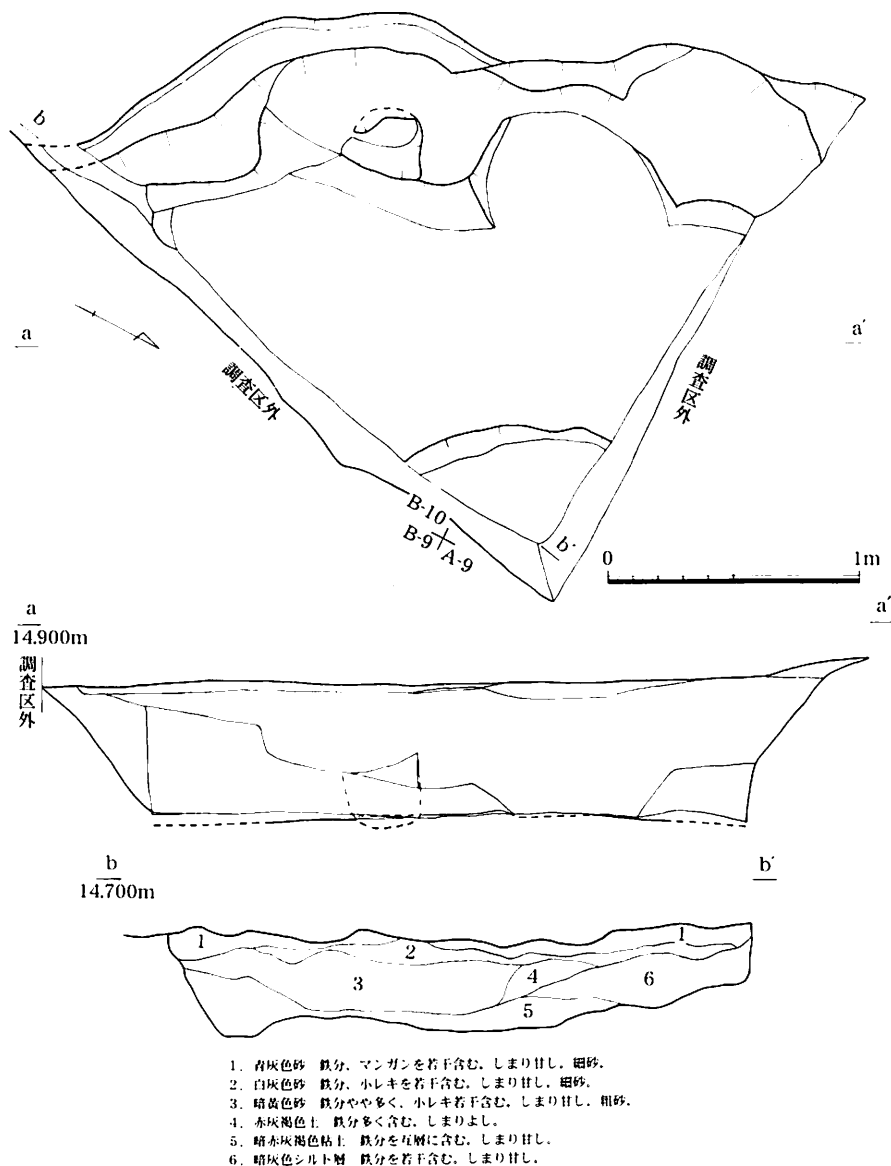
第2号溝状遺構 (第112・113図)

本水田の中央部に検出され、本水田を東西及び南北に四分割する。北はII a区のE-10・11グリッド南端に近いC畦畔、

南はII b区のG-10・11グリッド南側のE畦畔、西はIII a区のE・F-13グリッド中央のH畦畔で本水田と区切られる。東側は試掘トレンチと重なったため不明だが、土層図からするE・F-10グリッド中央部に水田と溝状遺構の境界があったと推測される。また、II b区の東端に部分的に溝状遺構が検出されており、F・G畦畔で水田と区切られているが、土層観察からこれも第2号溝状遺構の一部だと考えられ、II a区の外の西側部分でほぼ南北方向を示していたが、III a区に灰って南東方向に屈曲し、II b区の外の東側部分で再びほぼ南北方向に戻るような流路が予測される。底面の比高差は第III a調査区の東西方向で約0.5m、第III a調査区の南北方向で約8cm、第II b調査区南北方向で約8cmを測り、北西から南東にかけて流れていたと考えられる。東西の最大幅は調査で確認できた部分のみでも約13.0m、深さは約13cm、調査区内での長さは推定約28.0mを測る。

A畦畔 (第114図)

C-10グリッドに位置し、ほぼ東-西方向に延びる畦畔である。土層断面の観察によると、本畦畔の北側には水田が存在しない。このため、第4号水田北端の大畦畔であると考えられる。また、本畦畔は1・2層の2層で構築されていることが分かる。東へ約2.0mの所で北東へ屈折し、中心部のやや西寄りには、長径約0.85m、短径約0.45m、深さ約14cmを測る溝状土坑を有する。最大幅は溝状土坑の長径約0.85m、最大高は約



第111図 第1号溝状遺構平・断面図(1/30)

18cm、調査区内での長さは約2.7mである。

B畦畔 (第116図)

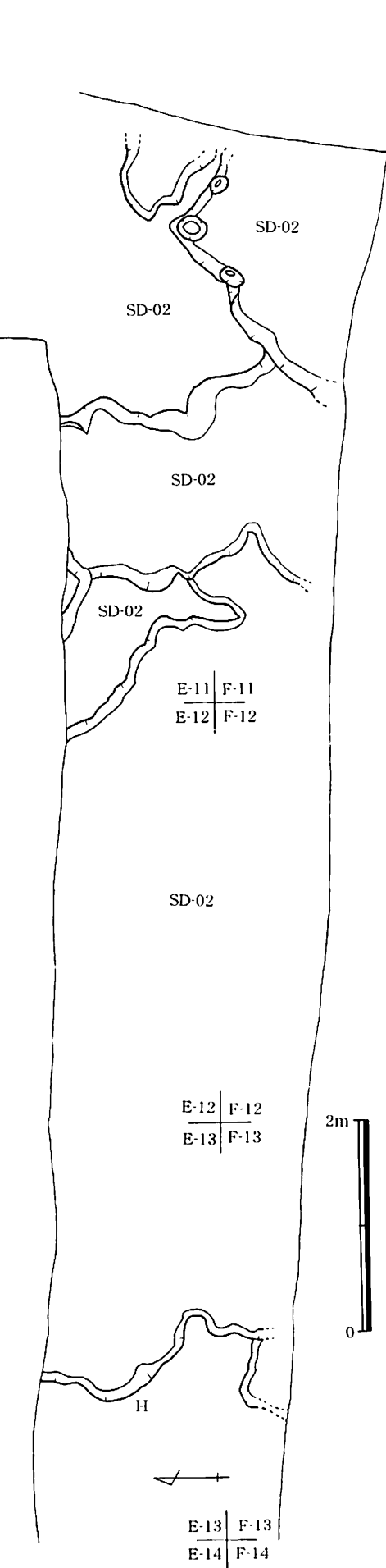
D-10グリッドに位置し、ほぼ南西-北東方向に延びる畦畔である。北側に長径約0.8m、短径約0.3mの洋梨形をした溝状土坑が存在し、3基の柱穴を伴う。最大幅約0.35m、最大高は約8.5cm、調査区内での長さは約2.0mを測る。

C畦畔 (第115図)

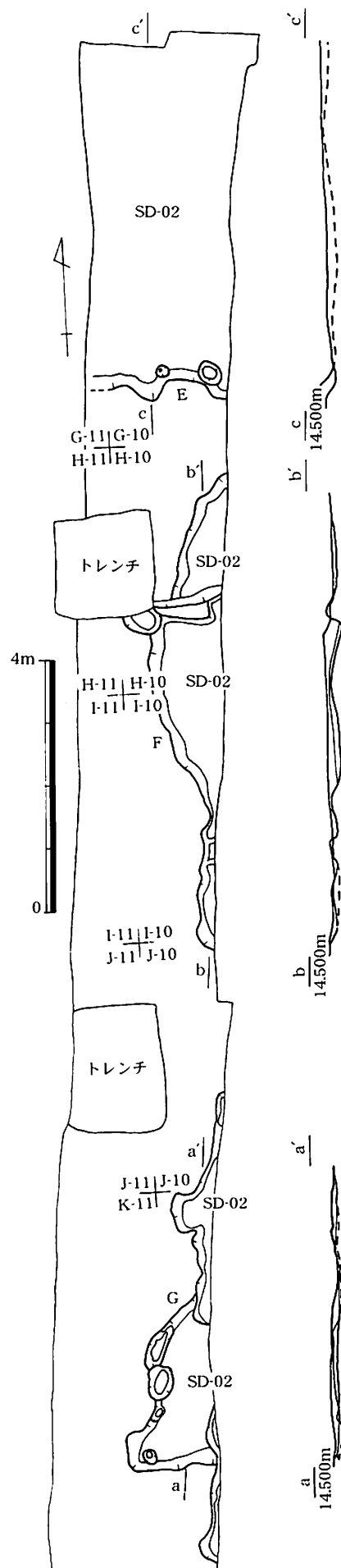
E-10・11グリッドに位置し、ほぼ東西方向に延びる畦畔である。断面をみるとやや南に向って上面が傾斜している。北側に隣接して島状の高まりが認められる。最大幅約0.55m、最大高は約24cmで残存状態はよく、調査区内での長さは約2.0mである。隣接する島状の高まりも同様の様相を呈しており、両者はセットで存在したものと考えられる。第2号溝状遺構と本水田を画する大畦畔と考えられる。A～C畦畔はほぼ東西方向に造成されている。

D畦畔 (第118図)

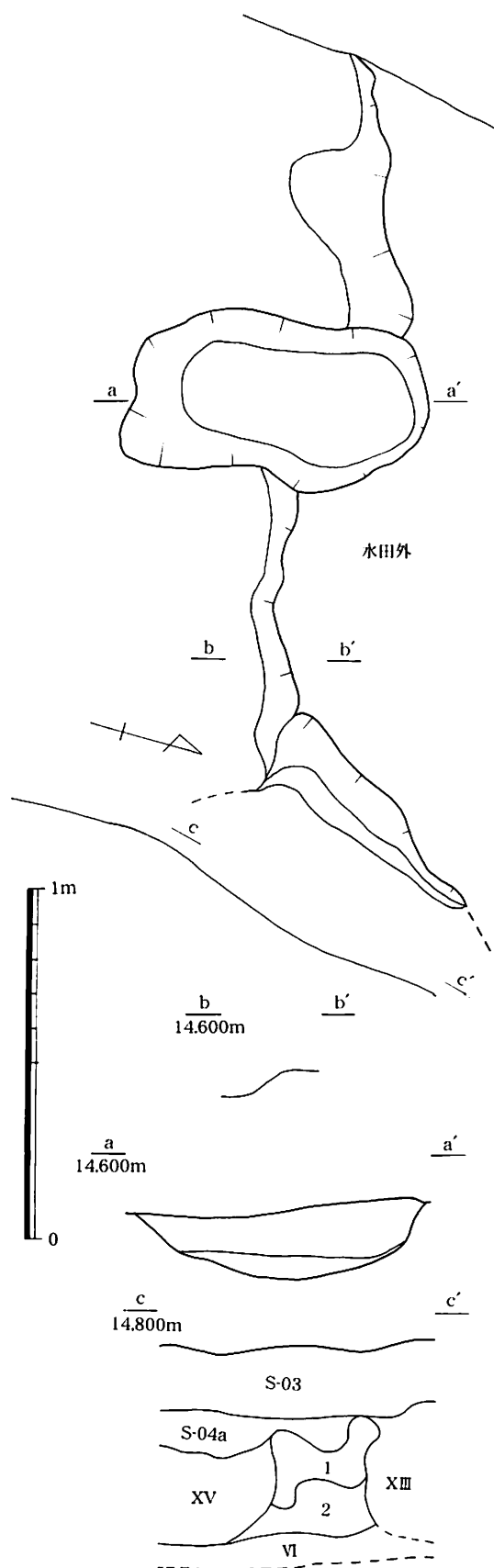
E・F-9グリッド中央からE・F-8グリッド西端にかけて検出されており、ほぼ南北方向に延びる畦畔である。最大幅約2.6m、最大高は約4cm、調査区内での長さは約0.9



第112図 第4号水田第2号溝状遺構
平面図①(1/60)

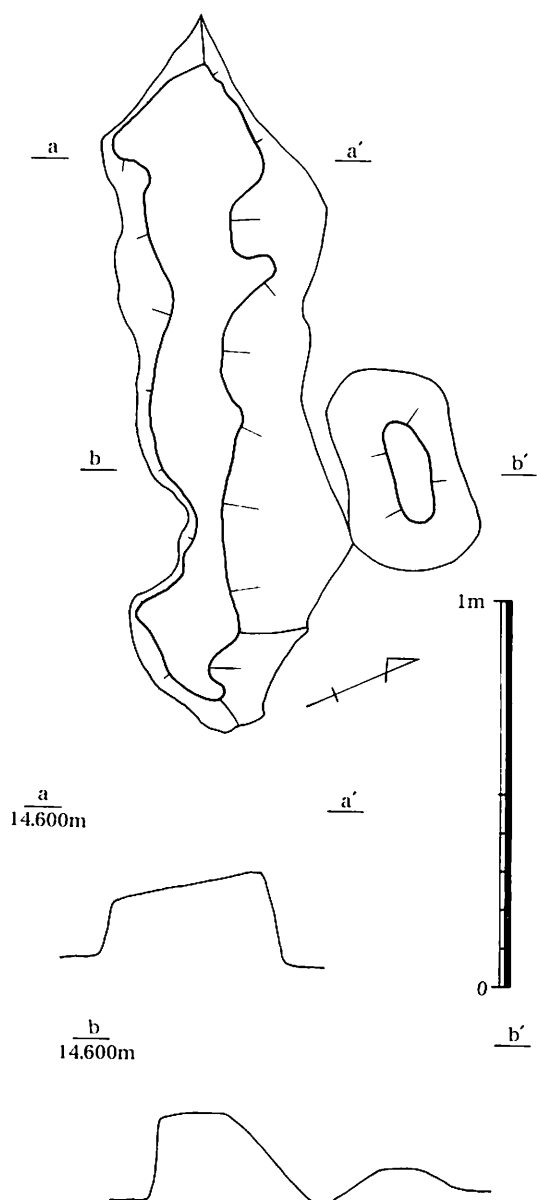


第113図 第4号水田第2号溝状遺構
平・断面図②
平面図(1/100)・断面図(1/40)



第114図 第4号水田A畦畔平・断面図 (1/20)

1. 暗青灰色砂質土 鉄分を非常に多く、小礫若干含む。しまりよく粘性ややあり。
2. 暗青灰褐色砂 鉄分をやや多く含む。しまりやや甘し。



第115図 第4号水田C畦畔平・断面図 (1/20)

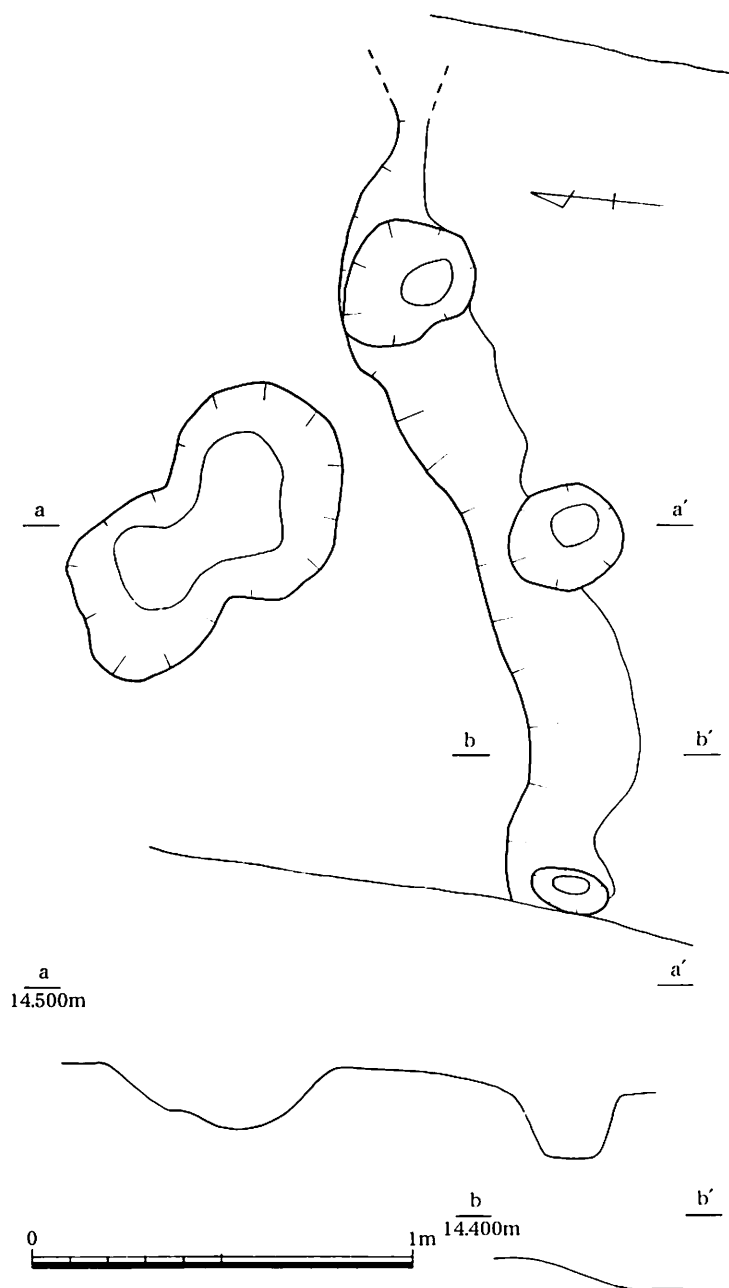
mを測る。本水田の東端を示す大畦畔である。

E 畦畔 (第 117 図)

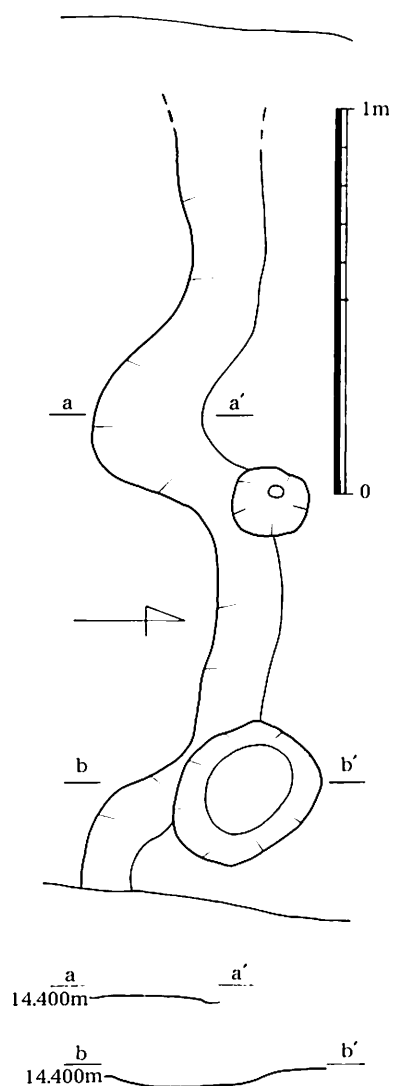
Ⅲ b区のG-10・11 グリッドで検出され、ほぼ東西向きに造成されており、第2号溝状遺構と本水田を画する畦畔である。最大幅約 0.3 m、最大高約 10cm、調査区内で長さ約 2.5 mを測る。

F 畦畔 (第 120 図)

Ⅲ b区のH-1-10・11 グリッドに存在し、第2号溝状遺構と本水田を画する南北向きと水田を小区画する東西向きのものが組み合わさった畦畔である。調査区内で南北方向が長さ約 7.8 m、最大幅約 0.2 m、最大高約 3cm、東西方向が長さ約 1.5 m、最大幅 0.3 m、最大高約 7cm を測る。



第116図 第4号水田B畦畔平・断面図(1/20)



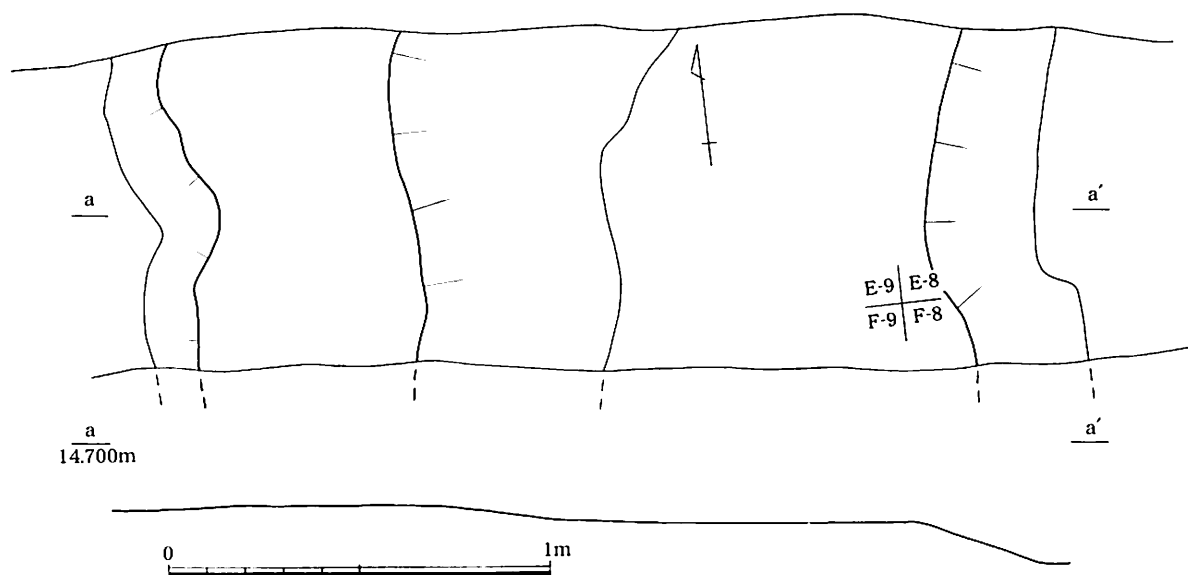
第117図 第4号水田E畦畔平・断面図(1/20)

G畦畔 (第121図)

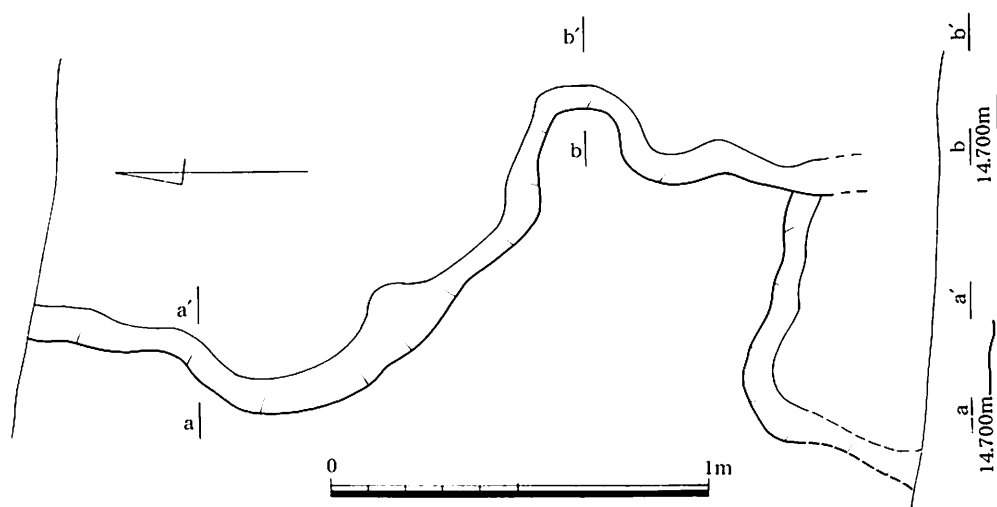
Ⅲb区のJ・K・L-10・11グリッドで検出され、やはり第2号溝状遺構と本水田を画する南北向きが2列と水田を小区画する東西向きのものが組み合わされた畦畔である。調査区内で、南北向きの長い方が長さ約6.3m、最大幅約0.2m、最大高約7cm、南北向きの短い方が長さ約2.6m、最大幅約0.15m、最大高約3cm、東西向きが長さ約2.3m、最大幅約0.3m、最大高約3cmを測る。F・G畦畔の南北向き部分は調査区外で連結する可能性が高く、第2号溝状遺構はⅢb区北端で北西-南東方向からほぼ南北向きに急激に屈曲すると推測される。

H畦畔 (第119図)

E・F-13グリッドに位置し、本水田と第2号溝状遺構を画してほぼ南北方向に造成されている。調査区内で長さ約2.4m、最大幅約0.15m、最大高約3cmを測る。



第118図 第4号水田D畦畔平・断面図(1/20)



第119図 第4号水田H畦畔平・断面図(1/20)

牛の足跡 (写真図版 21 - 4)

E・F - 10・11 グリッドの床土上面で数個の足跡を検出した。いずれも小形でありすべて牛の足跡であると考えられる。足跡の向きに規則性は認められない。

ii) 出土遺物

第122図1=第2号溝状遺構一括

時期は不明であるが、土師器の坏の小皿である。口縁部から底部にかけて約 1/10 が残存する。

第122図2=第4号溝状遺構一括

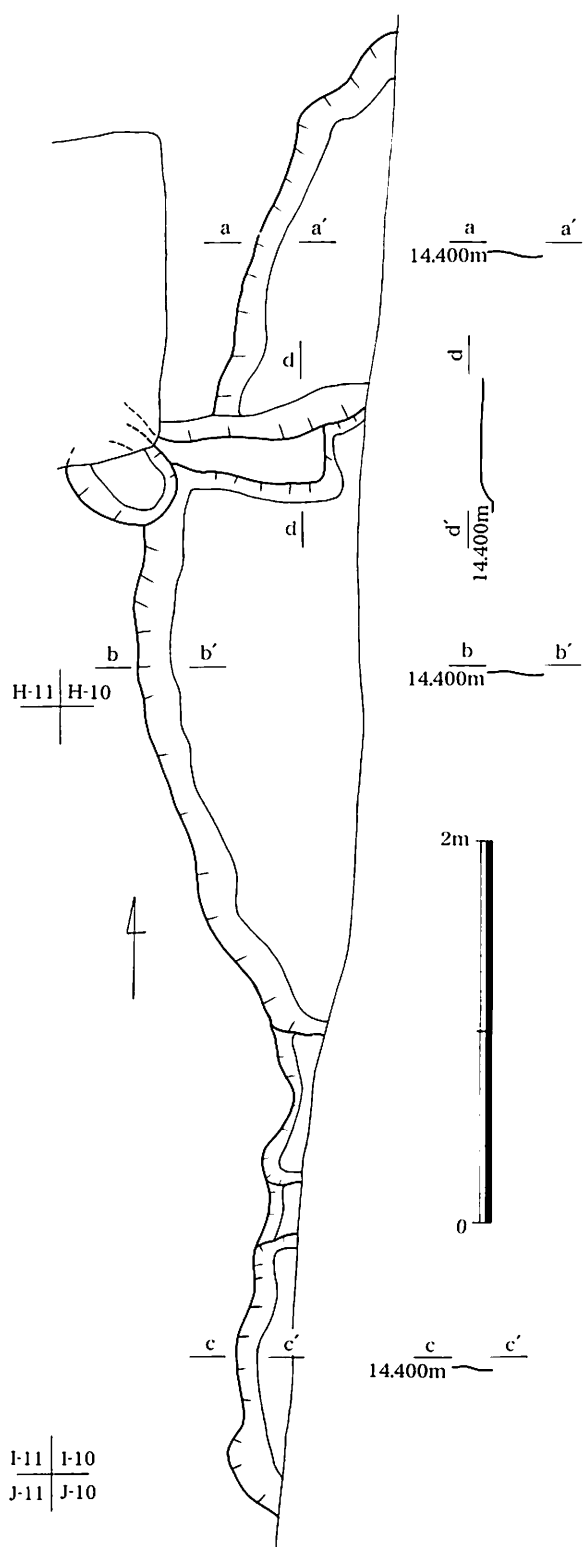
弥生時代中期の所産と考えられる弥生土器で、底部のみ残存する。平底の底部内面には指オサエの痕跡が残る。胴部外面にはかすかに施されたハケ目が残る。

第122図3=第4号溝状遺構一括

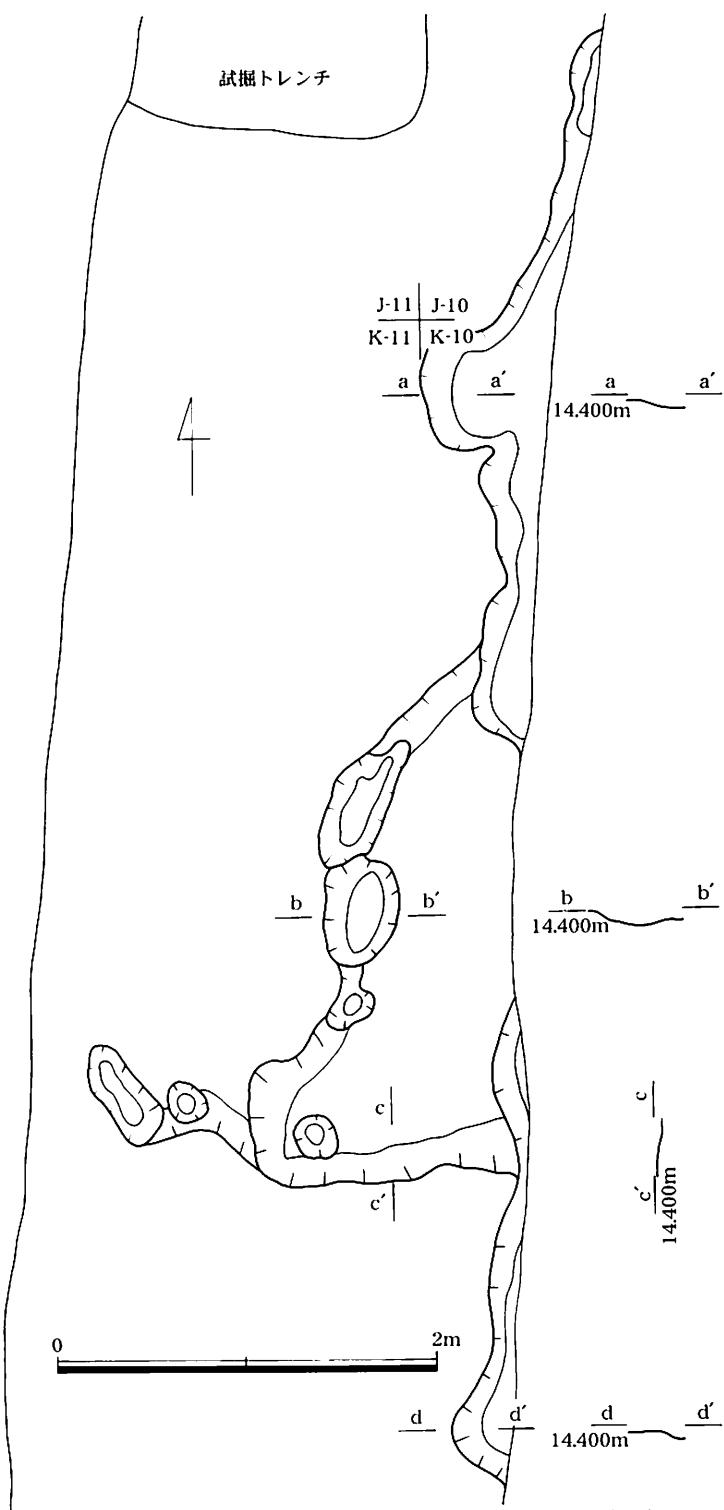
弥生後期の所産と考えられる弥生土器の鉢の口縁部片である。外面にハケ目が施されている。

第123図1=第2号溝状遺構一括

土師質の土錘。紡錘形だが、太形で短躯な形態を呈する。上下端には磨き整形が認められる。下半部に若干の



第120図 第4号水田F畦畔平・断面図(1/40)



第121図 第4号水田G畦畔平・断面図(1/40)

剥落が認められる。長さ 2.30cm、外形 1.50cm、孔径 .035cm、重さ 4.6 g を測る。

④第II・III調査区出土のその他の遺物

第 124 図1=II層E-18・19 グリッド一括

時期は不明であるが、瓦質土器の捕鉢の口縁部片である。

第 124 図2=II b層G-10・11 グリッド一括

14世紀～15世紀所産と考えられる土師質土器の鍋の口縁部片である。外面に煤が付着している。

第124図3=Ⅱb区中央トレンチ埋土一括

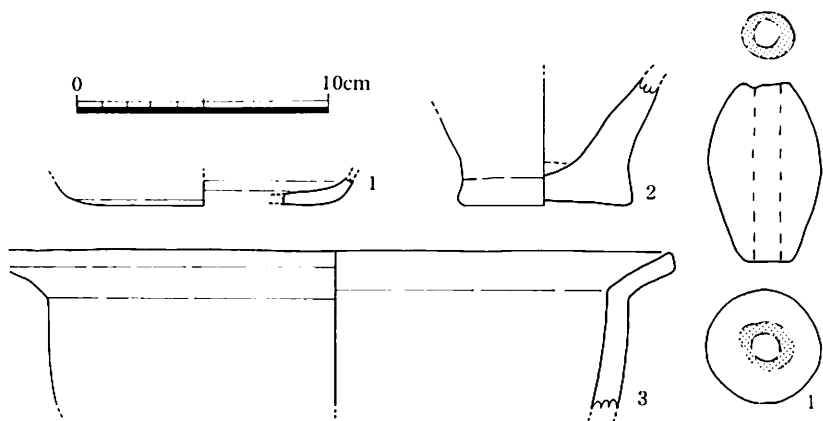
中世後期の所産と考えられる白磁皿の口縁部片である。中国産で内面に型押陽刻紋が浮彫されている。

第124図4=Ⅱb区中央トレンチ埋土一括

15世紀の所産と考えられる龍泉窯系青磁皿の口縁部片である。口縁部には貫入、内面の口縁部付近には櫛描紋、より内側には刻花紋が施されている。

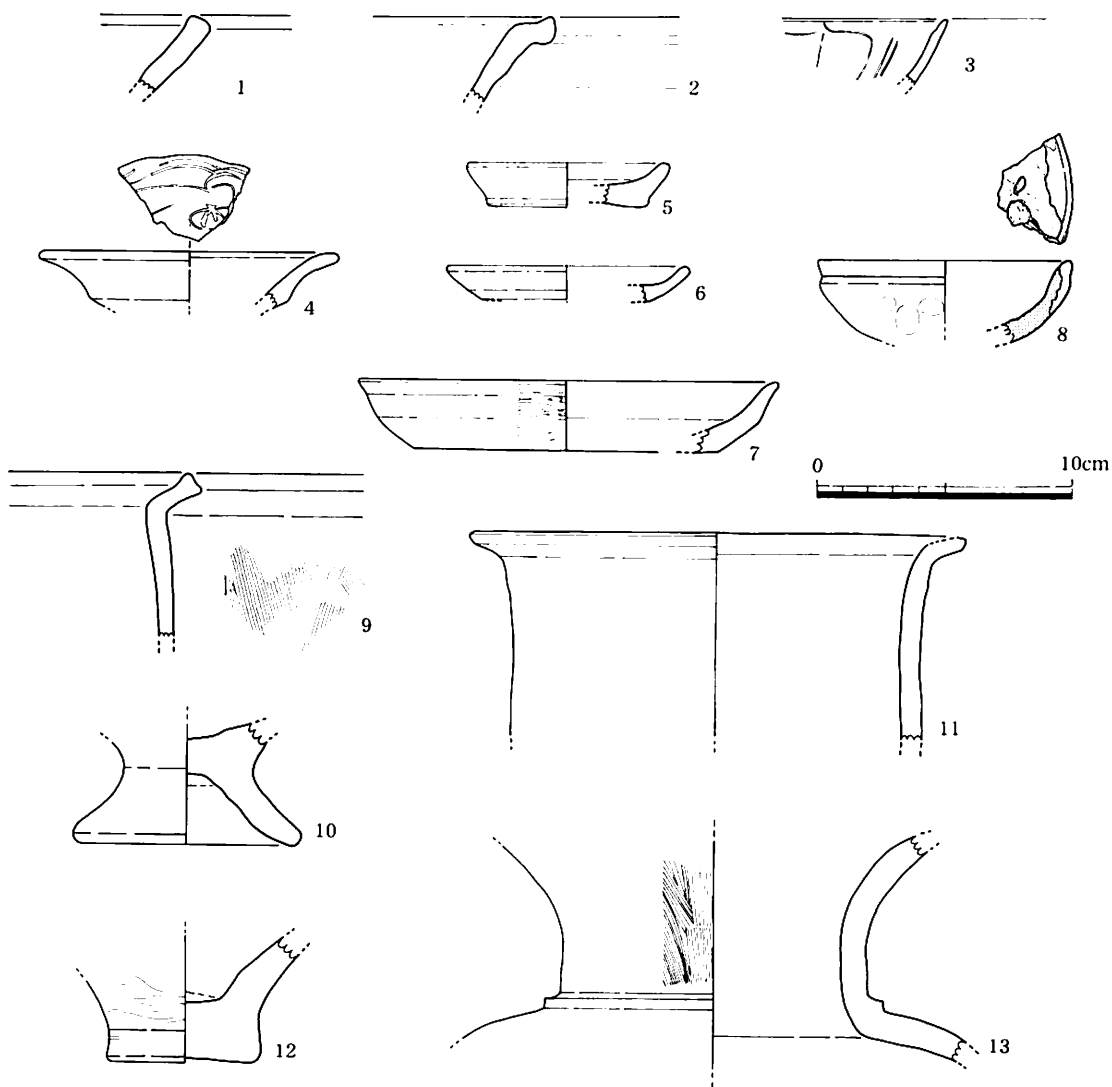
第124図5=Ⅱb層G-10・11グリッド1一括

14世紀の所産と考えられる土師器の小皿である。底部のみ約1/5残存している。



第122図 第4号水田出土遺物(1/3)

第123図
第2号溝状遺構
出土土錘(1/1)



第124図 第Ⅱ・Ⅲ区出土遺物(1/3)

第 124 図6=II a 区東壁マンガン層一括

土師器の小皿で、口縁部片である。

第 124 図7=II b 層L-10・11 グリッド一括

14～15 世紀の所産と考えられる土師器の坏で、底部から胴部にかけて約 1/12 が残存する。内面・外面にはハケ目が施され、底部は回転糸切痕跡が残る。

第 124 図8=II b 層E・F-7 グリッド一括

京都系土師器の皿で、口縁部が一部残存する。外面には指オサエの痕跡が残る。口縁部約 1.0cm の範囲を除いた内面と側面に、銅合金が付着していることから、火挟みで挟み、坩堝に溶かした金属を注ぐ柄杓代わりに用いたと考えられる。付着している合金についての詳細は科学分析の項に譲る。

第 124 図9=XVII 層E-19 グリッド一括

弥生中期前葉の所産と考えられる弥生土器の口縁部片である。外面にはハケ目が施されている。

第 124 図10=遺跡一括

弥生後期の所産と考えられる弥生土器の脚付き鉢である。脚部と鉢底部の一部が残存する。脚部の外面と内面に指オサエの痕跡が残るが、外面の指オサエは後の調整のため明確には残っていない。また、脚部内面の一部以外には丹が塗られている。

第 124 図11=第3号水田直下E-20・21 グリッド一括

弥生後期の所産と考えられる弥生土器の口縁部片である。

第 124 図12=XI 層D・E-27 グリッド一括

弥生中期前葉と考えられる弥生土器である。底部と胴部の一部が残存する。底部内面には指オサエの痕跡が残る。

第 124 図13=第3号水田境D・E-25 グリッド一括

弥生中期の所産と考えられる弥生土器である。口縁部を欠くが、口縁部から頸部にかけての一部が残存する。口縁部外面にはほぼ全面にハケ目が施され、頸部には断面が三角形の突帯を一条有している。

第 125 図1=II b 層F-O グリッド一括

土師質の土錘。円筒形で細形を呈す。長さ 5.15cm、外径 0.95cm、孔径 0.30cm、重さ 5.5 g を測る。

⑤小結

ここでは、第II・III 調査区で検出された主要な3枚の水田と近世の水田層(II 層)及び調査によって明らかになった各区域の自然地形について概観すると共に、若干の考察を加えてゆきたい。

i) 地形的変遷(第126 図)

自然地形を、第4号水田が形成される以前、即ち人間の力が明確に及ぼされる以前と、水田が一部形成された第4号水田形成期、水田が本調査区のほぼ全域に拡大する第3号水田形成期、近世以降の四期に分けて見てゆく。なお、本調査区全域で水田が形成されるが、溝状遺構も検出されず、地形的に特徴的なところの捉えられない第2号水田形成期は省略する。

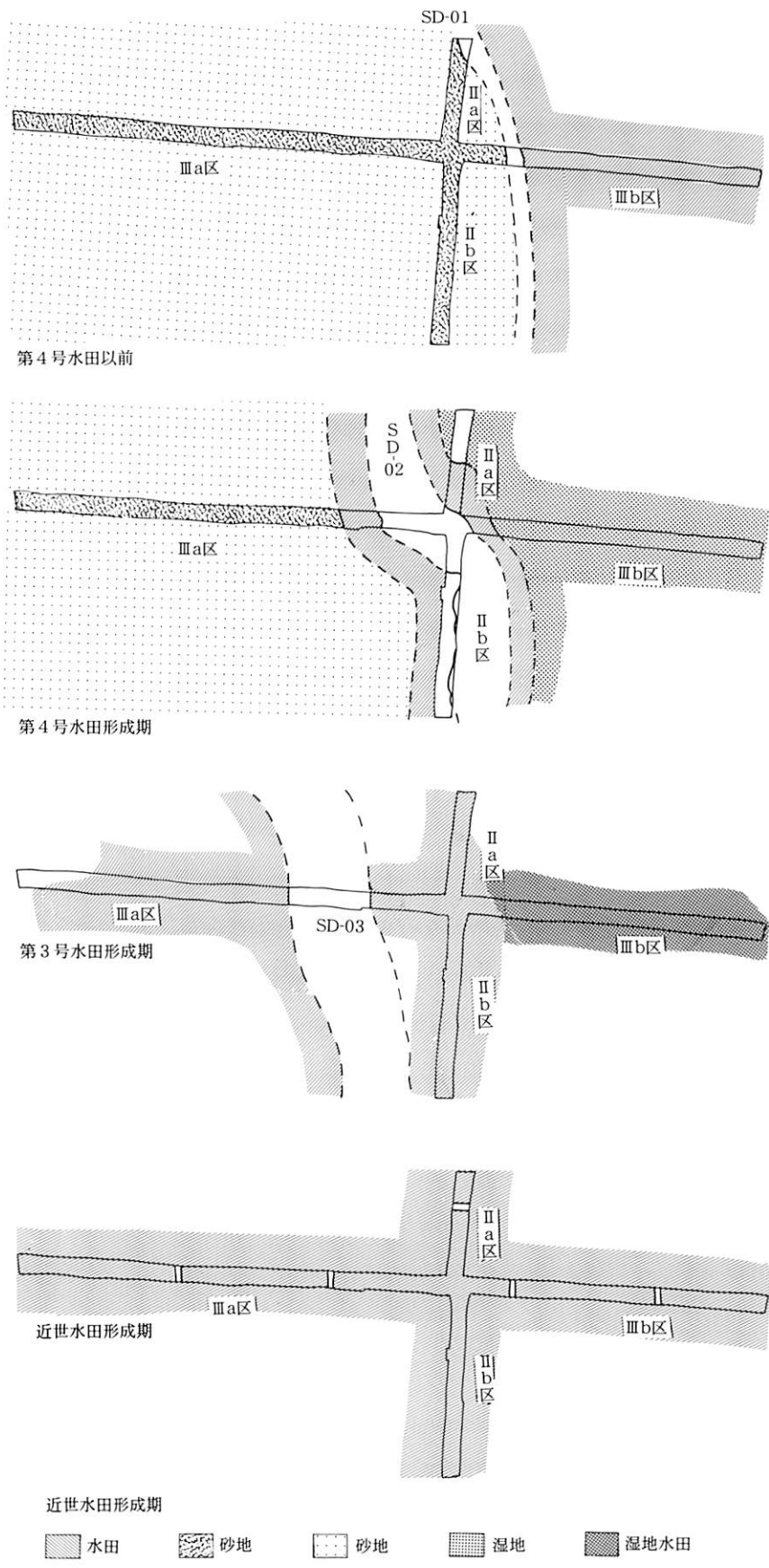
先ず、第4号水田が形成される以前をしてみる。溝状遺構だが、第1号は第4号水田の項で記載したが、当該水田と実際は絡んでおらず、また第2号水田と流路が一部重複してしまうと予想されること、更に第1号→第2号→第3号と徐々に西に移行してゆく様子が窺えるので、第1号溝状遺構は第4号水田形成前の流路だと推測される。そして、II a 区の南半、II b 区、III a 区、III b 区の第4号水田の存在する西端は、土層観察から自然の砂層が検出されており、III a 区では処々に深さ 20cm 未満の浅い溝状の窪みが検出されており、砂地に細い自然流



第125図
II b 層出土土錘
(1/1)

路が点々と見られるような地形だったと予想される。Ⅲb区の第4号水田の東端を示すD畦畔より東は、先ず流路に近いレンズ状の砂層の堆積が見られ、次に灰色の粘土層に遷移してゆき、砂地から湿地となっていたと推測され、それは第4号水田形成期も同様であったと考えられる。第2・3号溝状遺構の流路方向から第1号溝状遺構のそれを予測すると、Ⅲb区の流路状の砂層付近を南北方向に流れていた可能性が高い。

次に、第4号水田形成期を見てみる。第2号溝状遺構が第Ⅱ・Ⅲ調査区交差点付近からⅢa区東端、そしてⅡb区東端で検出されており、Ⅱa区の調査区外西側から南流して交差点付近で南東に屈曲し、再び南方向に曲がり、Ⅱb区東端を掠めるように南流していた推測される。Ⅱa区では第2号溝状遺構の北側に約10mほど水田が延び、それ以上北は土層観察から砂地が広がっていたと考えられるが、第1号溝状遺構の直上はやや湿地気味であったろう。Ⅱb区は全域に水田が造成されている。Ⅲa区は第2号溝状遺構の西側に約6mの東西幅の水田が形成されており、その西は砂地が広がっていただろう。Ⅲb区は、第2号溝状遺構の東側に約4mの東西幅の水田が造成されており、その東は砂地から湿地に移行



第126図 水田の拡大と自然の地形の変遷(1/2000)

する地形が拡がっていただろう。

次いで、第3号水田形成期は、調査区のほぼ全域に水田が拡がっている状況であるが、Ⅲa区東よりに第3号溝状遺構が検出されており、Ⅲa区の北側の調査区外から南側の調査区外をほぼ南北に流れて、水田を東西に分断していたと推測される。また、Ⅲb区は湿地の上に水田が形成されたが、他区域に比べると床土層は軟弱で、洪水により幾度も破壊を受けては造成し直した様子が土層図から窺える。

更に近世の水田層になると、方向の定まらない自然流路的な溝状遺構は姿を消し、近現代へとそのまま受け継がれる用水路を持つ、条里に乗った整然とした水田層が本調査区だけでなく、区画整理地区全体に拡がる様相を示す。Ⅱa区東端に近い位置に東西向きの用水路が1本、第Ⅲ調査区には南北向きの用水路が約22～26m間隔で垂直に交わるように並んでいる。だが、Ⅱb区には用水路が見られないが、現代の水掛けりでもⅡb区に相当する位置は南北に長い長短冊水田で用水路は存在しない。

また全時期を通じ、第2号溝状遺構の西側の第Ⅱ・Ⅲ調査区交差点付近には、第4号水田形成期以前には約20cmの比高差を持つ、北西から南に高まる急斜面が存在したと推測される。

ii) 水田の平面的・垂直的変遷 (第126図)

先ず、各水田の平面的な比較から時期を追って水田が拡大する様子を見てゆく (第126図)。

本調査区最古の第4号水田は、南北は北のA大畦畔からⅡb区南端までで約37m以上、東西はH・D大畦畔の間に約22mで、ほぼ南北に走り、水田を東西に分断する第2号溝状遺構部分を除き、調査区外を入れて水田総面積約620㎡以上と予想される。すぐ上面の第3号水田は、南北は調査区全域で約44m以上、東西は西のO大畦畔からⅢb区東端までで約108m以上で、北西から南東向きの走り、水田を東西に分断する第3号溝状遺構部分を除き、調査区外を入れて総面積約4,090㎡以上と予想される。その上面の第2号水田は調査区全域で検出されており、南北は約44m以上、東西110m以上、調査区外を含めて総面積約4,840㎡以上である。Ⅱ層の近世水田は区画整理対象地区全体が水田であり、第2号水田同様、本調査区内では約4,840㎡以上と言うしかない。

つまり本調査区内では、水田面積に大きな差が生じているのは第4号水田から第3号水田への変遷期で、第3号水田から第2号水田への変遷期にはさほどの増加は見られない。近世直下の第2号水田と近世水田への変遷期の水田の拡大については次章の考察に譲る。何となれば、第4号水田から第3号水田への変遷期に水田の面積は、本調査区内で約5.8倍となっている。

これには、地形的な問題とそれを克服する農業技術上の進展が絡んでいると考えられる。地形的な問題は、第4・3号水田の両者が存在する区域の地形を比較してみれば自ずと判ってくるだろう。即ち、第3号水田は存在するが第4号水田の見られない区域は、Ⅱa区北半、Ⅲa区西半、Ⅲb区の西端を除く大部分ということになるが、これらは地形的にどういう区域だろうか。Ⅱa区北半には第1号溝状遺構が存在する。その直上の第3号水田の床土層でも湿地気味であり、第4号水田形成期はより湿地傾向が強かったと推察される。Ⅱb区及び第2号溝状遺構より西側のⅢa区は砂地である。また、Ⅲb区は水田層の東側は砂地及び湿地である。そして、逆に第4号水田が造成されている区域は第2号溝状遺構の両岸約5,6mまでに限定される。何となれば、自然流路を用水路として利用し、その沿岸区域にのみ水田を造成しており、灌漑は流路の両岸5,6m以上に及んでおらず、灌漑技術が不十分だったと考えられる。また、流路の西側よりも東側の方がやや狭いのは、Ⅱa区北半及びⅢb区の東側で検出された湿地のためだと推測される。即ち、排水技術が不十分であったと予想されるのである。

更に、第3号水田から第2号水田への変遷で水田域は調査区内では余り拡大していないが、若干の拡大が地形的な差異ないしは灌漑技術上の向上を示すと推測されるので、見てみる。両水田の違いは前者がⅢa区の東端で東側は終っているのに対して、後者は調査区外まで延びていることである。ここで、第3号水田が更に東側に延びない理由を勘考してみると、用水路である第3号溝状遺構の岸との標高差にあると推察される。何となれば、

II a 区の北端は第3号溝状遺構の東岸と比高差が殆どなく、II b 区は北端が同東岸と標高差の差がなく、中央部や南端は約5～10cm 低くなっている。第3号溝状遺構の東岸に当るIII a 区東端は第II・III調査区交差点付近まで東岸より約20cm 高くなった後、III a 区に入って降下する一方で、最深部では東岸より約50cm 降下している。それに対して、第3号溝状遺構の西岸も東岸と同様の標高を示すが、III a 区の東端部分では東岸よりも約55cm 上昇して、それより標高の高い更に東側には水田が形成されていない。即ち、用水路である第3号溝状遺構から灌漑で水を揚げる技術が、第3号水田形成期には用水路との標高差が約55cm までが限度であったと推測されるのである。一方、第2号水田のIII a 区の東西の比高差は同程度の約50 cm であり、更に東方に上昇する傾向を見せるのに、水田はなお延びている。これは55cm 以上揚水できるほど灌漑技術が向上したことを表すのか、それとも、第2号水田形成期には調査区内で用水の役目を果たしたと考えられる溝状遺構が検出されていないことから、第1号→第2号→第3号と時間の経過と共に西に遷ったことからして、当期には溝状遺構が更に標高の高い西に移動し、揚水しなくとも水田を潤せるようになったかのいずれかと推察される。

次に、水田の垂直的な比較から、畦畔造成の変遷と水田の造成された窪地地形の変化の様相を追ってゆく。

まず、ほぼ南北向きの第II調査区から見てみる（第127図）。

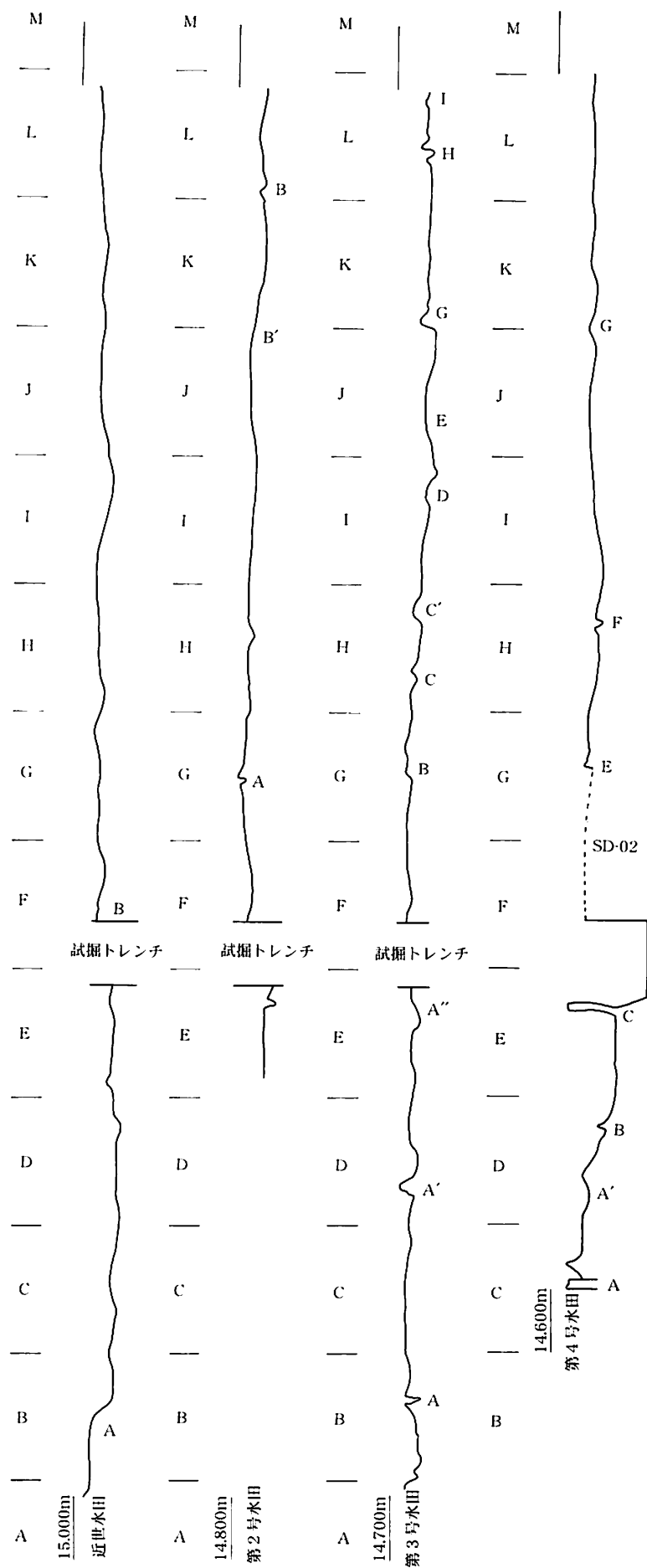
第4号水田はCグリッド中央のA大畦畔から水田が始まっており、E・F-9・10グリッドを境に存在する第2号溝状遺構に向って下り勾配を見せる。Dグリッド中央までは約14.4 mとほぼ同様の標高が続き、そこから約10cm ほど急に下るとB畦畔が検出されているが、その直前に畦畔状の盛り上がり認められ、A' 畦畔と称することにする。B・C畦畔間はほぼ同様のレベルが維持され、C畦畔で第2号溝状遺構と区切られる。第2号溝状遺構の東側はE畦畔から水田が再開されるが、C畦畔までより約20cm も急上昇している。これは、水田形成前の自然地形が既に北に低く、南に高いので、流路も南北岸で傾斜を持っていたと考えられる。第2号溝南岸のII b 区はE・F・Gの3畦畔が造成されているが、最も低い位置にF畦畔が、それを挟んで約10cm 高い位置にE・G畦畔が存在し、G畦畔以南は同レベルが継続する。II a 区の水田が約8mの南北幅で約20cmの標高差＝約2.5%の傾斜を持つものに対して、II b 区ではF畦畔の北までが約0.9%の下り勾配、そこから調査区南端までが約0.5%の登り勾配と、後者がかなり平坦な地形に水田形成されているのが判る。畦畔は傾斜の違いに関わらず、II a・b区ともに約10cmの標高差が生じることに畦畔を造成しているため、両区では畦畔間の距離に大きな差が生じている。

第3号水田は、流路が西にずれたためにE・Fグリッド間の窪地は解消され、II a 区北端に近いA畦畔からII b 区南端のI畦畔まで約10cmの標高差＝約0.3%の傾斜しか認められず、かなり平坦な地形であったことが窺える。殊に、II a 区では北端の第1号溝状遺構の名残を除き、約5cmの比高差しか有しない。平面的に検出された畦畔の他にD畦畔の北側、E・F畦畔境界付近、H畦畔南側にも畦畔状の盛り上がり認められ、他畦畔同様、水田標高の変移する位置に存在するので畦畔と認識しておき、それぞれA'・A''・C' 畦畔と称しておく。即ち、A・A' 間の標高を仮にXと置くと、 $A \cdot A' \text{ 間} = A' \cdot A'' \text{ 間} + 5\text{cm} = A'' \cdot B \text{ 間} = B \cdot C \text{ 間} = C \cdot C' \text{ 間} + 5\text{cm} = C' \cdot D \text{ 間} + 10\text{cm} = E \cdot G \text{ 間} + 15\text{cm} = G \cdot H \text{ 間} + 10\text{cm}$ となり、溝状のD・E畦畔間を除き、約5cmの標高の差異が生じることに畦畔を造成していることが判る。かなり小区画で水田が形成されていたと推測される。第2号水田は、II a 区の北側の大部分では近世のII層水田に削平を受けたと推測され、詳細は不明である。II a 区の南端から検出されるが、E・Fグリッド境界の試掘トレンチを挟んで標高差約10cmのギャップを有しているが、II b 区では南北幅約26 mで比高差約10cm と約0.4%の傾斜しか認められず、前時期同様かなりの平坦地である。畦畔はA・B畦畔しか平面的には検出されていないが、J・Kグリッド境界付近で急激に約10cm 落ち込む当りに畦畔状の盛り上がりが見取されるので、B' 畦畔と称しておく。つまり、本水田は約10cmの標高差が生じることに畦畔を造成していたと考えられ、すると、II a・b区境界付近の試掘トレンチを挟んだ約10cmのギャップ地点にも、畦畔が形成されていた可能性が高い。

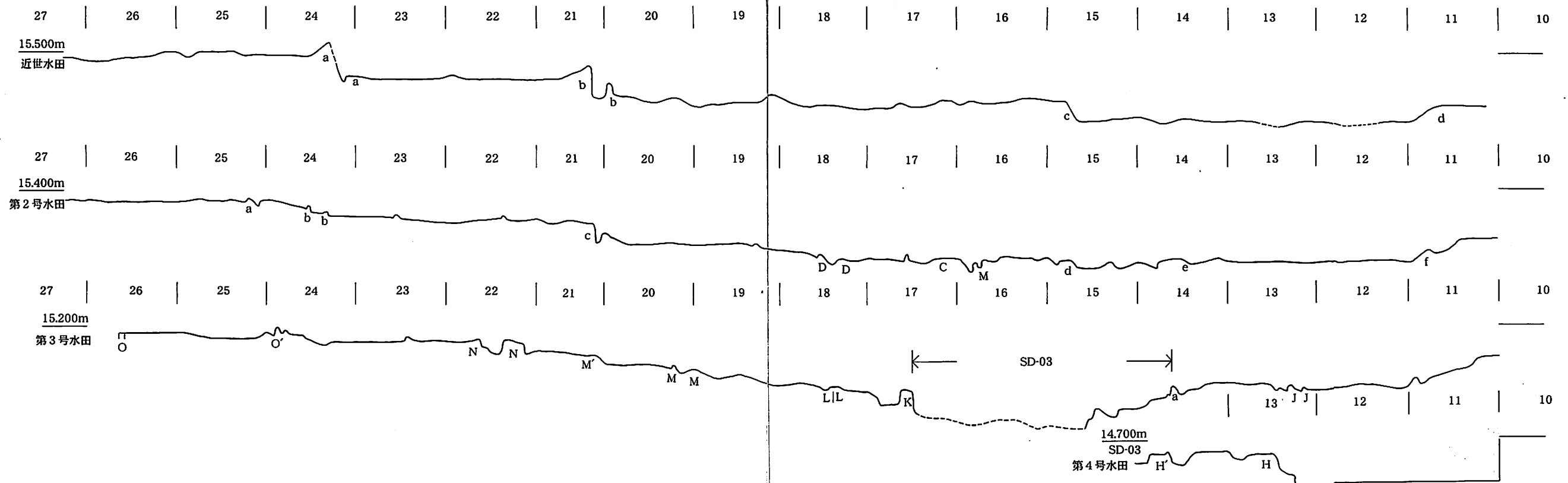
近世のⅡ層水田は、平面的に調査はしていないが、Bグリッド中央に比高差が約15cmの落ち込みが認められ、土層観察から、その直上には近代・現代の2枚の用水路付きの畦畔が検出されている。近世の水田は近現代の水田とほぼ同様の水掛けりを利用していたと推測されることから、近世でもこの位置に用水路付きの畦畔が存在したと考えられるので、A畦畔と称しておく。また、前代同様E・Fグリッド境界付近の試掘トレンチを挟んで南北で約10cmのギャップを有しており、この位置にも畦畔が存在した可能性が高く、B畦畔と称しておく。Ⅱb区は若干の高低を示しながらも、ほぼ同様の標高を維持し続ける。現代の水田でもⅡb区に相当する位置は一枚水田である。畦畔は約10cm以上の標高差が生じることによって造成するようである。また、第4・3号水田間、第3・2号水田間の標高差が約20cm持つのに対して、第2号・Ⅱ層水田間の標高差が約10cmしかないことから、Ⅱ層水田の造成は大規模で深く掘削したと推測され、そのためにⅡa区の大部分の第2号水田が削平されたと考えられ、調査区の大部分で第1号水田がごく部分的にしか検出されないのも同様の理由と思われる。

次いで、ほぼ東西向きの第Ⅲ調査区を見ていくが、東西の距離が長いので、Ⅲa・b区に分けて、先ずⅢa区を試みる(第128図)。

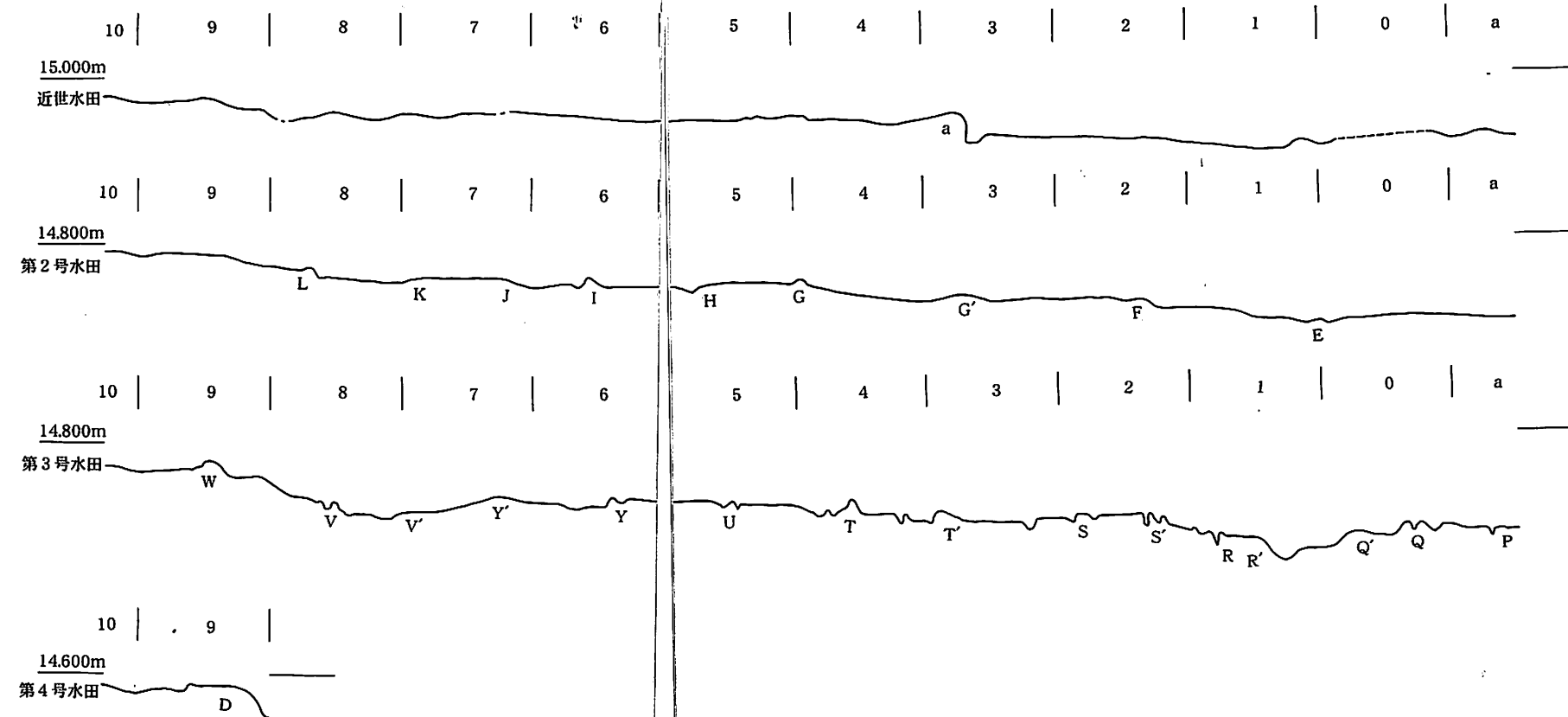
第4号水田だが、第2号溝状遺構の西岸のH畦畔から東西幅約5mのみ検出されており、ほぼ平坦な地形に造成されていて、14・15グリッド境界付近から上面の第3号溝状遺構に削られているが、その直前に溝状の落ち込み



第127図 第Ⅱ調査区の水田の垂直的変遷(1/200, 断面1/40)



第128図 IIIa区の水田の垂直的変遷(1/200, 断面1/40)



第129図 IIb区の水田の垂直的変遷(1/200, 断面1/40)

と畦畔状の盛り上がりか認められ、H' 畦畔と称しておく。

第3号水田は、14 - 17 グリッドで検出された第3号溝状遺構を挟んで、東西両方向に昇り勾配の地形に水田が造成されている。東側は平面的には、第3号溝状遺構と水田を区切るa畦畔と13グリッド東側にJ畦畔が検出されたただけだが、11グリッド西端から始まる急激な傾斜地形の直前に畦畔状の高まりが見られるので、J' 畦畔と称しておく。a・J畦畔間とJ・J' 畦畔間の水田は約5cmの標高差を有する。西側は平面的には、第3号溝状遺構と水田を区切るK大畦畔、L・M・N畦畔、水田の西のまりを示すO大畦畔が検出されたただけだが、20・21グリッド境界付近と24グリッド西端に畦畔状の盛り上がりか認められるので、M'・O' 畦畔と称しておく。M' 畦畔を除き、少なくとも土層観察からはどの畦畔も中央に溝状の窪みを有している。それぞれの畦畔間の水田の平均標高は、K・L間= 14.65 m、L・M間= 14.75 m、M・M' 間= 14.85 m、M'・N間= 14.95 m、N・O' 間= 15.05 m、O'・O間= 15.15 mと、約10cm標高が高くなることに畦畔が造成されているのか判る。東側で平均約2.3%の傾斜を、西側で約1.7%の傾斜を有している。

第2号水田形成期には、流路は更に西側に移動したと推測され、前代の第3号溝状遺構は窪地として痕跡を留めている。平面的には部分的な調査しかできなかったため、D・C・M畦畔しか検出できなかったが、土層観察から、25グリッド東端、24グリッド中央、21グリッド東端、15グリッド西端、14グリッド中央、そして11グリッド西端から始まる急激な傾斜の直前に畦畔状の盛り上がりか認められるので、a～f畦畔と称しておく。d・e畦畔間が標高約14.7mと最も低く、前代の最低地点である第3号溝状遺構の位置より若干東にずれており、そこから東西両方向に昇り勾配を示す。e・f間はそれに+約5cm、d・M間、M・C間、C・D間は+約10cm、D・c間は+約20cm、c・b間は+約35cm、b・a間は+約45cmとなっており、M・C畦畔以外は、約10～15cmの比高差が生じることに畦畔が造成されていることが判る。何となれば、M・C畦畔は若干の高低のぶれで畦畔でない可能性もある。最低標高のd・e畦畔間から、東側は平均で約1.8%の、西側は平均で約1.6%の傾斜を有しているが、前代の第3号水田形成期に比べると、東側はかなり緩やかに、西側でも若干緩やかになっている。

近世のII層水田は平面的には調査していないが、土層観察から、24グリッド東端と21・20グリッド境界付近に溝付きの畦畔が、15グリッド西端と11グリッド西端に畦畔状の盛り上がりか認められるので、A-D畦畔と称しておく。標高の最低の地点はC・D畦畔間で、前代とほぼ同様の地点だが東に延びている。標高は約14.9mで、b・c間がそれに+約15cm、a・b間が+約35cm、aより西が+55cmとなっており、約15～20cm標高が高くなることに畦畔が造成されているのか判る。d畦畔以西は一樣に上昇しており、傾斜は約1%と前代より緩斜面化している。

次にⅢb区を見てゆく(第129図)。

第4号水田は、第2号溝状遺構の東岸に、試掘トレンチを挟んでいるため正確には判らないが、約3～4mの東西幅の水田と、9グリッド東半に水田の東端を示すD畦畔が平面的にも検出されており、その東側は約15cm降下してから湿地となっている。

第3号水田は、西端は試掘トレンチのために判然としないが、Ⅲa区東端の急激な高まりから、約25cm降下した標高で水田が始まっている。よって、Ⅲa・b区境界付近に約25cmの高さを持つ大畦畔が存在したと推測される。平面的にはW・V・Y・U・T・S・R・Q・Pの9畦畔が検出されている。他に、6・7グリッド境界付近、7グリッド東より、3グリッド西端、2グリッド西より、1グリッド中央、Oグリッド西端といった標高の転換点に畦畔状の盛り上がりか土層観察から認められるので、V'・T'・S'・R' 畦畔と称しておく。W畦畔より西が最も高く標高約14.65mであり、W・V畦畔間がそれより約-15cm、V・V' 間で約-30cm、V'・Y' 間で約-25cm、Y'・Y間でY・U間、U・T間で約-20cm、T・T' 間で約-30cm、T・S間、S・S' 間で約-35cm、S'・R間、R・R' 間で約-45cm、R'・Q' 間で約-50cm、Q'・Q間、

Q・P間で約-45cmとなっているが、15・10・5cmと割合ランダムな標高の変化によって畦畔が造成されており、また、畦畔の間隔も1～3mとかなりランダムで、他地区のどの段階の水田とも相違する。これは、湿地に造成され、なお水田盤が軟質なため、大規模な水田は形成できなかったのではないかと推察される。実際に複数度の洪水による破壊の痕跡が看取されている。また、調査区西端からQ'畦畔までは一様下っており、約1.5%の傾斜を有している。

第2号水田も、西端は試掘トレンチのため判然としないが、Ⅲa区東端の急激な高まりから、約20cm降下した標高で水田が始まっている。よってⅢa・b区境界には約20cmの高さを持つ畦畔が存在したと推測される。平面的には、L・K・J・I・H・G・F・Eの8畦畔が検出されている他、3グリッド西端の標高の変移点に畦畔状の高まりが認められるので、G'畦畔と称しておく。L畦畔の西側が最も高く標高約14.70mを示し、L・K畦畔間、K・J畦畔間でそれぞれ約-10cm、J・I畦畔間、I・H畦畔間、H・G畦畔間で約-15cm、G・G'畦畔間、G'・F畦畔間で約-25cm、F・E畦畔間で約-35cm、E畦畔より東で約-40cmとなっている。即ち、5～10cmの標高の変移ごとに畦畔が造成していることが判る。平面的には、およそ4～2mの間隔で畦畔が造成され、方向的な面からも、台形状の水田が組み合わされていることが推測される。但し、J・I畦畔間が約1mと間隔が短いのは、違う方向の畦畔がぶつかる手前だからだと考えられる。また、Ⅲb区内は一様に西から東に下っており、約1.0%の傾斜となっており、前代より若干緩やかになっている。

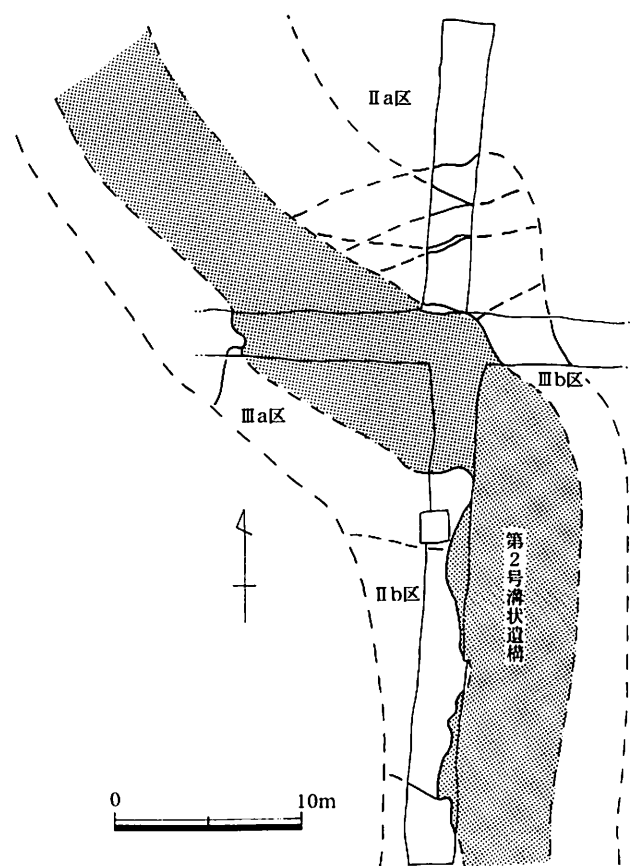
近世のⅡ層水田も、Ⅲa区の東端の水田とⅢb区の西端の水田では約15cmの比高差を有しており、やはりⅢa・b区境界付近には、高さ15cmを有する畦畔が存在したと推測される。平面的な調査は行っていないが、土層観察から3グリッド西端に溝付きの畦畔が看取されるので、a畦畔と称しておく。Ⅲa区東端の水田が標高約14.9mであり、それを基準にすると、a畦畔の西側は約10cm、a畦畔の東側は約30cmとなり、およそ、10ないし20cmの標高差で畦畔が造成されていたことが判る。やはりⅢb区内では西から東に一様に下っており、約0.6%の傾斜となっていて、前代、前々代より一段と緩斜面化している。

ii) 水田の平面的な復原と畦畔についての予測 (第130図)

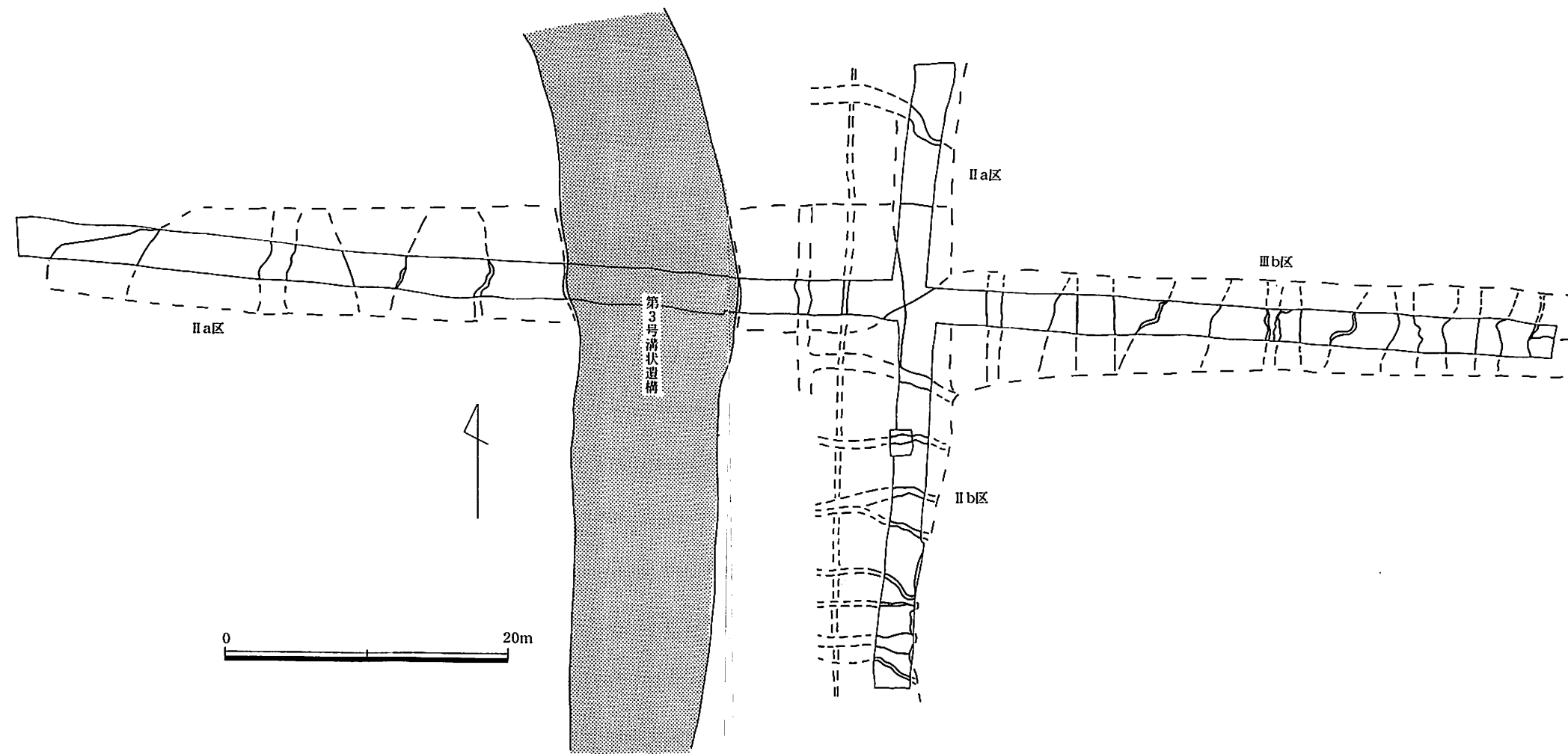
ここでは、畦畔の方向や水田下面の標高などから、水田面ごとにそれぞれの内部に区画された小水田の平面形や水田域について予測的に復原してゆく。

第4号水田 (第130図)

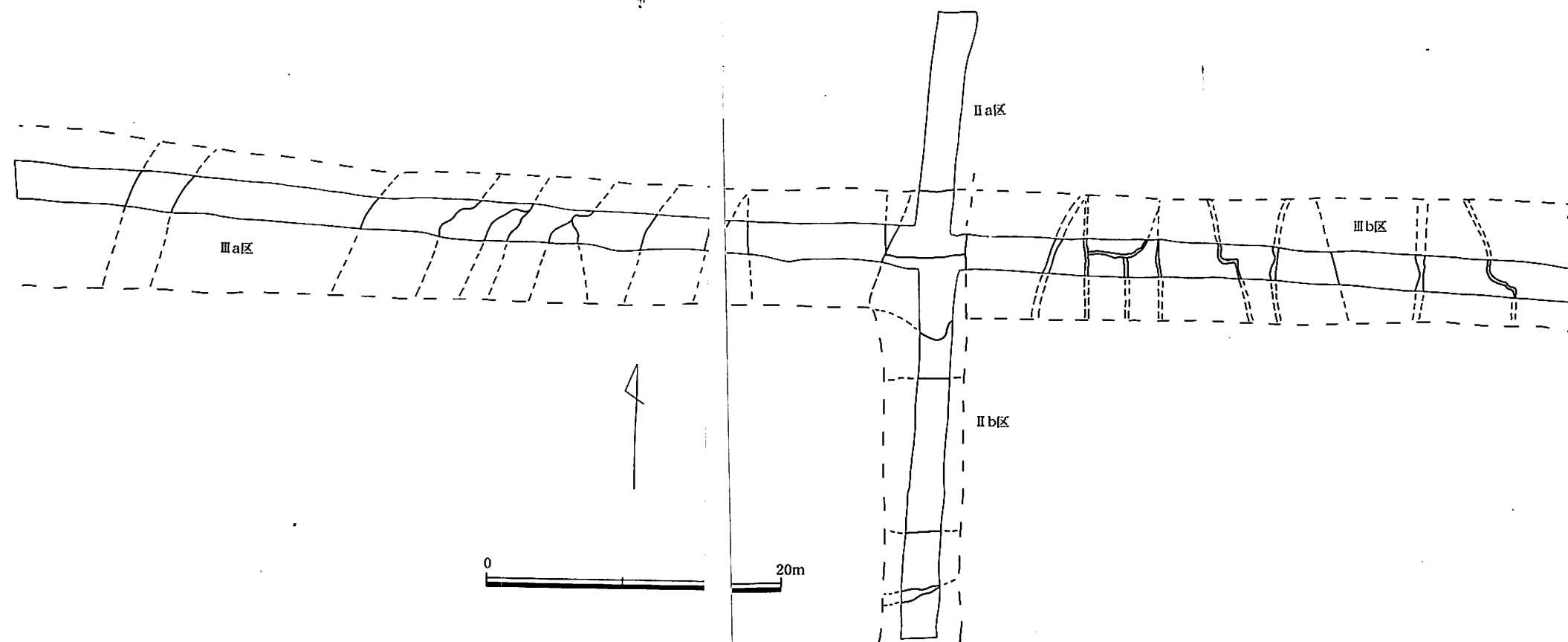
本水田は中央に第2号溝状遺構を挟んで、その東西岸に形成されており、その東西幅はどんなに広くても10mを超えることはなく、一般的に5～6mであったと推測される。水田の東端を示すと考えられるA・D畦畔はかなり大規模に造成されており、西端を示すH'畦畔は上面の第3号溝状遺構に削平されているため判然としないが、やはり大規模に造成されていた可能性が強い。水田と流路を区切る畦畔のうち、東岸のC畦畔は約30cmの高まりを残しており、やはり大規模に造成されているが、西岸のH・E・F畦畔は数cmの盛り上がりしか残



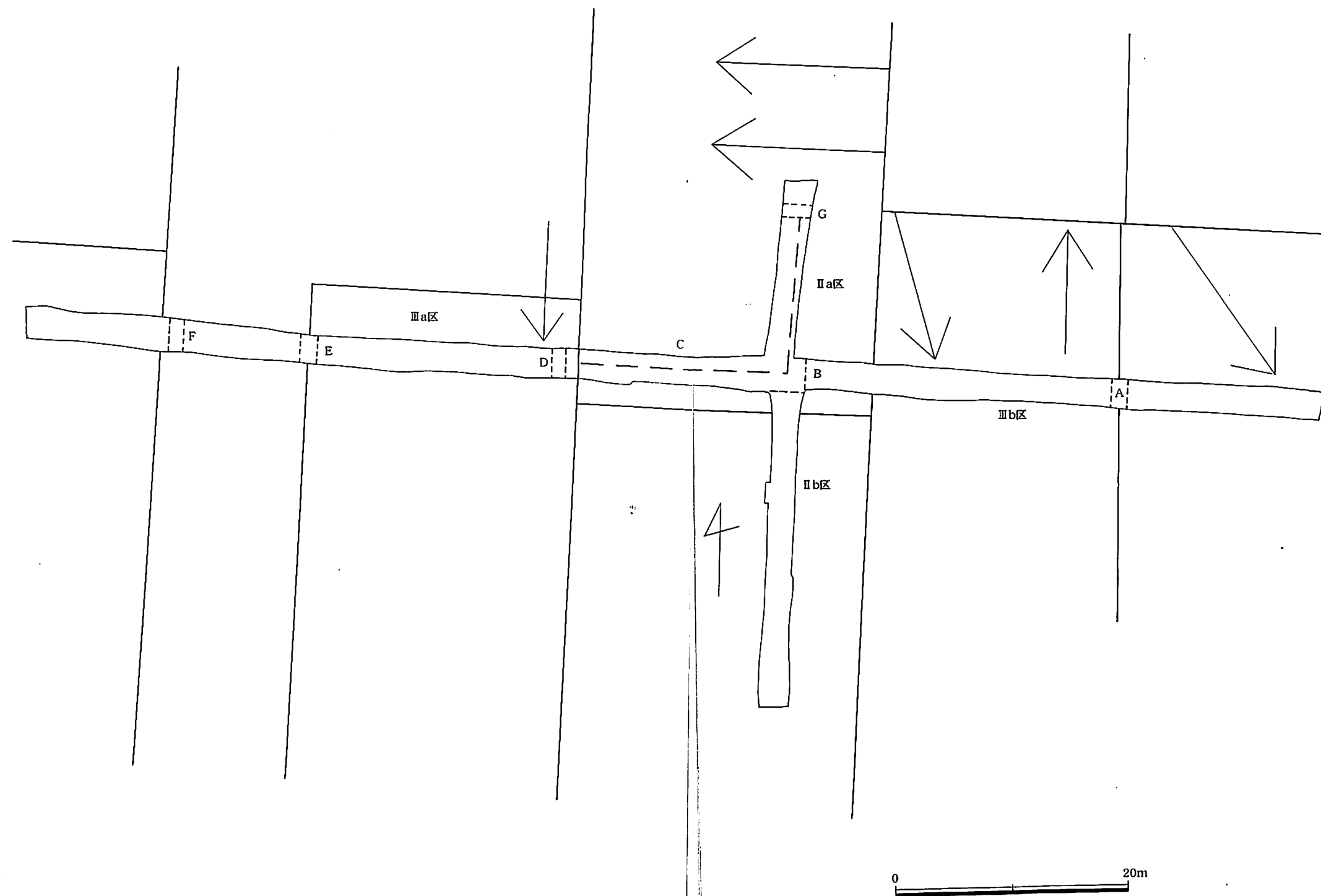
第130図 第4号水田の平面形の復原(1/400)



第131図 第3号水田の平面形の復原(1/400)



第132図 第4号水田の平面形の復原(1/400)



第133図 II層水田と現代の水田の比較(1/400) (大分市歴史資料館『FunaiⅦ』付図3改)

しておらず、さほどではない。これは、屈曲部に当るC畦畔の近くが、南流してくる水流が最も激しく、Ⅲb区の東側でも東岸の方が水流が強いからだと推察される。

東西は幅が狭いため、主に畦畔は南北の標高差によって必要になってくると考えられ、Ⅱa・b区ともに約10cmの標高差ごとに造成されており、傾斜の大きいⅡa区では南北に狭い間隔で畦畔が造成されており、傾斜のごく緩やかなⅡb区では南北に広い間隔で畦畔が形成されている。従って、区画された小水田も北部では小さく、南部では大きな面積を有している。形状は長方形ないしは台形であったと推測される。

第3号水田（第131図）

本水田も第3号水田を挟んで、その東西に形成されている。畦畔の造成状況は東西で大きく異なる。即ち、西側は約10cmの標高差が生じることにより畦畔を造成しており、その東西幅は約4m以上で、平面形状はほぼ台形を呈しており、長短の上辺と下辺を組み合わせた形状となっており、西側に比べて倍ほどの面積となっている。それに対して東側は区画された小水田は狭く、平面形状も台形・長方形三角形を組み合わせたものとなっている。但し、Ⅱa区では畦畔の間隔は4～5mとⅢa区に近く、Ⅱb・Ⅲb区では3m未満となっている。これは、水田下面の標高が約14.6mを境界にしているようで、それ以上では小水田が広く、それ以下では狭くなる傾向にあるようである。また、なお第3号溝状遺構の東岸といってよく、下面が砂地である第Ⅱ調査区では、約5cmの標高差が生じることにより畦畔が造成されていることでは規格的だが、湿地の上に形成されたⅢb区では約5・10・15cmとランダムな比高差で畦畔が造成されている。これは湿地で床土が軟弱な上に、Ⅲa区が第3号溝状遺構の西岸より標高が高いのに対し、Ⅲb区はその東岸より低い下り勾配の斜面となっており、広い水田は給水の際の水の管理が難しかったからであると考えられる。また、流路の東岸より低いと言うことはその洪水の影響を受け易かったと推察され、洪水による複数水田破壊の様子が土層観察から窺えることは既述した。

第2号水田（第132図）

本水田は、近世のⅡ層水田に削平されているⅡa区の様相は判然としないが、どの地区もほぼ10cmの標高差が生じることにより畦畔を造成している。そのため、約0.4%の傾斜しか有さないⅡb区で畦畔間隔が広く、約1.6%の傾斜を有するⅢa区、約1.0%の傾斜を持つⅢb区では畦畔間隔が狭くなっている。また、Ⅲa区・Ⅱb区では、小水田の平面形状が長方形化する傾向にあるのに対して、Ⅲb区では前代の名残が形状が複雑で、なお台形・長方形・三角形の形状を組み合わせている。用水は、第1号→第2号→第3号と溝状遺構が西遷していたことを考えると、更にⅢb区の西側へ移動した自然流路を管理して使用していたと推測される。

Ⅱ層水田（第133図）

本水田面以降、区画整理区内全域に水田が広がったことが試掘から確認されており、初瀬井路の成立以降と考えられる。畦畔はどの調査区でも一様に約10～20cmの標高差が生じることにより畦畔が造成されている。しかも、現代の水田図と比較してみたところ、B畦畔が若干西ずれている以外は、畦畔の位置が現代のそれとほぼ一致している。即ち、ほぼ現代の水田と同様の長短冊形を呈していたと考えられる。即ち、前代までは自然の流路を管理して用水とし、小水田が台形状を主体としていたことに鑑みると、本遺跡では条里区画の成立は初近世初頭と考えられる瀬井路造成後のこのⅡ層水田の時期であると推察される。なお、現代の水田の畦畔がない位置に唯一検出されたG畦畔だが、水掛かりの方向と一致しており、また土層観察から近代・現代の水田面でもほぼ同位置に溝状遺構が土層観察から看取されていることから、畦畔でなくとも少なくとも用水路が存在したと推測され、やや東側に東西向きに造成された畦畔が、少なくとも最近まで延びていた可能性もある。

【引用・参考文献】

桒 政博 1987 「第4章 四 水への執念」『大分市史 中』 大分市編さん委員会

大分市歴史資料館 1998 「付図3 大字賀米・中尾・東院・宮苑の水路利用状況図」『Funai 府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅳ』

第8表 第Ⅱ・Ⅲ区出土土器・磁器観察表

図版 番号	遺物 番号	出土遺構 出土区	種類	器種	時期	胎土		色調		器面調整		法量 (cm)			備考
						混和材	粒子	内面	外面	内面	外面	口径	器高	底径	
78	1	第2号水田 E・F-8	白磁	碗	11C末～ 12C	—	—	灰白色	灰白色	—	—	—	—	(6.0)	反転復元 白磁Ⅳ類
78	2	第2号水田 F-0	白磁	碗	11C末～ 12C	—	—	灰白色	灰白色	—	—	(19.6)	—	—	反転復元 漆接合 白磁Ⅳ類
78	3	第2号水田 F-10・11	土師器		13C～14C	石英 角閃石 赤色粒子	微粒	褐灰色	褐灰色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	(6.6)	反転復元 回転糸切
78	4	第2号水田 E・F-6	土師器	坏	14C～15C	石英 長石 赤色粒子	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	(14.5)	(2.3)	(10.4)	反転復元 回転糸切
78	5	第2号水田 F-4	土師器	小皿	14C～15C	石英 金雲母	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ目 ナデ	(9.4)	1.1	(7.6)	反転復元 回転糸切
78	6	第2号水田 M-10・11	須恵系土器		中世	角閃石 白色粒子	微粒	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	(10.0)	反転復元 東播系 底部片 回転糸切
78	7	第2号水田 E・F-6	土師器	小皿	14C～15C	石英 角閃石 長石 赤色粒子	微粒	橙色	橙色	ナデ	ナデ ケズリ	(6.4)	1.2	(5.0)	回転糸切
78	8	第2号水田 F-a	土師器	小皿	14C～15C	石英 角閃石	微粒	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	—	(1.0)	—	回転糸切
78	9	第2号水田 F-3	瓦質土器	坏	14C～15C	石英 雲母 角閃石 白色粒子 赤色粒子	微粒	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	ナデ	ナデ ケズリ	(14.2)	2.7	(10.0)	反転復元
78	10	第2号水田 F-2	土師器	小皿	14C～15C	石英白色粒子	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ目 ナデ	ナデ	(9.0)	1.2	(7.8)	反転復元回転糸切
78	11	第2号水田 G-10・11	土師器	坏	13C～14C	長石 角閃石 赤色粒子	微粒	浅黄褐色	濃灰色	ナデ	ナデ	—	—	(9.0)	反転復元回転糸切
78	12	第2号水田 G-10・11	瓦質土器	鍋	中世前半	雲母 金雲母	微粒	濃灰色	濃灰色	ハケ目	ハケ目	—	—	—	口縁部片
109	1	第3号水田 D・E-19	土師器	坏	14C～15C	石英 角閃石 赤色粒子	微粒	橙色	橙色	ミガキ	ミガキ ケズリ	—	—	—	口縁部片
109	2	第3号水田 D・E-25	土師器	甕	古墳時代	石英 角閃石 長石 白色粒子 赤色粒子	微粒	にぶい 黄褐色	にぶい 浅黄褐色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	—	
109	3	第3号水田 F-0	土師器	小皿	14C～15C	石英 長石 赤色粒子	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	(8.2)	(1.1)	(7.0)	反転復元
109	4	第3号水田 F-0	土師器	坏	14C～15C	石英 長石 雲母	微粒	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ ケズリ	(10.2)	(3.0)	(7.8)	反転復元回転糸切
109	5	第3号水田 D・E-25	土師器	碗	古代末～ 中世初	石英 長石 雲母	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	(8.0)	反転復元 底部内面に鉄付着
109	6	第3号水田 E-16	土師器	甕	古墳後期	石英 金雲母	微粒	橙褐色	にぶい 橙色	ハケ目 ナデ	ナデ ケズリ	(18.4)	—	—	反転復元 外面にハケ目
109	7	第3号水田 E-21	土師器	碗	9C～10C	石英 長石 角閃石 雲母	微粒	橙色	橙色	ナデ	ナデ	—	—	(8.6)	反転復元 高台付碗の 高台部分
122	1	第2号 溝状遺構	土師器	小皿		石英 金雲母	微粒	橙色	橙色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	(10.8)	反転復元
122	2	第4号 溝状遺構 D・E-19	弥生土器		弥生中期	石英 長石 角閃石	細粒	赤色褐色	橙褐色 黒色	ナデ	ハケ目 ナデ	—	—	6.9	底部片
122	3	第4号 溝状遺構	弥生土器	鉢	弥生後期	角閃石雲母金雲母	微粒	橙色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	(26.8)	—	—	反転復元 外面にハケ目
124	1	Ⅱ層E-18・ 19	瓦質土器	掃鉢		石英 角閃石 白色粒子 赤色粒子	微粒	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	—	—	—	口縁部片
124	2	Ⅱb層 G-10・11	土師質 土器	鍋	14C～15C	石英 長石 赤色粒子	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ ケズリ	—	—	—	煤付着口縁部片
124	3	第Ⅱb調査区 中央トレンチ 埋土	白磁	皿	中世後期 (14世紀?)	—	—	灰白色	灰白色	—	—	(14.5)	—	—	中国産 型押彫刻紋 浮彫
124	4	第Ⅱb調査区 中央トレンチ 埋土	青磁	皿	15世紀	—	—	オリーブ 灰色	オリーブ 灰色	—	—	(12.0)	—	—	反転復元 龍泉窯系 口縁部に貫入あり
124	5	Ⅱb層 G-10・11	土師器	小皿	14世紀	石英 雲母 角閃石 赤色粒子	微粒	灰白橙 にぶい橙	灰白橙 にぶい橙	ナデ	ナデ ケズリ	(8.1)	1.7	(6.4)	反転復元
124	6	第Ⅱa調査区 東壁 マンガン層	土師器	小皿		長石 角閃石 赤色粒子	微粒	橙色	橙色	ナデ	ナデ ケズリ	(9.6)	1.9	(6.8)	反転復元口縁部片
124	7	Ⅱb層 L-10・11	土師器	坏	14C～15C	石英	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ目	ハケ目	(16.8)	2.7	(12.0)	反転復元回転糸切
124	8	Ⅱb層 E・F-7	土師器	皿			微粒	灰白	灰白 灰色		指ナデ	(10.0)	—	—	反転復元 京都系 柄約に転用
124	9	XVⅡ層 E-19	弥生土器		弥生中期 前葉	石英 長石 角閃石 雲母 赤色粒子	細粒	淡黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ハケ目 指ナデ	—	—	—	口縁部片
124	10	遺跡一括	弥生土器	脚付 鉢	弥生後期										
124	11	第3号水田 直下E-20・ 21	弥生土器	壺?	弥生後期	石英 金雲母	微粒	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ ケズリ	ナデ	(19.6)	—	—	反転復元
124	12	XXⅠ層 D・E-27	弥生土器		弥生中期 前葉	石英 長石 角閃石 赤色粒子	細粒	茶褐色	黄灰褐色	ナデ	ナデ	—	—	6.2	底部片
124	13	第3号水田境 D・E-25	弥生土器		弥生中期	石英 赤色粒子	微粒	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	ナデ	ハケ目	—	—	—	反転復元 頸部に一条の突帯

第5章 考察

1. 賀来西土地区画整理地区の地形復原

調査地は、賀来川の左岸に位置することからも河川の影響が強く見られる。また、北側丘陵の影響もあり複雑な地形であったと思われる。

第134図（トレンチ配置図）のA－B'－A'、B－B'、C－C'、D－D'、E－E'、F－F'の位置で仮想の断面を設定した。全体を通して上層2層の耕作土・床は現代の田畑である。また、調査による制限も入るため、比較的上層までの採掘になる。そのため、鍵層になる層序が見受けられない。堆積環境も複雑であり、あまり広域な堆積が無い。そのため、仮想断面線に隣接するトレンチ断面も同時に載せている。

調査区ほぼ中央を、東西方向に見ると、A－B'－A'断面では、E－47トレンチを中心にE－46トレンチ、E－49トレンチの範囲で微高地状に盛り上がっており、E－49付近で低くなる。またE－20トレンチからE－19トレンチ付近で高くなっている。その後E区とB区を境界に、E区では安定した平地が続きB区ではE－12トレンチ付近を中心に低くなっている。次に調査区中央を南北方向に見ると、B－B'断面では、A－8トレンチ、A－10トレンチを中心に、南北方向に低くなっていることがわかる。また、北側より南側が、砂質が強い状況がうかがえる。

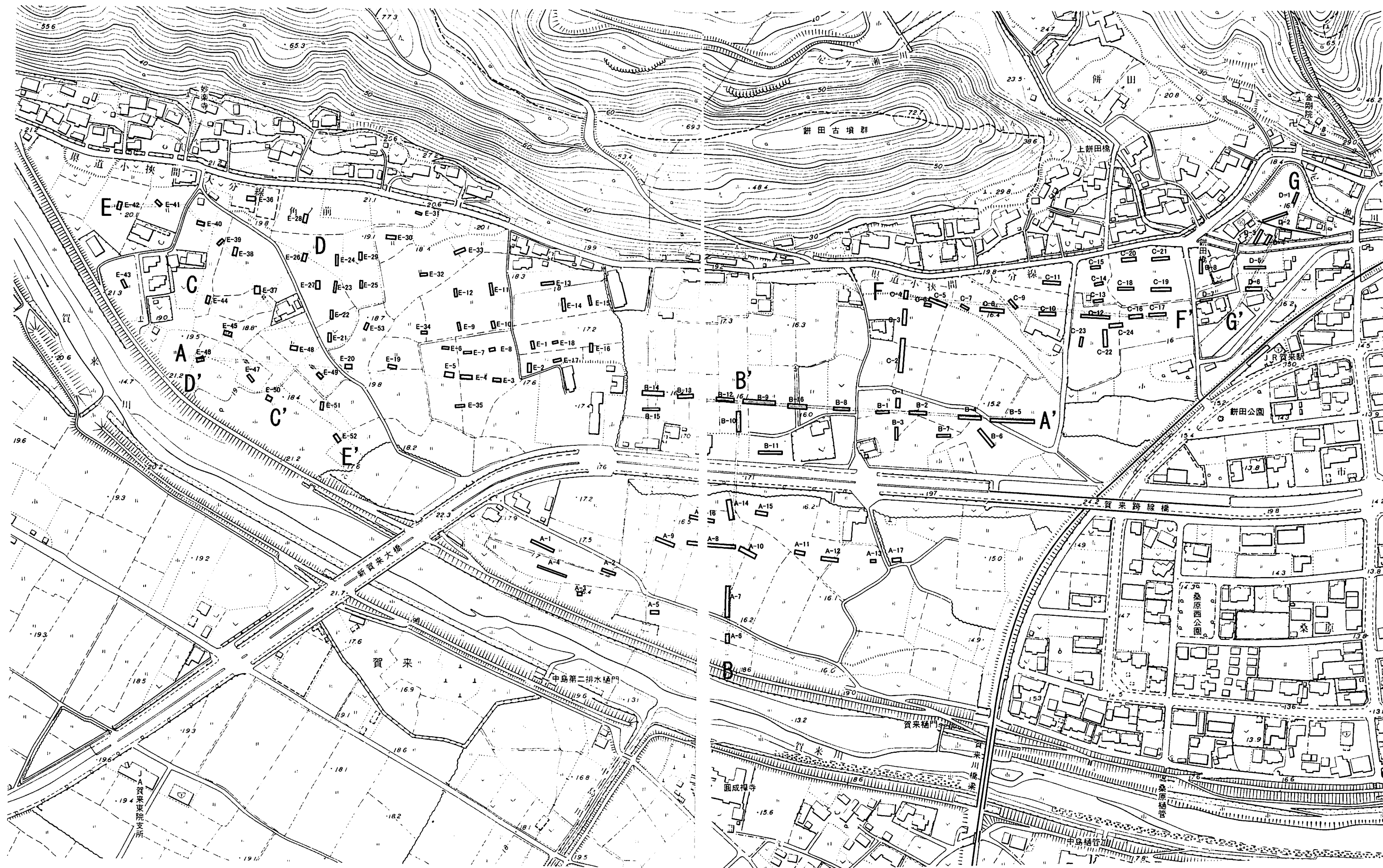
この2本の断面を見る限りでは、賀来川に沿って自然堤防が走っており、その北側に後背湿地が広がる様な形になるが、この部分はいくつかの見方が出来る。粒度の詳細がわからないため、確かなことは言えないが、C－C'断面、D－D'断面、E－E'断面を見るとE－41トレンチ、E－37トレンチ付近が低いこと、またE－50トレンチ、E－51トレンチ付近で下層に砂礫が多く入っていることなどから、E－45トレンチを中心に賀来川とE－E'断面に沿うような形で中州状になっていた可能性も考えられる。この場合A区の自然堤防状になっている部分も中州の様な形になる可能性も考えられるが、A区は比較的安定した形で下流に向かって標高が下がるくらい的高低差しか見られないことから、自然堤防と考える方が妥当と思われる。又は単純に賀来川に沿って自然堤防が走りその北側に後背湿地が広がる形になっておりその一部に流入河川または自然地形を使った人為的な溝が伴っているという見方も考えられる。

断面線は入っていないが、E－21トレンチからE－23トレンチ付近に向かっては安定した微高地が見受けられる。これはA－B'－A'断面でも見られる。また、E－23トレンチからE－24トレンチに向かって急激に下がっており、E－24トレンチ付近には湿地が広がる。この湿地の広がりについてはわからない。しかし、F－F'断面の西側まで広がる可能性も考えられる。これは、A－A'断面のB－14トレンチからB－2トレンチまでの水田面数が一定していないことや、土層などから調査区B区の北側の未調査部分を中心に円を描く様な堆積がうかがわれることからである。

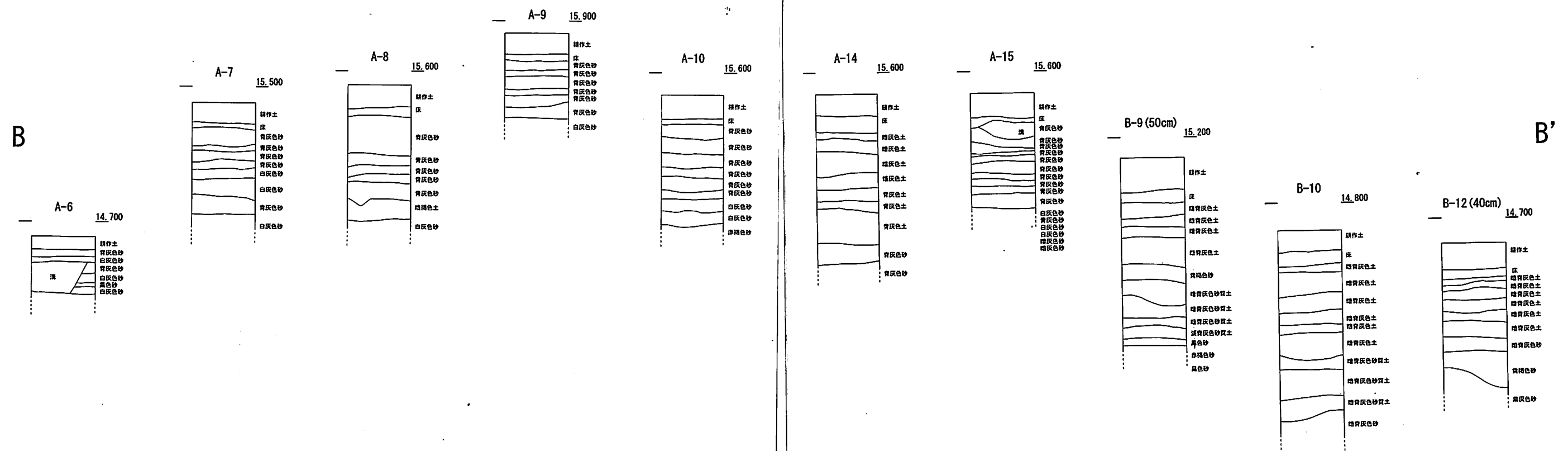
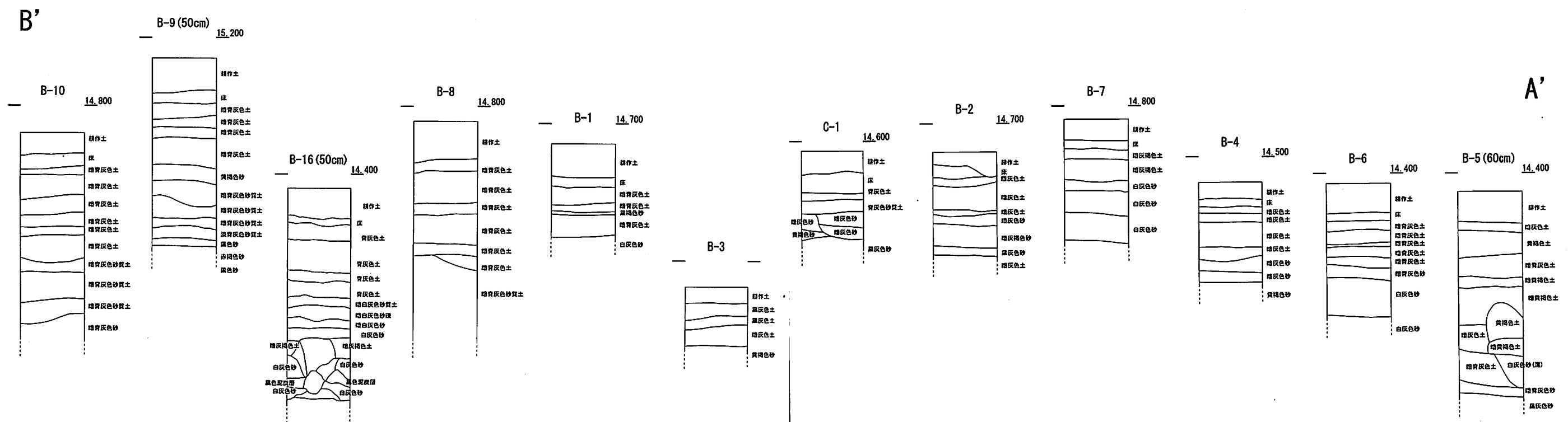
調査区東側のF－F'断面では西側で低湿地、東側で微高地と谷と見受けられる。低湿地は南向きに広がり、調査区のC区北側に安定した微高地があり、その微高地の飛び出た部分にあたるものと思われる。G－G'断面の東部分では小規模な湿地 または、F－F'断面の湿地に関係する堆積が見られる。また、西側については、少し高くなっており水田堆積物も中世以降と思われる堆積物になる。

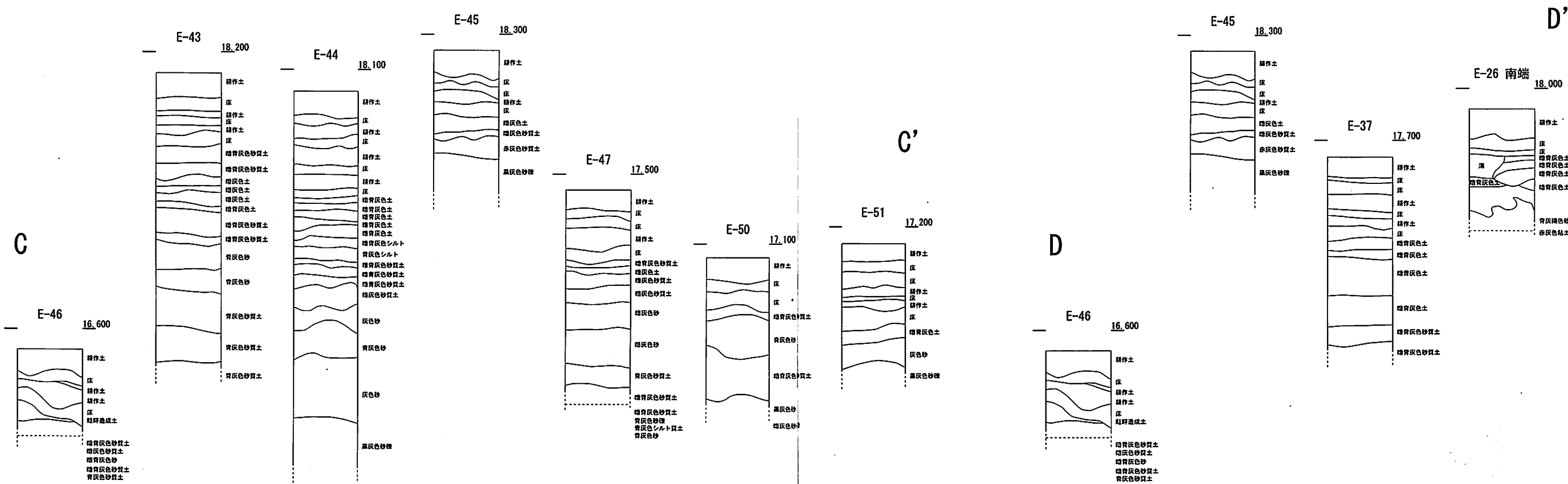
これらのことより、調査区全体をまとめて見ると、E区中央付近（E－23トレンチ）と調査区C区北側に微高地があり、調査区B区北側の未調査地点を中心として、湿地が広がり、調査区A区には自然堤防があり、調査区E区南側では中洲状の地形が広がっている。または、賀来川に沿って自然堤防が走っておりその一部に流入河川又は谷や溝の様なものが走っている状況が考えられる。

今回の考察は、砂の粒度・淘汰度、礫の円磨度などのデータが少ないため正確な事は言いかたなく、根拠を裏付ける事実が少ないため参考程度に留めて頂きたい。



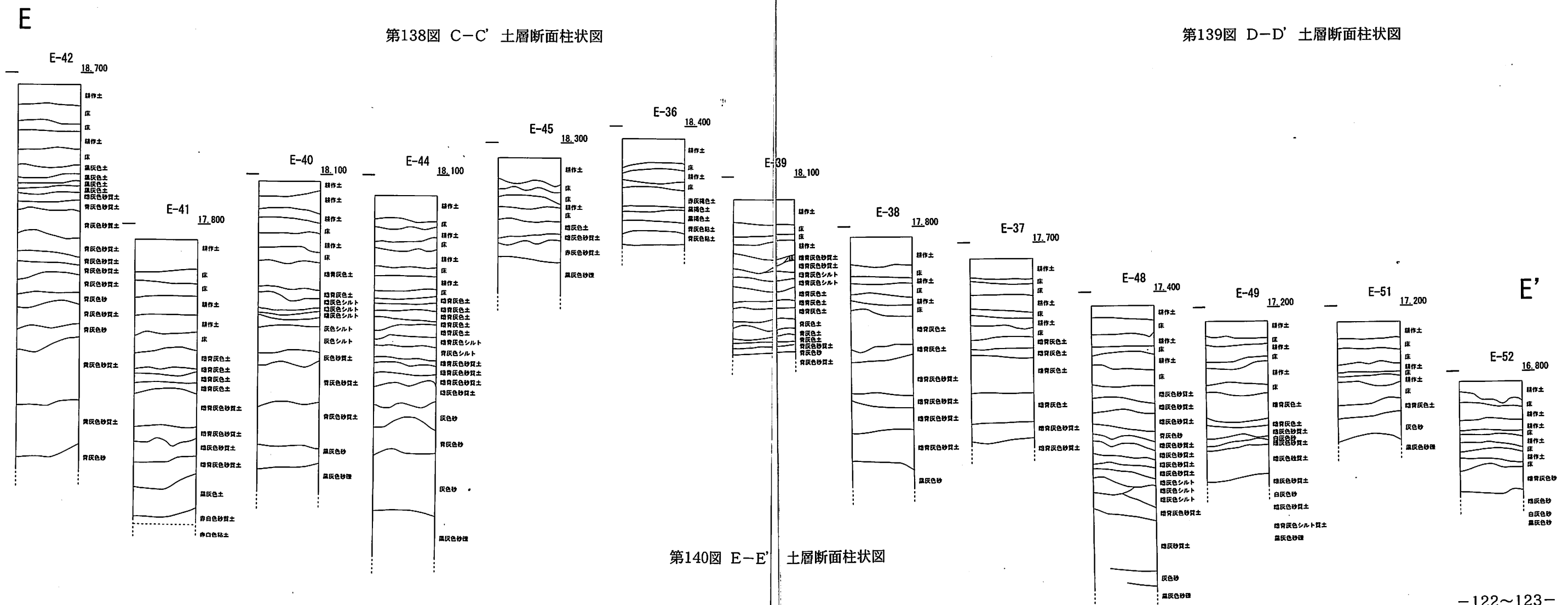
第134図 トレント配 置図 S=1/20,000



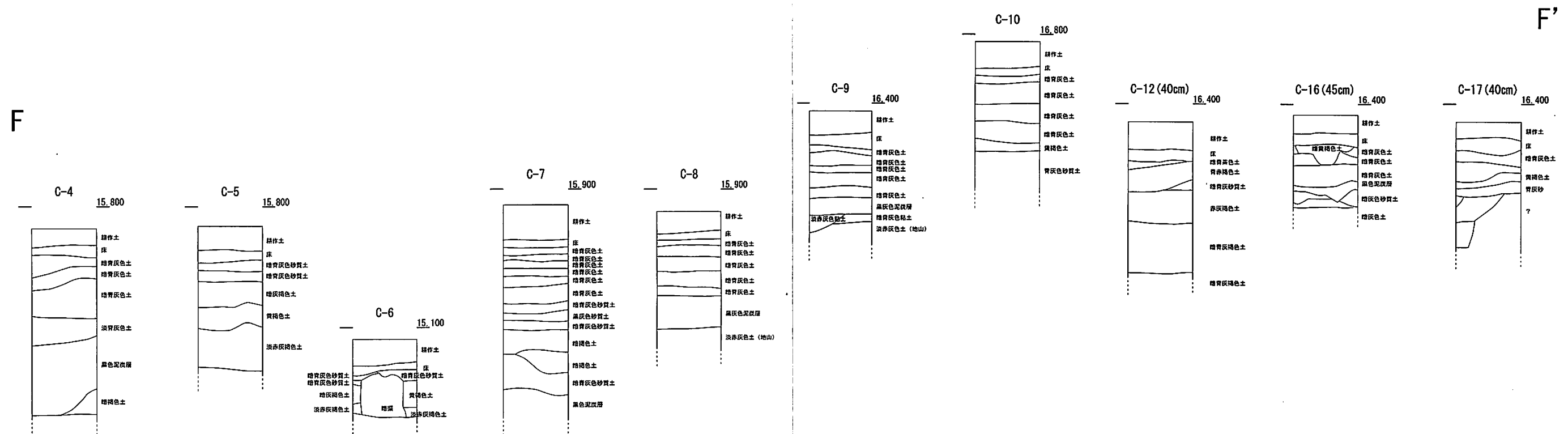


第138图 C-C' 土層断面柱状图

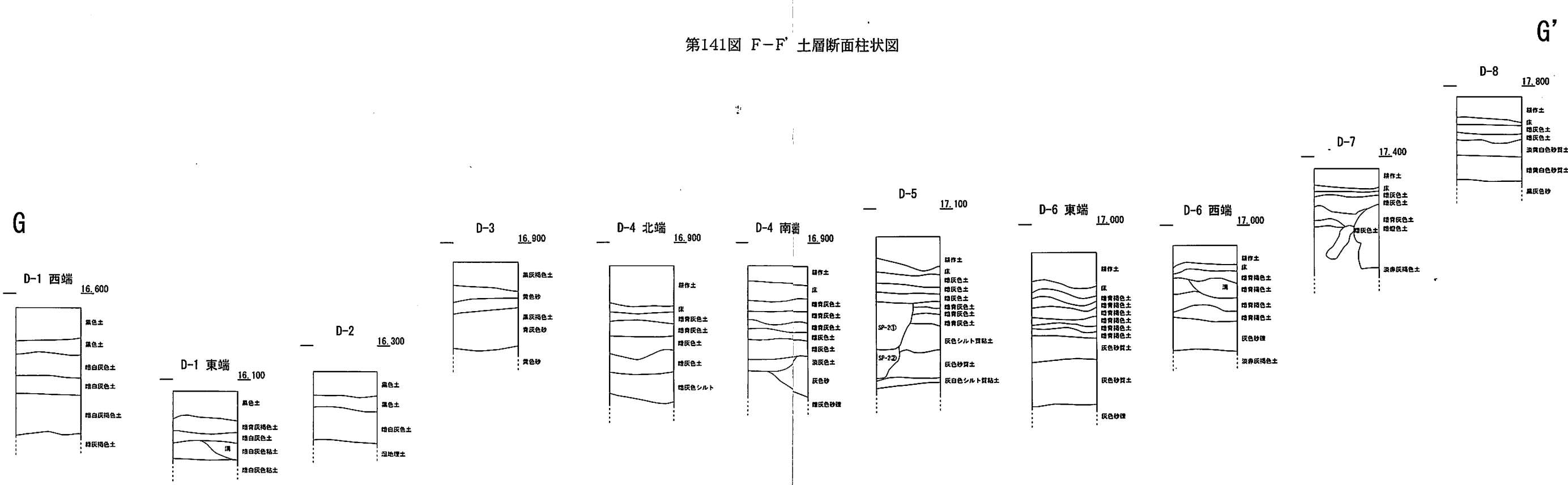
第139图 D-D' 土層断面柱状图



第140图 E-E' 土層断面柱状图



第141图 F-F' 土層断面柱状图



第142图 G-G' 土層断面柱状图

II. 賀来西・宮苑井ノ口両遺跡における水田の広がりとお瀬井路の開削

1. はじめに

「本章」で述べてきた試掘・本調査の結果から、近世には水田が遺跡全体に広がっていた様相が浮かび上がってきた。水田耕作には水が不可欠であり、近世に新たに造成された水田も初瀬井路の開削により開発が可能になったと考えられるのである。そこで、この項では中世水田との比較から当遺跡の近世水田造成の様相を浮き彫りにし、初瀬井路の開削によりもたらされた成果を調査した部分のみであるが、若干の考察を加えていく。

2. 近世とその前代の水田

この項では、便宜的に延べ2回の試掘調査と第1・2次に亘る本調査で設定した調査区名を用いて、水田の分布状況を説明する（第3・8図）。

まず、大まかな地形や水田・集落の分布状況を記す。

C区東端からD区南西部にかけてとE区中央部は微高地で、C区東端には弥生時代中期、D区北東部には古墳時代、E区中央部には弥生～古墳時代、やや南東に中世と考えられる集落が点在し、C区東端及びE区中央の集落は近世水田直下から検出されている。周辺は、初瀬井路に近い区画整理地区のC区西半部・D区（D-1・D-7西端）・E区中央北端部は、水田造成前は沼もしくは湿地であったと考えられ、E区中央北端部以外は泥炭層である。

①中世の水田

本遺跡では中世を中心として水田が造成されている。中世までに水田が造成されたのはA区の中心部北方、B区西端と東端部、C区の東端部、D区の南半部、そしてE区では中心部・北端部・南端部を除くほぼ全域であるとみられる。つまり、東部では水田は一部分しか存在せず、中心部から西半に密集して分布しているといえる。南部を除き大部分で中世水田下には数枚の水田層が確認されており、中世以前から継続して稲作が行われていたものと考えられる。水田を造成したのは沼、あるいは弥生～古墳時代に集落が営まれた微高地もしくは沼あるいは湿地の南方である。造成された中世水田の面積は約64,250㎡と推定できる（第143図）。

次に、造成地の特徴を周辺環境・地形・標高・砂質からみていく。微高地と中世床土直下面すなわち中世水田が造成された当時の、周辺区画との比高差をみていく。C区東端に位置する集落と考えられる弥生時代中期の包含層の標高は約15.9mで近世水田直下で検出されたものである。D区中世水田直下（中世水田が造成された標高）の標高は約16.4m～17.0m、C区東半を中心としてこの付近は約16.1m～17.1mの微高地になっている。

この微高地と弥生時代中期包含層の最大の比高差は約1.2m、D区中世直下とは約0.7m、B区東半の中世水田直下とは約4.6m、西半とは約2.9m、A区中央部北方では約2.5mを測る。B区西半部の本調査（第2次調査第II・III区）における水田の標高は、約14.3m～14.6mでこの付近が深い。E区中央微高地の標高は約17.4m～17.5mで、比高差は東部の水田で約1.7m、北部で約0.9m、南部で約0.8m低く、西部の水田は約0.8m標高が高くなっている。土地区画整理地区の地形は北から南へ向かって下がり、東西では中心部が窪地になっているといえる。中世水田上面の標高は、最大でE区中心北端部の約18.1m、最低でB区東端部の約14.4mと、約3.7mもの比高差がある。C区の微高地付近の標高とE区西端が約17.1～18.1mと高く、B区東端が最も低い。

次に、中世水田直下層と各トレンチの最下層水田直下層の土質について述べる。土地区画整理地区の北東部に当たるC区東端・D区の初瀬井路沿いは泥炭層や沼・湿地になっている。中央部東端に当たるB区東端（第2次調査第I調査区）の中世水田直下層は砂層である。調査区の東半には用水路として機能していたと見られる溝状遺構が北西から南東方向に流れていることから（第4章II-1項）、北方から流れる溝から水を引いていたと考えられる。第2次調査第II・III区に該当する区画整理地区中央部から西部にかけては、窪地や自然流路を埋め立て

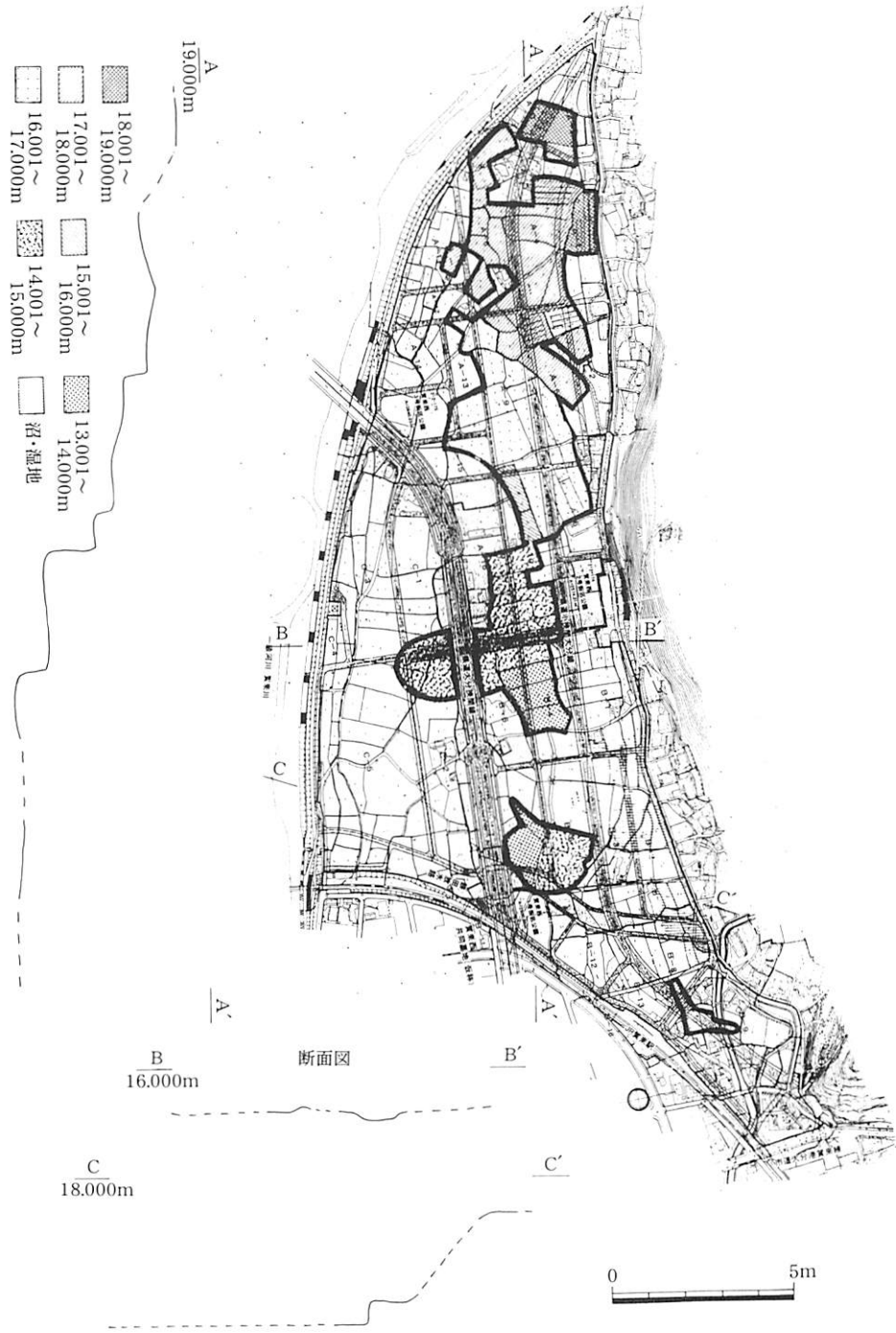
て水田造成している痕跡も確認できる。E区東半には水田最下層の直下層に砂層もしくは整地層が認められる所もある。西半の賀来川沿いは中央部の微高地より標高が高く、A区とともに他所と比べて砂層が目立つ。

②近世に新たに造成された水田

近世になると中世までの水田周辺にも水田が広がっていくことが確認できる。中世に水田ではなかった南半や北東部などにも水田が造成されるようになったのである。この時期に水田が造成された場所で特徴的なのは、沼あるいは湿地に造成された水田が土地区画整理区北側の初瀬井路沿いに面していることであり、未調査の中央部北側も同様であると考えられる。

近世に新たに造成された水田は約33,350㎡で、中世までが約64,250㎡であるのに対し、近世には約1.5倍の約97,600㎡に及ぶ。未調査の部分を含めても、試掘調査の成果から近世には土地区画整理地区全体に水田が広がっていたと考えられる(第144図)。

次に、近世直下すなわち近世水田造成時の標高をみると、C区東半からD区南西部にかけては弥生中期の集落で約16.2m～17.1mの微高地になっている。ここから西・東双方に向かって標高は下がり、東、西ともに比高差は最大で約2.8mになる。この微高地からB区との比高差は最大で約3.3m、A区とは、約2.4mといったように、さらに南にも下がっていく。E区中央部の近世水田直下から検出された集落跡の標高は約17.3～17.5mでこの付近も微高地になっている。E区北方中心部では、東端が約17.2mと低く西端が約17.8mと若干高い。南方中心部は約16.2～16.9mと低い。微



第143図 中世水田の範囲と水田上面の標高(平面図1/8000、断面図1/200)

高地との最大の比高差は、北方中心部で最大約 0.3m、南方中心部では約 1.3m と土地区画整理地区東半と比べると高低差は小さい。B 区で近世から造成された所と、前代から水田が造成された東・西隣りの比高差を近世床土下面を基準に割り出すと、前者のほうが約 14.3m で約 0.2m 高いのに対し、賀来川沿いの A 区は中世水田が存在する中心部北方の標高約 14.9m より近世造成水田のほうが約 0.3m 低い。

近世水田の造成前には、沼や自然流路を埋め立てて整地している事例が一部を除き確認できる。B 区の近世直下は近世水田礫を含む砂質土もしくは砂層で、大中礫等で埋め立てをして水田を造成している（第 145 図）。B 区付近の地山はしまりが甘い黄褐色砂もしくは砂質土であり、水はけがよかったと考えられる。C 区の初瀬井路沿いと D 区北端、E 区北部は沼（泥炭）を埋め立てて造成しており、



第 145 図 近世期の整地層
(B-7)



第 144 図 近世水田の範囲と水田上面の標高 (平面図 1/8000、断面図 1/200)

E 区東半にも自然流路を埋め立てた整地層が一部に認められる。賀来川沿いの区域は、A 区は近世直下層には小中礫を含んだ砂層が堆積し、E 区は砂質土で小礫・軽石等を若干含んでいる。

3. 初瀬井路の開削と近世における水田開発

①初瀬井路の開削

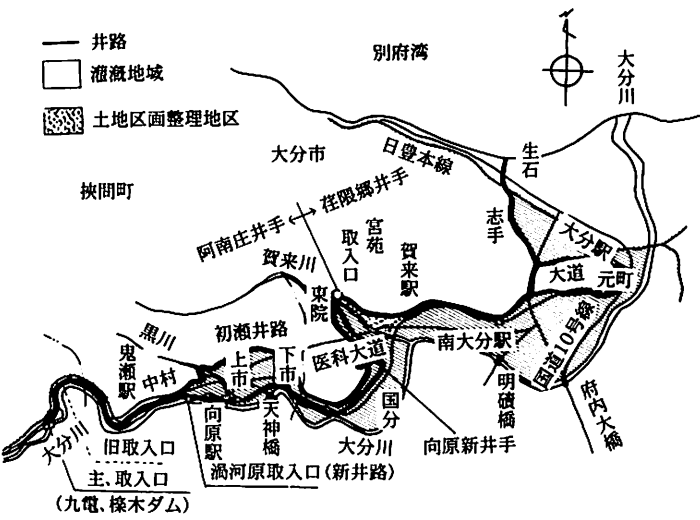
上述のように、近世には前代よりさらに水田が広がりを見せるが、それには当遺跡の北方に流れる初瀬井路（第 146 図）が大きな役割を果たしている（秦政博 1987）。初瀬井路は大きく荏隈郷井手（国井手）、阿南庄井手（初瀬井路）、初瀬井路助水線（向原新井手）から成る。賀来地区とその周辺では、近くを流れる大分川や賀来川の水流を利用するのが難しかった。近世、特に江戸時代になると開発技術の向上や藩経済の基盤である米の増産を促すため全国的に新田開発が盛んになった。それに伴い、戦国時代末期 1589（天正 17）年には荏隈郷井手、府内藩でも 1650（慶安 3）年には日根野吉明築造による阿南庄井手、1694（元禄 7）年には初瀬井路助水線等、多くの井路が開削された（第 9 表）。近世に沼地や湿地の上に水田を造成することが可能になったのも開発技術が中世より向上したからであると考えられる（赤峰重信 1985a）。

②水田と水掛かり

土地区画整理地区内における現代の耕地利用状況と水掛かりは、ほぼ近世末の様相をとどめていると考えられる（大分市歴史資料館 1998a、1998b）。また、部分的でありながら、土層断面で近世と近現代の溝がほぼ同位置にある場所、中世以前からの溝の位置が若干西へ変遷しながらもほぼ同位置に存在している例（第 4 章Ⅱ—1 項）、近世と現代の畦畔の位置と水掛かりが一致していることも確認できることから（第 4 章Ⅰ—7 項）、近世から現代の区画と水掛りはあまり変化しなかった、とみられる。以上のことを考えると、ほぼ全域に用水が行き渡っていたことになり（大分市歴史資料館 1998b）、村高増加に大きな影響を及ぼすことになる。

③初瀬井路灌漑地域の村高

初瀬井路開削の結果、賀来村を始めとする灌漑地域の村々の村高は、中世末期から江戸時代初頭までの史料は現存しないものの、正保 4 年の正保郷帳から天保 5 年の「天保郷帳」までの記録によると年々増加している。正



第146図 初瀬井路の水路現況模式図(秦1987文献第15図一部改)

第 9 表 府内藩領内の主要井路と初瀬井路の開削・関連年表

年代		事項
天文頃		三船井路開削
天正17年	(1589)	荏隈郷井手（国井手）開削
天正18年	(1590)	豊臣秀吉、天下統一を果たす
文禄2年	(1593)	文禄検地が行われる
慶長3年	(1603)	徳川家康、征夷大將軍になる
元和元年	(1615)	小狭間古井路開削
寛永11年	(1634)	日根野吉明が府内に入部
正保4年	(1647)	正保郷帳できる
慶安元年	(1648)	長宝水開削
慶安3年	(1650)	阿南庄新井手（初瀬井路）開削
明暦3年	(1657)	御取ヶ郷帳できる
元禄元年	(1688)	武宮井路開削
元禄7年	(1694)	向原新井手（初瀬井路水線）開削
元禄14年	(1701)	元禄郷帳できる
享保2年	(1717)	山野口井路開削
天保5年	(1834)	天保郷帳できる

保4年の記録と比較した増加状況は次の通りである（第10表）。

正保4年の「正保郷帳」と明暦3年の「御取ヶ郷帳」との比較によると、荏隈郷井手の灌漑地域では当遺跡に該当する賀来（市）村の増加率は約3.7%で40,432石、宮苑（宮園）村では約1.1%でわずかであるが増加し、永興村は約7.5%の増加率を示している。それに対し、阿南庄新井手の灌漑地域に当る平横瀬村の増加率は約44.5%で、荏隈郷井手の灌漑地域と比較すると大幅に増加している。

元禄14年の「元禄郷帳」との比較によると、荏隈郷井手の灌漑地域では賀来村の増加率は約5.2%、宮苑村で約2.5%である。阿南庄新井手の灌漑地域では、中尾村が約31.4%の増加率を示す。

天保5年の「天保郷帳」の記録では賀来村の増加率は約9.7%、宮苑村では約4.4%である。それに対し阿南庄井手、初瀬井路助水線での増加率をみると東院村では約20.7%、平横瀬村では約58.6%であり、賀来村・宮苑村に比べて増加率が高い。

以上の数値は村高の増加状況がよく表れている。阿南庄新井手が開削された7年後に「御取ヶ郷帳」、向原新井手が開削された7年後に「元禄郷帳」が作成されており、井路開削後数年のうちにその成果が表れていることが読み取れる（第10表）。特に阿南庄新井手、初瀬井路助水線の灌漑地域で顕著に認められる。中世の資料が現存せず近世との比較が不可能であるため村高断言はできないが、近世の井路開削の成果が村高に表れていることから、荏隈郷井手開削

後も同様に村高は増加し
たと考えられる。

第10表 正保4年と比較した村高増加率

	村名	正保4年(1647) 正保郷帳(単位:石)	正保4年から 明暦3年(%)	正保4年から 元禄14年(%)	正保4年から 天保5年(%)
荏隈郷	羽屋村	666,219	0.9	1.0	4.8
	畠中村	218,588	2.8	3.1	9.1
	田中村	423,001	0.2	0.2	1.4
	永興村	309,158	7.5	7.7	8.6
	市村(賀来村)	1,087,547	3.7	5.2	9.7
	宮園村	382,912	1.1	2.5	4.4
阿南向原	中尾村	282,936	16.5	31.4	48.1
	東院村	493,168	1.6	7.6	20.7
	国分村	338,311	22.3	2.3	43.8
	平横瀬村	108,910	44.5	44.5	58.6

4. 小結

述べてきた中世以前に
水田造成された場所と近
世に新たに造成された場
所の特徴から、なぜ分布
状況に差が生じたのかを
考察していきたい。

まず、中世以前の水田が少なく、近世期に新たな水田が目立って増加したA・C・D区における特徴をみると、C区初瀬井路沿いとC区からB区にかけてのほぼ一体が近世に沼もしくは湿地上に造成している。それに対し、A区は中世水田造成地より標高の低い小・大礫を多く含んだ砂層上に造成している。土質は異なるものの、初瀬井路により農業用水が行き届くようになったことと無関係ではないと思われる。C・D区において沼地上に水田を造成したのは初瀬井路により用水の確保ができるようになったからであると考えられる。

次に、A区南半とB区西半の中世以前の水田を比較していく。土地区画整理地区中央部は窪地で最も下がった所でも中世水田の標高は約14.17mであり、A区南半を中心に南北方向に下がっていく。中世水田が造成された場所の標高は、A区で約14.80m、B区西半部の本調査（第2次調査第Ⅱ・Ⅲ区）では、約15.3m～14.3mで高低差がある立地である。B区西半部は中世以前から水田が営まれており、水田層直下は若干小礫を含んだ砂層である。一方、A区南半では中世以前の水田は確認されておらず、水田層直下は小・大礫を多く含んだ砂層で形成された自然堤防であったと考えられる（第5章Ⅰ項）。A区は南方に賀来川が流れているものの取水が困難であり、A区において中世になるまで水田が造成されなかったのは、砂質や農業用水の確保に問題があったためと考えられる。

E区では大部分で中世以前から水田が造成されている（第143図）。水田下層からは微高地を中心に弥生・古墳時代・中世の集落や遺物包含層が認められ、水田の枚数も多い。水田直下層は砂粒や小礫を若干含んだ砂質土・

砂層が大半で水はけがよく、標高も東部より高く洪水にあった痕跡も比較的少ないが、東部では土層断面で洪水層を確認している。賀来川の水流を利用するのは困難であるために、E区では北方に存在する流路から水を引いていたのであろう。以上の事柄から、水田を営むにはよい立地であったと考えられる。また、北・南端に近世造成水田が認められる。北端は沼地を埋め立てて造成し、南端は水はけのよい砂質土もしくは砂層であり、整地してから水田を形成している例もある。沼地を埋め立てて水田造成したのは初瀬井路の開削によって用水の確保ができるようになったためであり、用水が行き渡ることによって南端にも水田が造成されたと考えられる。

つまり、分布状況の偏りは起伏のある地形・標高、場所ごとに異なる砂質と取水状況によるものであるといえ、土地の特徴に見合った水田造成が行われていたということがいえる。

それでは、中・近世の景観を復原してみよう。水田の上面の標高を1 mごとに区別した結果、最高で18.0 m台、最低でも13.0 m台に分かれている。中世の西半に集中している水田は大きく17.0 m台と16.0 m台に分かれ、東西方向では断面図A-A'で示したようにさらにほぼ1 mごとに中心部へ向かって段階的に下がっていく。南北方向B-B'はA-A'とC-C'と比べて高低差は小さいものの段階的になっている。このことから南北方向C-C'でも段階的になった水田がB区東端にある水田の南北に造成されていた可能性がある(第143図)。近世においても水田のまとまりはさほど変わりはない。新たに造成された場所でも周囲と近似した標高で水田を造成し、北東―南西方向C-C'でも段階的に水田が形成されている様子が認められる(第144図)。さらに畦畔の位置と水掛かりが一致し、近世から現代までの水田区画はほぼ同一であった(第4章7項)。近世には沼地や自然堤防の上にも水田が造成され、徐々に初瀬井路による用水路がめぐらされた棚田が一带に形成されていったものと考えられる。

5. 終わりに

試掘と本調査の結果から、近世になるとほぼ全面に水田が広がっていく様子が確認できた。そして地形や砂質といった特徴をうまく利用して造成している様子が明確になった。史料による中世水田との比較はできないものの、近世の検地記録をみると井路開削前より増加しており、水田や村高の増加は初瀬井路の効用であるとみてよいと考えられる。賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡一带は近年までみられたような水田地帯が、近世段階では既に広がっていたものと考えられる。

【参考文献】

- 赤峰重信 1985a 「日根野時代の農村と初瀬井路」『大分県史』近世篇Ⅱ
- 赤峰重信 1985b 「付表 府内藩領の村高変遷」『大分県史』近世篇Ⅱ
- 秦政博 1985 「灌漑用水の開発」『大分県史』近世篇Ⅱ
- 秦政博 1987 「水への執念」『大分市史』中
- 豊田寛三 1987 「交代する領主と取り組み支配」『大分市史』中
- 大分市歴史資料館 1998a 「耕地利用状況復元と用水利用状況調査について」『Funai 府内及び大友氏関連遺跡総合調査研究年報Ⅶ』
- 大分市歴史資料館 1998b 「付図3 大字賀来・中尾・東院・宮苑の水路利用状況図」『Funai 府内及び大友氏関連遺跡総合調査研究年報Ⅶ』

化 学 分 析 編

大分市、賀来西遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 賀来西遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	I 区, 第3号溝状遺構	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄, 石墨調整	AMS
No. 2	Ⅲ b 区, 第2号水田 (F-1 グリッド)	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄, 石墨調整	AMS

※ AMS は加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry.

2. 測定結果

試料名	測定 No.	^{14}C 年代	$\delta^{13}\text{C}$	補正 ^{14}C 年代	暦年代 (西暦)
	(Beta-)	(年 BP)	(‰)	(年 BP)	
No. 1	188291	1030 ± 40	-26.3	1010 ± 40	交点: cal AD 1015 1 σ : cal AD 1000 ~ 1030 2 σ : cal AD 980 ~ 1050, 1095 ~ 1140
No. 2	188292	860 ± 40	-26.1	840 ± 40	交点: cal AD 1210 1 σ : cal AD 1175 ~ 1250 2 σ : cal AD 1055 ~ 1085, 1150 ~ 1270

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。現在、最も確からしいとされる ^{14}C の半減期は 5,730 年であるが、下記の補正 ^{14}C 年代値および暦年代較正は、Libby の半減期を用いて算出された年代値に対して適用される。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。cal は calibration した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約 19,000 年 BP までの換算が可能となっている。ただし、10,000 年 BP 以前のデータはまだ不完全であり、今後改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数

の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 の炭化物では 1010 ± 40 年 BP (1σ の暦年代で AD1000 ~ 1030 年)、No. 2 の炭化物では 840 ± 40 年 BP (1σ の暦年代で AD1175 ~ 1250 年) の年代値が得られた。

文献

Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

II. 賀来西遺跡における蛍光 X 線分析

1. 試料

分析試料は、Ⅲ b 区の II b 層から出土した不明物質が付着した土器片である。測定は、土器内側の不明物質付着部分および土器外側の付着物のない部分 (比較試料) の 2 箇所について行った。

2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光 X 線分析システム (日本電子 (株) 製, JSX3201) を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法 (FP 法) による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間 300 秒、照射径 20mm、電圧 30keV、試料室内真空であり、X 線発生部の管球はロジウム (Rh) ターゲット、ベリリウム (Be) 窓、X 線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。

3. 分析結果

各元素の定量分析結果 (wt%) を表 1 に示す。

4. 考察

分析の結果、土器内側の不明物質付着部分では、銅 (CuO) の含量が 33.3%、珪酸 (SiO_2) が 22.0%、鉛 (PbO) が 18.1%、鉄 (Fe_2O_3) が 7.0%、アルミニウム (Al_2O_3) が 6.2%、ヒ素 (As_2O_3) が 4.7%、スズ (SnO_2) が 1.3% であり、銅が主成分となっている。土器外側の付着物のない部分 (比較試料) では、銅 (CuO) の含量は 0.1% と微量であり、鉛 (PbO)、ヒ素 (As_2O_3)、1. スズ (SnO_2) は検出されなかった。

以上の結果から、土器内側に付着した不明物質は、銅を主成分として、鉛、ヒ素、スズなども含まれる金属塊と考えられ、何らかの銅製品に関係するものと推定される。

表 1 賀来西遺跡における蛍光 X 線分析結果

地点・試料		土器片	
原子No.	化学式	内側-付着物	外側-比較
11	Na_2O	0.247	0.396
12	MgO	0.342	1.118
13	Al_2O_3	6.230	18.626
14	SiO_2	22.012	57.279
15	P_2O_5	0.854	0.000
16	SO_3	0.000	0.124
19	K_2O	1.129	5.934
20	CaO	3.635	1.601
22	TiO_2	0.748	2.270
23	V_2O_5	0.000	0.088
25	MnO	0.309	0.368
26	Fe_2O_3	7.030	11.952
29	CuO	33.287	0.101
33	As_2O_3	4.690	0.000
37	Rb_2O	0.000	0.026
38	SrO	0.068	0.043
40	ZrO_2	0.000	0.074
50	SnO_2	1.303	0.000
82	PbO	18.115	0.000

単位: wt (%)

写真図版編





1. 第1次調査第6号水田全景



2. 第1次調査第7号水田全景



1. 第6号水田全景①



2. 第6号水田全景②



3. 第6号水田全景③



4. 第6号水田全景④

图版3



1. 第3号水田A畦畔完掘



2. 第3号水田B畦畔完掘



3. 第3号水田C畦畔完掘



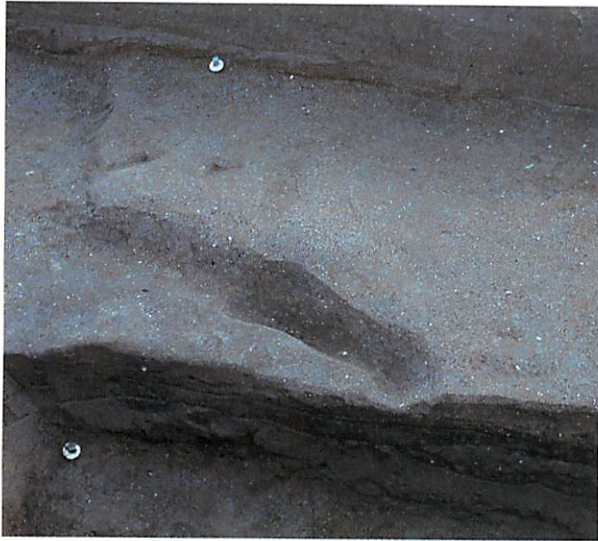
4. 第4号水田A畦畔完掘



5. 第4号水田B畦畔完掘



6. 第4号水田F畦畔完掘



1. 第6号水田A畦畔完掘



2. 第6号水田B畦畔完掘



3. 第6号水田C畦畔完掘



4. 第6号水田D畦畔完掘



5. 第6号水田F畦畔完掘



6. 第7号水田D畦畔完掘

図版5



1. 第6号水田 牛の足跡①



2. 第6号水田 牛の足跡② (A・B-3グリッド)



3. 第6号水田 牛の足跡③



4. 調査区北壁①



5. 第V-VI層水田A畦畔完掘



6. 第V-VI層水田B畦畔完掘



第2次調査 第1調査区全景



1. 第1号溝状遺構土層断面



2. 第1・4号溝状遺構完掘



3. 第3号溝状遺構土層断面



4. 第3号溝状遺構完掘



1. 第2号溝状遺構完掘



1. 第2号溝状遺構土層断面



3. 第2号水田A畦畔



4. 第3号水田A畦畔



第2次調査 第3号水田
第Ⅱ・Ⅲ調査区全景



第2次調査 第3号水田
第Ⅱ a 調査区全景



第2次調査 第3号水田
第Ⅱ b 調査区全景



1. 作業風景



2. 第2次調査 第2号水田
第Ⅲb調査区 全景



1. 第2号水田A畦畔完掘



2. 第2号水田B畦畔完掘



3. 第2号水田D畦畔完掘



4. 第2号水田E畦畔完掘



5. 第2号水田F畦畔完掘



6. 第2号水田G畦畔完掘



1. 第2号水田H畦畔完掘



2. 第2号水田I畦畔完掘



3. 第2号水田J畦畔完掘



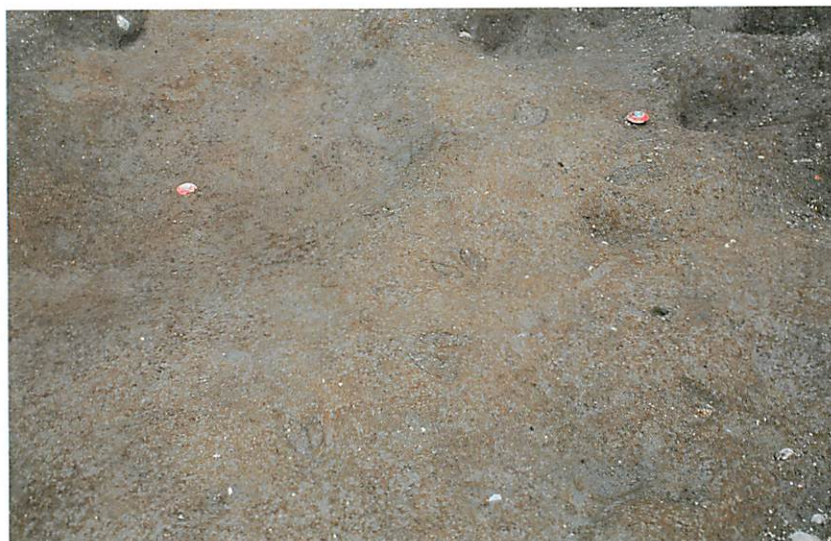
4. 第2号水田K畦畔完掘



5. 第2号水田L畦畔完掘



6. 第2号水田M畦畔完掘



1. 第2号水田 牛の足跡 (F-10・11 グリッド)



2. 第3号水田第1号溝状遺構完掘



3. 第3号水田第1号溝状遺構土層断面



4. 第3号水田A畦畔完掘



5. 第3号水田B畦畔完掘



1. 第3号水田C畦畔完掘



2. 第3号水田D畦畔完掘



3. 第3号水田E畦畔完掘



4. 第3号水田F畦畔完掘



5. 第3号水田G畦畔完掘



6. 第3号水田H畦畔完掘



1. 第3号水田I畦畔完掘



2. 第3号水田J畦畔完掘



3. 第3号水田K畦畔完掘



4. 第3号水田L畦畔完掘



5. 第3号水田N畦畔完掘



6. 第3号水田O畦畔完掘



1. 第3号水田P畦畔完掘



2. 第3号水田Q畦畔完掘



3. 第3号水田R畦畔完掘



4. 第3号水田S畦畔完掘



5. 第3号水田T畦畔完掘



6. 第3号水田U畦畔完掘



1. 第3号水田V畦畔完掘



2. 第3号水田W畦畔完掘



3. 第3号水田Y畦畔完掘



4. 牛・人の足跡完掘① (F-8グリッド)



5. 牛・人の足跡完掘②
(F-10・11グリッド)



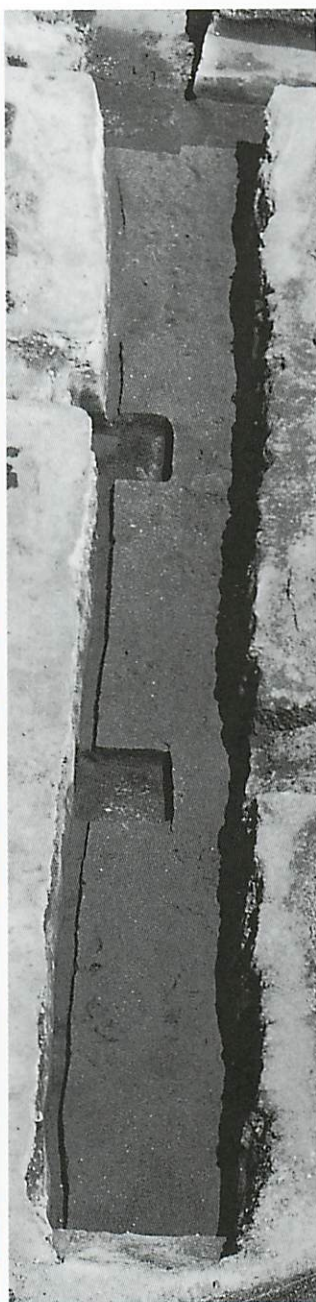
6. 遺物出土状況
(D・E-24・25グリッド)



1. 第4号水田Ⅱ・Ⅲa区全景



1. 第2次調査 第4号水田
第Ⅱ a 調査区全景



1. 第2次調査 第4号水田
第Ⅱ b 調査区全景



2. 第2次調査 第4号水田
第Ⅲ a 調査区全景



1. 第4号水田 第2号溝状遺構完掘①



2. 第4号水田 第2号溝状遺構完掘②



3. 第4号水田A畦畔完掘



4. 第4号水田B畦畔完掘



5. 第4号水田C畦畔完掘



6. 第4号水田D畦畔完掘



1. 第4号水田E畦畔完掘



2. 第4号水田F畦畔完掘



3. 第4号水田G畦畔完掘



4. 牛の足跡① (E・F-10・11) グリッド



5. 牛の足跡② (E・F 8) グリッド



6. 牛の足跡③ (E・F 7) グリッド



1. 第Ⅲ a 調査区南壁東



2. 第Ⅱ b 調査区東壁①中央



3. 第Ⅱ b 調査区東壁②南



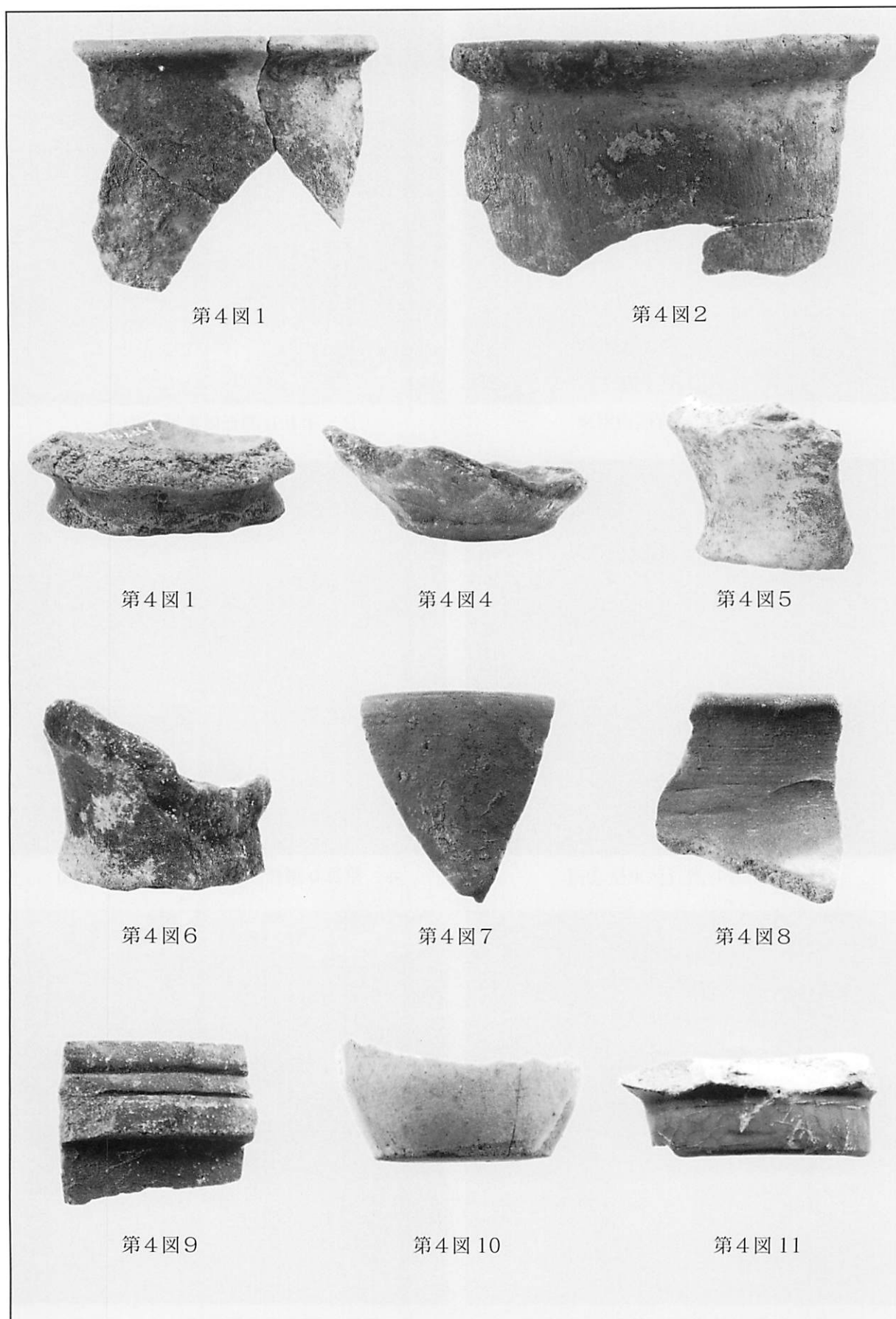
4. 第Ⅲ b 調査区北壁① (4.5 ~ 5.5m)



5. 第Ⅲ b 調査区北壁② (17.0 ~ 18.0m)



6. 第Ⅲ b 調査区北壁③ (34.5 ~ 35.5m)



試掘出土遺物



第 15 図 1



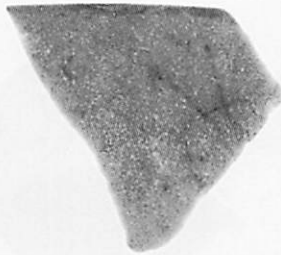
第 15 図 1



第 22 図 1



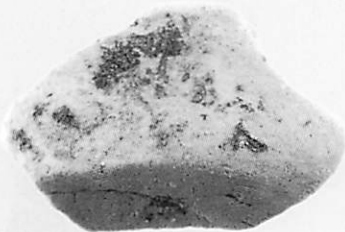
第 22 図 2



第 22 図 3



第 33 図 1



第 33 図 2



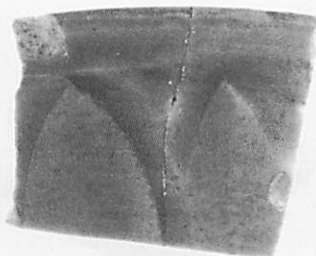
第 38 図



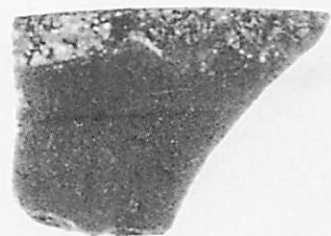
第 44 図 1



第 44 図 2

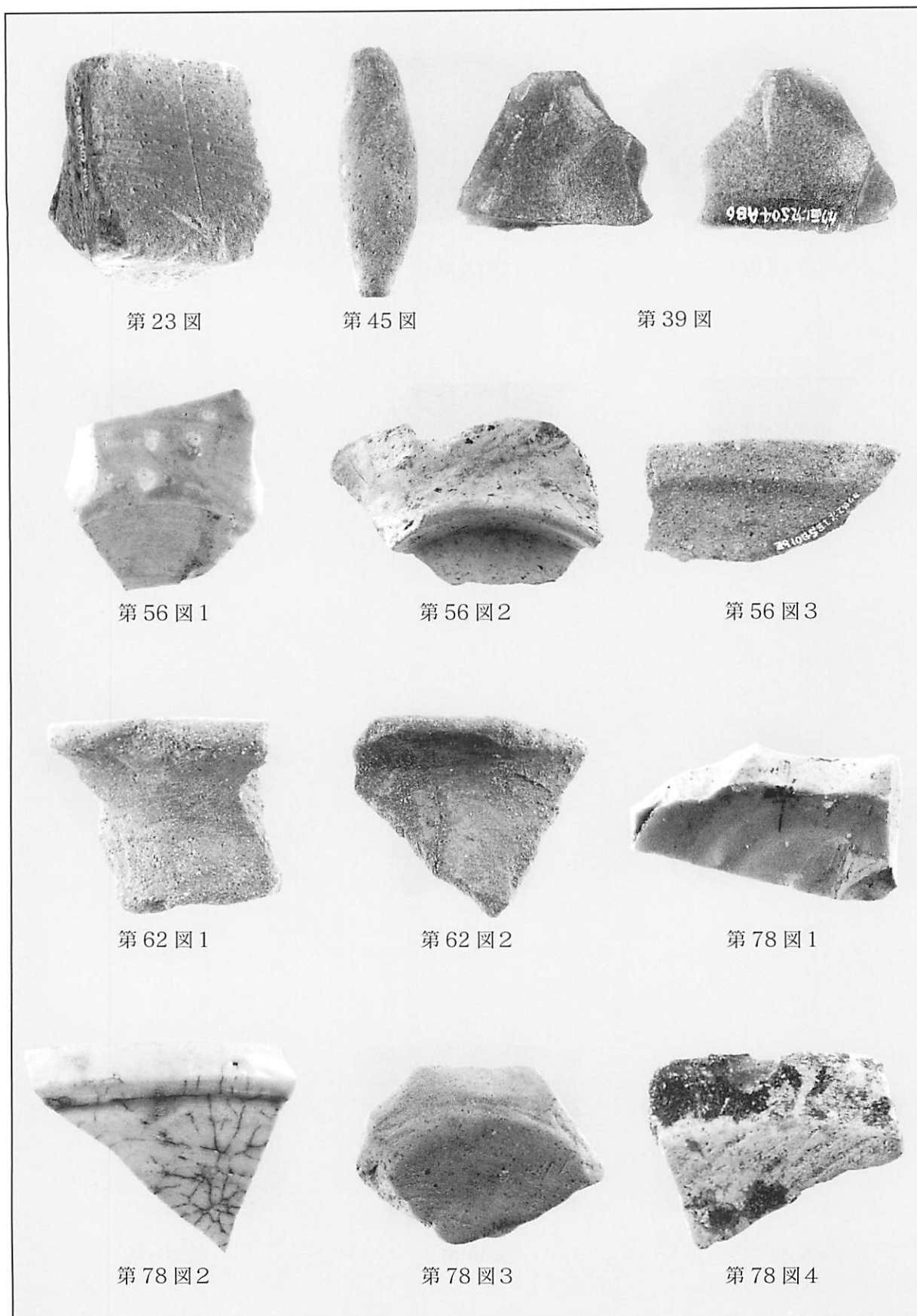


第 44 図 3



遺跡一括

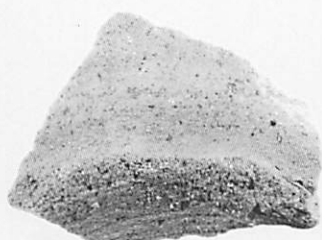
第 1 次調査出土遺物①



第1次調査② 第2次調査出土遺物①
(1段)



第 78 図 5



第 78 図 6



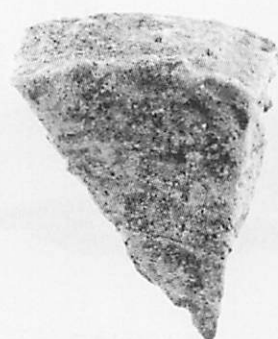
第 78 図 7



第 78 図 8



第 78 図 9



第 78 図 10



第 78 図 11



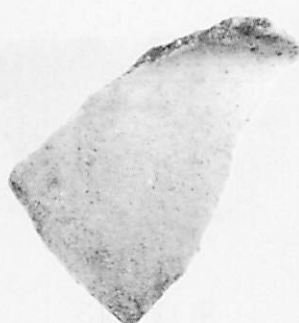
第 78 図 12



第 79 図



第 109 図 1

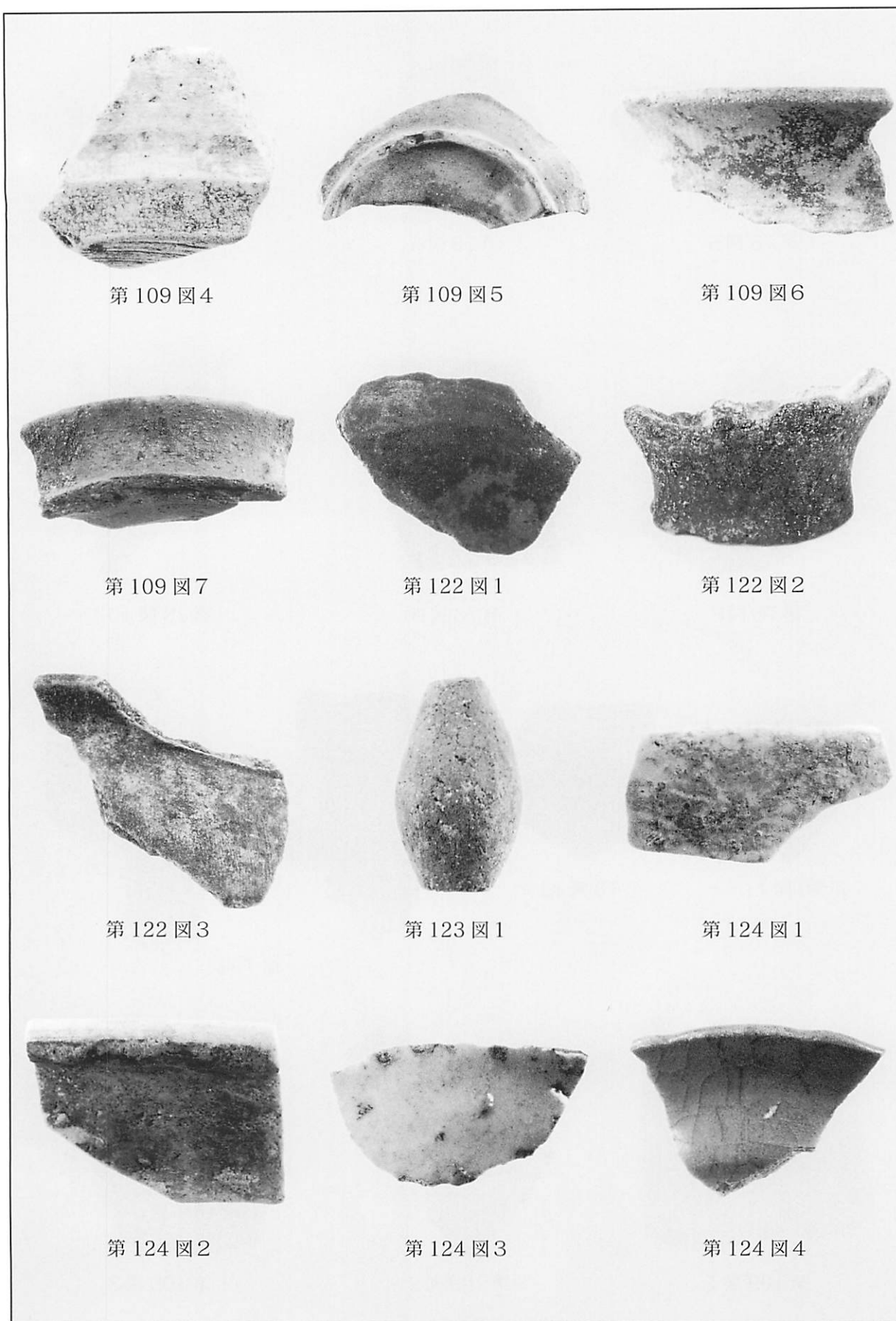


第 109 図 2



第 109 図 3

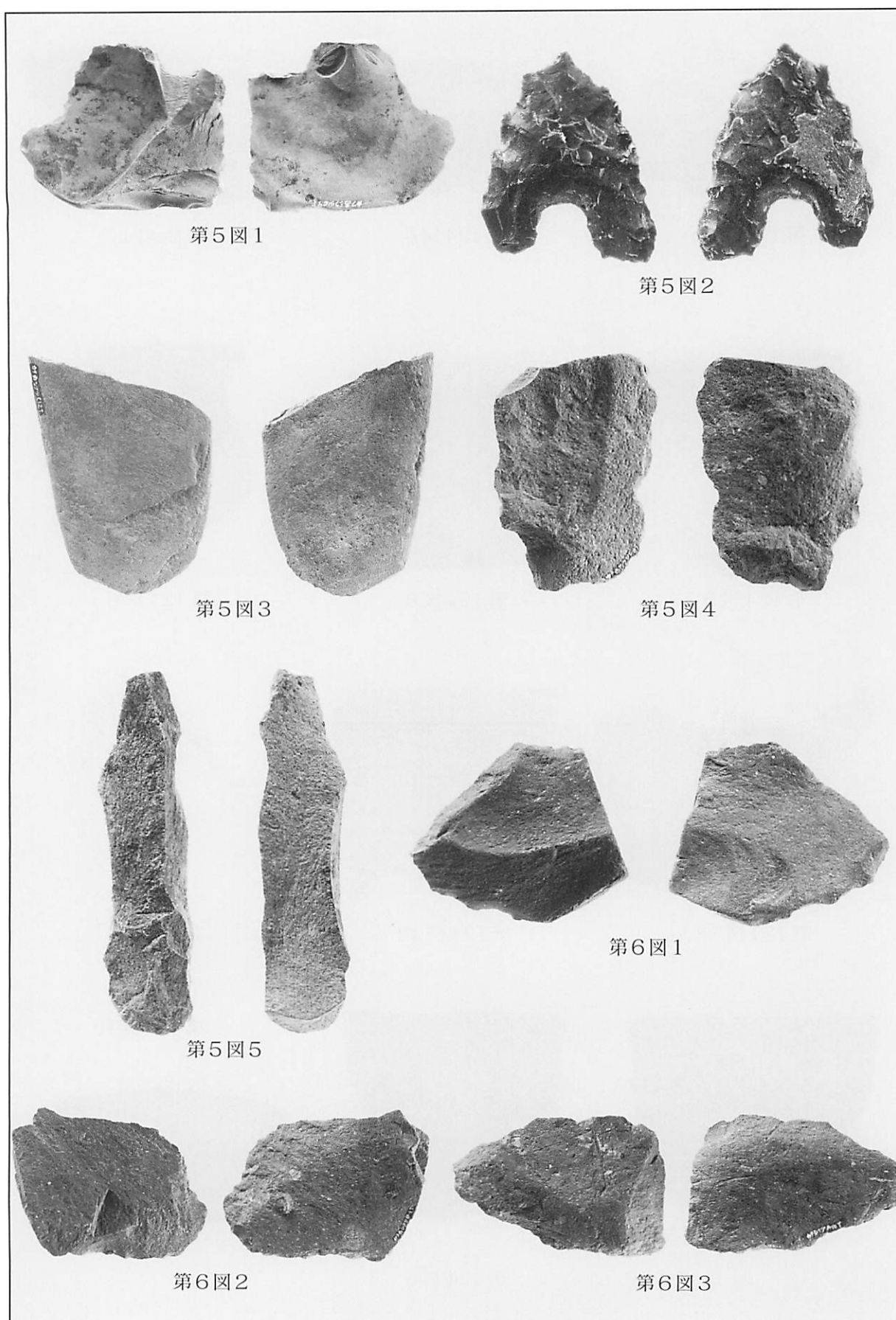
第 2 次調査出土遺物②



第2次調査出土遺物③



第 2 次調査出土遺物④



試掘出土遺物 石器①



第6図4



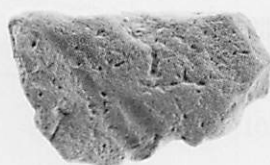
第6図5



第7図1



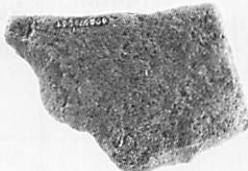
第7図2



第7図3



第7図4



第7図5



試掘出土遺物 石器②

報告書抄録

ふりがな	かくにしいせきだいいちじ・だいにじはつつちようさほうこくしょ							
書名	賀来西遺跡第1次・第2次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第53章							
編著者名	荻 幸二 大野 瑞恵 井口あけみ							
編集機関	大分市教育委員会							
所在地	〒870-0046 大分県大分市荷揚町2丁目31号 TEL097-534-6111 (代)							
発行年月日	2004年10月1日							
ふりがな 所収遺跡名		コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくにしいせき 賀来西遺跡	おおいたけんおおいたし 大分県大分市 おおあざかく 大字賀来	44201	322348	33° 12' 30"	131° 33' 40"	2002.10.01 ～ 2002.10.31 2003.04.22 ～ 2003.10.01	166.4㎡ 54㎡ 383㎡	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺物				
賀来西遺跡 第1次調査	水田跡	中世	水田跡 畦畔 溝状遺構	青磁 白磁 瓦質土器 土錘 土師器 須恵器 2次加工剥片				
賀来西遺跡 第2次調査 第Ⅰ調査区	水田跡	中世	田跡 畦畔 溝状遺構 取水口	土師器 弥生土器 白磁				
賀来西遺跡 第2次調査 第Ⅱ・Ⅲ調査区	水田跡	中世	水田跡 畦畔 溝状遺構	弥生土器 青磁 白磁 土師器 瓦質土器 須恵器 轆羽口 埴埴 土錘 牛の歯				

賀 来 西 遺 跡

第 1 次 ・ 第 2 次発掘調査報告書

－大分都市計画事業賀来西土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－

2004年10月 1 日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2－31

印刷 三恵印刷株式会社